
ポケットモンスター～白と黒の想い～

キシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター〜白と黒の想い〜

【Nコード】

N9028G

【作者名】

キシ

【あらすじ】

トレーナークロノとバシャーモのガレス達が全地方のリーグ制覇を目指す。しかし彼は知らない。彼が人とポケモンを繋ぐ架け橋になることを……

プロローグ（前書き）

お初にお目にかかります。キシと申します。初投稿はタイトル通りのプロローグです。主人公クロノの過去がちよっと書いてあります。まだまだ、拙い小説ですが暖かい目で読んで頂ければ幸いです

プロローグ

雲一つ無い晴天。響きわたる鐘の音が水の都アルトマーレの教会墓地を彩る。

一つのお墓の前に一人の少年とパートナーのアチャモが呆然と佇んでいた。

まだ新しいお墓。墓に少年の兄が眠っている。

「お母さんが呼んでるよ」

少年の後ろから一人の青年が声をかけ、少年に近づき、少年の肩に手を乗せる。

「触るな！人殺し！」

青年の顔を見ず少年は怒鳴る。そして青年の前に立ち、瞳に涙を浮かべ、小さな拳に力を入れる

「なんで兄さんが死ななくちゃいけないんだよ！なんで、なんでなんだよ……」

少年は力任せに青年の胸を何度も、何度も叩きながら瞳を涙で一杯にして叫んだ。

「チツ……ヤな夢見たな」

舌を打ち、青年 クロノはハウエン地方に向かう船の甲板のベンチからその体を起こす。

海風が少し冷たくなり、夕日が空を彩り始めた。

「ガレス、起きろよ。着くぞ」

ベンチもたれ掛かり寝ていた彼のパートナーのバシャーモ ガレス。まだ少し眠そうに瞬きをしガレスは立ち上がる。二人はうっすらと見えるハウエン地方に視線を向ける

「見るよ。ハウエンが見えてきたぜ。この三年間。長かったな」

クロノはガレスに問いかけた。

「シヤモ」

クロノの問いに答えるようにガレスも答える

「これから、俺たちの三年間の成果が試される。頼むぜ相棒」

腰の5個のモンスターボールに手を当てクロノはガレスに拳を向ける。

ガレスもクロノを見て、クロノの拳に拳をあわせる。

プロローグ（後書き）

プロローグは如何でしたか？

クロノ「俺は不満だな」

おや？それは何故でしょうか？

クロノ「甲板で、しかも夕方まで寝てたら風邪ひくだろうが！」

・・・細かいな

クロノ「作者ああああ！貴様が一番知ってる事だろうが！ガレス！

オーバーヒート！」

ガレス「シヤモオオオ！」

ピギヤアアアアア（作者絶命）

第一話 「キンセツ到着〜港町の夜〜」 (前書き)

やっと第一話です。バトルは全くなしです

第一話 「キンセツ到着〜港町の夜〜」

「フックション！」

船着き場に広がる巨大な嚏が人の目を引く

「甲板で昼寝するもんじゃないな」

鼻をすすりながらクロノは呟く。

空は夕闇に覆われ、人々は自宅に帰宅する時間。

ここはニューキンセツ。ホウエンでも有数の港町で有名である。そのため必然的に人は多くなり、船着き場で働く人も多いが、流石に時刻的に開いている出店は少ない。

しかし、飲食の出来る出店はここぞとばかりに客を呼ぶ。港で働く人にとって、町で酒を飲むよりここで酒を飲んだ方が近いし安い。

そして家に帰り妻に怒鳴られる。それが港で働く男達の日常だ

クロノは町へ続く道を歩きながら、食事の出来る出店を探した。

「ここにするか・・・」

クロノは一件の出店を見つけそこで食事をする事にした。選んだ理由は簡単だ。空いていたからだ。

「いらっしやい」

口ひげを生やした親父が笑みを浮かべながら挨拶をしてきた

「おっちゃん。なんか腹が膨れる物頂戴」

適当な注文をしながらクロノはカウンターの真ん中に座る

「親父みたいな小僧だな。ちょっと待ってな。」

出店の親父は笑いながら鉄板の上で料理を作り始めた。クロノは出された水を飲み一息つきながら、夜空を見上げだけ。

(綺麗だな・・・アルトマーレみたいだ)

生まれ故郷のアルトマーレの事を思っていたら料理が出てきた

「ほら、坊主。特別に大盛りだ」

そこには皿から溢れんばかりに焼きそばが盛られてきた。平らげるには時間がかかりそうだが、たしかに腹は膨れる量ではある。

「坊主、今いくつだ？」

大量の焼きそばと格闘しているクロノに屋台の親父は聞いた。クロノも答えようとするが口に物が入っているため喋れない。

「16だよ。生まれはアルトマーレ」

聞かれた事と自分の生まれ故郷を親父に告げた。親父は笑いながら何かを言っていたが焼きそばと格闘しているクロノには聞こえていなかった。

焼きそばを平らげたクロノは口を拭きながら親父に話しかけた

「なあ、おっちゃん。ポケモンセンターってどこ？」

新聞を読んでいた親父は、町へ続く道を指さし

「この道真っ直ぐだ。そこが一杯なら、町の中心だな」

そう告げるとまた新聞を読み始めた。

「ありがと。あとお代いくら？」

ポケットから財布を出そうとすると屋台の親父が止めた。

「いいよ、タダで。ジム戦頑張れよ」

クロノは多少驚いたが、お礼を告げ、その屋台を後にした。

「面白い挑戦者がきたな」

屋台の親父が呟いた言葉は港町の風に消えた

第一話 「キンセツ到着、港町の夜」 (後書き)

第一話です。バトルは全く無く、ゲームとは設定が微妙に違います。作者のイメージとしては漁業が盛んな外国の港町です

第二話 「乾坤一擲」笑う強者達」前編（前書き）

第二話なのに異常に長いです。しかも前後編

第二話 「乾坤一擲〜笑う強者達〜」前編

気持ちよい眠りを妨げる者。誰もがそいつの存在を知っている。汝の名は

「うるせー目覚まし！」

自分でセットした目覚まし時計にキレルクロノ。キンセツシティのポケモンセンターの宿泊施設に泊まり夜を明かした。

ポケモンセンターにはトレーナーには欠かせない施設だ。ポケモンの治療からポケモンの入れ替え。そしてトレーナーなら一週間だけ寝泊まりが可能なのだ。

クロノは寝間着から私服に着替え身だしなみを整えポケモンセンターの受付に向かった

「はい。お預かりしたポケモンの治療は終わりましたよ」

天使のような笑顔で治療を終えたポケモンを返すのはポケモンセンターには欠かせない人、ジョーイさんだ。全てのポケモンセンターに同じ顔のジョーイさんがいるが全て血縁者らしい。細かな違いは有るらしいが、常人にはまず分からない。某ジムリーダーには判別出来るらしいが、少なからずクロノには見分けはつかない。ポケモンを受け取り、ポケモンセンターを後した。目指す場所は言うまでもないキンセツジムだ。

ジム制覇は全てのトレーナーの目標と言っても過言ではない。クロノもジム制覇を目標とするトレーナーの一人だ。

程なくしてキンセツジムには着いた。しかしクロノは入り口前に立

ちジムを見上げていた。

「ココから俺の……俺の覇道が始まる!」

高ぶる気持ちを口に出し、やっとジムの中に入る。入り口に入るとすぐに受付が有った。

「ジム戦をお願いします」

クロノは受付に座る女性にジム戦の受付を頼んだ。受付嬢はパソコンを操作する

「はい。今でしたら直ぐに可能ですよ。横のゲートからどうぞ」

笑顔で受付右側に手でゲートを指す。一礼しクロノはゲートを潜る。ゲートを潜るとすぐにバトルフィールドがある。しかし電気が点いていない。真っ暗だった

「ガツハハハハ! 待ったぞ小僧!」

聞いた声と無駄にデカイ笑い声の後にフィールドにライトが点く

「あ! 屋台の親父!」

クロノは知っていた。キンセツジムのジムリーダーを。昨夜クロノに大量の焼きそばを作った屋台の親父だったからだ。

「今更だが自己紹介だ。ワシがキンセツジムのリーダーテッセンじや! ガツハハハハ! チャレンジャーク

ロノ! 正々堂々とダイナモバッジを賭けて勝負じゃ!」

ハイテンションな雰囲気とは裏腹、クロノは感じた。テッセンから発する覇気を。この三年間の間に戦った誰よりも強い闘志。

「こちらこそ！俺の全力でダイナモバッジを取りに行くぜ！」

覇気には覇気。テッセンに負けない覇気をクロノも出す

「宜しい！ならルールじゃ！使用ポケモンは三体！全滅したら負けじゃ！ポケモンの交換はチャレンジャーのみじゃ！」

本来ならジャッチがする説明をテッセンが行う。ジャッチが所定の位置に着くがよもや仕事は勝負の判定のみだった。

クロノもテッセンめジャッチ着くなりモンスターボールを構える。ジャッチもそれに答えるように試合開始の合図を出す。

「まずはお前じゃ！エレキブル！」

テッセンの先鋒はエレキブル。シンオウ地方で発見されたエレブーの進化体。

「震える大地！ジオ！」

クロノはニドキングのジオ。地面タイプを持つジオは電気タイプのエキスパートテッセンには天敵である

「セオリー通りで来たか！エレキブル！力比べじゃ！」

ジオ向かってきた突進するエレキブル

「力比べも制する！ジオ！突っ込め！」

ジオもまたクロノの命でエレキブルに突進する

二体はフィールド中央で組み合い静止する。静かな力比べ。しかし確かに二体は戦っている。

僅かだがエレキブルが押されている。先に動いたのはジオだった

「ジオ！そのまま地震だ！」

組み合ったままジオは地面タイプの大技『地震』を放つ。ゼロ距離でこの技を受ければ大抵の敵は倒れる。地震の衝撃で舞う土煙で前が見えない。

土煙が晴れるとエレキブルはジオに掴まったまま片膝をついていた。勝った。クロノやジオ、ジャッチまでもがそう思った。テッセン以外は

「自信と満身は己の敵じゃ！」

テッセンの叫びと共にエレキブルの口元が笑った
ジオはエレキブルから離れようとするが遅かった

「炎のパンチ！」

エレキブルの拳が炎に包まれる。クロノも指示を出そうとするが遅すぎた。刹那、ジオはクロノの後ろまで飛ばされていた。

「ジオ！」

ジオに近づくクロノ。ジオも立とうとするが無理だった

「ニドキング戦闘不能！エレキブルの勝ち！」

ジャッチの判定に従いクロノはジオにお礼を言いボールに戻した

「タイプの優劣だけが勝敗を決しないぞ小僧！」

腕を組み諭す用にテッセンが言う。クロノは背を向けたまま肩を振るわせた。泣いている訳でも、畏怖しているわけでもない。そう、彼は

「そうだ！こうでなくっちゃな！これがジム戦！俺の目指す覇道！」

彼は歓喜していた。この三年間。ジム戦を味わったことのないクロノにとって血湧き肉踊る戦い。クロノにとって歓喜しない理由がない

「ガッハハハハ！狂ったか小僧！」

クロノの歓喜に流石にテッセンも理解出来なかった

「俺は正常だ！ジオのゼロ距離の地震を耐えたのはアンタが初めてだ！これが嬉しくてよ！ジオも全力だった！俺も全力だった！でもジオは負けた！最高だ！アンタ！燃えてきた！」

一年間、クロノは自分のポケモンが戦闘不能になったことがない。どんな相手にもかかわらず。それだけ彼が強い証拠だった。そして今、彼のポケモンは倒れた。彼をさらに燃えさせるには十分な理由だった。

「試合続行！行くぜジムリーダー！テッセン！」

トレーナーサークルに戻り新しいモンスターボールを取り出すクロノ。

「来い！チャレンジャークロノ！」

唐突に二人は理解した。

『眼前の男は強い』

そこには笑い上戸のテッセンはもういない。そこには普通のクロノはもういない。

「逆巻け！ゲライント」

クロノの二番手はムクホークのゲライント。彼のメンバーの中では最大の早さを誇る

相手が出たのにエレキブルは片膝をついたままだった。否構えをとれるほど体力が無かった

「やっぱりな。気合いの鉢巻で耐えたのか」

クロノは不適な笑みを浮かべエレキブルをみた

気合いの鉢巻。ポケモンに持たせる道具だ。この鉢巻を巻いたポケモンは致死ダメージを受けでもって少しでも体力を残せる不思議な鉢巻。

「さよう！いかに致死ダメージを受けようとも返しの一撃が決まれば勝負は決まる！」

乾坤一擲。正に今のテッセンの戦略だがそう何度も使えない

「手負いのエレキブルなんか怖くない！ゲライント！」

高速のゲライントがエレキブルを襲う。避ける統べなくエレキブルは倒れた。

ジャッチの判断によりエレキブルの戦闘不能が告げられテッセンはエレキブルを戻す

「条件は同じ！勝負はまだまだじゃ！」

エレキブルを倒されてもまだその覇気は衰えない。

「二番手はお前だ！レアコイル！」

テッセンの二番手はレアコイル。鋼、電気を併せ持つポケモンだ

「勝負だ！ジムリーダー！」

二人の強者の戦いは続く

第二話 「乾坤一擲」笑う強者達」前編（後書き）

クロノVSテッセン。まさかのシンオウポケモンとカントーポケモン登場です。

クロノ「流石にビビったな」

シンオウで新しいポケモンが見つかったのにホウエンに影響がない訳がないと作者の勝手な妄想です

テッセン「ガツハハハハ！豪快豪快！」

テッセンの性格も笑い上戸な面とジムリーダーとしての強者の面を作ってみました。

タイトルの「白と黒」とはオセロの裏表みたいな人の裏表を意味しています。今回のクロノが良い例ですね。普段のただ仲間と戦いを楽しむ面と強者との戦いを楽しむ面。言うなれば「歓喜と狂喜」。

これがクロノの「白と黒の想い」です。作者はこれは誰にでもあり、全ての生き物が持っている物だと思ってます

クロノ「意外と真面目に考えんだな」

裏クロノ「ハッ！くだらねえ！自分に正直に生きる！そこに裏も表もねえ！」

それもまた真理

クロノ「てか、なんだよ裏クロノって」

アカネ「私の出番まだ？」

では、また次回

第三話 「乾坤一擲」笑う強者達」後編（前書き）

テッセン戦が終わります。ガレスが初バトル。

第三話 「乾坤一擲」笑う強者達」後編

制空権はクロノのゲライントに有った。

ただ浮遊しているテッセンのレアコイルに対し、容赦ない攻撃。

反撃を許さぬようにヒットアンドアウェイを繰り返す徐々にダメージを与え着実に勝利へ近づく

「タイプの相性が勝負を決めない。さっきアンタが言った台詞だ。」

挑発するクロノ。しかしそんな易い挑発に乗るジムリーダーテッセンではない。ただ戦況を見極め、反撃の機会を伺う

「潮時だ！ゲライント！フィニッシュ！」

レアコイルに対し止めの一撃を指示するクロノ。

しかし、ゲライントの早さが急激に落ちた。ゲライント自信飛ぶのがやっとの状態であった

「やっとか。長かったな」

テッセンの思惑。クロノは正にテッセンの策にハマっていた。

「クソ！麻痺か!？」

そう。あの猛攻の中レアコイルは電磁波をゲライントに当てていた。しかし、ゲライントが早すぎたため電磁波が当たらずここまで時間を要したのだ

「確かにスピードではレアコイルは劣る。ならば攻撃が当たりやす

い速度まで下げればよいだけのこと。電気タイプにはそれが可能な技がある！」

テッセンの策にクロノは気づけなかった。いや、実際レアコイルは技を出した素振りは見せなかった。

技を出してないように見せる。テッセンの育成の賜だ

「勝ち誇るの早いな！早さは落ちたが、レアコイルの体力はもう、殆ど無いぜ？ゲライントは麻痺になっただけ！次で決める！」

クロノ言うとおり。実際ゲライントは何発が攻撃を受けたがかすり傷程度。ダメージ呼べる攻撃は受けてない。

引き替えレアコイルは弱点である格闘技『インファイト』による猛攻を何発も受け、限界ギリギリである。しかもレアコイルはエレキブルのように気合いの鉢巻を巻いている訳でもない。

「ならばかかってくるが良い！」

圧倒的不利な状況に有りながらテッセンは未だ余裕であった。

何か策がある。誰もがそう思うが、麻痺状態のままの持久戦は逆転される可能性を招く。

「麻痺状態だがスピードはゲライントがまだ上！ここは仕掛ける！」

決して間違った作戦ではない。寧ろ良好な作戦である。

レアコイルに突っ込むゲライント。麻痺の影響で思うような早さは出ないがレアコイルに止めをさす位なら可能であった。

あと数メートル。麻痺状態出なければ勝っていた。

「大爆発！！！」

「なに!!」

テッセンの最後の一手。

驚愕するクロノ。

勝てなくとも引き分けは可能。まさかの作戦。

凄まじい爆発を放つレアコイル。

巻き込まれるゲライント。

視界を奪う爆風。

爆風が消えた視界が回復すると、フィールドにはレアコイルとゲライントが力無く倒れている

「ダブルノックアウト!」

ジャッチの判定が下る。誰が見ても分かる。よもやこの二体には戦う余力は無い。

「勝てなけりや引き分け狙いかよ?」

ゲライントを戻し、テッセンの大胆な作戦に呆れるクロノ。
テッセンもレアコイルを戻しクロノに告げる

「最後の一体が立っていればワシの勝ち。それは団体戦のキモだ。
覚えておけ小僧。」

豪快にして大胆。ハウエン最強のジムリーダーテッセン。クロノはまさに彼の作戦通りに動いていた。

「ワシに挑むのがちと早かったな小僧。こいつが出たらお前の負けは確定じゃ。」

テッセン最後の一体。テッセンを今の地位に上げたテッセンの切り札。

テッセンの顔には既に勝利の色が浮かんでいた。

しかし、先ほどまでの狂喜したクロノはもういない。頭の血が抜けクロノは普段通りに戻れた。

そして、クロノにもまた勝利を確信した笑みを浮かべていた。

クロノの最後の一体。彼と最も長く、最も信頼しているポケモン。

「俺の最後の一体は！ガレス！お前だ！」

クロノが最も信頼しているポケモン。それがガレス。

「ワシのトリはお前じゃ！ライボルト！」

テッセンの信頼するポケモン、ライボルト。テッセンが一から育てた彼の右腕とも呼べるポケモンである

フィールドに立つガレス。手首から吹き出す炎は、激しければ激しいほど彼の闘志の現れである。

対峙するライボルト。彼もまた姿勢を低くし、対峙する倒すべき相手に威嚇をする。

ガレスの周りを回りながら隙を伺うライボルト。

ガレスはそんなライボルトに対し視線のみを向け、隙を伺う。

ガレスの炎がさらに燃える。

さきに仕掛けたのはライボルトだった。ガレスとの距離を素早く詰めて、飛びかかり電撃を放つ。

しかし、ガレスはもうそこにはいない。

ライボルトの真下に潜り込んでいたのだ。

ライボルトの死角。反撃の隙すら無い。

「ブレイズキック！」

クロノの指示と同時にガレスの右足に炎が宿り、頭上のライボルトを蹴り上げる。

避ける術なく天空に舞い上がる。

しかし、ライボルトもテッセンもこの瞬間。さらなる勝利を確信した

「出直して来い小僧！ライボルト、雷！」

技を放った隙。それを見逃すテッセンではなかったライボルトから凄まじい電撃がガレスを襲う。

天空からの電撃。ライボルトの必殺技の雷。

ライボルトの雷を直に受け立っていた相手はいない。雷が決まった瞬間テッセンは三度目の油断を生んだ。

雷を弾き返す業火。電撃の中からガレスが放つ炎。

テッセンとライボルトは目を疑った。雷は確かに当たった。避けてはいない。何より電撃の中からガレスが反撃をしている。

クロノは何も指示をしていない。指示をする必要が無いからだ。

ガレスの炎は空中のライボルトだけでなく、その先の天井をも貫いた。

炎が消え、ライボルトはそのままフィールドに倒れた。

「ライボルト！」

テッセンがライボルトに近づく。よもや勝負はついた。ジャッチも判決を出そうとするが、出す必要もなくなった。

テッセンはライボルトを戻しガレスを見た

「なぜ、このバシャーモは立っておる？確かに雷は当たったはずだが？」

テッセンの疑問。雷が当たったのは確か。倒せなくとも反撃は許さないはず。なのにガレスは反撃を行い勝った。

「答えはこれさ。」

クロノもフィールドに入りガレスの隣に立った。僅かだがガレスの口が動いた。

「ガレスには木の実を持たせててね。この木の実は電気タイプの攻撃を受けた時、電撃を体外に流しやすくするのさ」

クロノはポケットの中から一つの木の実を見せた。電撃を受ける瞬間、ガレスはこの木の実を食べ自分に受ける電撃の威力を減らし、反撃をしたのだ。

「ガツハハハハ！こりゃ参った！まさか、全力のワシを倒すとはな！愉快、愉快！」

バトルが終わり、何時もの笑い上戸のテッセンに戻った。クロノもつられて笑い、いつしかフィールドは笑い声に包まれた

第三話 「乾坤一擲」笑う強者達」後編（後書き）

はい。テッセン戦最終です。プロローグから出番の無かったパートナーガレスが出てきました

クロノ「まあガレスは一番育てたからな。初めっから出すと牛蒡抜き出来ちまうしな。」

ガレス「シヤモ！」

軽く補足すると、ライボルトを倒した技は「ブラストバーン」です
クロノ「デメリットが有るけど高い威力が有る技だな」

最後に。

次は番外編です。クロノは愚か人が出てきません。

アカネ「私ので〜ば〜ん！」

新キャラアカネちゃんは番外編の後に登場予定です。

番外編 「決意し神々の意志し」（前書き）

番外編です。結構重要キャラばっか。

番外編 「決意し神々の意志」

何も無い空間。ただ闇のみがその空間を覆う。

ある者によればそこは、宇宙。またある者によればそこは、始まりの世界。しかし、その空間には名前など意味をなさない。

「我らが星の運命を決める時が来た……集え我が子らよ」

全てを創りし神。神の名はアルセウス。

アルセウスの呼びかけに全ての創世者達はその空間に集った。全ての創世者達はアルセウスを中心に円になり頭をたれた。しかし、その中に一体のみいない者がいた

「蒼き夢の君がおらぬが？」

アルセウスがその一体に気がつく

「神よ。兄は特異点と共にあります」

紅き夢の君ーラティアスが兄の不在を告げる

「神の召集に応じぬとは。無礼な」

七色の翼ーハウオウがラティアスを睨む。しかしラティアスは気にせず神に対し頭を垂れていた

「頭を上げるが良い。我が子よ。」

アルセウスの許しを得て創世者達は頭を上げ、創造主に眼を向けた。

「神よ。この星の未来の為に人は要らぬ命。我らが同胞への仕打ちよもや見過ごせません。」

炎の帝王―エンテイがアルセウスに告げる。

「主がそれを言うか？」

「貴様の身勝手さが同胞の住処を灰にした事を忘れたわけではあるまい？」

水の長、雷神の化身―スイクンとライコウ。彼らは不適な笑みを浮かべエンテイに言いはなつた。エンテイが睨みつけると二体も睨み返す

「俺はエンテイに賛成だな」

雷の羽―サンダーが何時もと変わらぬ口調で言い放つ

「――！貴様！神の御前！なんたる口調！」

ホウオウが怒鳴るがアルセウスがそれを静止させる。ホウオウも気に食わないがそれに応じた。しかし怒りの眼差しはサンダーに向かったままだった。サンダーもそれに気づいているがあえて無視していた

「雷の羽よ。貴殿の真意を述べよ。貴殿らの祠の人間は暴拳を行つてはいないようだが？」

そう。サンダー、フリーザー、ファイヤーの三体が住まう場所。ア

「シア島では彼らは神に等しき扱いであり、島では常に崇められている。つまりサンダーが人に対して殺意をもつ理由が無い。アーシア島だけを見れば

「神さまだつて、知ってるだろ？アホな人間が俺達を捕まえようとした事をよ？俺からしたらそんな人間が要るだけで人間なんていなくて良いわ」

よもやサンダーにとってアルセウスは友人感覚でしか無かった他の創世者からすれば信じられない口調である

「たしかに。あのまま行けば世界はバランスを失い崩壊していた。」

アルセウスは瞳を閉じ先の異変を思い出していた

「なあ？だから神さまよ、早く人間を消しちまおうぜ？」

話し合いに意味はない。直接は言わないがサンダーの真意はこれだ。

「しかし神よ。先の異変を止めたのもまた人間。人の創りし奇跡の業によるもの」

銀色の風ールギアがアルセウスに告げる。

先のサンダー達による世界のバランスの崩壊は人によって招かれ、人によって止められた

「確かに。人間によって我々も止められた。」

「人間の奇跡。不可能を可能にする力」

時間と空間の化身ーディアルガとパルキア。彼らもまた人間の奇跡

の業により異変を止められた者だった。

「水星と歩む者、時の壁を抜ける者、我が半身は如何に思う?」

アルセウスの急な指名に戸惑う三体。他の創世者達より遙かに小さい体だが、その身に宿る力は凄まじいものである

「僕は、まだ人と一緒に居たいな。」

水星と歩む者―ジラーチ。千年の内7日間だけ目を覚ましあらゆる願いを叶える者。

人との関わりが少ない。だからこそ、人の想いを強く感じれる。

「たしかに人の中には悪い奴もいる。でも、人は悪い奴だけじゃないよ!」

時の壁を抜ける者―セレビィ。

彼もまた、人に悪用されその命を無くしそうになった一人。そんな経験をしながらも彼は人と歩む道を選んだ。

「僕は……やだな……。人は身勝手だよ」

アルセウスの半身―ミュウ。

全ての同胞の親。あらゆる者の基礎。

ミュウ自信人に何かをされたわけではない。しかし、彼から別の命が作られた。人の身勝手さで。彼から生まれた命は、自分の生きる意味を模索し苦悩し、運命に抗った。

「人の身勝手に振り回される命……。人の飽くなき欲望……」

異界の使者ーギイラティナが呟く。
彼もセレヴィイ同様に人の業により命を無くしかけた者の一人。

「ですが、人は同胞を助け、一緒に歩いてくれます！今までもこれからでもです。」

感謝の花束ージェイミが全ての創世者に強く言い聞かせる。
しかし、吹雪の風ーフリーザーはそれを否定した

「たしかに人は同胞を助け、共に過ごしてきた。聞こえは良いが結局は同胞を利用してはほかなら無い。」

「ヒトノヨクボウ。ユルセナイ。シカシ、ヒトモマタシゼンノイチブ。ヒトヲケスコト。ホシヲコワスコト。」

大地を変える者ーレジギガスが言う。人も星の一部。彼もまた人と歩む事を選んだのだった。

「しかし、人間は地上だけではなく、空も破壊し始めた。このままでは星が持たないぞ？」

天空を創る者ーレッツウクザ。

人は空を飛ぶ術を得た。しかし、それは世界を壊すスピードを早めたことでもあった。

「ソラだけじゃない。星のソト。宇チユウもマタ、汚されハジメタ。」

異星の命ーデオキシス。

この星を外から見たことにより人の悪行を見極めた。結果彼も人を

否定した。

「人が悪い言い方しかしないが、なら俺達は直す点は無いのか？俺達はそんなに完璧な命なのか？」

大地を広げる者ーグラードン。

人の悪行は許せない。しかし自分達もまた過ちを犯してきた。これがグラードンの考えである

「しかし、余り悠長なことは言つてられないぞ？星の命は有限。腐りきる前に腐つた部位を切り取る必要がある。それが我々にせよ、人間にせよだ。」

大海の波ーカイオーガ。

中立な意見。そんな意見が話し合いを無限の回廊に招くきっかけであつた。

「星がまだ進化の過程とは考えられないの？人の奇跡と僕達が合わされば何とかなるよ！」

蒼海の王子ーマナフィ。

人と接する事で、人の可能性、暖かさ。そして自分達の可能性を知つた。

だからこそ、人を、星の未来を信じる事が出来た

アルセウスは悩んだ。

世界を見て、人を見た自分の化身。全てが独自の意識、人への想い

を持った。星が危ない。人のせいで。しかし、人を創ったのは彼自信。人を消す。同胞達と変わらぬ命を。彼らを全て消すことは悪行を行う人と変わらない。

そんな、話し合いを終わらせたのは無言だった二人だった

「下らない。」

「馬鹿みたい」

黒い悪夢ーダークライ

紅い夢の君ーラティマス

全ての創世者の視線が彼らに向かう

「なぜ、我らだけで話し合う？人の意志は無視か？彼らの知性は話し合いのためにあるのでは無いのか？」

ダークライの疑問も、最もだった。世界を創った者は自分達だ。星の行く末を見定める義務がある。

しかし、人もまた彼らと同じ知性がある。話し合う事が出来る

「全ての人とは無理だけど、特異点となら不可能じゃない。」

そう。彼らがポケモンの代表なら、人の代表とも話を行う。それがラティマスの意志。

「特異点に真実を教える。その上で我らに牙を向くなら人を消す。これなら構わんだろ？」

ダークライの突然の提案。全ての創世者達が戸惑った。アルセウス以外は

「……良からう。黒い悪夢。紅い夢の君と共に特異点に接触し、特異点の求める真実を告げよ」

アルセウスの承諾を得て、ダークライ、ラティアスは一礼し、姿を消した。

「神よ。良いのですか？」

エンテイがアルセウスに問う

「不服か？炎の帝王。それともそなたが直接告げるか？」

エンテイは無言だった。

そして、一礼しその空間から消えた。

一体、また一体とアルセウスに一礼し、その姿を消していった

「……人よ。恨むなら私の不甲斐なさを恨むが良い。我もまた未完の神。」

アルセウスは決断を出した自分を怨んだ。特異点に全てを任せ、決断から逃げた自分に……

番外編 「決意」神々の意志」(後書き)

はい！番外編！来ました！伝説ラツシュ！

クロノ「流石に多いな。」

今年の映画で神様きましたしね。時間軸的に言えば、テッセン戦前にこの会議は行われています。

アカネ「次回には本当に出来るの？」

はい。確実に。多少予定とズレましたが次回にはアカネちゃんは出ます。

アカネ「やったー！なら次回に乞うご期待！」

数少ない女の子要素ですからね。

第四話 「出会い／＼千客万来な旅路」 (前書き)

はい。新キャラ登場です

第四話 「出会い〜千客万来な旅路〜」

楽をする事。決して悪い事ではない。しかし、代償に人との出会いを失い、新たな発見の機会を無くす。

110番道路。サイクリングロードと隣接する道路だ。サイクリングロードを使えば長くて2日で目的地カイナシティに着く。しかし110番道路を歩くと早くて3日。長くて5日かかる。

クロノ自身、己を鍛えるためあまり楽はしないようにしているが、今回は自転車を持っていないため仕方がなく110番道路を歩く羽目になった。

「貸し出し用も無いとかあり得ないな・・・」

そうばやくクロノ。本来サイクリングロードは貸し出し用もあるが、今年のこの時期は大半の人がカイナシティ方面を目指している。そのためサイクリングロードの自転車も不足したのだ

空は晴天、左手側にはうつすらとサイクリングロードが見える川沿いを歩き幾分涼しいが、温暖な気候のハウエン地方。こう晴れていると暑くなってくる。

腰に付けた水飲みに手を掛け水分を補給しようとするが、肝心の中身が空だった。時間的にも昼に近い。クロノは水筒の中身の補給と昼食を兼ねて一旦休憩を取ることにした。急ぐ旅だが倒れては元も子もない。

クロノの昼食はポケモンセンターで作ったサンドイッチが3つ。木陰で涼みながら食べていた。すると、茂みが動き出す。

(ポケモンか?)

視線のみ茂みに向け様子を伺うクロノ。下手に敵意を向けポケモンを脅えさせない為にクロノあえて無視していた。

しかし、出てきたのはポケモン出はなく、年も間もない女の子だった。草村を歩き回ったのだろうか、頭や服などに葉っぱや小枝が大量に着いている。

女の子はこちらに気づいて近づいてくる

「ねえ、お兄ちゃん。この辺でプラスルとマイナン見なかった」

クロノを覗き込むように見る女の子。

「ごめんな。俺は見てないな。」

クロノがそう答えると、女の子は少し残念そうに

「そっかあ」といいクロノから目を離し、あたりを見回す。

身なりを見ると、たしかに小枝や葉っぱまみれだが、着ている服がまだ新しい。何よりモンスターボールがまだ一つしかない。つまりこの子は今日旅に出たばかりの新人トレーナーであることが分かる。すると女の子のお腹から空腹を告げる虫が鳴く。それを聞いたクロノがまだ、手をつけていないサンドイッチを女の子に差し出す。

「お腹が減ったらプラスル達も捕まらないぞ。」

女の子はお礼を言い座りサンドイッチを食べ始める。

変わりにクロノが立ち上がりモンスターボールを一つ取り出す。

「お兄ちゃん？なにをするの？」

口にソースを着け女の子がクロノに聞く

「プラスル達を誘き出すのさ」

そう言いクロノはモンスターボールから一匹のサンダースを出す。

「ガラハット。ちょっとだけ電気を出してくれないか？」

サンダースのガラハット。彼の持つ唯一の電気タイプのポケモンだ。クロノはガラハットに指示を出すとガラハットは微弱な電気を出し始めた。

「これでプラスル達は来るの？」

サンドイッチを食べ終わりクロノの行動を見つめる女の子。

「ああ。電気タイプのポケモンは電気にひかれる性質があつてね。まあ種族によつて違いは有るけど。で、プラスル達はこんくらいの電気にひかれるわけ。」

クロノ説明をあまり理解出来ずにいるが、プラスル達にあえると分かると女の子は目を輝かせた

それから、程なくすると、茂みから一匹のマイナンが出てきた。

女の子は始めてみるマイナンに目をさらに輝かせた。

「早くしないと逃げちゃうぞ。」

女の子を急かすクロノ。

女の子は我に帰り腰からモンスターボールを取り出す。

出てきたのはキモリだった。

それからは初々しいバトルが始まった。

初めてのバトル。クロノにもあったあの感覚。少し懐かしくなり、クロノは自然と笑っていた。

「やったー！」

女の子の叫びで思い出から戻るクロノ。どうやらゲットに成功したようだ。

反面女の子のキモリは少し疲れた様子である。

「ありがとう！お兄ちゃん！」

女の子はお礼を言い、キモリと一緒にその場を離れていった。女の子の後ろ姿見送り、ガラハットを戻した木陰で休み始める。

「見てたよ。お兄さんつてもしかして、そっちの人？」

頭上から新しい女の声が聞こえ、クロノは声の方を向く

「千客万来だな。ちなみに俺にそっちの気は無いぜ。」

木の枝に座り下を見ている女。

女は枝から下りクロノに近づく。

「誰だよあんた。」

クロノが先に口を開く。女はクロノより頭一つ分小さく、その茜色の長い髪を三つ編みにして纏めている。

クロノをのぞき込むように見る女。

「……も。まあいいわ。私はアカネ。超一流のなんでも屋兼美

少女トレーナーよ。花も恥じらう13歳。」

胸をはり得意げに自己紹介をするアカネ。

クロノは多少呆れているが、美少女を自称するだけありなかなか良い顔つきをしている。

「俺はクロノ。全地方のリーグ制覇目指して旅をしている。年は16だ。」

クロノも軽く自己紹介をし立ち上がる。

立ち上がり、並ぶとクロノとアカネの身長さが更に明白になる。今までクロノを見下ろしていたアカネが今度は見上げている。

「ねえクロノ。今どこに向かって旅してるの？」

クロノに問うアカネ。

それに答えるクロノ。

「今年がなんの年か知らない訳じゃないだろ？俺も千年水星目当てだよ。」

クロノの言う千年水星。

それは名の通り千年に一度見れる巨大な水星であり、とある巨大な広野では伝説のポケモンであるジラーチを称える祭りがある。クロノもそれが目当てでカイナシティ方面に向かっていった。

「なら私と同じじゃん。ならそこまで一緒に行こうよ。」

アカネの提案をクロノには断る理由がない。むしろ二人なら、夜が

安心して睡眠がとれるため、願ったり叶ったりだった。

「よく見ず知らずの男にそんな提案できるな？そっちがいいなら構わないぜ。」

ポケモンがいるから安心して旅が出来るが、人間関係ではそうは行かない。善人を装い犯罪をするトレーナーも少なくはない。女性トレーナーの一人旅ならなおのこと標的になりやすい。

「やрийい。いやー実は結構不安だった。ほら、私可愛いからさ。だから、ここで安全そうな人探してたのよね。」

ポーズをとり自分が可愛い事をアピールするが、クロノにとっては大したアピールにはならなかった

「アホか。なら早く行くぞ。ここで油売って千年水星見られなくなるのはヤだしな。」

荷物を持ちカイナシティへ向かう川沿いを歩きだすクロノ。

「ちょっと、待ちなさいよ。これから一緒に旅するんだしさ。」

それを追うアカネ。

しかし、クロノは知らない。既に黒い想いが動きだし彼を巻き込もうとしている事を。

「リーダー。アイツが目標に接触しました。また、リーダーから消えたグラードンも再発見出来ました。」

そこには紅いローブ姿の集団がいた。

「そうか。なら監視を怠るな。」

一段高い椅子へ座り機器を操作する部下達へ指示を出す男。
男の前にある巨大なスクリーンに映し出されているのは、大地を創造した者だった……

第四話 「出会い〜千客万来な旅路〜」 (後書き)

えー第四話(実質第五話か?) 如何でしたか?

新米トレーナーの女の子やら、メインヒロインのアカネちゃんやら、新しい手持ちのガラハット。

新キャラはそんなに出すべきじゃないね。うん。

アカネ「はい。メインヒロインのアカネです。美少女トレーナーで世界の男達を虜にしてみせます!」

クロノ「アホか。それならシロナさんみたいになってみるって」

アカネ「なに、クロノってシロナさんみたいな人が好みなの?」

実はクロノ君はシロナさんやナギさんのファンである裏設定があります。

アカネ「うわ。ロリコンじゃなくて年上趣味か。」

クロノ「違くないが、言い方が悪いぞ。」

では次回でお会いしましょう。

クロノ&アカネ「また次回〜」

第五話 「夜、二人の孤独」 (前書き)

クロノとアカネの昔話

第五話 「夜、二人の孤独」

闇が空を包み込み、全ての生き物達が夢の中にいる。110番道路の一部。赤々と燃える薪の前に二人がいた。クロノとアカネ。彼らが出会い早2日が立っていた。クロノは一人古ぼけた一冊の本を読み、アカネは寝袋にくるまり睡眠をとっていた。

「ん……。まだ起きてなの？」

本めくる音で起きたのか、アカネが寝袋から出てくる

「ああ。日課みたいな物だしな。何より野党がいなくても限らないしな。」

そう言い、本を閉じる。

アカネと出会ってからクロノはろくに寝ていない。

火を消さない為でもあるが、何より女性を守る。その彼のプライドが睡眠を妨げている

「……やっぱり迷惑だった？」

出会って1日目からアカネが何度も口にしてきた言葉。それに対してクロノは

「大丈夫」や

「問題ない」とだけ答えているが、昼間の彼は隙有れば寝ている生活を繰り返している。

「なら今から寝なよ。私が薪の番してるからさ」

クロノの体調を気遣い見張りをかって出るがクロノは断る。

「夜更かしは肌荒れの元だぞ？何より女性を気遣うのは男の勤めだ。」

「

クロノの変なプライド。女性を守るのが男の勤め。女性に対して優しいのはここからきている。

それが自分の体調を崩すことになろうと。

「私だって殆ど一人旅だったから野営にもなれてるし、見張り番くらいなできるよ。このままじゃ私お荷物じゃん。」

少し頬を膨らませるアカネ。それを微笑みながら見るクロノ。

「……その変なプライドもお兄さんに教わったの？」

出会ってすぐ、二人は大まかに自分達の素性は話をしているためある程度のことには理解していた。

中でもアカネはクロノの家族の話に興味があった。

「まあな。女性を護ることだけじゃない。ポケモンとの接し方、応急処置に強くなる方法。兄貴は俺の先生だったし人生の教科書でもあった。何より唯一俺を認めてくれた人だった……」

星空を見上げて、無き兄に想いをはせた。

アカネは座り直しクロノに向き直った。

「ねえ。問題無かったら話してよ。家族の話。」

空を見ているクロノにアカネは聞く。
少し悩むがクロノもそれに応じた。

「そんなに面白くもないし、兄貴の話メインになるなけど知りたいな教えてやるよ。おさらいもかねて。

俺の家はアルトマーレって所にある。今は三人だけ兄貴が入れば四人だな。

兄貴は生きてれば今年で25歳。

兄貴は凄腕のトレーナーでな。19歳ポケモンレンジャーに転職してそれから世界を転々してた。でも、たまに帰ってきたら俺に色々な話をしてくれた。話だけじゃない、トレーナーして生きる様々な知識をくれた。

でも俺の11歳の誕生日の日にミッション中の事故にあって亡くなった。胆略したけど俺の家族話はこんなもんだな。」

寝てるものかと思っていたクロノだが、アカネは起きて話を全て聞いていた。

「ありがとう話ってくれて。・・・私にはいないな。私を認めてくれたくれる家族なんて。私は全部手探りだった。生きる為の知識を知るのわ。」

薪の炎を見つめ少し俯くアカネ。それを見つめクロノ

「なあ。アカネの家はどうだったんた？俺ばっかり話すのも不公平だろ？」

薪から目を離しクロノを見る。少し悩んだがアカネは口を開いた

「……私の家はお父さんと私の二人暮らし。お父さんは学者で、毎日研究ばかり。お金には困らなかつたし、お父さんも私に色々な物をくれたけど家はいつも私一人。誕生日だってケーキとプレゼントだけだつた。でも、私を見るときのお父さんの笑顔が大好きだつた。だから私も頑張ろうつて思つて、なんでも屋になるつて思つたの。」

話していてもどこか寂しさを見せながらもアカネはクロノに自分の寂しさ、しかしその中にある希望を打ち明けた。

「わりい。あんまり聞かない方が良かったか？」

聞いちゃまずかつたか？クロノの脳によぎる言葉。自分が聞かれたく無いこと聞かないようにしてきたが、アカネは家族話があまり聞かないようにクロノは感じた

「うん。別に構わないけどさ。たまた思い出したらちよつと寂しさなつちやつて。」

再び薪に目を向け俯くアカネ。その小さな胸を寂しさがよぎる。

「ほら。お話終わりだ。早くねろ。」

そんなアカネを見かねてクロノは床につくようにアカネを促す。しかし、クロノ自身隠しているが話している最中から睡魔と戦っていた。

「そんはへろへろになつて人の心配しないの。三時間したら起こすから、ホント少し寝なさい。」

小刻みだが左右に揺れているクロノ。彼自身よもや限界寸前の状態で有りながら自身のプライドは護ろうとしていたが、

「……ああ。すまない。本当に限界だ。少し寝させてもらおう……」

そう言いクロノは座布団にしていた寝袋に潜り込み、直ぐに寝息を立てた。

クロノが熟睡するのに三十分とかならなかった。

「……私、なにやってるんだろ。こんな不安定で、変にプライド高いけど、こんな私には優しい人騙すなんて。」

膝に顔を埋め誰にも聞こえない声でアカネは自分の苦悩を口にしていた。

しかしそれが自分黒い想いに潰されないために彼女が出きる唯一の方法でしかなかった

そして彼女は目の前の彼が自然に起きるまで彼に声をかけることがなかった。それが彼女今出来る精一杯の優しさだからだから。

第五話 「夜、二人の孤独」 (後書き)

今回はクロノとアカネの昔話です。

クロノのお兄さんの素性をやつと公開。

ここで「お兄さんの年齢おかしくない？」とお考えの読者皆様にネタバレしない程度にご説明

クロノが生まれた時お兄さんは10歳。で、来年旅に出ています。

お兄さん19歳でポケモンレンジャー。(クロノ9歳)

クロノ11歳(お兄さん21歳)お兄さん他界。

現在クロノ16歳(お兄さん26歳)

てな分けです。

ではまた次回にお会いしましょう

第六話 「クロノく惨めだった過去」 (前書き)

クロノの黒く激しい部分の全てを書いたつもりです。

第六話 「クロノく惨めだった過去」

雲が青空を飾り、潮風が人を撫でる。働く人の声が町を彩り、町の華やかさは一層際だつ。一般の人だけではない。トレーナーもバトルテントに足を伸ばす。

そして、水平線に浮かぶ観光地。水の都アルトマーレ。それらがこの町、カイナシティへ人を寄せる。

「キンセツより賑やかな町だね。」

市場を歩くクロノとアカネ。つい先刻カイナシティに着きその足で、買い物に繰り出していた。

市場では、今朝採れた魚やトレーナー必需品、人形に技マシン。主婦からトレーナーまで幅広い人がこの市場を利用している。

すでに二人は必要な物は買い終わり市場を物色している状態だった。

「流石、ハウエン最大の港町だな。何時来ても賑やかだ。」

市場を利用する人の量にクロノは呆気にとられるしかなかった。しかし、そんな市場の一角を大量のダンボールが積み上げられ一種の山を作っていた。山の周りを野次馬取り囲んでいるのは言うまでもない

「何あれ？クロノ行ってみよ！」

クロノの手を引き野次馬に突っ込みアカネ。

ダンボールの山の先には何人もの人いた。身なりのしっかりしたスーツ姿の老人以外はすべて同じ作業着を来ており、大量のダンボールを忙しく運んでいた。

老人は店の店主らしき人と交渉しているらしく、電卓を何度も打ち直し値切りを行っていた。

「なら、このお値段でいかかでしょうか？」

老人が出した金額に店主も納得したのか、首を縦に振り店の品を全て梱包し始めた

「見てクロノ。あの人店の品物全部買ったみたいだよ。ドコの富豪だろ？・・・クロノ？」

アカネの横に居たはずのクロノ顔を隠し後方に向かってゆっくり歩いていった。

「クロノ。何やってんの？」

クロノの上着の裾を掴みクロノの歩みを止めるアカネ。しかし、クロノは顔を隠したままだった

「声がデカい。あの老人はやばい。見つかったら本気やばい。」

必死にその場を離れようとするクロノ。しかし、それは儂く潰えた。

「坊ちやま。ジイの耳と目は誤魔化せませんよ？変装ならもう少しましな方法が御座いませんでしたか？」

先ほどまで店の店主と交渉していた老人がいつの間にかアカネのすぐ後ろに立っていた。

「や、やあ。セバス。元気だった？見ない内に白髪増えた？」

引きつるクロノの笑顔。

セバスと呼ばれる老人を港町の太陽が不気味に照らす

「お陰様で。」

決して変わらぬ声のトーン。照らす太陽がセバスを不気味に彩る

「クロノってお坊ちゃまだったんだ。」

クロノの横で悪戯っぽい笑顔で笑うアカネ

セバスに見つかったらクロノは無言わさず、自家用の船に連行されアルトマーレに向かう羽目になった。

「アカネ様。今オレンジジュースしか有りませので、こちらで我慢してください。」

セバスがアカネの前のテーブルにオレンジジュースが注がれたグラスを置く。

しかし、グラスは透明では無く、淡い青色でグラスには二体のポケモンが彫られていた

「綺麗……。これがアルトマーレグラスのコップなんだ……」

グラスを手にとり、見とれるアカネ。グラスはクロノの前にも置かれたがクロノは無言でグラスの中身を飲む。

「坊ちゃま。旅に出るのは構いませんが、せめてご連絡は定期的行つて頂かないと奥様が不安になります。」

ジュースを飲むクロノの横にセバスは立ちクロノを見下げる。

「旅立つ時にも言ったたる？親父に俺を認めさせるまでは帰らないし連絡もしないって。」

セバスとは目を合わせずクロノはただ自分の旅立ちの日の決意を語った。

「しかし、クロノ坊ちやまは、ウィールアス家の大事な跡取り。その身に何か有ればそれこそ重大な事件です。」

セバスがウィールアス家の名を口にした時、アカネは我に帰り、我を疑った

「え！ウィールアスって、あのウィールアス？」

クロノとセバスが驚くアカネを見てクロノは

「言ってなかつたか？」と呟く。

「恐らくアカネ様が仰っているウィールアスとは多分ウィールアスコーポレーションの事かと思いますが、クロノ坊ちやまはそのウィールアスコーポレーションの次期跡取りです。」

ウィールアスコーポレーション。

デボンコーポレーション、シルフカンパニーに次ぐ大企業。

その企業内容は、トレーナーの必需品から乳母車。さらには棺桶まで制作している。しかし、主な収入現はポケモンレンジャーの必需品、

「キャプチャースタイラー」を筆頭したポケモンレンジャーへのサポート器具を作ってその富を築いた。

しかし、ウィールアスコーパーレシヨンは名声に負けない物を作つて来ている。ウィールアス製の鞆やリュックは丈夫で有名で、アカネの使っているリュックもウィールアス製の鞆である。

「はあ〜。クロノって只のお坊ちやまじなかつたんだあ〜」

改めてクロノをまじまじと見直すアカネ。
すると、船がアルトマーレに到着した合図を出した。

「まだ、帰ってくるつもりは無かつたんだけどな……」

船から出てアルトマーレを見るクロノ。

アルトマーレの移動手段は徒歩か船の二つだけである。自転車の使用はアルトマーレの法で禁止されている。

クロノとアカネ、セバスはゴンドラに乗り先に本家に向かう事になった。

「これもクロノの家の私物？」

アカネがゴンドラから手を出した、水に手を入れクロノに訪ねる。

「正確には親父のだな。」

アカネの間に補足するクロノ。

太陽はまだ高く、ゴンドラでの移動にはうつつけの日であった。程なくウィールアス家には着いた。着いてからアカネは思った。港から見えていた巨大な建造物。それは、観光物ではなくウィールアス家であったことを。

そして改めて思った。

クロノが大富豪の息子だということ。

巨大な扉。まるでここだけ過去にいるような感じである。巨大な扉のノッカーを叩くセバス。それに応じるかのように扉は開き、三人は家の中にはいる。

『お帰りなさいませ、クロノ坊ちやま。』

赤い絨毯を挟むように並ぶメイド達と執事達。

クロノは小さくため息を着くのをアカネは横目で見ていた。

「奥方様は？」

セバスは手前のメイドを呼びクロノの母親の居所を聞く。メイドは小声でセバスに話、一礼をし元の位置に戻る。

「では、皆の者。クロノ坊ちやまのお客人がいらしている。粗相無きように。」

セバスの一喝で執事、メイド達は自分の仕事に戻った。

内二人の使用人がアカネとクロノの荷物を預かり部屋に運んで行く。

クロノとアカネはセバスの後を歩き中庭に案内された。

中庭にはパラソルの下でティータイムを嗜む女性、クロノの母親がいた。

「奥様。クロノ坊ちやまが帰宅されました。」

セバスの一言を聞き、母親は手でセバスを下げた。セバスも一礼し中庭を後にした。

「お帰りなさい。クロノ。実に三年ぶりかしら？」

綺麗な声の中庭に響く。その声は同姓のアカネですら聞きほれてしまう程だった

何も答えないクロノ。アカネはそれを見守るしかなかった。

「相変わらずね。あなたがセバスや使用人にしか心を開かないのは

」

小さなため息と共にでる母親の言葉。拳に力がはいるクロノが返す

「……そうしたのは、母さんと親父の二人だ。心当たりが無い訳じゃないでしょう。」

敬語だが何処かトゲのあるトーンで話す。決して居心地が良くない空気が中庭を包み居場所のなくなるアカネ。それに気づく母親。

「……止めましょう。お友達もいることですし。久しぶりにみんなで夕食を取りましょう。お友達も一緒に。」

アカネに微笑みかけるクロノの母親。結婚している事が嘘のような美人であった。

クロノは一礼だけし、中庭を出る。アカネも慌ててお辞儀をしクロノの後に続く。

「クロノ坊ちやま、どちらへ？」

中庭への入り口で待機していたセバスが中庭から出てきたクロノへ訪ねる。クロノもただ

「町だ。」とのみ告げ玄関へ歩いていく。アカネもただクロノへ着

いていくしか無かった。

「綺麗なお母さんなんだね。あの親からならクロノがカツコ良く生まれる訳だ。」

未だ無言なクロノに茶化すように言うアカネ。しかしクロノの無言は続いた。

「……ねえ、クロノ。デートしよ。デート。せつかくアルトマ―レにいるんだし、時間もまだあるし良いよね。」

クロノの正面に立ち笑いながら言うアカネ。クロノはただ見下げているだけだった。

「それとも私とはヤダ？」

少し俯き声のトーンが落ちるアカネ。

「……デートスポットも知らないし、変な噂が立っても知らないぞ。」

やっと喋ったクロノ。そこには何時ものクロノがいた。また笑顔になるアカネ。

「クロノとなら変なん噂が立っても良いかな。」

クロノの左腕に抱きつくアカネ。クロノの頬が少し赤くなったのはアカネには見えなかった。

(まあ、お前となら俺も良いかな?)

クロノの心の声が思わず口に出てしまったが誰にも聞こえてはいなかった。

二人はアルトマーレの色んな所を巡った。アルトマーレの守り神ラティアスとラティオスを奉った神殿。大理石の中に化石の入った大聖堂。名産アルトマーレグラスを作っている工房。アルトマーレと絶賛されるクレープも食べた。端から見ればまさにと見えているカップルにしか見えなかった。

「ありがとうクロノ。アルトマーレを案内してくれて。」

高台でアルトマーレを一望し後ろに立つクロノにお礼を言うアカネ。

「……悪かったな。変な気使わせて。」

アカネの横まで歩き逆にクロノは誤った。今日のデートもアカネが気を使ってクロノを誘ったのはクロノ自身直ぐに分かっていたことだった。

「クロノとお母さん達との間に何が合ったか知らないし、聞こうとも思わない。でも、喧嘩出来るだけの中なら元にも戻れるんじゃないかな?」

水平線に浮かぶ夕日を見つめアカネはクロノへ言う。まるで自分が後戻り出来なくなってしまったかのように聞こえるクロノ。

「……最後にちょっと付き合っただけと、いいところがあるんだけど、良いか?」

今日初めてクロノがアカネにお願いをした。アカネもそれを受け入

れ二人は歩き出した。

着いた先は教会。脈が急激に上がっていくアカネ。

（まさかプロポーズ?!）

そんなアカネの期待は見事なまでに消え去った。

クロノは教会裏手の墓地に足を運んでいく。

このときクロノは知る由も無かった。ここに一番会いたくない人間がいることを。

クロノの目的の墓地に一人の男が立っていた。

茶色いスーツに紳士的な口髭。時代遅れだが風貌にマッチしたパイプをくわえ、手には花束を持ち。

「……親父」

足を止めるクロノ。まさか合うはずがない。ここに親父が来るわけがない。クロノの頭の中が混乱し始めたが、クロノは再度歩き出す。アカネはただついていくしかなかった。

「……久しいな。クロノ。」

ただ墓石を見つめパイプを蒸かすクロノの父―ケルア。

「あんたに、そこに花を添える資格も義務もない。」

久しぶりの父との再開。しかし、クロノの最初の一言は挨拶ではなかった。

「ここは死者が眠る場所だ。あまり殺気立つな。カイトが眠れない

だろ。」

ケルアがクロノを諭すがクロノにとってそれは火に油を注ぐ行為でしかなかった。

「あんたは、苦しむ兄さんより仕事を選んで、葬儀にも来なかった！そんな奴が今更父親面するな！」

クロノの怒りが限界を超え、ここでは言いたくないセリフを爆発させてしまった。

ケルアは、花だけ添えアカネに笑顔で会釈しその場を去っていた。俯き、力が入りすぎた拳からは血が流れ落ち、石畳を染める。空が夕闇に染まり、教会の鐘の音がアルトマーレの空に響く。

夕食は豪華なものだった。クロノの両親はアカネと話をして笑いが耐えなかったが、クロノは必要最低限の会話しかなかった。辛うじて母親と目は合わせるがケルアとは目すら合わせなかった。デザートも終わり、食後のコーヒーを飲んで一息着いていると

「クロノ。後で私の書斎に来なさい。」

ケルアがクロノと話をするためにクロノを呼び出した。クロノも「分かった」とだけ答えると席を離れ食堂を後にした。

食後、アカネは客室に戻り入浴などを済ませ一息着いていた。しかし部屋が広いいため、何処に居ても良いか分からなくなっているのが実情であった。

「クロノ。大丈夫かな？」

しようがなくベツトに座り、父親と話しているクロノを心配する

ケルアは書齋奥の椅子に座り書類サインをしていた。クロノは入り口前に立ち、そんなケルアを見ていた。

「座ったらどうだ？」

クロノを見ないが椅子に座るように言うケルア。

「用件の程は？」

母親の時のように敬語だが何処かトゲのあるトーンの声が書齋に響く
書類から目を離し初めてクロノを見るケルア

「テツセンさんに勝ったそうだな。おめでとう。ハウエン最強を謳われるジムリーダーに勝ったんだもつと誇ったらどうだ？」

クロノを誉めるケルア。しかし、クロノにとってそれはバカにされているような聞こえた。

「……兄さんが居なくなつたから次は俺ですが？」

警戒する野生ポケモンのような瞳でケルアを見るクロノ。
ため息つくケルア。

「そんなに私が嫌いか？」

決して怒鳴らないが、ケルアも苛立ちを隠すのもそろそろ限界だった。

「ああ！大嫌いだね！昔から俺がどんなに惨めだったかアンタは知らないだろ！何をやっても兄さんの陰に隠れて、『カイトの弟だから出来て当然』、『カイトならもつと上手い』、そんな事をずっと言われ続け、俺の努力を何も見なかったくせに、今更何が『おめでと』う』だ！兄さんが事故に合い病院で苦しんでいるのに、最初に病院に着いたのは弟の俺！アンタは来もしなかった！挙げ句葬儀にも来なかった！アンタにとって俺も兄さんもアンタの跡取りでしかないのかよ！？」

怒鳴り散らすクロノ。息を荒くし肩で息をするほどに。

「お前にはすまない事をした。今更謝る父を許せとは言わない。しかし、これだけは信じてくれ。私はお前を愛していることを」

クロノに近づき謝るケルア。しかしクロノはそれを拒む

「それが俺を惨めにさせるんだよ！何でも上から目線で、そうやって俺をいつまでも半人前扱い！アンタが俺を対等な関係で話した事が一度でも合ったか！？何が愛しているだ！本当に愛しているなら、なんで本当のことを話してくれない！兄さんが養子だって事もずっと隠してられるとも思ってたか！？」

涙を浮かべ部屋を出ていくクロノ。ケルアはそれを止められなかった。否止める資格すら無かったと彼が感じたのだ。

「たしかに、私はアイツを対等に見ていなかったな……。何が

愛しているだ。上辺だけの愛でアイツの惨めだった今までが埋まるのか……」

本棚を力一杯に叩き、自らの不甲斐なさを嘆くしか無かったケルア。そして彼もまた涙を流していた……

部屋の外でセバスは主の悲しむ姿をただ見守るしか無かった。

夜のアルトマーレを走るクロノ。

荷物を持ち、実家を飛び出した。あそこには居たくない。あそこ俺の居場所は無い。孤独が彼を襲う。そんな彼の孤独を救ったのは出会って間もない彼女だった。

「世界一になるトレーナーがなんて顔してるの」

いつもと変わらぬ明るい声。その声が今の彼には救いだった。

「うるせえ。」

涙で赤くなった目を擦り必死に隠そうとする。

近づき、ハンカチを渡すアカネ。

広場のベンチに座る二人。

「ごめん。話した聞いちゃった。」

さっきの親子の会話をアカネは聞いていた。

「バカみたいだろ？親父や母さんに一人前として認めて欲しくて旅にでたトレーナーなんて。」

否定するアカネ。寧ろクロノに賛成していた。

認めて欲しいから努力する。振り向いて欲しいから努力する。何も間違っではない

「なら、次に合うときはお父さんが土下座するくらい立派なって見返してやるよ！俺はここにいろぞって！」

こんな俺をアカネは認めてくれた。ただ意地でトレーナーになり。認めて欲しくて努力した、こんなバカ俺。

クロノの瞳からまた涙が溢れてきた。悲しくてでは無く、嬉しくて。クロノ抱き寄せるアカネ。

「今は泣いて良いよ。私を抱いててあげるから……」

クロノは声も無く泣いた。嬉しくて。初めて居場所を見つけて

第六話 「クロノく惨めだった過去」 (後書き)

認めて欲しかった。誰もが経験したことが有ると思います。

クロノの強さは「認めさせる」「認めて欲しい」などの『孤独』から来ています。目の前の高い壁があるから、ちっぽけな自分は見られない。だからその壁を超える。これがクロノの強さであり弱さでも有ります。でも、「ポケモンをただ強くする」じゃなく、「ポケモンと強くなる」がクロノのポリシーです。だからポケモン達はクロノを認め歩いてきてくれます。ポケモン達と一番になりみんなから認めてもらう。それが彼の居場所になり、彼の生きる意味です。クロノは誰よりも弱く、脆く壊れやすい主人公ですね。

第七話 「旅路〱何気ない旅〱」 (前書き)

忘れがちですが、二人は千年彗星を見るために旅をしています W W

第七話 「旅路〱何気ない旅」

まだ、空が暗く風が冷たいアルトマーレの朝。

ポケモンセンターの宿泊施設の一室に彼らは居た。

クロノとアカネ。

昨夜、アカネはクロノの抱える心の孤独を知った。

だから、彼の心の拠り所になりたい

それがアカネの今の嘘偽りのない本心だ。

違うベッドで寝ているが、同室で寝ることになった。

隣のベッドから彼を見つめ、涙の後が残るその頬を優しく撫でるアカネ。

「これが私に出来る、最大限の事。うん、私にはあなたに優しくする資格も、あなたの居場所になる資格も無いのに……」

寂しげな瞳でアカネはクロノを見つめていた。

目を覚ますクロノ。伸ばしていた手を引っ込めるアカネ

「ごめん、起こしちゃった？」

その問いにクロノは無言で首を横に振る

「……少しは落ち着いた？」

この問いに対してはクロノも無言では答えなかった

「悪かったな。急に泣き出して。」

起き上がりアカネの方に顔を向けるクロノ。アカネもただ首を横に

振るだけだった。

「私もクロノと同じ立場なら泣いてたと思うから、私は一番私が落ち着く事をクロノにしただけ。」

ただ明るく。いつもと変わらないその声がクロノの心を癒していく。その結果はクロノの表情にはつきりと出ていた。

「なら、ありがとう。アカネが居てくれたから、俺はパンクしないで済んだんだと思う。だから、ありがとう。」

いつもと変わらないその笑顔。その笑顔がアカネには重く押し掛かった。

「……やめて。私にはあなたにお礼を言われる資格なんて無いのに……」

顔を背き、クロノから目を離した。
困惑するクロノ。

「なんか、悪いこと言ったか？」

笑顔が不安の色に染まり笑顔が無くなる。

「何でもない。……もう寝るね。」

そう言い、アカネはベッドの中に入り眠り始めた
何も言えないクロノ。そして彼も再び眠りについた。

翌朝、二人は朝一番のカイナ行きの船に乗り込み、アルトマーレを出た。

カイナシティに着き何処にも立ち寄らず二人はカイナシティを後にした。

昨晚の事が尾を引き、ここまでの旅路はほぼ無言だった。

どちらも声をかけようとするがきっかけが無い。

時刻は昼過ぎくらいだろう。103番道路で一息入れている二人に、男女二人組のトレーナーが話しかけてきた。

「よお。お二人さん。一戦どうよ？もちダブルバトルで」

格好もそうだが、口調も馬鹿丸だしな男。

醸す香水が異常に臭いため人は愚かポケモンも寄りつかないだろう。

「もつともお、戦つても私達には勝てないけどねえ」

相方も馬鹿ならこちらも馬鹿丸だしな女。今風と言えば今風なのかも知れないが、関わりたくない人種なのは確かである。

軽いため息を着く二人。

アルトマーレを出て初めて二人は目線合わせた。

「腹ごなしには調度良い運動かな。」

立ち上がり、腰からモンスターボールを取り出すクロノ。

「久しぶりのバトルが三下かあ。」

少しがっかりしながらもアカネはモンスターボールを構える。

アカネの挑発にのる二人

「三下あゝ！ならその三下に負けるお前等は四下か？」

「うわ！マジウケる！」

どうやら彼らは上手いことを言ったつもりらしいが全く面白い
のとは言つまでもない。

アカネと出会つてからクロノはアカネのポケモンを見たことがない。
ここまでの来るのに何人かのトレーナーと戦つたが全てクロノが戦
つていたためアカネはクロノ前で初めてポケモンを出す事になる。

(アカネは何を使うんだ？)

横目でアカネの持つボールを見て、様々なシミュレーションを脳内
で行うクロノ。

「行くぜ！バトルスタート！」

相手の合図と共に四個のボールが宙を舞い、閃光と共にポケモンを
出す。

相手は、スピアーとベトベトン。

クロノはガレス。パートナーのアカネは

「ビレッジ、久しぶりのバトルだよ。」

ビレッジと呼ぶジュカイン。

バトルの相性は相手に有利だが、アカネにもビレッジにも余裕の表情が浮かんでいる

「なら、先に行くぜ。ベトベトン、あのトカゲにヘドロば……」

「ビレッジ！リーフブレード！」

男がベトベトンに指示を出し終える前にアカネがビレッジに指示を出した。

刹那、相手のベトベトンは倒れた

「はぁ？何でだよ！」

タイプ相性は勝っているのに一撃で倒された現実が理解出来ない男

「もお。情けない。スピアー！毒針！」

ビレッジに突っ込むスピアー。しかし

「俺を忘れんなよ！」

スピアアの頭上からガレスが、燃え上がる足ーブレイズキックを繰り出す。

それはスピアーにクリーンヒットし、伸びるスピアー。

「はぁ？マジ意味分かんないんだけど？」

スピアアとベトベトンを戻す相手。バトルに負けると挨拶も無しにその場を逃げるように居なくなつた。バトルが終わり、二人はいつの間にかいつも通りの二人に戻っていた。

「にしても、そのジユカインかなり強いな。特に速さがスゴいな。」
アカネの横に立つビレッジに感心する。

ジユカインは本来は森で活動するポケモン。森での活動には適しているが、このような平地では本来のフットワークは生かせないが、アカネのビレッジはそれをものともしていない。
むしろ、森で戦うより早いように感じさえする。

「まあね。私と一番長いし、なんでも屋やってたから平地での戦いに馴れてるだけだよ」

ビレッジを撫でるアカネ。ビレッジの安心した顔が二人が長い時を一緒に居た証だ。

その後は何気ない会話をしながらバトルをしたポケモン達のクーリングやブラッシングなどをしながら、昼を過ごした。

適度に休憩をした二人は、本来の目的地だった、千年彗星のお祭りがある広野を目指した。

広野に行くには、ここ103番道路の崖を超えなければならないが、道は荒れているが無いわけではない。

そんなあれた道を行く二人。

道の小石に躓くアカネ。それを支えるクロノ。
アカネもお礼を言うが少し顔赤い。

「……どうした？」

顔の赤いアカネにクロノが言う。

「……今胸触った！」

確かに支えるとき胸部に手は行っただが、クロノには触った覚えが無い。

「減るもんじゃない、俺も触った感覚ないから良いだろ？」

悪びれ様子もないクロノにアカネは怒り出す

「感覚無かったら触って良いの！？それに、そんな言い方じゃ私に胸がないみたいじゃん！」

怒り出すアカネを見て逃げ出すクロノ。

それを追いかけるアカネ。

しかし、二人は楽しそうだった。こんな旅が永遠に続くと思いたかった。

ただ、楽しい旅を続けたかった。

「……っ、かは」

悲痛に歪む表情の男性。カインシティの造船所の責任者クスノ館長。そんな、館長を見下げる青い服を着た、その男は深々と頭を下げた

「でわ、館長。この潜水艦は我々が頂いていきます。」

手を伸ばしそれを止めようとするが、手は風しか掴めなかった。

男は潜水艦に乗り込み船と共に姿を消した。

「後は、ターゲットの少年と、例の玉だけですか。」

自分しかいない船内で呟く男。

クロノ達がこのニュースを知るのはかなり後の話である

第七話 「旅路〱何気ない旅〱」 (後書き)

最近アカネちゃんが意味深げ発言連発していますね。

クロノに優しくしたり、優しくされたりすると、今の自分が許せなくなるのでしょね。

なぜ、そうまで自分が許せないのかは、もう暫くしたら分かりますので、もう暫くお待ちください。

ではまた次回お会いしましょう。

第八話 「願い星」 彗星がくれた幸福の時間」 (前書き)

バトルの描写は少しだけありますが、今回はラブコメ要素盛りだくさん。

ちよつと前の作者なら墓場に入っても書きたく無い描写でした。

第八話 「願い星」彗星がくれた幸福の時間「」

夜空には無数の星。全ての星が輝き、自分の存在を示し、居場所を持っている。

月より大きく、どんな星より青く輝く流れ星。

千年彗星。

千年に一度この星に姿を表し7日間のみ現れ、見た者に幸福の願いを叶えるいう。

「おつきいねえ。」

広野に座り、夜空に輝く千年彗星を見上げるアカネ。あまりにも巨大な彗星に驚きを隠せない

「千年に一度か……。そんなに長い間さまよって来たのに、アイツは自分の居る意味をちゃんと持っているのか」

千年に一度現れ、しかし自分の居る意味を誰からも存在を覚えてもらえない彗星。

そんな彗星と僅かな人にしか認めてもらえない自分とを比べてしまうクロノ

スパン！！

そんな下向きなクロノにアカネは一発頭を殴った

「っ！何だよ！」

殴られた箇所を押さえアカネを見る。

「下向き禁止！彗星に嫉妬しない！それにクロノにだって必要としてくれる人も居場所もあるじゃん」

クロノを叱咤激励するアカネ。そしてクロノの腰のモンスターボールを指さす。

ボールの中の相棒達を見るクロノ。そしてボールの中の相棒もクロノを見る。

「そうだったな。俺を必要としてくれる奴らならここに居たな。」

そう良い手持ちを全てボールから出す。

バシャーモのガレス

ニドキングのジオ

サンダーズのガラハット

ムクホークのゲライント

ボーマンダーのアレスタン

マニニューラのトリスタン

彼ら全てがクロノを必要とし、クロノもまた彼らを必要としている。どちらが居なくなってもいけない。トレーナーとしては当たり前な関係がクロノにとっては大切な自分の居場所だ

全員が巨大な彗星を見上げる思いを込める

『一番になる』

クロノとポケモン達が共通する想い。

そんな彼らを見るアカネ。

羨ましささえ感じる彼とポケモン達の関係。

「ねえ、クロノ。クロノのポケモン達のニックネームって変わってるよね。なんか由来でもあるの？」

兼ねてからの質問をクロノにぶつけた。

たしかに、クロノのポケモンのニックネームは少し変わっている。一般的に、バシャーモならシャモなどの呼びやすいもので決める。

「ああ。由来なら有るぜ。ジオ以外のメンバーは実在した騎士団の『円卓の騎士』から着けたんだ。」

円卓の騎士。

それは昔。それこそ千年より昔、段差の無い円卓に座っていた騎士団の事だ。段差の無い円卓が意味するものは、上下関係も階級も無い事を意味している。

その騎士達の使っていたポケモン達の名前をクロノは自分のポケモン達に着けたのだ

「ジオはクロノのポケモンとは違うの？」

『ジオ以外』クロノのこのセリフをアカネは聞き逃さなかった。

ジオに視線を向けるクロノ。

「ジオは元々兄さんのポケモンだったんだ。」

ジオの厚い表皮を撫でる。ジオも気持ちよさそうにうなり声を出す。そんな、ジオを見ていたトリスタン。

面白くなさそうな表情を浮かべ、クロノの服の裾に爪を立てる

クロノもそんなトリスタンを撫で始める。それに満足したのか、トリスタンは喉を鳴らし始める

「そのマニニューラは、甘えん坊ね。」

喉を鳴らすトリスタンを見てアカネは名前とのギャップに微笑む
他のポケモン達も笑いだす。

何気ないこの時間。千年彗星と『願い星』が彼らにくれた幸福の時間

夜空を舞う、その『願い星』は久々のこの世界を満喫していた。
いつの時代も変わらない暖かい人の心にふれながら、7日間しかない限られた時間を。

「これが今の僕に出来る小さな幸せだよ。でも、君はこれから決ま
なくちゃならないんだよ。人と僕達の未来を。」

彼らと違う場所から、その力で彼らを見る『願い星』。そして、厳
しい運命を背負った彼に願い星は小さな幸せを送ったのだった

人の声が普段殺風景な荒野を彩る。

千年祭と呼ばれるこのお祭りは、千年毎にその内容を変えていく。
文化の進んだこの時代の千年祭は実に豪華といえよう。移動する観
覧車やジェットコースター。エアドーム中で行われるマジックシ
ョー。そしてその他の出店。言うなれば遊園地がそのまま移動しお
祭りを行っている感覚である。

そんなお祭りを満喫するクロノとアカネ。バトルを楽しむ施設もあ
りトレーナーも数多くいるためクロノもバトルを申し込まれること
も少なくない。

しかし、その悉くを軽くあしらって五分とかからない。
そうして、また夜を向かえ、二人は千年彗星を見に荒野に行く

「千年彗星。私の願いを叶えてね。」

そう願いを込め、ウィッシュメーカーの星を折るアカネ。
ウィッシュメーカー。

千年祭の時のみに作られるお守りの一種で、七枚の突起のある星の形をしたお守りで、その突起一枚一枚が折れる仕組みになっている。千年彗星が見える七日間の間の夜、願いを込め一枚ずつ折り、七日後には願いが叶うと言われているお守りだ。

クロノとアカネの二人も彗星の見える日の日中にこれを購入し、既に三枚が折られている。

「クロノはどんなお願いを込めてるの？」

彗星を見ながらクロノに問うアカネ。少し困惑するクロノ。

答えようと口を開こうとすると、花火が打ちあがる。

ポケモンの形をしたその花火を見ると、座っていたアカネは立ち上がり、花火を食い入るように見る。

「俺の込めた願いは……」

花火が一時的に止まり、声が聞こえるようになった時、クロノな口を開いた。

その声を聞きアカネはクロノの方に振り向く。

その瞬間、二人の唇の距離が無くなる。

再び始まる花火が二人を照らし、瞬間が長く感じる。

二人に距離が出来、再びクロノが真剣な眼差しを込めアカネに言う

「俺は、お前と一緒に居たい！」

唇を手で隠し、顔を赤くするアカネ。

何が起きたか分からず、彼女の頭は真っ白になる。

顔を隠したい。

出来るコトなら隠れたい。

しかし、彼の真剣な眼差しがそうさせない。

「き、急に言われても……私、困るよ……」

クロノから、一歩下がりはやく口を開けたアカネ。

しかし、口を隠した手と赤い顔は変わらない。

まだ、花火は続いているが、今に二人には見えていない。

「あ、すまない。でも、俺はお前が好きだ！これからも一緒に居たい。お前はどんなんだ？」

自分のしてしまったことを誤り、再び自分の思いをアカネに告げ、アカネの気持ちをきくクロノ。

しかし、今のアカネにはそんなことを考える余裕は無かった

「今すぐじゃなくていい。彗星が出てるまでに答えてくれ。」

そう告げクロノは先に、宿泊施設に戻った。

そして、アカネは暫くその場に佇んでいた。花火が夜空に輝き、千年彗星が良く見える晩のことだった。

そして、残りの日数を二人は別々に過ごしていた。己の心の中を整理するには4日という日数は短く感じた。

クロノが4日前と同じ場所でウィツシユメーカーの最後の突起を折

り終わると、アカネやってきた。彼女もまた最後の突起を折り終えた後だった。

向かい合う二人。しかし、未だ言葉は交わされていない。どう話したら良いか分からず暫く無言が続いたが、先に口を開いたのはやはりクロノからだった

「お前の気持ちを教えてくれ。」

4日前と変わらない真剣な眼差し。アカネもそれに答えようと真剣な眼差しで返した。

「この4日間、私も考えたんだ。あなたのことをどう考えて、これからどうしたいかとか。でね、これが私の答え。」

そう言い、アカネは夜空を指さした。

つられクロノも上を見る。

夜空に花火が打ち上がるが、ポケモン花火ではない。たった2文字。

「スキ」

という2文字だけが夜空を照らした。

「これが私の偽りのないあなたへの思いだよ。」

クロノに近づき自分の気持ちを打ち明けるアカネ。

夜空から、アカネに視線を戻すクロノ。そしてアカネに逆襲される。

4日前、彼から行ったコトを、今度はアカネからされたのだ。瞬間が永遠に感じた。

この瞬間が永遠に続いて欲しいと願う二人。

背伸びをしているアカネの肩を掴み、離れないようにするクロノ。

過ぎ去っていく千年彗星が、最後の輝きで二人を祝福し、この年の千年祭は幕を閉じた。

第八話 「願い星」彗星がくれた幸福の時間」」（後書き）

ようやく二人がくっ付きました。いやーそれなりに長かったです。

クロノ「あー他人に言われると恥ずかしいな」

アカネ「もークロノったら積極的なんだたらw」

確かのに、不意打ちキツスは積極的とした言いようがないよな。まあ、そういつちゃアカネさんもすごいことしたよね。花火使って告白とか。ぶっちゃけ恥ずかしいよね。

クロノ&アカネ「ううううう・・・」

まあ、新しいバカツプル誕生ということでwww

クロノ&アカネ「うるさいバカ作者！」

ボコ！

「作者殴られ暗転」

クロノ&アカネ「では、また次回お会いしましょう」

第九話 「騎士道く騎士様は変わり者く」(前書き)

新キャラ登場。アホキャラですが、可愛がってください

第九話 「騎士道と騎士様は変わり者」

空は青く、森にはポケモン達の声が小さく響く。

「今日は過ごしやすいね」

クロノの隣で木陰で休みながら、話すアカネ
クロノも笑顔で答える

千年祭から早2日。今までとは違う二人の関係
千年祭の最後の日に二人はお互いの心の内を打ち明け、付き合い始
めた。

旅の仲間から恋人に変わった二人。
今までと普段の接し方は変わらないが、大きく変わったのは夜であ
る。

今までは、薪を挟んで寝ていたが、付き合い始めたからは隣同士で
寝るようになった。

隣で寝たいと言い出したのはアカネからだ。二人が寂しくない
ようにという意味を込めて。

「そろそろ行くか」

そう言いクロノは立ち上がりアカネに手を伸ばす。

アカネも手を伸ばしクロノの手をとる

すると、川上から人の声が聞こえてくる

「そこの姫君！お待ちください！」

エンペルトにまたがり、川を物凄い早さで降りてくる男の物だ

そしてクロノとアカネに近づいてくる

「その君！姫君から離れたまえ！」

男はクロノを指差し怒鳴り出す

アカネを見るが、アカネにも心当たりがないようだ

「あの、どちらさまですか？」

シンクロする二人の声。

男はポーズを取り名乗りだす

「おっと、名乗るのを忘れていたよ。騎士たる者の礼儀だ、心して聞いてくれ。私の名前は、クリアス・キャスパニア。由緒正しき騎士の家計の生まれだね。」

クリアスは深々と頭を下げ、名を名乗った。

そしてアカネの前で片膝を付き、手をとる

「美しき姫君よ。貴方こそ私が探し求めた人だ。是非私と旅を」

そう言いアカネの手の甲にキスをするクリアス。

流石にクロノもそれは見過ごせなかった。

「貴様！アカネに何してんだよ！」

クリアスをアカネから引つ剥がすクロノ。

クリアスはそれに抵抗するのは言うまでもない

「姫君よ！アナタは忘れてしまったかもしれないが、私は覚えてい

ます。貴方と戦った私は負け、それから私はあなたの強さに、美しさに惚れた！だからあなたを探した！」

どうやらクリアスは過去にアカネに負けた、そしてアカネに惚れたようだ

それを聞いたアカネはクリアスに言った

「えっと、気持ちは嬉しいけど、今私はクロノと付き合ってるからあなたの気持ちは受け取れないの。」

そう言うアカネ。しかし、キスをされた手を隠して拭いていたのはクロノも知らない秘密であった。

それを聞いたクリアスは両手両足について愕然したが、それも10秒と無かった。

「ならば、騎士クロノ！姫君の愛を賭け、私と勝負だ！来い我が剣よ！」

クロノに勝負を申し込み、川で待機していたエンペルトを読んだ。クロノもため息をついたが、渋々ガレスを出した。

「勝負は騎士道に則り1対1の勝負！いざ尋常に勝負！」

クリアスのかけ声を聞いて、エンペルトがハイドロポンプで先制攻撃してきた

それをかわすガレス。そして、エンペルトにカウンターで、ブレイズキックをお見舞いする。

しかし、ブレイズキックは風を焦がしただけだった。

クロノもそうだが、ガレスには何が起きたかすら理解できずにいた。

「アップルパイよりスイートだよ！騎士クロノ！エンペルト、ハイドロカノン！」

ガレスの後ろから攻撃してきたエンペルト。直撃こそ受けなかったがダメージはかなり受けたガレス。追撃は無かった。いや出来なかった。

ハイドロカノン
特定のポケモンのみが覚えられる強力な技だが、反面しばらく動けなくなる。

ガレス自身この隙を狙いたいが、かなりのダメージを受けたため狙えない

「お前なかなか強いな」

純粹にクリアスの強さに認めたクロノ。クリアスもまたその言葉に対して敬意の意を込めた

「お褒めに預かり光栄だな。しかしながら、手加減は出来ないな。エンペルトも攻撃出来るようになった。次は外さないよ」

既に勝利を確信しているクリアス。実際ガレスは未だに片膝をついて構えをとれていない。

そして、再びハイドロカノンを打ち出すエンペルト。今度はガレスに直撃し、ガレスの姿が消える

「な！？どこだ！」

エンペルトと共に辺りを見回すクリアス。クロノは余裕の表情を浮かべ空を指差す

「上だよ騎士様。ガレス！馬鹿力！」

エンペルトが頭上を見上げる。

そこには、踵を上に加え余裕の表情を浮かべているガレスがいた。そして、ガレスの踵がエンペルトの頭に当たり、この試合は幕を閉じた。

試合に負けたクリアスはエンペルトをボールにしまい、両手両足をつき頭を下げていた

「これで、文句ないだろ？」

そんなクリアスに近づくクロノ。クリアスは呟いていてクロノの話は聞こえていない。そして、クリアスは立ち上がりクロノに跪いた

「おお！我が君主よ！貴方こそ私の主に相応しい！このクリアス、あなた様の剣になります。」

呆気に捕らわれる二人。クリアスの変わり身の速さには感心すら覚え

「さ、早く行くぞ。」

アカネの手を取り、歩き出すクロノ。アカネも頷き同じ歩幅で歩き出す。

「待つてください！我が主！」

そんな二人を追いかけるクリアス。

変な奴が彼らの旅に混ざり、旅は、更に賑やかになっていく。

そんな彼らを見る、黒い影。

森の中から彼らを見つめ様子を伺う

「ほお。特異点が二人……………。今しばらく様子を見るか……………」

そう告げ影はそこから、姿を消した。

第九話 「騎士道」騎士様は変わり者」(後書き)

新キャラ登場でクロノ達の旅も賑やかになってきましたね

クロノ「つか、告白した次の回でアホキャラ出すなよ」

アカネ「デリカシー無さ過ぎ」

クリアス「主達も結構厳しいと思います」

実はクリアスは登場出す予定どころかキャラ像すらなかったキャラなんだよね

クロノ「なら出すなよ。お陰で今回の投稿遅れただろ」

実は投稿遅れ理由は、一概にクリアスのせいじゃないんだよ

クリアス「結局、私も原因デスカ？」

実は携帯が諸事情で半壊しまして、イマイチ使い方に慣れなくて。

アカネ「パソコンで投稿すれば？」

オールドな私にはパソコンなんてあつかえませーん。つかパソコンないし。

クロノ「うわあ」

アカネ「マジですか」

クリアス「なんたる様」

みんながみんな、パソコン持ってると思うなよ！（涙）

クロノ「泣くなよ」

アカネ「作者が泣いちゃったから、また次回ね」

クリアス「次は私の華麗なるバトルをご披露しよう」

あ、次も新キャラ出すから

クロノ&アカネ&クリアス「何で！」

第十話 「レンジャー」彼の忌むべき存在」(前書き)

クロノのお兄さんカイトさん登場。でもまた直ぐ退場します

第十話 「レンジャー」彼の忌むべき存在」

多少荒れているが歩きやすい道を彼らは歩いていた。

クロノ、アカネ。そしてクリアス。

そこまで騒がしく無かった旅はクリアスが入った事で変わった。クロノとアカネを自分の主と勝手に思い込み、事ある度にクリアスが動く。

休憩中に水が無くなれば汲みに行き、食事の用意をしようとすれば全て一人でやってしまう。

端から見ればパシリにしか見えないが、クロノ達にそのようなつもりはない。それについては何度も

「止めてくれ」と言っているが、クリアスは

「主のために騎士は動くもの」の一点張りで聞く耳を持たない。

そこでクロノは

「主命令。自分のことは自分でやるように」と言うとクリアスも渋々了承しパシリ行為を止めた。しかし、何かをしようとすると、クリアスが

「私が変わりに」と言いやろうとする。しかし、それだけでもクロノ達の心労は大分軽減した。

そんな旅が続き、トウカシティまで後2日のところまで来た。

そんな、103番道路の一部。森と言うには小さいが林と言うには大きい、そんな森の入り口に人盛りが出来ていた。

「なんだ？」

そんな人盛りを見たクロノ。森の入り口溜まる人盛り。そこを通らなくともトウカシティには行けるため人盛りが出来ない理由がない。

「ですから、今この森は現在、捕獲禁止空域のため人が入るのは禁

止されているのです。」

森の入り口に立つ男が人盛りに対して説明すると、人盛りは文句を言いながらも解散していく。

入り口に立つ男。身なりを見れば男が何者なのかは一目瞭然だった。ポケモンレンジャー

それが、男の職業だ。

ポケモンレンジャーとは、トレーナーとは違い手持ちポケモンを持たず、

「キャプチャースタイラー」を使い一時的に野生ポケモンの力を借りて任務をこなしていく者達をいう。そしてポケモンレンジャーにも階級があり、上位のトップレンジャーには、キャプチャースタイラーの上位種の

「バトナージスタイラー」を受理される。そして、入り口に立つ男もまた、バトナージスタイラーを持っていた

「ポケモンレンジャーだ。珍しいねクロノ。」

目の前のポケモンレンジャーを見て、驚くアカネ。しかし、クロノは返事をしない。クロノは目の前のポケモンレンジャーにその視線を向けていた。敵意と憎悪を込めた視線を。

そんなクロノに少し恐れを感じるアカネとクリアス。強敵と戦っている時の狂喜しているクロノでも見せないその目。まさに、ただ純粹な敵意と心の底からの憎悪を込めた眼。今までの旅では見せたことのないクロノの眼。

そしてクロノは歩き出す。それについて行く二人。そして、三人に気がつくポケモンレンジャー。そしてクロノを見たポケモンレンジャーの顔が変わる。

「クロノくんじゃないか。久しぶりだね。いつハウエンに帰ってき
たんだい？」

近づきクロノに話しかけるレンジャー。

「主のお知り合いですか？」

クロノに問うクリアス。クロノは相変わらずの眼をしている

「兄さんを殺しておいてまだ、ポケモンレンジャーやってたんです
ね。カズキさん。」

カズキと呼ばれるポケモンレンジャー。

クロノのその一言で彼の顔から笑顔が消える。
重たい空気が場を包み、話がなくなる。

「先輩の事は弁解も言い訳もしないさ。実際僕が殺したようなもの
だしね。僕を恨んでくれて構わないよ。」
さつきまでとは違う声のトーンで話すカズキ。
拳に力が入るクロノ。そして憎悪は更に増していく。

「聞いていたと思うけど、今この辺りは捕獲禁止空域に指定されて
いるんだ。だからこの辺りでのポケモンの捕獲行為は禁止されてる
から気をつけてくれ。」

知り合いの顔からポケモンレンジャーの顔に変わり、カズキはこの
辺りの現状を説明した。

すると、カズキの持つ通信機に連絡が入りカズキが通信に応答する。
通信が終わり再びクロノ達に話しかけ始める

「今、この先の川でちょっとしたトラブルが起きたみたいだ。危険みたいだからトウカまで行くならトウカまで同行するよ。」

クロノ達の安全を守るために同行しようとするカズキ。しかし、クロノは一人先をいき、ボールからゲライントを出す

「クロノ？なんでゲライントを出したの？」

クロノの行動に疑問を持つアカネ。いや、ここにいる全員が疑問に思ったことだ。

「俺は先にトウカに行く。クリアス、アカネを頼む。」

それだけ言いクロノとゲライントは空に舞った。アカネも止めようとしたが既に遅かった。

「相変わらず嫌われてるな……。当たり前だけど」

クロノの消えた空をみてカズキが呟く。

「さあ、君達も行こう。トウカまで後少しだしね。」

そうアカネ達に言い、再度通信機で他の団員に通信しトウカへ向かった。

旅路は至って順調だった。川以外は

川の水嵩は増え、流れも急になっていた。本来有るはずの橋も落ち、何人ものトレーナーが立ち往生していた。

しかし、カズキは川に生息していた野生のギャラドスをキャプチャ

ーし、ギャラドスで全てのトレーナーを対岸に移動させた。アカネやクリアスも初めて見るかポケモンレンジャーの活躍に口を開けて見ていた。

こうして、夜を迎えることとなった。

夕食を済ませ、全員が一服をついでいるころ、アカネがカズキに聞いた。

「・・・カズキさんって、クロノのお兄さんと何があっただんですか？殺したとかってあんまり穏やかじゃないし。」

薪に枝をいれ、火の勢いを増やすカズキ。日中の優しい顔のまま告げる

「まんまの意味だよ。俺がクロノくんのお兄さん、カイト先輩を殺したんだよ。」

笑顔であるが、どこか寂しさを見せる顔。なぜ自分は生きているのかすら疑問に思う。そうだった顔だ。

「もし、差し支えなければなんで主の兄上がなぜ無くなったか話してくれませんか？」

コーヒーを飲みながらカズキに問うクリアス。クロノ程ではないが一種の敵意を向けていた

暫く無言が続き、カズキは口を開いた

「レンジャーとして、一般話せない事もあるけど知りたいなら話すよ。クロノと旅をしてる君達なら知る権利もあるし」

〈数年前カントーの森〉

その森は本来の美しさを消し、業火にに包まれていた。何匹ものポケモンや人が犠牲になっただろうか。そして何人もポケモンレンジャーが森の消火活動やポケモンの保護にあたっていただろおか。

「ダメです先輩。火の手が衰える気配がありません！」

まだ、新人だったカズキ。そして一緒にいるクロノの兄ーカイト。火の手が一向に収まらない。雨が降っているのに、コノアタリノ水系ポケモン全てが協力しているのに、寧ろ火の手は中心部からさらに燃え広がってきている。

「おかしい……。火が生きてるみたいだ。」

まるで火が生きているように燃えている。そんな不自然さにカイトは気づいていた。

すると、カイトが森の中心部に走り出した。

「先輩！？どちらに！？」

カイトの後をついて行くカズキ。火は確かに熱いが不思議と火傷はしない。まるで燃えるべき物を見定めているように

カイトに追いついたカズキ。火の中心部。元建物だった瓦礫の上に見たこともないポケモンがいた。

「この不思議な炎はやっぱりお前の炎か。なんでこんな事をする！」

瓦礫の上から見るポケモンにカイトは問う。

「森を壊した人間が我に説教か！なら言おう！始めに森に火を放ったのは貴様ら人間！私の力を使いな！」

カイトに叫ぶポケモン。カズキはその一括でたじろぐが、カイトは変わらずポケモンを見る

「それは、俺たちのせいだ。謝っても許してくれとは言わない。だけど、今だけ、この火を消すのに力を貸してくれ。」

ポケモンに頼むカイト。ポケモンも考え暫く無言が続いた。

しかし、その間にも森は焼けその姿を変えていく。そして、ポケモンが口を開く前にカズキが口を開いたキャプチャースタイラーを構え。

そして、スタイラーから飛び出した、小型のキャプチャー装置はポケモンの周りを周りキャプチャーを始める。

しかし、キャプチャー装置はポケモンにより破壊される。

「……………一瞬、また貴様ら人間を信じようと思った我が間違いだった……………」

また、自分を利用とした人間に、信じようとした自分に怒りポケモンそんなカズキにカイトは怒鳴る

「カズキ！何やってる！指示なしに何故キャプチャーした！」

新人レンジャーは現場研修が終わるまで自己判断でのキャプチャーは禁止されている。しかし、今の森の状況から見たらそんな事も言っただけだった。

「確かに、コイツの言っている事も事実です！ですが、今は森の消化活動が優先されるべきです！呑気にポケモンの説得をしていたら森が燃え尽きてしまいます！」

確かに今のミッションは森の消化活動だ。カズキも間違っではない。

「……茶番は終わりか人間？ならば、次は我から行くぞ！」

殺意と深い怒りを込めたポケモンはカズキに襲いかかった。カズキも避けようとするが、足が竦んで動かない。そのポケモンの放つ威圧のせいだ。

終わった

そうカズキは思い、目を強く閉じたが、彼は生きていた。変わりにカイトがカズキを庇っていた。

何が起きた解らないカズキ。カズキを庇い背中に深い爪痕を受けたカイト。

「前にも言った……だろ？ただキャプチャー……する……だけじゃなく……ポケモンの……気持ち……を読めって」

口から血を吐くカイト。あまりにも深い爪痕。そしてカイトは力なくカズキに倒れかかった。

「せ、先輩！」

カイトを呼ぶカズキ。しかし、カイトから返事は帰ってこない。カズキの手に着く鮮血。燃え盛る森の中心にカズキの声が響く。

そして、あのポケモンはもういない。

「俺があの時、キャプチャーしなければ先輩は死ななかつたし、森も全焼しなかつたかもしれぬ。」

カズキの話を書く二人。静寂と火が燃える音だけが夜を彩る。

「……………すみません。辛いこと聞いてしまつて。」

カズキに誤るクリアス。カズキも笑顔で首を横に振る。

「事実だし、それが俺の戒めだと思つから構わないよ。さ、夜も遅いから寝よう。」

そう、話を切り替え全員眠りにつき、夜を明かした。

それから先の旅は順調に進み、問題なくトウカシテイに着いた。

「クロノ、もう着いてるかな？」

トウカシテイの前で先に行ったクロノを心配するアカネ。

「主なら大丈夫ですよ。」

そんなアカネをクリアスは安心させる。

「なら、俺はもう行くな。」

そんな二人を見てカズキは来た道を戻りはじめる。

「カズキさん、有難うございました。」

離れていくカズキにアカネはお礼を言い、カズキもまた、後ろに向かって手を振る。

カズキと別れた後二人は、取りあえずクロノを探すためポケモンセンターに向かった。

ポケモンセンターに入るとクロノは待合室にいた二人に気づいたクロノは、二人に対して手を上げる

「やっとなついたか」

今は普段通りのクロノに戻っており安心した二人。

「もお、先にいくならアレスタンで私も連れてってよ！」

クロノに合い早々にムクれるアカネ。それを宥めるクロノ。そして、また普段通りの騒がしい旅が続くのであった

第十話 「レンジャー」彼の忌むべき存在」（後書き）

いやー今回は投稿まで長かったわ

クロノ「今までと比べるとな」

アカネ「携帯変えたから？」

ぶっちゃけ。未だに使い方がイマイチ分からん

クリアス「っーか作者。私の出番が少ない気がするのだが」

すまん。急に出す羽目になったから作者自身キャラが練りきれてないww

クリアス「泣イイデスカ？」

クロノ「今は泣いていいぞ」

アカネ「クリアスも後書きなら出番多いのにね」

クリアス（無言で走り出す）

クロノ「フィニッシュしたなアカネ」

アカネ「なんか悪いこと言った？」

クリアスの出番増やすように頑張りまーす。

では、次回お会いしましょう

第11話 「襲撃く胡散臭いオヤジは嫌いですよ〜」(前書き)

どうもキシですよ。ついに11話です。また新キャラ。そして敵組織出てきました。

クロノ「また新キャラかよ」

また新キャラですよ。懲りませんね私。

第11話 「襲撃〜胡散臭いオヤジは嫌いですよ〜」

空は青く、風が優しく彼らを撫でる。浜辺には海水浴楽しむ人々やサーファーが波に乗りその海を満喫している。

「そう言えばお前ら、ジム戦しないのか？」

ムロタウンのポケモンセンター内の喫茶店で一息入れているクロノ達。クロノはつい先刻ムロジムのリーダートウキと戦い勝利した。しかし、アカネとクリアスはムロタウンだけでなくトウカ、カナズミですらジム戦を行っていない。ふと疑問に思ったクロノは二人に聞いたのだった

「あ、私は後ルネジムだけだから大丈夫。」

そう言いアカネは自分のバッチケースを見せ、七個のバッチが納められているのを見せた。

「ご心配は及びません。私はジム制覇ではなくコンテスト制覇を目的に旅をしています。ちなみに後、マスターランク全制覇で完了です。」

クリアスもそう言い、上着を広げ今までに手に入れたリボンをクロノに見せた。

クロノも二人の実力を改めて知った。これまでに四個のバッチを手に入れた少し浮き足立っていたクロノだったが二人の実力を知り、気を引き締める。

「でも、クロノもすごいよ。今年のジムリーダー達、今までと使う

ポケモン変えて強くなったのに一歩も引かないバトルしてたじゃん。私は何回も挑戦して集めたのに。」

逆にクロノの強さを誉めるアカネ。

実際、今年のホウエンのジムリーダーのポケモンは今までと桁外れに強かった。トウカシティのリーダーセンリはケッキングとカビゴン。カナズミのリーダーツツジはノズパスをダイノーズに進化させ、イシツブテはゴローニャに進化していた。

なかでもムロタウンのトウキのポケモンには驚いた。相棒のマクノシタはハリテヤマ進化し、他はルカリオ、キノガッサを使ってきた。そんな雑談を三人はしながらクロノのポケモンの治療を待っていた。

そんな三人を少し離れた場所からみる男女二人組。

「あのガキが目標か？」

女の前に座る大男が、不似合いなパフェを食べながら聞く。

「ああ。今なら手持ちのポケモンもいながら連れて行くのも簡単さ。それよりは送り火山の方は？」

クロノから視線を放し向かいの男に聞く女。

「それは問題ない。もうホカゲが二つとも頂いた。多少邪魔が入ったみたいけどな。」

パフェを平らげ口を拭きながら女に答える。そしてクロノ達が立ち上がるのを見て彼らも行動を開始した。

喫茶店を出て、治療したポケモンを受け取りにクロノはカウンターに向かっていた。他の二人は先に外に出てクロノを待っていた。

「すみません。75番のポケモンのトレーナーです。」

そう言いクロノは整理券を受付に渡し、ガレス達を引き取りに来た。

「はい、少しお待ちください。」

そう言い受付の女の方はパソコンを操作した。しかし、操作していくうちに顔から笑顔が消えていく。

「え？君。君のポケモン達検査の結果、悪性の腫瘍があるみたい。」

そしてクロノにも不安の色が出てくる

「え？悪性？」

受付の女性に聞き直すクロノ。女性も頷き、クロノの不安の色がさらに強くなる

「直ぐに手術だから、こっちに来て」

受付の女性に誘導されクロノは手術室までついていく。

しかし、部屋は真つ暗だった。

すると受付の女性が笑い出

「あはははは！まさかこんな手に引つかかるとはね！」

クロノが身構えるより先に地面に叩きつけられ身動きがとれなくなる。

手術室に電気がつくと、クロノは大男に取り押さえられ、受付の女性の手にはクロノの預けたモンスターボールがあつた

「お前ら。何者だ？用があるならもっと紳士的に来いよ。」

自分だ不利な状況だが挑発的な態度で挑むクロノ。

「嫌いじゃねえな、ボウズ。その強気な性格。」

クロノを抑える大男が言う。そして女がクロノに近づき言う

「私はカガリ。マグマ団の三幹部の一人さ。で、あんたをpushさえるのがホムラ。そいつも三幹部の一人よ。さて、ボウヤ。あんたのポケモン達を大人しく返して欲しければ抵抗しないことね。」

手に持ったボールを握りつぶす仕草をするカガリ。しかし、クロノは逆に笑う。

「何が可笑的いんだ小僧？」

ホムラがクロノがなぜ笑うのかを聞く。するとクロノは答えた

「お姉さんよ。あんまり近づくとくスカートの中身見えるぜ？」

クロノの指摘にカガリは慌ててスカートを抑える。そしてホムラにも少し隙が生まれた

「嘘だよ！」

押さえられていない足でホームラを蹴り飛ばし、カガリ持っているボールをクロノは瞬時に奪い返し手、手術室のドアを開けた

「あんたらもう少し体鍛えな。なんなら俺の師匠を紹介するぜ？」

そう言い残しクロノは手術室から脱出し、人の多いロビーに向かった。後から二人も追いかけて来たが、人の多いロビーに出たクロノを追う事は出来なかった。

「遅かったね？何かあったの？」

外で待つていたアカネ達に合流したクロノ。クロノがあまりにも遅かったためアカネは心配していた。

「悪い悪い。なんか、マグマ団とかって名乗る変なん二人組に襲われてな。」

マグマ団の名を聞いたとたんアカネの顔に不安の色が出る。そしてクロノの腕を引く

「襲われたなら早く逃げよう！ここならカイナ行きの船があるはずだから！」

そして港に向かっていった歩き始めた。

「いやあ港はだめだろお？」

ポケモンセンター横のベンチから彼らに向かって声が飛び、クロノ

達はその声の主に目を向ける。

「誰だよあんた？」

その声の主、男はあまりに胡散臭い奴だった。陣羽織のような上着を羽織り、ダボついたズボンに無精髭に猫背。そしてベンチに胡座をかいて座っていた。年は三十代位だろうか。それなりの年をとっている

「今頃港はそのマグマ団って奴らに占拠されてるぜ？今行ったら間違いない捕まるだろ？」

ニヤニヤ笑いながらクロノ達に言う男。クロノの問いには全くスル一である。

「いや、だからあんた誰だよ？」

三人声が重なり男に突っ込みを入れる

「俺の話は無視かよ？まあいいや。おいっちゃんの名前は星^{せい}って名乗ってる。一応情報屋兼何でも屋をやってるしがないおっさんよ」

未だにベンチから立たずに自己紹介をする。しかし星の自己紹介が更に胡散臭さを際立たせる。

「お前の話を信じろってか？お前もあのマグマ団の仲間かも知れないだろ？」

クロノの疑問も最もだった。なにせ実際に襲われたなら後ならば尚更だ。

「まあ信じる信じないは勝手だけど、取りあえず逃げたら？」

クロノは自分が狙われているのを思い出した。そしてひとまずポケモンセンターを離れる事にした。そして公園に場を移した。

「ここなら取りあえず大丈夫か？」

それなりに人が多いため、マグマ団も大それた行動はとれない。そう思って4人はここに来た

「で、なぜ貴公も一緒にいる？」

なぜ、星と一緒にいるかの疑問をクリアスは聞いた。

「あれあれ？おっちゃんは仲間ハズレ？なによりおっちゃんの情報
は結構当てになるよ？」

星の胡散臭さ彼を信じざるのを躊躇させている

「なら、そのご自慢の情報を教えてくれよ。星のおっちゃん。」

自分を襲ったマグマ団の情報を得るためにクロノはあえて星の話に耳を向けた。

「はいよ。ならまず、おまえさんを襲った奴らだけど、名前はマグマ団。聞いた話だとポケモンを使ってなんかしようとしてるテロリ

ストだな。大地を崇拝してるらしいけど、俺からすればただの熱烈
信仰者の集まりだな。」

大した情報じゃなかったか？少なからずマグマ団の姿が分かった。

「ふん。豪語したわりには大した情報ではなかったな。」

星の胡散臭さがクリアスの警戒心を緩めない。しかし、クロノは少
しは満足していた。

「ありがとよ、おっさん。ぶっちゃけ為にならなかったけど少しは
相手の素性が分かったわ。」

そう言いクロノは立ち上がり星にお礼を言い歩き出した。しかし星
はそれを止める

「まあ待てって。行き先を決めないで下手に動くともまた捕まるぜ？」

そう言いクロノは足を止め、星の方を向く。

「なら、おっさんならどうする？」

そう言うと星はまたニヤニヤと笑い出す。

「船を使わずに海に出る。まあここからならカナズミかカイナだな。
でも、カイナは止めとけ。つい最近クスノ館長が襲われて潜水艇が
奪われたらしいからな。」

クスノ館長が襲われ事を聞くとクリアスの表情が堅くなる。

そしてクロノ達もまたクスノ館長の襲撃事件は知っていた。被害者
のクスノ館長によれば犯人は青い水兵のような服をきた奴らしい

「だよな。ならカナズミに向かうべきだな。」

そついいクロノとクリアスは港ではなく浜辺に向かいだした。しかし、アカネと星だけはしばらく歩き出さなかった

「嬢ちゃん。おっさんは嬢ちゃんの素性知ってるけど何も言わをよ。だけど、後悔だけはしない選択をしな。あの兄ちゃんが好きなら尚更な。」

すれ違いざまに星はアカネに耳打ちした。アカネが一番最後を歩き始めた。しかし、その顔は必死に苦悩に耐えていた。

そいて4人は人気のない浜辺に着き、水平線を見ていた

「で、ここからどうするのよ？少年？見た感じ君らのポケモンじゃ、カナズミまでは行けないでしょ？」

星がクロノ達に問うが、実際クロノ達に船を使わずにカナズミに渡る手段は無かった。クロノだけならアレスタン やトリスタンを乗り継げば渡れないことも無いがアカネとクリアスを置いていく事になる。クリアスもホエルコを持っているが三人を乗せられるほど大きくない。

「すまん。考えてなかった。」

クロノのその一言に全員が肩を落とした。

「だと思ったよ。おっさんもカナズミに用があるから乗せてつてやるよ。」

そう言い星は袖からモンスターボールを出し、ホエルオーを海に出した。

クリアスに勝ち誇った顔を見せるとクリアスは苦虫を噛んだ顔をなのおそつとしている。クロノの騎士として尽くせない事が何より悔しいのだ。

星の計らいでカナズミに渡れるようになりホエルオーで海を渡る4人。流石に1日では着かず一晩はホエルオーの背中で寝泊まりする事になる。

「少し宜しいか？」

クロノとアカネが寝静まったころクリアスはホエルオーに指示を出す星に話しかけた。

「アナタは情報屋らしいが、実際はどの程度の情報屋をしっている？」

星の後ろに立ち問いただすクリアス。星は眠そうに欠伸をしながら答える

「少なからず、あんたが何者で何をしようとしているかは知ってるよ。でも、止めるつもりはないから気にするなや。」

普段通りのやる気のない声で答える星。そんな星の発言に身構えるクリアス。

「貴殿。ただの情報屋じゃないな？なぜそれを知っている！」

思わず腰のモンスターボールに手を伸ばし臨戦態勢に入るクリアス。
星はそれを軽くあしらう

「血の気が多いのは若人の特権だけど、おっさんは戦う気も、あんなちゃんを止める気もないから。」

それだけ言うと星は寝っ転がり水平線をただ見ていた
クリアスもボールから手をはなし星から離れていく

「あれくらいで私たちを捲けたとでもおもってるのかい？なめられたもんだね。」

ホエルオーの上空からクロノ達を見るカガリ。背中にはオオスバメが彼女を支え飛んでいる。あの後懲りずにクロノ達を追ってきたのだった。

「まあいいさ。行き先は大凡の予想はできてるんだ。後は誘導すればいいだけか。」

そう言いカガリは踵を返し通信機で仲間と連絡をした。

第11話 「襲撃」胡散臭いオヤジは嫌いですよ〜」（後書き）

今回はどうでしたか？いきなりムロ到着！

クロノ「ジムリーダー涙目だな」

うん。だから、その辺は灰色に乗せるつもり。

クリアス「いや、本編で良い気がするのだが」

まったくだ。

星「おいつちゃんの紹介は？」

クロノ&クリアス「帰れオヤジ」

星「酷い！おっさん泣いちゃうぞ！ならアカネちゃん！」

アカネ「なんですか？」

星「実はね本編でクロノは（耳打ち）〜なことをしてるねよ」

アカネ「な！クロノ！あなた、襲われた時にそんなものみたの！」

クロノ「いや、誤解だ！少ししか見えて、違う！全く見えてないから！」

アカネ「クロノの変態！エロ！」

クロノ「アカネ誤解だ！オヤジ！覚えとけよ！」

星「情報屋を敵にしたらコワイよお〜。」

えーラツキースケベなクロノがいい感じに起こられているので今回はこれで。

ではまた次回

第12話 「影く盡く二つ目の闇」 (前書き)

今回も敵勢力がでてきます！

ポケスペやらゲームをプレイされている方にはバレバレなんですけど・
・
・
・

第12話 「影く盡く二つ目の闇」

海の風が街を撫で、波と鐘の音が書斎に響く。

書類にサインをし、自宅にて仕事をこなすケルア。

そんな書斎の扉が開き執事のセバスが中に入る

「失礼します。旦那様、クロノ坊ちやまが例の組織に襲われたと報告が。また送り火山で玉の護衛をしていたフウ様とラン様が例の組織に襲撃され玉が奪われました。」

セバスの報告を聞きサインしていた手を止めるケルア。

「そうか、分かった。なら、協会に連絡をいれ全ジムリーダーと四天王の協力を要請してくれ。」

セバスを見て様々な指示を出すケルア。セバスもそれを了承したが、一つ気がかりがあった

「旦那様。クロノ坊ちやまの方は如何いたしますか？」

それを聞くとケルアは机に飾ってあった一枚の写真に目を送った。

ウィールアス家が唯一揃い皆が笑顔だった写真に

「今更私が父親らしいことをしてもアイツには酷なだけだ。クロノの保護はテッセンさんをお願いしてくれ。」

それだけ言い写真を倒し、セバスを見た。

セバスもそれ以上何も言わず一礼し書斎を後にした。

「そう、今更アイツの父親にはなれないのだ……」

そう呟きケルアは拳に力を入れた。我が子を孤独にさせた自分を恨みながら。

「ほれ、若人達。104番道路に着いたぞ。」

星の声に反応し三人は水平線の先に浮かぶ104番道路に視線を向けた。

星のホエルオーから降りひとまずトウカシティで休憩をすることにした4人。

「で、一息ついたらトウカの森を抜けて、カナズミ経由で106番道路に出てカナシダトンネルだよね？」

ポケモンセンターのロビーで休んでいる時にアカネがこれからの行き先をおぼいした。なるべく人が多い道を選んだすえこのルートになり、クロノもクリアスもそれで納得していた。星はホエルオーをセンターに預け治療が終わるのを待っている。

アカネとクリアスは彼とは別行動をする事を提案したが、星がカナズミまで付き合おうと言ってそこまで同行する事となったのだ。

「はい、お待たせ。んじゃ、カナズミまで行くか。」

ホエルオーの治療が終わり星がクロノ達の所に戻ってきた。

クリアスは昨晚の事が気になり彼に対して一向に警戒心が緩まなかった。アカネもムロでの一言が気になり少なからず星に対して警戒

心が有った。

トウカシティから出てしばらくするとあるトウカの森。

ホウエンー大きい、その森は虫ポケモンの宝庫であり、ホウエンではここにしかキノココとナマケロが生息していないため一部のトレーナーはここで何日も野営しこの2体を捕まえる。

現にクロノ達もこの森で出会った大半のトレーナーにナマケロとキノココの事を聞かれている。

「しっかし、めちゃんこ大きい森だね。ここは。」

辺りの木々を見て星はこの森の大きさに感心していた。

「おっさんはホウエンの出身じゃないのか？」

そんな星の言葉にクロノは少し疑問に思った。

星はいまだ木々を見ながらクロノに答えた。

「ああ。おっちゃんはシンオウ出身だね。シンオウにも森は有るけど木の太さはここには負けるわ。」

余程この森が凄いのだろう。星は木々から目が離せずにした。

実際トウカの森の木は確かに太い。森の面積は大したことはないが、太い木が大量に有るため一度迷うとそう簡単に抜け出せない。

この木々がこうも太いのは温厚な地方であるホウエンがなせる自然の技であり、ホウエンの木材は各地方に送り出されている。

そんな森を進でいると星は急に止まりクロノ達を止める

「どうした、おっさん？」

そんな星にクロノは問う。

しかし、そこにはいつもの胡散臭い星はない。眼には強者が持つ強い光を宿している。まるでジムリーダーのような覇気すら感じる

「奥から声がする！行くぞ！」

そう言い星は森の奥に走り出しクロノ達もそれについて行く。

奥には確かに人がいた。

青い海兵隊のような服を着た男が三人。そしてその男に囲まれているスーツ姿の男性。男性はカバンを大事そうに抱えている。

「いい加減にそれを渡していただきたい。我々も余り手荒な事はしたくないのだよ。」

真ん中に立つ男が男性に手を伸ばしカバンを差し出すように促す男性は怯えながらもそれを拒んだ。

「赤の次は青かよ！ゲライント！アイツ等を……」

「エンペルト！アイツ等を追い払え！」

クロノがゲライントを出す前にクリアスがエンペルトを出し三人の男に攻撃を仕掛けた。

「このエンペルトは……！！」

男達が立ちほだかるエンペルトを見てたじろぎ、そこにクリアスも加わる。

「騎士としておまえ達の悪行は見過ごせない！大人しく身を引け！」
クリアスの一括にて男達はさらに後ずさりした。

「あなたが相手では分が悪いですね。ここは一度引かせていただきます。」

それだけ言い男達は森の奥に走り去った。

「お怪我は有りませんか？」

クリアスはスーツの男性に声をかける。男性も安心したのか、その場に座り込んでしまった。

「いやあ、すまない。急に腰が抜けてね。怪我は無いよ。」

男性が安堵の表情を浮かべ、クリアスも安心した。クロノ達もクリアスの先ほどの覇気に押されたのか、少し遅れて男性の所に集まった。

「いやあ助かったよ。ありがとう。私はデボンコーポレーションの社員でトミサカって言うんだ。カナズミに行こうとこの森を歩いていたら急に襲われてね。本当に助かったよ。」

お礼を言いトミサカさんはやっと立ち上がることができた。

それから、クロノ達はトミサカさんに頼まれカナズミまで護衛する事になった。クロノ自身、数日前に襲われたとばかりなため人事とはいえ思えずに、護衛を受けた。

「まさか、あの人がいるとは思いませんでした。しかも、目標の少年と一緒にでした。」

先ほどの男達の一人が通信機に向かって話していた。

「そうですか。でしたら、後から私の方で連絡をとってみます。あなた方はひとまずターゲットの少年の尾行を頼みます。」

通信機からの女の声に従い男達は行動を開始した。

空には不穏な雲が見え始めた。

しかし、その雲はこれからホウエンに降りかかる事の前触れを告げていたし過ぎなかった……

第12話 「影を盡く二つ目の闇」 (後書き)

やっと12話です。いやいや、早いものですね。

クリアス「こんな小説を読んでくれる読者様に感謝ですね。」

まったくです。

今回はクリアスを気持ち格好良く描写してみました。でもクリアスの裏の部分がちょっと見え隠れしています

クロノ「お前、なんか隠し事してるのか？」

クリアス「主よ。人には言いたくないことの二つや三つは有るものです。ね、アカネさん」

アカネ「え！う、うん。有ると思うよ。」

星「少年。隠し事は本人が言いたくなったら自ずと言うから黙してまちなさいな。」

クロノ「無理には聞かないよ。言いたくなったら聞くから、遠慮なく言えよ。」

アカネ&クリアス「……………」

作者が居づらくなったので今回はこれで。

では次回

第13話 「決意、我が想いの全て」 (前書き)

今回はケルアのお話です

第13話 「決意！我が想いの全て」

なぜ私はあの時息子を誉めてやらなかったのだろうか？

ただ一言

『良くやったな』

この一言が言えていれば、今は違ったかもしれない。

『父さん！見てみて、今日のスクールでの模擬戦で一番になったよ！』

私の下に走り寄ってくる息子。手にはバトルレコーダを持ってそれを私に渡した。中には今日の模擬戦の様子が入っていた。この年でこの戦いぶりは凄いものだ。大人の私が見てもそう思う。しかし、あの時の私が息子に言った言葉は褒め言葉ではなかった。

『ふむ。なかなかの戦いぶりだ。』

やめろ。その先を言うな

『しかし、カイトなら最も早くに決着をつけていたな。』

もうやめろ！それ以上息子に何も言うな！

『お前もカイトを見習い精進しなさい。』

やめろ！なぜ誉めて頭を撫でてやらない！

なぜ、あの約束に縛られる！なぜ息子の気持ちに気づいてやれなかったのだ！

そんな悪夢からケルアはようやく目を覚ました。仕事の最中に少し寝てしまったようだ。幸い誰にも見られていないのが唯一の救いだっただ。

「ふう……。約束に縛られた親の末路か……。」

天井を見上げたため息つき、自分の犯した罪を口に出したケルア。

何時間寝たのだろうか。空は夕焼けに染まり、風が少し肌寒くなってきた。そんな時、セバスドアをノックし書斎に入ってきた。客人を連れて。

「旦那様。テッセン様がお見えになりました。」

客人とはキンセツシティのジムリーダーテッセンだった。確かについ先日セバスは彼に連絡を入れたが、決してここに来るようにとのことではない。

「あんたに話がある。」

いつもの笑い上戸なテッセンではなく、真面目だった。むしろ怒りすら感じる。ケルアもそのテッセンの空気を感じ取りセバスを下げる。

「で、お話はどの姿の私にかな？父親の姿の私か？社長としての私か？それともポケモン協会会長としての私にか？」

机の前に立つテッセンにケルアは言う。

「全部のあんたにだ。」

ケルアより高圧的な態度でテッセンはケルアに言った。ケルアは何が彼をそんなに怒らせているか分からなかった。

「なぜ息子を助けに行かない？あんたが息子ともめたのは知っている。」

それを聞くとケルアは少しため息ついた。

「……アイツには今まで酷い仕打ちをしてきた。何も知らず、親の愛をまともにも受けられなかった。私とあいつの約束に振り回されたせいだな。そんな身勝手な親が今更どの顔をして助けに行けばいい？」

ケルアのその言葉にテッセンは静かに怒りを爆発させた

「……逃げたな、ケルア ウィールラス？息子から。いや、これ以上息子から嫌われる事を恐れて。」

ケルアもテッセンのその一言を聞いて眉を狭めた。

「好きに言いたまえ。しかし、家族関係まで部外者にとやかく言われたくないな。」

静かに反論するケルア。しかし、テッセンもさらに言い返す。

「なぜ、今の息子から逃げる。息子は対等に話すことを望んだのだらう？なぜ今の胸の内を、今まで秘密にしてきたことを教えてやらない？」

テッセンのその言葉に対しケルアはついに怒りを爆発させた。
机を強く叩き、椅子から立ち上がる。

「アンタに何が分かる！今まで息子を他人のように接してきてしまった親の気持ちだ！」

「ああ！分からないね！アンタみたいに何でも胸の内にとまって、語ろうともしない奴の気持ちなんか！想いは言葉にしないと相手には伝わらないんだよ！」

テッセンの一括を聞き言葉を無くすケルア。

何も言わず、全てを隠してきた。それが息子のためだと想ってきた。息子なら私の気持ちを理解してくれていると思っていた。

しかし、幾ばくもいかない息子にそれを理解しろなど到底無理な話だった。

それを今知った。気づくのが遅かった。いやまだ遅くはなかった。

「……私は怖かったのかもしれない。真実を知ったとき息子が私から離れて行ってしまおう。だから私は、真実を隠した。あの約束を守り通した。真実を知らない方が良いと思込んでいた。」

ようやく息子に対する思いを打ち明けたケルア。テッセンからも怒りは消えていた。

さらに続けて話すケルア。

「今更真実を息子に教えても、遅いかも知れないがそれでも構わない。自己満足と言われようと構わない。真実を、胸の内を息子に話す。それがアイツを対等に見たということだと思っから。」

ケルアの胸の内を聞きやつとテッセンに笑顔が戻った。

「自分が変われば相手も必ず変わる。変化を恐れた奴にその先は無
いぞ」

テッセンのその言葉を聞きケルアは強く頷いた。

「ありがとうテッセン。ならポケモン協会会長として改めて命ずる。
他のジムリーダー達と協力し例の組織の野望を阻止する事に尽力を
尽くせ！」

今度はケルアの一括でテッセンの身が引き締まる。

「その命確かに！」

先日とは違う命を受けテッセンは、改めてその命を受け取った。そ
して書斎を後にした。

書斎に残ったケルアは引き出しの一番下を開け中から、6個のモン
スターボールを取り出しセバスを呼んだ。入ってきたセバスの手に
は一枚のコートがあった。

「用意が良いな。」

「恐縮です。」

それだけを言い、ケルアはコートを着た。そして玄関まで一目散に
歩き出した。

「では、セバス。留守中は頼むぞ。」

そう、セバスに命じるがセバスは微笑していた。

「旦那様。私もお供いたします。」

セバスの言葉に多少驚いたがケルアはそれを止めなかった。そして二人は、息子を助けるために屋敷を出て行った。

第13話 「決意！我が想いの全て」 (後書き)

いや、ケルアの意外な姿が判明しました。

セバス「ウィールラスコーポレーションはポケモンリーグにも莫大な寄付してしまして、その功績を称えられポケモン協会会長に任命されました。」

多忙なパパさんですね。

それはそうと、セバスさん。とある方がセバスみたいな執事が欲しいと仰ってましたよ

セバス「おや？嬉しい限りですが、私は血の一滴もウィールラス家に捧げた身ですので、執事を辞めるわけにはいきません。ですが、ウィールラス家にいらした際は最高のお持て成しをお約束します。」

つまりクロノの知り合いになれと？

セバス「クロノ坊ちゃまか旦那様。奥方様の知り合いになられたらですね。」

だそうですね。

では、また次回

第14話 「友々お前は俺の好敵手」 (前書き)

クリアスをカッコ良く描写したつもりです。またクロノの7体目のポケモンが出ます

第14話 「友々お前は俺の好敵手」

空を厚い雲が覆い、雨が116番道路を濡らす

「もう、ずぶ濡れだよ」

アカネがそう言い、木の影で雨宿りをすることにする三人。

昨日、トウカの森でデボンコーポレーションの社員を助けたクロノ達はカナズミシティに何事もなく到着した。そしてポケモンセンターで一晩空かし、116番道路に向かった。

星も昨夜までは一緒にいたが夜が明けると、既に居なくなっていた。

「流石に雨具くらいは用意しとけばよかったな。」

雨に濡れ神を拭くクロノ。しかしどこか落ち着かない様子だった。

それもそのはずだ。雨に濡れたアカネの服が濡れ、アカネの下着がうつすらと見えているからだ。

そのためクロノは眼のやり場に困っていた。

しかし、クリアスは一人険しい顔をしていた。

「どうしたのクリアス？」

そんなクリアスに気づいたアカネ。クリアスは来た道の方を見ながら二人に告げた。

「……私達は誰かに付けられています。」

その言葉を聞き身構えるクロノとアカネ。更にクリアスは茂みに向かって叫んだ

「いい加減出てきたらどうですか？ついてきてるのは分かっています。」

クリアスの叫びを聞き左右の茂みから何人もの男達が出てきたら。さらに、クロノ達が来た方から傘を挿し歩いてくる女性が来た。その集団は昨日トウカの森でトミサカさんを襲っていた連中と同じ格好をしていた。

「あらあら？バレていましたか？」

傘を挿しいる女が少し惚けた風にクロノ達に言う。

「俺達に何か用か？わざわざ尾行までしたんだ。まともな用件じゃないだろ？」

クロノの言い分はもつともだった。数十人で人を威嚇する奴らがまともな要件をたのむ筈がない。

「あら、察しが宜しい事で。では一応要件を言いますよ。クロノウィールラス君。私達アクア団と一緒に来て下さるかしら？」

アクア団と名乗る女は敬語で話すが、早い話クロノを誘拐しようとしているだけだった。

「貴方みたいな人をお願いされたら行きたくもなるけど、お断りだ

よ！」

クロノのセリフと同時に走り出す三人。
それに反応し後を追うアクア団。

「こいつら、足早いな！」

悪天候なか、アクア団の走りは衰える事を知らなかった。

「なら、ユーウィン！出番だ！」

クロノがボールからウィンディのユーウインの出し、背中に乗る。
そして、アカネとクリアスも乗せる、アクア団を離していく。

「クロノ、この子は？」

突然のウィンディの登場に戸惑うアカネ。子供とは言え三人も背中に乗せてもその足の速さは脱帽だった。

「俺の七体目のポケモンさ。名前はユーウィン。朝、ジオとガラハツトと交換したんだよ。」

クロノは朝方手持ちの六体をボールから出し様子を確認した。その結果ジオとガラハツトが多少疲れ気味だったため、預けてあったユーウィンとガウエインと交換していたのだった。

アクア団を引き離しクロノ達は本来の目的地だった、カナシダトネルに到着した。

「なんとかまいたか？」

ユーウィンをボールに戻し、後ろを確認するクロノ。追っ手は来なかったが、

「あら、気を抜くには早すぎませんか？」

カナシダトンネルの入り口からさっきのアクア団の女が出てきた。思わず舌打ちするクロノ。

「ったく。アンタらはマジシャンかよ。」

女はクスクスと笑いながら言う

「お褒めの言葉ありがとう。では鬼ごっこも終わりましたし一緒に来て頂きますよ。」

女がクロノに近づいてきた時クリアスが動いた。

「やらせません！」

いつの間にかクリアスはルンパツパを出しており、技『自然の力』を使っていた。

自然の力によって出た技を『ツルの鞭』だったため女の足に絡みつき、動きを封じた。

「お二人は早くトンネルへ！」

クリアスの言葉に従いクロノ達はトンネルの中に入った。しかしクリアスは一向にトンネルに入らなかった。

「おい、クリアス早く来い！」

クロノがクリアスを呼びにトンネルの入り口戻ろうとしたしかし、次の瞬間トンネルの入り口が岩石によって閉じた。

「私はここで奴らを止めます！二人は先に行つて下さい！」

岩石の隙間からクリアスの声が聞こえ、クロノは答える

「お前何言つてんだよ！お前一人でどうにかなる数じゃないだろ！」
怒鳴るクロノ。しかしクリアスさらに答えた。

「これだけの数を相手に逃げ切るのは困難です。ですから主の騎士たる私が盾になりお守りします。」

その言葉にクロノは激怒した

「お前いい加減にしろ！ダチを置いて行けるかよ！俺はお前を従者と思つた事なんて一度もないぞ！お前は俺のライバルなんだからな！」

クロノのその言葉にクリアスは驚く。そして笑う。

「なら、今からは友していいいます。友ならなおのことお守りします。彼らを倒したら、必ず後を追います！ですから、心配なさらず！」

暫く無言が続き、クロノが漸く口を開いた。

「なら、ミナモシティで落ち合おう。待ってるからな！」

そう言いクロノはアカネの手を引き走り出した。

「ありがとうございます、クロノ。私を友と呼んでくれて。」

頬を伝うその水は、雨なのかはクリアスにしか分からない。彼の感謝の言葉は雨の音の中に消えていった

第14話 「友々お前は俺の好敵手」 (後書き)

クリアスはクロノを主と思い、クロノはクリアスをライバルと
思っていました。

でもクリアスにとってクロノは特別な存在には変わりありません。
友達の為に命をはれるクリアスは格好いいと作者は思います

第15話 「疑心〱俺はアイツを信じている〱」 (前書き)

今回は繋ぎのお話です

第15話 「疑心く俺はアイツを信じている」

こんな不安な気持ちで旅をしたのは初めてだった。
今まで一緒に居た友達が今はいない。

数日前、カナシダトンネルを通り、シダケタウンの警察に駆け込んだクロノ達。

警察の協力を得て塞がったカナシダトンネルを開けるとが、そこにはクリアスは居なかった。

争った後がさつきまでここで戦いが合った事の証拠だった。

それからカナズミの警察も加わりクリアスの搜索が進められたが、結局クリアスは見つからなかった。

そんな中クロノは一枚の紙切れを見つけた。

それにはクリアスの字で

「フエン」

とだけ書かれていた。

その後クロノ達は警察の提案で保護を進められたが、クロノはそれを断った。

クリアスが残したメッセージと約束をした場所ミナモシティを目指し、クリアスを探す事にしたのだった。

「クリアス大丈夫かな？」

不安そうな声でアカネが問う。

それはクロノにも解らないが、今はクリアスの無事を祈るしかないかった。

身を犠牲にしてまで自分を守ってくれた友の無事を祈ることが今のクロノに出来る唯一の事だった。

今彼らは112番道路を歩いていた。

ここには、巨大な砂漠がありちゃんとした準備が無ければ通り抜ける事が出来ない。

しかし、彼らの目的地であるフエンタウンは砂漠を通らず、その先の煙突山をゴンドラで上がりデコボコ山道を下った先にある。

「ねえクロノ。何かおかしくない？」

突然のアカネの質問に足を止めるクロノ。さらにアカネは続けて話す

「だって、合流地点を決めたのに急にフエンに変えたんだよ？何より戦ってる最中にあんなメッセージが残せるとは私には思えないよ。」

アカネの疑問をただ聞くクロノ。

「……つまりクリアスも俺を狙っているって言いたいのか？」

静かにクロノは口を開いた。アカネも静かに頷き話を続けた

「クロノを最初に襲った連中。マグマ団の仲間ならクロノを必死に守った事も辻褄が合うと思うの。」

クリアスが敵

クロノもその仮説は直ぐに行き着いたが、友達を、仲間を疑いたくなかった。だからあえて口にもしなかった。考えたくもなかった。

「それは俺も考えた。でもそれならわざわざ俺をフエンに呼ぶ意味の説明にはならないだろ？」

「そうだ、クリアスは仲間だ。フエンに呼んだのも何か考えがあったの事だ。」

「そう必死に思い込むクロノ。」

「しかし、アカネの言葉がクロノの考えを壊す。」

「……仮説だけど、フエンの周辺にマグマ団の拠点があったとしたら？」

「いい加減にしろ！クリアスは仲間だ！アイツは俺を助けて……」

「上手く言葉が繋がらない。自分を納得させる理由が見つからない。アカネはただクロノを見つめていた。そしてアカネはさらにクロノに聞いた」

「……クロノ。真面目に答えて。もし、私やクリアスがアナタを狙う組織の人間だしたらクロノはどおする？」

「アカネの問いの意味が解らなかった。」

「二人が敵」

「考えたくも無かったし、答えたくもなかった。」

「しかし、アカネの眼がクロノを逃がさなかった。」

「……話を聞くと思う。なんで俺を狙うのか。なんで俺と旅をしたのか。でも、俺は二人を信じると思う。確かに俺を狙って近づいてきたかもしれないけど、旅をしていた時の笑顔は本物だと思うから。」

一緒にいた時は仲間だった。友達だった。三人がそれぞれの居場所だった。だから敵になっても分かり合える。クロノの答えを聞きアカネの顔が笑った。

「ごめんね。そうだよね！クリアスは私達の仲間だもんね。信じてあげよう！」

「ああ！アイツは俺達の仲間さ！だから迎えに行こうぜ！」

二人は歩き出した。クリアスが残したメッセージを頼りにフエインタウンへ。

（ごめんねクロノ。私まだ、どうしたらいいのか分からないよ・・・）

心の中で苦悩するアカネ。クロノに決断をさせていながら、自分はまだに答えを出せていなかった。自分が取るべき道の答えを

第15話 「疑心く俺はアイツを信じている」 (後書き)

急に友達を信じられなくなる事ありませんか？

相手を信じる事は実はかなり難しい事だと思えます。

しかし、クロノは疑心と闘いながらも仲間を、友達を信じる強さを
見せてくれました。

作者も見習い強さです。

第16話 「裏切り〜彼女は俺の敵〜」 (前書き)

今回は、二人の隠し事が大暴露

第16話 「裏切り〜彼女は俺の敵〜」

未だに雨が続くカナズミシティ。

一際大きいビルの社長室に二人はいた。

デボンコーポレーション。

ホウエンで名高い会社である。

「これが無ければ、あいつらは海底遺跡は行けません。」

社長の対面に座り、トランクの中を見せ語るトミサカ。社長のツワブキもそれを聞くと、ほっとした表情をする。

「これで、注意すべき巨悪はマグマ団だけですな。早速ケルアさんに連絡をいれて、この朗報を知らせなくていけませんな。」

「しかし、その朗報も悪い報告になりますよ」

刹那、社長室の電気が消える。そしてドアの前には男が立っていた。

「誰だ！」

トミサカが立ち上がり、その男を怒鳴るが、それより早くトミサカの肩から鮮血が噴出す。

何が起こったか分からないトミサカ。しかし、激痛が体を支配するのにはあまり時間を必要とはしなかった。

「っ！がつ………！」

言葉にならない悲鳴。傷口を押さえその場に蹲るトミサカ。ツワブ

キ社長もトミサカに近寄り心配する。

「今のは威嚇です。大人しくこちらの要求を聞いていたいただければ、これ以上の事はいたしません。」

男を見上げるツワブキ。男の手にはトミサカを打ち抜いた銃が握られていた。ご丁寧にサイレンサーまでついて

「要求は何だね？金か？」

暗い部屋で男の顔は分からないが、声から大よその年が分かる。声からして男はまだ若い。まだ16歳ぐらいの青年であろう。

近づいてくる男。外の明るさで何とか口元や服装が確認できた。

口元にはスカーフを巻き、そのスカーフは腰まで伸び、まるで騎士の羽織るマントのようにも見える。服装は、彼らが注意すべき敵のものだった。

アクア団

そして、彼の隣にはポケモンが二匹。本来なら楽しく踊る陽気なポケモン。

鋼の体を持つ海の中の鳥。

「お分かりのはずです。ここで製作された、特別パーツと様々な方面から調べたカイオーガ、グラードン。さらにはレックウザの資料ですよ。」

ツワブキ社長を見下げる男。にらみ付ける社長。

「君のような悪党の要求を呑むと思うかね？」

そう告げると社長の太ももに銃弾が打ち込まれた。

もがくツワブキ社長。

「一つ訂正いたします。お願いでは無く命令です。命が欲しかったら渡していただけませんか？」

敬語だが殺意の籠ったその言葉。

次は殺される。

二人がそう思ったが、決して要求された物を渡そうとはしなかった。

「強情ですね。しかし、探し物はここに用意されているのですから、ここまでのことをしなくても良かった気もしますが。」

そう言い、男は机の上の資料とトランクに収められたパーツを手にとった。

「確かに頂きましたよ。」

そう言い男は、床で苦しむ二人に深々と頭を下げ、10階もの高さもある窓から飛び降りた。そして、ボールから一匹のフライゴンを出し二匹と共に空に消えていった。

「これが本来の私なのに、今になると虚しいですね……。」

男は、あの時の自分と今の自分。どちらの自分が本当の自分かわからなくなっていた。

本気で友を守った、あの時の思いは偽りではないと信じたかった。

「クロノ……。すいません……。」

スカーフを外した男　クリアスは自分を友と呼んでくれた彼にただ謝るしかなかった。

「くそ！俺だけを襲えばいいのに、何でアスナさんまで襲ったんだよ！」

アレスタンに乗り煙突山の山頂に単身向かうクロノ。

煙突山に着いたクロノ達は、そこで何人も人が倒れているのを目撃した。

その中にはフエンジムリーダーのアスナさんもいた。

意識のある人から話を聞くとマグマ団と名乗る連中が煙突山とフエンシティを占拠した、話す。

それを聞いたクロノは、激怒しアカネを下に残し単身、山頂に向かって。

煙突山は世界有数の活火山で山頂に近づけば近づくほど暑くなる。フエンシティの温泉もこの火山の熱を利用している。

言うなれば、この火山がハウエンの豊かな大地を生み出していた。

「いた！ん？何だあの機械？」

火山よりはるか上空から火山を見下ろしたクロノ。

火口付近のは謎の巨大な機械が設置されていた。

見た目は、多脚の着いた戦車といったものだ。

そして、その筒状の部分は火口に向かっていた。また、その機械の近くには、ムロでクロノを襲った女ーカガリともう一人いた。

服装が他の連中と違うことからそいつが幹部クラスどということは

一目瞭然だった。

「考えてもしょうがない！アレスタン！突っ込むぞ！」

クロノ指示を待っていたアレスタンは、待っていたとばかりに、マグマ団の幹部二人に向かって急降下を始めた。

そして、その巨大な機械に対して攻撃を行った。

機械は爆炎を上げ、その役目を果たせなくなった。

それを見ていたマグマ団は、対して狼狽えていなかった寧ろ、想定内の事態といった表情だった

一人の男性を除いて

クロノもその男性の存在は気づいていたがあえて無視をした

「お前ら！何やってんだよ！」

上空からカガリ達に叫ぶ

「やっと来たかい。早いとこ降りてきたらどうだい？」

カガリの挑発に乗り、距離を問ったとこに降り立った。

「俺を狙ってんなら、俺だけ狙えばいいだろ。何でフエンまで襲った。」

四方を囲まれながらも、強気でカガリ達に話すクロノ。

そんなクロノに迫り来る一人の男性。

服装から見てもマグマ団の仲間では無いことは一目瞭然だった。む

しろ科学者が探検家に近い

「君！何て事をしてくれたんだ！？」

鬼の形相をした男性はクロノの肩を掴み前後に揺する。

「これは、世界に誇れる世紀の実験だったんだぞ！」

揺られるクロノはただ振られるしかなかった

「だー！うるさい！あんたもこいつらの仲間かよ！」

腕を振りほどこき更に距離をとるクロノ

「私はソライシ！彼らは私の実験に協力してくれている人達だ！」

男性はソライシと名乗りマグマ団との関係も説明したが、後ろにいたカガリがそれに続ける

「そうさ。ソライシ博士の火山活性化実験に協力したのさ。もっとも、それは予備の作戦で本当はあんたを誘き出すのが目的さ。」

それを聞くとソライシの表情が変わる

「それはどういうことだい！？この子が目的なんて聞いていないぞ？それにさっきこの子はフエンを襲ったとかどういうことだい！」
クロノから離れカガリに近づいていくソライシ

「研究には手を貸しただろ？それにあんたはもう用済みさ。」

そう言いカガリはソライシの腹部に強力な拳をお見舞いし、ソライシは気絶する

「さて、用済みの餌は片づいたし、話の続きをしようか。」

そうカガリがクロノに告げる。

「何でフエンを襲ったんだよ。」

カガリはその問いに笑いながら答える

「目的あんたなのは言ったよね。フエンはあんたがその噂に引き寄せられてここに来るようにし向けるためさ。それに、ジムリーダー様が私達に喧嘩売ってきてね。その見せしめさ。」

その言葉にクロノはキレた

「女性は優しくするのが、お前は別だ！今ここで倒す！」

アレスタンに指示を出そうとするが、上空からクロノを呼ぶアカネの声がした。

「アカネ！なんで来たんだよ！」

アカネは自前のカイリューに乗り山頂まであがってきた。

「来たなら仕方がない。アカネ。手を貸してくれ。今からコイツらシメる。」

少し後ろ立つアカネに言うクロノ。

しかし、アカネは思いもよらない事を言った。

「ごめん。依頼だからそれは出来ないんだ。」

その言葉を聞くと同時にクロノの意識がとぶ。

アレスタンがアカネを見ると同時にボールに戻されてしまう。

「クロノごめんなさい。」

手にはスタンガンを握り、意識のないクロノに誤るアカネ。
そして、その瞳には涙が溜まっていた。

第16話 「裏切り〜彼女は俺の敵〜」（後書き）

あゝ疲れた

セバス「どうなされましたか？」

いや、結構早いペースで投稿したから疲れた

セバス「左様でございましたか。」

あー夜勤の後の投稿はマジで眠い。

セバス「でしたら、布団の用意をいたします。」

ありがとうー。後次回は本編で出番有るから。

セバス「左様でございますか。」

淡泊だなあ。

では、また次回

第17話 「陰謀く明かされた真実く」 (前書き)

今回はちょっとと暴力的表現が含まれています

第17話 「陰謀く明かされた真実く」

あれからいくつもの時間が過ぎただろうか

クロノが目を覚ました場所は屋外ではなかった。

見慣れない銀色の天井。冷たい床に倒れ、後ろで縛られた手。幸い足は縛られてはいないが、腰のモンスターボールが無くなっている。ついでに荷物もだ。

なぜこんなことになったのか、クロノはあの時の事を思い返した。

アカネがマグマ団の仲間だった

考えても行き着く先はここだった。

あの時、山頂で助けに来てくれたと思ったアカネがクロノを気絶させた。

それは紛れもない事実だった。そして、クロノは今、場所も分からないこの部屋の中に監禁されている。

「どこだよ、ここ……」

そう呟くと、部屋のドアが開き、あの時幹部のカガリと一緒にいたもう一人の幹部が入ってきた。

「……起きたか。なら出る。御頭がお呼びだ。」

それだけ言う幹部の男。

前髪で片目を隠しよく顔が見えないが、声の印象からして、かなり根暗な人物であることは間違いはなさそうだった。

幹部の男と数人の団員達に囲まれクロノはとある部屋に招かれた。

その部屋は何かの司令室なのか奥にはキーボードやスクリーンなど

が設置されていた。

そして、スクリーンの上には外が見える窓がついていた。その窓から見える、景色の先は煙突山の火口ないであった。

「よお、お目覚めか。」

部屋の中心にある机には、カガリ、ホムラ、こいつらの親玉と思われる男。そして俯いたアカネが腰掛けていた。

アカネを見たクロノは、少し安心した。

自分を騙したアカネでもクロノには大事な人には代わりはなかった。

「最高に気分がいいぜ。この手が自由で俺のポケモンが無事ならな。」

男に言い返すクロノ。男はそれを聞くと笑い出す。

「いいねえ、報告通りの小僧だあ。まあいい。座れや。少し話そうか。」

クロノは入り口に一番近い椅子に招かれ、腰をかける。

手が後ろで縛られているため、座りにくいのは言うまでもない。

「さて、何からはなすかねえ……。お前は何かから聞きたい？」

背もたれにもたれかかり、クロノに聞く男。

「とりあえず、あんたの名前からだな。」

絶対に不利な状況なのに強気な態度で出るクロノ
それを聞くと男はまた、笑い出だす

「そうだな。まだ名乗っていなかったな。俺はこのマグマ団を纏めているマツブサだ。覚えておけ。」

マツブサと名乗る男は不適な笑みを浮かべながら名乗った。そして、さらに話を続けた。

「・・・今お前が一番気になっている事を教えてやるよ。」

クロノが一番気になっている事。言うまでもなくアカネにお事だった。

マツブサのその言葉を聴くとアカネは少し体を強張らせた。

「こいつは、その道じゃ結構有名な何でも屋だな。汚い仕事も金次第で請け負ってくれるから、俺らみたいな連中からは重宝されてる訳よ。」

アカネが何でも屋だったのは知っていた。だからこんな奴らに協力していた。

「・・・私のお父さんが科学者なのは話したよね？すぐ前にお父さんの研究が、学会で非難させて以来マグマ団に協力して、自分の研究が正しい事を証明しようとしてるの。初めてだった・・・お父さんが私を必要としてくれた・・・。この依頼を断る事も出来たけど、初めてお父さんが私を必要としてくれたから、この仕事を請けた。でも、あなたは私を好きって言ってくれた・・・だから、あなたもお父さんも、両方裏切りたくなかった。でも私はお父さんを選んだ・・・あなたを裏切って・・・」

はき捨てるように自分の心の内を話すアカネ。しかし、クロノはそ

んなアカネを見て言った。

「なら、しょうがないよな。肉親と彼氏なら天秤にかけられないよな。」

決してアカネを攻めないクロノ。アカネは自分とは違い父親を信頼していた。だからこそ苦しんだ。考えた。その結果がこれなら何も攻めることはない。

アカネはそれを聞くとやっと顔を上げクロノの顔を見た。

攻められると思っていた。でも彼は許してくれた。父親と比べて、クロノの気持ちを裏切ったのに彼は許してくれた。

「まあ、事情が分かったとこだし、本題を話そうか。」

マツブサが話を始めようとした時、アカネが席から立ち上がりクロノに駆け寄ろうとするが、それをカガリが腕を掴みそれを止める

「差し詰め、依頼が終わったから小僧を助けるつもりなんだろうけど、そんな事読めてるんだよ。」

カガリがそう言うと、アカネを机に叩きつけ腕を後ろに回し、アカネの動きを完全に防ぐ。

それを見たクロノも椅子から立ち上がり、カガリに向かって走り出す。

「てめえー！アカネ何してんだよ！」

しかし、クロノの動きをよんでかホムラが先回りして、クロノの腹部に蹴りを入れる。が、クロノもそれを足で防ぐ。

「邪魔なんだよ！木偶の坊！」

怒りを露わにした口調でホムラに怒鳴るクロノ。

「ムロでの借りを返してねえからな。何より少し痛めつけといた方が後々楽だからな。」

ホムラが不適な笑みを浮かべながら話、二人は一度距離を開けた。しかし、クロノは蹴りを防いだ足が痺れていた。体格が違うからダメージが大きいのは仕方がないが、足の痺れ方が少し違う。

「あんだ。足になんかつけてるな？」

痺れた足を後ろに下げクロノは言う

「ああ。特性のレガースをな。しばらくその足は使い物にならないだろ？」

そう言い、ズボンの裾を上げるホムラ。その足にはレガースと言うよりも臍鎧に近いものがあつた。

手が使えればあの蹴りはそこまで怖いものではないが、縛られて使えない。更に今左足が思うように使えない。何よりポケモンとアカネが人質と同じ扱い。

状況はさらに悪くなる一方だが、目の前でアカネが居るならアカネを助ける。

それがクロノの結論だった。

そして、クロノはホムラに向かって走り出す。しかし。

「……抵抗しても良いが、お前のポケモンがどうなっても良いのか？」

今まで無言だった、最後の幹部がクロノのモンスターボールのついたベルトを取り出す。
それを見たクロノの動きが鈍り、ホムラの蹴りを無防備なまま左腕に受ける。

クロノの腕に骨の軋む音がし、激痛が入る。
床に転がり、声にならない声を出すクロノ。

「クロノ！」

押さえられていたアカネもクロノの様子をみて体を上げるが力ガリに押さえつけられて動けない。

「おお、悪い悪い。つい足が滑っちゃったぜ。……腕イッチ舞っただろ？」

「ぐあー！」

蹴られた部位を踏みつけるホムラ。クロノの腕には更に激痛が走る。

「その辺にしておけ。この女がいれば、この小僧は言うことを聞くんだからなあ。」

マツブサの命令を聞き足を退かすホムラ。
マツブサはさらに続けて話す。

「良いか小僧。お前はこれから俺達のために一働きしてもらうんだ。」

激痛に耐え立ち上がるクロノ。

自分を使って何をするのが皆目見当がつかない。

「そう！お前はこいつを起こすために働いてもらう！この超古代ポケモン、グライドンを起こすためにな！」

マツブサの叫びと共に巨大なスクリーンに、マグマの中で眠るグライドンの姿が映し出された。

それを見るクロノ。本や口伝でしか見たことのないその姿を前にただ、呆然とするしかない。

しかし、クロノには解せなかった。何故自分がグライドンを起こすのか。

「お前まだ気づいていなかったのか？お前は生き物の心を操る力を持っているんだよ！」

マツブサのその言葉にクロノは驚きを隠せなかった。しかし、クロノはその驚きの中マツブサに聞いた。

「仮に俺にそんな力が有ったってグライドンを起こす事となんの関係があるんだよ。」

「それが有るんだよ。この紅色の玉にお前が念じればグライドンは起きるんだよ！」

すると机の中心から二つの玉が出てきた。
紅色と藍色。

「おっと。あなたに拒否権は無いよ？少しでも抵抗したら、あなたの可愛い彼女が酷い目にあうよ？」

そう言い、カガリはアカネの頬にナイフを当て威嚇する。

「……………分かった。だからアカネとポケモンには手を出すな。」

流石に万策尽きたクロノはマグマ団の言うことをしか道がなかった
すると、扉が爆発し煙が部屋を覆う。

「クロノ。カイトはお前に教えたはずだ。『如何なる時も諦めるな』
。諦めたらそこでおしまいだ。ならば、死ぬまで足掻け！」

煙の中から、ドサイドンと共に現れたケルアとセバス。

しかし、セバスの手には入り口の前の警備をしていた団員が引きず
られた。

「お、親父……………」

考えもしなかった援軍にクロノは何も考えられなかった

第17話 「陰謀く明かされた真実く」（後書き）

はい第17話いかがでしたか？

番組の最後に出てくる演出でなんかカッコいいですよね？

星「あゝ。作者ちと良い？」

なんざんしょ？

星「おいつちゃんの出演はもうないの？」

出演欲しいの？

星「そりゃ欲しいよ。他の作者さんの作品見て見なよ。オリジナルキャラはみんな主役張りの活躍してるじゃん。同じおいつちゃんキヤラのセバスと扱いがちがうじゃん。」

セバス「出演を気にしているようではまだまだ小物ですよ？」

星「なにをおく！」

セバス「おや？やりますか？」

おじちゃんキャラ達が争い始めたのでこれではまた次回

第18話 「目覚め、暴走した者」 (前書き)

いや、長らくお待たせしました。久しぶりに投稿しました

第18話 「目覚めゝ暴走した者ゝ」

部屋を覆う煙が晴れ、思わぬ助けが現れた。

クロノの父ケルア。その執事セバス。

万策尽きた。

そう思ったクロノを一括し、彼らは助けに来た。

「うちの息子に手を出したのはどこのどいつだ？」

眉間にシワを寄せ、マグマ団を睨み付けるケルア。

クロノも初めて見たケルアが怒った顔。

マグマ団に向けられたその顔には怒りだけではなく、殺意すら見えていた。

「へっ、そんなので怖気づくとも思ったか？」

そう言いホムラはケルアに対し敵意を向け、突撃してきた。

それを見ていた、カガリは止めようと口を出すが無意味だった。

ケルアに襲い掛かるホムラの蹴り。

しかし、その蹴りはケルアに届くことは無かった。

ホムラとケルアの間には、セバスが割って入っていた。

ホムラの繰り出した、蹴りを肘と膝で挟み受け止めていた。

「な！何！」

ありえない状況に困惑するホムラ。

「まだまだ未熟ですな。お若いの。」

不適な笑みを浮かべ、ホムラに言うセバス。

距離を取ろうと離れようとするホムラだったが、セバスがそれを許さなかった。

そして、セバスの強烈な拳がホムラの顎を直撃し、ホムラが宙に舞う。

「鍛え方が足りませんな。」

気絶したホムラを見てセバスは一笑した。

そしてクロノに近づき腕を縛っていた縄を解いた

「いやあ、恐れ入った。だがあんまり、変な事はするなや。こっちははまだ、人質がいるしは。」

マツブサが捕まっているアカネを指差し三人を見る

「……本当にそう思うか？」

パイプに火を付け余裕の表情を浮かべると、部屋に地鳴りが響き始めた

そして、カガリの下から、一匹のサイドンが飛び出した。

無論、カガリは身を守るため、アカネから離れた

「お待ちせしました、会長！」

サイドンの空けた穴から出てきたのは、カナズミのジムリーダーのツツジだった。

「ご苦労。他のジムリーダー達は？」

「作戦通りに動いています。ここは完全に包囲状態にあり、ここを抑えれば後は詰めです。」

「だ、そうだが。まだ対抗するのか？マグマ団総帥マツブサ。」

その言葉を聴くとマツブサの顔から余裕の表情が消えた。

そして椅子より立ち上がり朱色の玉を手を取った。

「ああ、確かにこっちが急に不利になったな。ったく。ガキの力使つてグラードンを操る計画がパーだぜ。だがな、こうなる事も予想してなかった訳じゃないぜ。」

圧倒的不利な状況で相手に背中を向け話すマツブサ

「どう言つことだ？」

「別にグラードンを起こすこと自体はその小僧がいなくても可能なんだよ。ただ、俺の思い通りに動かすことができないだけだな。」

また、ケルア達の方を向くマツブサ

「そう！この朱色の玉が在ればな！」

するとマツブサの手に握られていた朱色の玉から眩い光が部屋を覆う

「さあ、グラードン！俺の邪念を喰らい、このホウエンを蹂躪しろ！」

煙突山を中心に起きる地響き。それはここにいる全ての人が感じていた。

そして、その地響きによってこの部屋の壁や天井が崩れ、外が見えるようになった。

幸いクロノ達には怪我無かった。

そして、彼らは目の当たりにした。

大地を創造したポケモン・グラードンの姿を

「これが、グラードン……」

その姿を見たクロノ。そしてグラードンと目が合った。

「……が……点か……。……界の……。……を変える……。……を持つ……。……間。」

突然響く声にクロノは激しい頭痛に襲われ、頭を押さえその場に蹲った

「クロノ! どうしたの!？」

駆け寄ってくるアカネの声すら今のクロノには届かなかった

「頭が……。……割れる……。……何だよ……。……この声!」

必死に痛みと戦い、グラードンを見るクロノ。

グラードンもただクロノを黙って見ていた。

しかし、グラードンは急に苦しみだした。

『……。……郎!……。……てない!……。……情が! 小・な真似を!』

再びクロノの頭に響く謎の声。

それに反応するかのようにクロノの頭痛は酷くなる

「俺の邪念をたっぷり送ったんだ。自我が保てる訳がないだろ。」

苦しむグライドンを前にマツブサは不適な笑みを浮かべていた。

「マツブサ！貴様、グライドンに何をした！」

そんなマツブサに問うケルア。

マツブサは相変わらず不適な笑みを浮かべていた

「なら種明かしだ。グライドンはこの朱色の玉を使って目覚めさせる事が出来るのは今見たとおりだ。ただし、ここからが重要だ。グライドンが目覚める時、この朱色の玉を通して起こした者の心を強く反映しちまう。つまり、俺みたいに邪念ばっかの人間がグライドンを起こすとグライドンも邪念に犯されて暴れ出す訳だ。だから、俺達はその小僧の心を操る力でグライドンを起こし、グライドンを操る計画を立てた。まあ失敗したがな。」

そう言いながら手にした朱色の玉を手の上で遊ばせるマツブサ

「だが、グライドンが暴走した状態ではお前達の計画も成り立たないはずだ。扱えない凶器は役に立たないぞ。」

ケルアの指摘は最もだったが、マツブサは尚笑みを絶やさなかった。

「確かに暴走してたら、意味がない。だが、俺達がこいつの鎮め方を知っていたらどうする？」

マツブサのその言葉を聞きケルアとセバスは駆けたが、少し遅かった。

それよりも早くマツブサはオオツバメをだし空に逃げていた。

そして、その横には三人の幹部達もいた

「はい残念。まあ俺達を追うのも良いが、小僧を放置していいのかい？大分苦しそうだぜ？」

マツブサの指摘を受け後ろを振り返るケルア。

クロノは尚、頭を押さえ謎の頭痛に耐えていた。

爪を立てて頭を押さえていたためか、爪や頭から出血すらしていた。

「さあ、グラードン！暴れまくれ！そして愚かな奴らを殺っちまいな！」

マツブサの一括に反応するかのようにグラードンも大地を揺るがす叫びをする。

そして、クロノの頭痛も最高潮に達し、彼はその場で意識を失う。

「クロノ！」

アカネの彼を思う声は虚しくグラードンの叫びの中に消えた。

そしてグラードンは、煙突山を崩しながら歩き出した。行き場のないその力を振るうために。

その揺れはケルア達にも容赦なく襲いかかっていた。

半壊した基地ではグラードンの力には耐えられる訳もなく、更に崩壊を始めていた。

「会長！直ぐに非難を！」

ツツジの声に従い、ケルア達は彼女の開けた穴から脱出した。

しかし、この時誰も気づいてはいなかった。朱色の玉の対となるも

う一つの玉の存在。
藍色の玉についてを

「はいはい。ご苦労様。」

今となつては廢墟同然のフエントウンにその男 星とテツカニンはいた。

そしてテツカニンには藍色の玉が握られている
あの騒動の中、テツカニンは藍色の玉を盗み出すことに成功していたのだつた。

「んじゃ、依頼も終わったし依頼主の所にも行くこうかね。」

そして彼は藍色の玉と共に空に姿を消した

第18話 「目覚めゝ暴走した者ゝ」 (後書き)

はい久しぶり(かな?)の投稿です!色々あつて書けませんでした。

クロノ「色々つてなんだよ」

いや、この度作者キシは6月15日に誕生日を迎えまして、友人やら家族やらに引っ張りだこで書けなかつたんですよ。

クロノ「軽く誕生日をアピールすんなや」

アカネ「うわゝ。誰かに誉めて欲しいよオーラ出てるよ」

なら、聞くなよ!

今回はもっと早くに投稿出来るように善処いたします

第19話 「??.?」 (前書き)

今回のタイトルは一番最後に書いてみました

第19話 「????」

あれからどれくらい時間が立ったのだろう。
見知らぬ天井に薬品臭い部屋。

クロノが目覚めた場所は病院の一室だった。

左の手足が痛む。案の定包帯が巻かれている。

そして、クロノの脇には彼の右手を握りながら眠っている母がいた。

「ガレス達は……………！」

母の手を解き、自分の腰に手を当てるがボールは無い。それでこそか服装そのものが、入院用の寝間着に変えられていた。慌てて身を起こし、部屋を見回す。

そしてクロノは自分の足元で寝息を立てている11匹の自分のポケモン達を見つけ安心した。

「良かった……………。本当に良かった……………」

彼らの無事な姿を見て思わず、目頭に涙がたまる。

そんなクロノの声を聞き、母も目を覚ました。

「クロノ！目が覚めたのね！待ってて。今みんなに知らせるから。」

そう言い母はナースコールを押し、部屋を出て行った。

そんな母の行動にポケモン達も目を覚まし、クロノに飛びつき安心した表情を見せる。

未だに痛む左腕の痛みを堪え、両手で撫でるクロノ。
安心した。

クロノにとって、いや 트레이ナーにとってポケモンは家族であり兄

弟でもある存在。

そしてクロノにとつてはそれ以上の存在。だからこそ人一倍ポケモン達が大切だった。

「目が覚めたかクロノ。」

病室に入ってきたケルア。

彼の顔を見たときたんにクロノの顔から笑顔が消えた。

それを察してかポケモン達もクロノから離れる

「……助けてくれた事には感謝します。ありがとうございます。ま
した。」

まるで他人のような言い方のクロノ。

しかし、ケルアは顔色一つ変えない。

「親として当然の事をしたままだ。」

クロノの横に座るケルア。

そしてクロノの顔みて話始める。

「今からお前が気絶した後の事と、今までお前に隠していたことを
すべて話す。そしてそのためにお前の12匹のポケモン達にも出席
ねがった。」

そしてケルアが取り出した一つのマスターボール。

その中にはクロノの12体目ポケモンがいる。

今まで一度もバトルに出せなかったポケモン。彼に付けた名前はル
イン。

「最初に話すのは、カイトの事からだ。」

「今更俺に話してどうするきだよ。」

「お前を一人の男として話す。そして、お前は知らなくてはならない。しかし、始めに言っておく。私は今更お前に認めてほしくて話すわけではない。それだけは理解してほしい。」

始めてみた父親の真剣な顔にクロノは圧倒された。

そしてケルアの話は始まった。

クロノの義兄のカイト。

彼の父親はケルアの弟だった。

つまり、クロノとカイトは従兄弟に当たる。

カイトの両親はシンオウを拠点として活躍する特殊警察に身を起き、世界の影に潜む巨悪と戦っていた。

捜査のため度々ケルア達に預けられるカイトだったが、それでもカイトは本当の両親が大好きだった。

しかし、ある巨悪の存在に気がついた彼らはまだ十歳のカイトを残しこの世を去った。

そして、ケルアに向けて彼らはある頼みを言った。

『私達の分までカイトを愛してほしい』

ケルアは弟の最後の頼みを聞き、出来る限りの愛情カイトに注いだ。しかし、それを全うするあまり実の我が子を孤独にしまった。それを知ったのは余りにも遅かった。

「これが、カイトについての秘密だ。」

クロノは無言だった。

「アイツとの約束を守るあまり、お前を孤独にしてしまった。だが、それは言い訳だ。お前が私を許せないならそれでも構わない。私はそれだけのことをしたのだから。」

あれからケルアは後悔していた。それはクロノにも良く分かっていた。

だが、直ぐにわだかまりが無くなるほど人間は器用じゃない

「……その巨悪って、やっぱりマグマ団か？」

「いや。マグマ団やアクア団は最近出来たテロ集団だ。その巨悪はシンオウとカントーを拠点にその勢力を広げている。全貌こそ分からないがマグマやアクアを裏から操っているのは間違いない。」

未だに現実味がわかないが、ケルアの真剣な表情がそれが真実であると物語っていた

「無論カイトもそのことを知っていた。そしてアイツは亡き両親の想いを継ぎその巨悪と戦う事を決めた。それがカイトがポケモンレンジャーになつた理由だ。」

カイトがトレーナーからレンジャーに転職した理由を今知ったクロノ。

あの兄がそんな想いを胸にしていたことに驚くしかなかった

「……なら、なんで葬式にも来なかつたんだよ。」

クロノの指摘にケルアは少し俯いた。

そして重い口を開いた

「カイトの……最後の頼みだったからだ。カイトが病院に運ばれた日に、その巨悪を追ってほしいと頼まれた。それを果たすためにカントーに足を運んだ結果がこれだ。」

漸く知ったケルアの想い。

色々な約束が彼を縛り付け、彼もそれを全うしようとした。

「お前に、優しくしてやれなかったのは私の責任だ。私の実子のお前なら私の気持ちも察してくれると思いついていたが、幼いお前には無理な話だった。家でお前の気持ちを聞いたときそれを痛感したよ。……今まですまなかった。」

そんな話をしているとき、病室に医者と看護師、そして母が戻ってきた。

医者の指示によってポケモンやケルア達は一旦病室を出ることになった。

ケルアが病室から出ようとした時クロノが呼び止めた。

「親父。……過去を変えることは出来ないけど、未来は変えられる。上手くはいかないかもしれないけどさ。」

そのクロノの言葉の意味をケルアは唐突に理解した。

背中を向けたまま聞いたため、クロノの顔は見えないが、息子がどんな顔をしてそれを言ったのかは容易に想像出来たそして無言のまま部屋の外に出た。

「アナタ。お医者様が出てくる前にその顔なおして下さいね。」

妻に指摘されたケルアの顔。

その顔は涙で汚れていた。

「セバスよ。父親になってこんなに嬉しかった事は今までなかった。……」

「左様で御座いますか。ですが、大変なのはこれからですよ旦那様。」

「ああ。分かっている。」

ハンカチで涙を拭き、顔を整えながら言うケルア。
これからクロノとケルアの家族としての関係は大きく変わるのだった。

程なくして医者と呼ばれるケルア達。

そしてクロノの現状を知らされ、それ程大きな怪我では無いことをしり胸をなで下ろした。

その後ケルアは病室に戻りクロノと再び話始めた。

「親……。父さん。ちよつと良いかな？」

慌てて言い直すクロノを見て少し笑うケルア。

そして、今まで通りで良いと告げる

「分かった。話の前にアカネどおしてる？少し顔見たいんだけど。」

アカネの事を聞かれ笑みが消えるケルアとセバス。

「アカネくんから手紙を預かっているが、それはグライードンの話が
終わってからだ。」

ケルアの真剣な表情の前にただ返事をするしかなかったクロノ。
そしてケルアの話が始まる

「ところでクロノ。今何時だと思う？」

ケルアの突拍子もない質問に戸惑うクロノ。

窓の外は明るく日の光が、病室にまで入り込んできている。

日の明るさだけを見れば昼過ぎくらいだと錯覚するほど明るい。

「今は夜の9時過ぎだ。」

「……………はい？」

有り得ない事を言うケルアに対しクロノは思わず変な声を出してしまった。

「煙突山でお前が気を失ってからもう2日たっている。そしてグラードンが目覚めてからハウエンは24時間、日光に照らされている状態だ。」

「で、グラードンは？」

「目覚めたグラードンはキンセツを通り過ぎ、海へ姿を消した。それからの足取りは今搜索中だ。」

グラードンによる被害を聞き、愕然とするクロノ。

しかし幸いに死傷者はいまだにいないのが唯一の救いだっただ。

「アクア団の方は、アジトを突き止めたが、既に破棄されていた。盗まれたカイエン一号と共に姿を消していた。」

グラードンだけでも厄介なのにアクア団も本格的に動き出し、ポケモン協会はその対応に追われていた。

「……クロノ。本題はこれからだ。煙突山でマツブサがお前に言ったのか事を覚えているか？」

煙突山でマツブサに言われたこと。

『お前には生き物の心を操ることが出来る』

俄かに信じがたいがそれが、真実とは思えなかった

「マツブサの言っていたことは真実だが少し違う。それを教えてくれるのがお前の12体目のポケモンだ。それと、外で聞き耳を立てている看護師の女の子だ。」

そう言い、セバスが扉を開けると、赤い髪の看護師がいた。

「さて、役者は揃った。では、話してもらおうか？」

「え？私には何の事だかさっぱりなのですが？」

ケルアのその言葉に困惑する看護師。ケルアは鼻で笑い続けて話す

「いい加減人の真似を止めたらどうだ？ラティアス？」

その名前を聞いたときクロノは驚いた。

そして看護師は舌を出し悪戯っぽい笑みを浮かべた

「あちゃ〜。バレちゃった。まあ直ぐにバラすつもりだったし良いか。」

そう言い看護師が光に包まれる。
光は直ぐに消え、看護師がいた場所には伝説のポケモン ラティア
スがいた。

「さて、クロノ。そのマスターボールの中のポケモンを出してくれ。」

クロノは言われるままマスターボールを宙に投げる。

そして出てきたポケモンは、ラティアスの対となる伝説のポケモン
ラティオスが姿を現す。

「クロノ。お久しぶりです」

久しぶりに合うクロノにラティオスは一礼する

「んじゃ、アンタの力についての話そうか。」

ラティアスの言葉に頷くケルア。

クロノもそれを真剣に聞く

「クロノ。アナタの持つ力は、正確には心を変える力なのです。」

ラティオスの言葉に眉を狭めるクロノ。

「イマイチ、ピンと来ないみたいだから分かりやすく説明するね。

つまり、あんたは紅茶を飲みたがっている人の心を替えて緑茶を飲
ませたくする事ができるのよ。」

「すまん。もつとややこしくなった。」

ラティオスの説明でクロノの混乱は更に増した。
ラティオスの説明である程度は理解したがやはりピンと来ない。頬を膨らませ起こるラティオス
それに対しラティオスが補足する

「つまり、アナタの力を使えば、どんな優しく人でも忽ち凶暴化させることが出来るのです。また、逆も可能ですし、人を嫌悪しているポケモンの心を替えて人に従順にすることも可能です。」

ラティオスの説明で漸く全てを理解した。

なぜそんな力が宿ったかはラティオス達にも分からないが、今のクロノにはそんな事はどうでも良かった。

「つまり、マツブサ達はその力でグライドンの心を操って自分達の意のままに操りたかった訳か。」

「おそらくは」

クロノの疑問に肯定するラティオス。

しかし、クロノは新しい疑問が浮かんだ

「なあ、この力って無意識に発動する事って有るのか？」

ラティオスに問うクロノ

「確証は有りませんが、発動した事も有ったと思います。」

それを聞くとクロノは複雑な表情をした。そんなクロノにケルアは

言う

「今のお前の疑問。差し詰め、お前のポケモン達の心を操ってしまったのではないか。だろ？」

小さく頷くクロノ。

無意識の内に自分のポケモン達の心を操って、旅をしていたのではないのか。

それが今のクロノの疑問だった。

そんなクロノを見つめる彼のポケモン達

「……色々な事を聞いて頭が混乱しているだろう。今日は少し休みなさい。」

そう言いケルア達は病室を出て行った。

テーブルに手紙を残し。

クロノはその手紙を取り目を通す。

中にはアカンがクロノに宛てた手紙が入っていた

クロノへ

この手紙を読んでいるときには私はそこにはいないと思います。

あなたは煙突山であなたの気持ちを裏切った私を許してくれた。私にとってそれはスゴく嬉しかった。そんな私の為に傷ついたあなた見て、私は私のやったことの重大さに気づきました。だから私は自分のやったことのケジメをつけに行きます。

恐らく私はもうあなたの前には現れることはないと思います。私のせいであなたが傷つくのはもう見たくありません。

さようなら
アカネ

所々涙で霞んだ手紙を読みアカネの想いを知るクロノ。

「あの馬鹿……！何一人で決めてるんだよ……！」

アカネの決意に怒るクロノ。

そして、力一杯ベッドを殴りつける。

有り得ない程の光が半壊したキンセツシティを照らす。

そんな廃業の中をアカネは走っていた。

息を切らし、ただ闇雲に足を運んでいた。

今は目的地は無かった。

ただ、彼から離れたかった。

瓦礫に躓き、その身は地面に打ち付けられた。

その目に涙が浮かんでいた。

倒れたために流している訳ではない。

「クロノ……ごめんね。」

誰にも聞こえない声で、そこにはいない彼に対してアカネはただ謝るしか出来なかった。

第19話 「別れ〜想い別れるとき〜」

END O

第19話 「????」(後書き)

今回はクロノの12体目ポケモンを急に出しました！

他のポケモン涙目！

えー近々出す予定ですのでご期待ください。

お後が悪いです但し今回はこれで

第20話 「心〱移り変わるのが心なり〱」 (前書き)

今回も繋ぎなお話ですいません。 いや、本当に

第20話 「心〴〵移り変わるのが心なり〴〵」

グラードンが目覚めて早二日。

ホウエンを24時間照らす日光で体調不良を訴える人も出てきており、病院は何時になく忙しかった。

そんな病院の屋上で体を動かすクロノ。

自分の知らなかった力を知り、戸惑い、自分のポケモン達へ疑心を抱いてしまった。

体を動かしていないと落ち着かない。

（本当のアイツらの気持ち……）

心を変える力

その力の恐ろしさをラティオスから知らされた。

この力は自覚症状が無い。術者にも対象にも。

言うなれば、対象は心変わりをしただけのような感覚ですむ。

つまり、ただ何となく考え方を変えただけ。

それだけの事だ。だからこそ厄介極まりない。

「クソ……!!」

虚空を切るクロノの蹴り。

一人苛立つクロノ。

未だに左の手足が痛み、更に苛立たせる。医者の話では、軽くヒビが入っていて、全治二週間程度ですむようだ。

アカネも一人でケジメを付けに行き、行方が分からない。

クリアスもアレから消息が不明。

今すぐにも二人を探しに行きたいが、ポケモンに対する疑心からそれを妨げる。

再び虚空を切るクロノの蹴り。

そんなクロノを入り口からただ見ているだけのセバス。そして人に化けているラティース。

「荒れてるねえ。手足痛くないの？」

「痛いさ。でも体動かしてないと落ち着かない。」

ラティースの問いに体を動かしながら答えるクロノ。

「そんなに気になるの？ポケモン達の心を変えたかもしれない事か？」

そう言われるとクロノは止まり、答える。

「気になるのさ。今まで一緒に旅をした仲間なんだから。……
本当は俺なんかと旅するのがイヤだったかも知れないんだぞ？」

「ふーん……」

クロノの答えにやる気が無さそうに答えるラティース。

そしてセバスが漸く口を開く

「坊ちやま。僭越ながら意見させていただきます。……恐らく坊ちやまの力で心を変えられたポケモンはいたと思います。ですが、それは旅をする切っ掛けではなかったのではないのでしょうか？」

「切っ掛け……」

ただ、セバスの話を聞くクロノ。

「確かに切っ掛けは、その力によるものでしょう。ですが、坊ちゃまとポケモン達が旅をして、その課程で得た気持ちは嘘偽りの無い、本当の気持ちだと思います。」

旅をして得た気持ち。

そしてクロノは、ポケモン達と旅をした時の事を思い出す。

そこには、裏偽りの無い笑顔が有った。

一緒に山を超え、見知らぬトレーナーと戦い、その中でイヤな事も、楽しかった事も有った。

だからこそ、ポケモン達と今まで一緒にここまで来れたのだった。それを思い出したクロノは、空を仰ぎ笑い出す。

「何柄にもなく悩んでんだか。バカみたいだな俺。」

そしてセバスはクロノにポケモンの入ったボールを手渡す。

そしてクロノはボールに入った全てのポケモンを外に出した。

「悪かった。俺、お前達のこと少し疑った。でも、もう迷わないわ。俺はお前達を信じてるから。」

クロノの答えを聞き、頷くポケモン達。

「ああーあ、暑苦しい。私こういうの好きじゃない。お兄ちゃんもなんで、こんなのについて行くかなあ?」

ラティアスのぼやきを聞いたラティオス。

そしてクロノはラティオスに聞く。

「そう言えば、お前はなんで俺についてくるんだ？何時でも逃げられたら？」

クロノの問いにラティオスは答える

「アナタの、その心に惹かれたからですよ。それにアナタは忘れてしまったようですが、アナタは私を助けてくれました。その恩返しも予てですよ。」

ラティオスの言う助けた事は、少なからず今のクロノには無かった。そんな会話をしていると、ケルアが屋上に上がってきた。

「ここにいたか。クロノ、今から重大な話をする。お前も来てくれ。」

頷きセバスについて行けクロノ。

しかし、クロノの心には未だに迷いが有った。

アカネとクリアス

二人と別れてから、彼の心は常に揺らいでいた。

海上をジールランスに跨り泳ぐアカネ。

手にした発信機を頼りに、目指すはその場所に彼女は向かっていた。

「クリアスだけは、連れて行くからね。」

そう呟くアカネ。今は離れた、想い人に対して自身の決意と、犯してしまった罪を償うために。

ホウエンの遙か上空にその影はいた。

そしてその影に近づくと、七色の羽を持つもの。

「何時まで、茶番を続けるつもりだ？ グラードンが人の手で暴れているぞ。」

腕を組み、横目でそれを見る影。

「今暫くは黙して待つ。グラードン達には悪いが、特異点や人の光を試す良い機会だ。それから我も動く。」

「ふん……。呑気なものだ。しかし、人の手に負えなくなったら、有無言わず我が止めるぞ。」

「好きにしる……。」

そして七色の羽と影はその場から姿を消した

第20話 「心〱移り変わるのが心なり〱」 (後書き)

ぱっぱかぱーん！祝20話！

いやまさかの20話です。

クロノ「意外と早くに20話になったな？」

ぶつちやけあんまり、読む人いなかったら途中で投げるつもりだったから、かなり嬉しいね。

クロノ「俺達を闇に葬るつもりかよ!」

いや、でもここまで来れたのも読者様のお陰だし、感謝しなきゃ？

クロノ「まあな」

まだまだ、未熟な私ですが、これからも〱愛読何卒宜しくお願いします

第21話 A 「蟠り〜思いはなにも代え難きもの〜」 (前書き)

今回は、AとBという同じ時間軸でお話を作りました。

第21話 A 「蟠り〜思いはなにも代え難きもの〜」

ケルアに連れられクロノは、病院の会議室にきた。

会議室には、ジムリーダーと四天王。そして現チャンピオンのダイゴが椅子に腰をかけていた。

「よ、発狂小僧。」

そう言い、右手を上げ挨拶するトウキ。さらにテッセンも軽く手を上げる。

そしてクロノは、空席が有るのに気がつく。

ヒワマキシテイのナギ。

ルネシティのミクリ。

トクサネシティのフウとラン。

この4人の席が空いていた。

そしてクロノもケルアに進められるがまま、椅子に腰を掛ける。

「さて、諸君も知つての通りマグマ団によつて、超古代ポケモン、グラードンが目覚めハウエンは異常気象に見舞われている。」

「すみません……………。僕の力が及ばなかったばかりに……………」

拳に力を入れるダイゴ。

「いや。君だけの責任ではない。何より、君もお父上が心配だろ。」

つい先日、ダイゴの父はアクア団に襲われ、現在は入院中の身であ

った。

「話を戻そう。目覚めたグライドンは、現在行方しれずで、グライドンを目覚めさせたマグマ団の幹部達も逃走中だ。しかし、今現在なりを潜めているアクア団の脅威もある。よって、我々ポケモン教会もこれらに対抗するために、二つのグループに別れこれに対処していく。」

「だよなあ。それしか無いよな。」

机に足を乗せ話す四天王のカゲツ。

そして、隣に座るプリムにその足を叩かれ、足を下ろす。

「グループ分けの前に、全員に話しておきたいことがある。私の息子、クロノもそのグループの中。対アクア、マグマ団の戦力に加える。」

それを聞くと、そこにいる全ての人間が驚いた。取り分け、フエンタウンのアスナは立ち上がり、その意見に反対した。

「私は反対です！たしかにマグマ団はもう彼を必要としていないかもしれませんが、アクア団は未だに彼を狙っています！そんな彼を前線に出すことは高いデメリットを持っています！」

アスナの言う事は最もだった。未だにクロノはアクア団に狙われていた。グライドンの処理に回っても、アクア団を対処するチームに入ろうとも、前線に出れば、アクア団に狙われる可能性が出てくる。

「……それが本音では有るまい？」

ケルアの指摘に少し身構えるアスナ。
そして、ツツジが続けて話す。

「アスナさんは、お祖父様が守ったフエンを壊す切欠を作ったクロノさんとは戦えないと、仰りたいのです。しかし、私もクロノさんを前線に出すことは反対です。デメリットが高すぎます。」

何人かが、その意見に頷く。

「アスナ。それが君の本意か？」

ケルアの問いに、無言で頷くアスナ。

「すみません……俺のせいで……」

アスナに謝るクロノ。そんなクロノを睨むアスナ。

「他の人はどう思う？」

「俺は別に構わないぜ？強い奴が戦力に加われば、作戦が成功しやすくなるしな。」

クロノを見て話すトウキ。

拳を交えた者同士だからこそ、クロノの力を良く知っている。

「確かに、小僧は強い。そして戦力に加われば、作戦の成功率は上がる。しかし、同時にデメリットが増えるのも事実だ。」

腕を組み話すテッセン。クロノの強さを認めているが、同時に彼の身の安全をも考えていた。

「しかし、クロノくんがここにいるも狙われる可能性はあります。ならば、我々でクロノくんをサポートしながら戦えば安全も確保出来ると思います。」

そうセンリが言うと、テッセンが悩み始める。

「……分かった。しかし、小僧はグラードンの対処側に回ってもらうぞ。アクア団側なら、危険度が増すからな。」

テッセンがクロノの作戦参加に同意したが、やはりアスナは良しとしなかった。

「テッセンさん！？本気ですか？キンセツだって、そいつのせいで甚大な被害を……」

「アスナ！いい加減にせんか！フエンを壊したのはクロノではない！小僧もグラードンも被害者なんだぞ！それが分からないお前ではあるまい！」

テッセンに怒鳴られ、部屋から飛び出すアスナ。

「……彼女も分かっていると思いますよ。ただ、誰かに責任を押しつけないといられないんですよ。」

ダイゴがアスナのいた席に視線を送り話す。

「と言うわけだ。分かったなクロノ。」

「なんで、俺をメンバーに入れたんだよ？」

「こうでもしないと、お前は飛び出していくだろう？ならば、目の届く範囲で暴れてもらった方が助けやすい。」

そしてケルアは足元からクロノが隠れて用意していた、道具や服を目の前に置いた。

それを見たクロノは顔を押しさえ天井を向く。

その後の会議は直ぐに終わり、ジムリーダー達は各々作戦の準備に取りかかった。

クロノはその足で、レントゲン写真を取りに行き、再び屋上で結果を待っていた。

しかし、屋上には先客がいた。

先ほど会議室から飛び出したアスナだった。

「……………やっぱりアンタも作戦に参加するんだろ？」

背中を見せたまま、背後に立つクロノに言うアスナ。

クロノもそれに一言返事を返す手摺りを握るアスナの手に力が入る。

「……………フエンは、お祖父ちゃんが温泉しか無かった場所を、1から作った町だった。歴史なんて言えるものなんて無いけど、みんなで頑張った時間はどんな長い歴史にも負けないって私は思ってる。だけど、そんな時間は1日で消えたよ、アイツらのせいで……………。アンタをおびき寄せる為だけに。」

アスナの思いを無言で聞くクロノ。
何も言えない。フエンが襲われたのは他でもない自分のせいなのだから。

「……………すいません。俺のせいです。俺の力のせい……………」

」

俯き謝罪するクロノ。

そしてアスナはクロノの方を向き話す

「……言い訳はしないんだ。理不尽な私に怒られてるのに。何の弁解もしないの？」

「俺が原因で起きたことです。言い訳はしません。アスナさんの怒りは最もだと思いますよ。」

アスナの顔を真っ直ぐ見るクロノ。そしてアスナもクロノから目を離さなかった。

「分かった。でも、私はアナタを許さない、マグマ団を捕まえるまでは。」

アスナの言葉を聞き、漸く二人に笑顔が浮かぶ

「あと、アナタの実力が知りたい。少し手合わせ願うわ！」

「良いですよ！」

更に距離を取る二人。

「初めから全力で行くわ！コータス！」

アスナは、自身のエースのコータスを、そしてクロノは

「なら俺は！ガウエイン！」

高く投げられたボールから、出てきたのは、ルカリオのガウエイン。クロノの中では、最も遠距離戦を得意としてポケモンで、ガレスに負けない忠誠心を持っている。

睨み合う二匹。そして最初に動いたのはアスナだった。

「火炎放射！」

「波導弾！」

コートスの火炎放射に波導弾で応戦するガウエイン。しかし、その火炎放射は困だった。

「そのまま、高速スピーン！」

巨大な炎の竜巻になるコートス。

波導弾は儚く消え、そして炎の竜巻はガウエインを飲み込む。炎によるダメージだけでなく、高速スピーンによる物理的ダメージも重なり、更にはタイプ相性による三つのダメージがガウエインの体力を奪っていく。

「勝負在りかな？」

勝ち誇るアスナ。

目の前のクロノに目を向けるが、そこにはあのクロノが居た。不適な笑みを浮かべ、狂喜した彼が。

「勝ち誇るのはまだ早えよ！ガウエイン！飛べ！」

クロノの指示により、地面に波導弾を打ち、爆風を利用し攻撃の射程外に飛ぶガウエイン。

「それで逃げたつもり？射程内に入ったら、火炎放射で追撃よ？」

「誰がそんなことさせるかよ！ガウエイン！」

そして上空にいるガウエインは二種類の波導を交互に打ち出す。波導弾と水の波導。

波導弾が先に出た水の波導を打ち、爆裂した水の波導は屋上に雨を降らせる。更には波導同士がぶつかる事で爆風が視界を奪う。

目標が見えなければ攻撃できない。

そして、ポケモンが見えなければトレーナーは指示が出せない。

「コータス！上空に火炎放射！」

アスナの指示に従いコータスは上空に火炎放射を放ったが、そこにガウエインはいない。

既にガウエインの得意とする射程にコータスは捕らえられていた。

そしてアスナがそれに気がつくのは少し遅かった。

「食らって寝てる。」

クロノの言葉を耳にした時、既にガウエインは波導弾を放っていた。そして波導弾はコータスに吸い込まれるように当たり、コータスを吹き飛ばす。

アスナの足元まで飛ばされたコータス。

そんなコータスをボールに戻し、アスナはコータスに感謝の言葉をかける。

そして、クロノに近づいて行く。
戦いが終わり、クロノの狂喜も落ち着き、普段のクロノに戻っていた。

「やっぱり強いわね。テッセンさんの言うとおりだった。」

「アスナさんも強かったですよ。少し指示が遅かったら負けてました。」

ガウエインをボールに戻し、クロノもアスナに言う。

「なら、これを渡すには十分ね。」

クロノに差し出した手の中にはヒートバッジがあった。

「私がアナタの強さを認めた証よ。」

クロノの手を取り、ヒートバッジを渡すアスナ。
クロノもそれを受け取った。

「有難う御座います。」

「そのかわり、絶対マグマ団とアクア団を倒しましょう。」

そして今度は、仲間として二人は固い握手を交わした。

そんな時、ハウエンを包む地鳴りと共に、空を覆う厚い雲。そして打ちつける大粒の雨。

この時すでに、クロノ達は最悪の状況下に置かれていた……

第21話 A 「蟠り〜思いはなにも代え難きもの〜」(後書き)

ゲーム中でもアスナはお祖父ちゃんっ子だったので、それが何故なのかをベースに性格やフエンの出来た理由を書いてみました。

クロノ 「なんか意味有るのか？」

いや？特には無いけど、考えてたら何か番外編が出来そうだから番外編を書くつもり。

クロノ 「マジかよ。後七体目、実質八体目か？のポケモン出たな。」

ああ、ルカリオのガウエインね。本当に漸くだよ。先に番外編で出す予定だったのにこんな後になっちゃって。

クロノ 「ったく。計画的に行こうぜ？」

あと久々に裏クロノも出たね。

クロノ 「ジム戦は毎回出てきそうだな・・・」

裏クロノ 「おいおい。そう邪険に扱うなって。」

クロノ 「また来たよ」

では。今回はこれで。

ではまた次回

第21話 B（前書き）

からり遅めの投稿お待たせいたしました。

第21話 B

私好きな人がいました。

うん、過去形……

私、その人の気持ちを裏切ったの

あの人は、それを笑って許してくれた……でも……
私は……もうあの人の隣には居られないなあ。

あああ。やり直せば良いのになあ。

そしたら、うんとお洒落して、アルトマーレやラルース辺りでデートして。

でも、無理だよな。もう一回なんて……

本当、あああ……

第21話 B

「私、あの人の為に」

海底遺跡

誰も足を踏み入れたことのない未開の遺跡。

最近になり発見され、調査を勧められていたが、何故か調査は打ち切りとなってしまう。

そんな遺跡の中、アカネは身を隠していた。

幸い遺跡内には酸素が有るため、酸素ボンベ等を必要。

そのため身を隠すのに困ることはなかった。

しかし、アカネが潜水艇無しに、ここに来られたのは、彼女のジーランスの力によるものだった。ジーランスは深海に生息し、滅多に人の前には姿を見せないポケモンだ。そしてジーランスには水を操

る力があり、アカネはその力に守られながらこの遺跡に来た。そして、少し広くなっている、遺跡内の一室。その中を見るために、手鏡で様子を伺う。

部屋の中には三人のアクア団。

部屋の奥には、さらに先に進む道があった。

そしてアカネは二つのモンスターボールから、ラフレシアとピジヨットを出す。

「ラフレシアは眠り粉を。ピジヨットはゆっくり羽ばたいて。」

二匹は指示に従い、部屋の中に眠り粉を充満させた。

そしてアカネの作戦通りに、アクア団は全て眠りについた。そして、アカネは遺跡の奥に駆けていく。そして、たどり着いた一際大きな広場。

アカネは部屋の外から中を伺う。

中にはアクア団の幹部とその首領が居た。そしてアカネは首領を見た時驚愕した。

アクア団の幹部ーアオギリ

その名を知らない人はまず居ない。なぜなら、アオギリはハウエン自然保護協会の会長であり、設立者だからだ。

これでアクア団が潜水艇の存在をいち早く知ることが出来た理由が分かった。

アオギリとクスノキ館長は知り合いである。そして、自然保護協会は海底探索を積極的に行っていた。

「この先に、私達の祈願を叶えてくれるポケモンが居るのですね。」

アオギリが横にいる二人の幹部に対し話す。

一人はあの時、クロノを狙って来た女幹部。もう一人はまだ見たことのない幹部だった。

「ええ。ですが、先に子鼠を退治しましょう。ねえ、クリアス？」

そして、アカネは背後より殺気を感じ、瞬時にその場を離れた。案の定、アカネの居た場所が強烈な水圧に襲われる。

「あらあら？あの時の女の子でしたか。」

幹部の女がわざとらしく口を抑え、驚いたふりをする。

そして、背後からクリアスが近づいてくる。

「……まさか、この様な形で再会する事になるとは。とても残念です。」

「私もよ。クリアス」

クリアスを睨みつけるアカネ。

「クリアス。後は任せましたよ？」

アオギリがクリアスにそう告げるとクリアスは頷く。

そして、アオギリ達は更に奥に歩いていく。

アカネはそれを追うが、クリアスがそれを阻止する。そして奥に続く道を背にして道を塞ぐ。

「先に行きたければ、私を倒してからにしてください。」

鋭い眼光をアカネに向け、威嚇する。

アカネも立ち上がり、クリアスを見る。そして、ボールから相棒のビレッジを出す。

クリアスもエンペルトを呼び臨戦態勢をとる。

「戦う前に教えて。なんでカナシダトンネルでクロノを守ったの？」
何もない岩肌の天井を見るクリアス。

「……あの時は、本気で彼を守ろうと思いました。同じ組織の仲間を裏切つてでも。彼は、私を唯一友と呼んでくれた。」

「なら、なんでクロノの敵になるの！？そこまでクロノを思っているなら！」

クリアスの考えを聞き、アカネが怒鳴る。

「……私には、上に五人の兄弟がいました。家柄的に上の兄達は大切にされていましたが、私は違いました。まるで厄介者扱い。そんな家に嫌気がさして家を飛び出しました。そして、路頭に迷っていた私を助けてくれたのがアクア団の仲間でした。アクア団の皆さんは私に優しくしてくれた。そこが私の初めての居場所でした。だから、どんな汚いことも仲間の為ならと、耐えられた。しかし、クロノは少し違かった。彼は出会って間もない私を全てを受け入れてくれた。必要としてくれた。ですが、アクア団の仲間も裏切れなかった……」

アカネを見るクリアス。迷いがあるが、未だに臨戦態勢を解かない。

「……なら、クリアスは間違っているよ。本当に仲間を思うなら、こんな事をさせちゃダメだよ。間違っている事をしようとしているなら、止めるのが本当の仲間でしょ。」

アカネの説得に、クリアスは悩む。
クロノは初めての友。

アクア団の仲間は家族。

どちらもクリアスにとって大切な人達だった。

「……大切な人達だからこそ……。アオギリ達はカイ
オーガを使って、人を消すつもりです。急ぎましょう。」

クリアスの出した答え。

それはアクア団を止めるの事。それが、彼の出した道だった。

「また、私たちを裏切るのですか？」

奥からあの女の声が聞こえてくる。
そしてその姿を見せた。

「シズク姉さん……。」

「クリアス。あなただっただけ分かってるはず。自然とポケモン
を守る道はこれしか残って無いことを。」

シズクと呼ばれるアクア団の女幹部。

そしてクリアスがシズクに告げる

「たしかに分かっています。ですが、今までは話し合いで解決して
きたのに、なぜ急にカイオーガに頼るのですか？最近の首相の行動
には不可解な事が多すぎます。」

「それでも！あの方は私達を助けてくれた！ならば、どんな事をし

でもそのご恩を返したい！アナタだってそれは分かっているはずで
す！」

感情を爆発させるシズク。

クリアスはそれをただ黙って聞いた。

「恩義は返したい。しかし、アオギリさんには、あの時のように戻
って欲しい。そのためなら、私はみんなと戦います！」

クリアスは自身の思いの全てをシズクにぶつけた。

シズクも黙ってそれを聞いた。

「……どうあっても平行線ですね。ならば、私もあの人を守
るためにアナタと戦います！」

モンスターボールを取り構えるシズク。

しかし、その刹那。

激しい地鳴りが部屋を覆う。

「まさか、カイオーガ!?」

アカネが地鳴りの原因を口にすると、シズクが笑う

「少し遅かったみたいですね。カイオーガは目覚めました。私達の
目指したシナリオ通りに。」

そして部屋がその形を維持できなくなり天井が崩れ始める。

そしてクリアスは咄嗟に一つのモンスターボールをアカネに向かっ
て投げる。

「クリアス！何これ！」

「私のホエルコです。必ず必要なる時がきます！それとアオギリ達の最終目的は第三の超古代ポケ……」

クリアスが全てを言い終える前に、二人の間に天井の残骸が壁となる

「クリアス！大丈夫!？」

壁の向こうにいるクリアスにアカネは叫ぶ。

「空……しら!……アオ……います!」

壁の向こうから微かに聞こえるクリアスの声。

そして、アカネのいる部屋に海水が浸水を始めた。

アカネは悔しさをかみ殺し、入り口に向かって走り始めた。

すでに至る所に海水が入り込み始めた、この遺跡も長くは保たないことは明白だった。

そしてアカネはジーランスに掴まり、崩壊していく海底遺跡を離れていく。

海面に顔を出すと、そこには激しく打ちつける雨が空を覆っていた。しかし、部分的に空は晴れており激しい日光が顔を覗かせていた。

「おやおや？こんな時には海水浴かい？元気だねえ。」

アカネのすぐ横の海面に立つ星。

こんな天変地異にも驚いているが、そんな星にも驚きを隠せなかった。

しかし、この星のトリックは簡単だった。

アカネを巻き込み浮上するホエルコ。星はただホエルコの背中

に立っていただけだった。

「星さん！？なんで？」

「なァーに。ただの散歩よ。それに超古代ポケモンを拝む良いチャンスじゃん。」

こんな時もマイペースさを崩さない星。
そしてアカネは星にある依頼を頼んだ

「……星さん。何でも屋として依頼をお願いします。クロノに伝言をお願いします。」

「良いけど、君はどうするの？」

「私は、カイオーガ達を止めに行きます。」

「……なァ、一つ質問な。なんでそんなに頑張るのよ？別にポケモン協会に任せても良くない？」

星の質問に何の迷いもなく答えるアカネ。

「クロノやみんなを守りたいからです。」

アカネの真っ直ぐな答えを聞き星は少し笑った。

「成る程ね。分かったよ。クロノに合ったら伝言伝えておくわ。後、これ持ってきな。」

そういつてアカネに三個の飴玉を渡す星。勿論ただの飴玉ではない。ポケモンの成長を促す『不思議の飴』だった。
そして星は、ボールからビブラーバを出す。

「あと、俺様から一つ。最初にホエルオー、最後にジーランス。覚えときな。」

星はそれだけ言うと、ホエルオーを戻し、ビブラーバとともに空に消えていった。

そして、アカネもカイオーガ達の向かった場所にジーランスと共に向かっていった

第21話 B（後書き）

え〜只今私キシは椅子に縛り付けられています。

クロノ「では尋問タイム！」

アカネ「イエーイ！」

作者尋問して楽しいか？

クロノ「（無視）んじゃ、なんで遅れたかった話せや」

ガレキ作ってた

アカネ「ガレキ？何それ」

ガレージキットの訳。プラモみたいにはめ込んで作るんじゃなくて、パテとか使って作る上級者向けの物。主に人とかの造形が主流。

クロノ「ほお〜そんな物を作ってた遅れたのか？」

でも、君たちを作ってたんだよ？1から

クロノ&アカネ「!?!」

いや、キャラの図面が引き終わったから君達を作ってみたくなくなったから作ってた。

クロノ「なんだと……」

アカネ「ウソ……」

いやいや。こんな状況下でウソなんて言ったら瞬獄殺だろ？

クロノ「まじかよ！」

アカネ「本当に本当？」

今はないけどクリアスも作ってるよ。

クロノ「なら、楽屋にいるクリアスにも教えに行こうぜ！」

アカネ「うん！」

あれー？放置ですかぁー？
解け

では今回はコレで。

あと、楽屋ってなんだよ

第22話 「真実、我胸に決意の火が灯る」 (前書き)

最近、めっきり投稿ペースが落ちています。ぶっちゃけ、ネタに詰まってきました。

第22話 「真実く我胸に決意の火が灯るく」

ホウエンを襲う異常気象はさらに増していた。

土砂降りの雨が降ったと思えば、夏を思わせる日光が照らしつける。その異常気象が意味するものを病室にいるクロノ達は理解していた。彼らにとって最悪のシナリオ。

2体の超古代ポケモンが目覚めたことを意味していた。巨悪の存在を知りながら、ポケモン協会の行動は全て後手に回っていた。

総指揮をしていたケルアは、自分の無能さを悔やみながら、現状の打開策をダイゴや四天王達と話していた。

ジムリーダー達は、一足早く超古代ポケモンが向かっていると思われる場所、ルネシティに向かっていた。

ルネシティ。

巨大なクレーター内にある町で、外部との関わりをあまり持たない町で、入るためには上空か海底から入るしか方法がない。

そしてこの町に伝わる口伝では、超古代ポケモン達はここで戦い、そして二つの玉を生み出したと言われている。

ゆえに、ルネシティには超古代ポケモンを奉っている祠が存在する。そしてホウエンを襲う異常気象もルネシティを中心に広がっていた。そんな中、クロノは動けない自分をただ呪っていた。

ジムリーダー達と一緒に行くこととしたが、完治していなければ足手まといと言われ、病院に残された。

「クソ……！こんな時には役立たずかよ！」

窓の外のホウエンを見て嘆くクロノ。

なにも出来ない自分に嫌気が差す。
いざとなれば、勝手に出て行けば済む話だが、病室にはセバスと母親がいるため、出ていけない。出て行こうとすれば、間違いなく止められてしまう。

「坊ちやま。お気持ちは察しますが、全快ではない坊ちやまではかえって足手まといです。ここは我慢を。」

クロノの気持ちを察して声をかけるセバス。

それは分かっていた。自分一人が加勢したところで、この状況は打開しないことも。

それでも力になりたい……

間接的にもこの事件に関わっている自分が何も出来ない事が悔しかった

そんな時、病室にケルアが入ってきた。

「今後の打開策が決まった。まず、マグマ、アクア団の首謀者の身柄を確保する事を第一目的とした。幸い両首謀者の顔は解っているから、逃げ隠れは難しいだろう。」

ケルア達は両首謀者を捕まえ、この二匹の暴走を止めさせることがもつとも確実と考えた。しかし、肝心の首謀者の居場所が解らなければ捕まえようがない。

しかし、目星は付いていた。首謀者二人はルネシティにその身を隠している。ケルア達は考えていた。仮に今はルネに居なくとも、必ずカイオーガ達を求めルネに現れる。

だから、ケルアはジムリーダー達をルネに向かわせた。

「しかし、こんな時に自然保護協会の会長アオギリ氏と連絡が付かない。いざとなれば協力を願ったのだが。」

「そりゃー無理な話だわ。そいつがアクア団のボスなんだから。」

ケルアの疑問に対し、いつの間にか現れた星が答えた。

その場にいた全ての全ての人が驚いたが、セバスはすぐに我に返る。

「その御仁。ノックも無しに病室に入るのはマナーに反しますぞ。」

「いやー、生まれが貧相なもんで高貴なマナーは存じ上げなかったわ。でもー、おいつちゃん。依頼でココに来たんだから大目に見てよ。」

そう言い、クロノを見る星。

クロノも、それを言われ自分を指指す。

「そう。可愛い愛しのガールフレンドからのラブレターよ。「アクア、マグマの最終目的は第3の超古代ポケモン―レックウザ。私はカイオーガ達を止めるから、貴方はレックウザをお願い。」だって。」

星のメッセージを聞きアカネが無事だということを知る。そして、アカネが自分を頼ってきた事に少し嬉しく思えてしまった。

「んじゃ、お仕事終わったからおいつちゃん帰るわ。」

そう言い、部屋を出ようと星。しかし、ケルアが彼の肩を掴み出て行く事を阻止した。

「そう急いで帰らないでくれ。君にはまだ聞きたいことが有るのだ」

から。……さっき言った「アクア団の首相がアオギリ」と言うのはどういう事かな？こちらが確認していた情報と聊か食い違いが有る様だが？」

「報酬しただね。おいつちゃんもこれでお飯食べていますから。」
そう星に言われて、ケルアは一枚の小切手の上で筆を走らせる。そして星に見せ、星はそれで了承したようで、渡された小切手を袖の中に入れる。

「毎度あり。……まあ、なんだ。御宅らポケモン協会はいつらに一杯食わされた訳よ。表ではマグマ団がわざと目立つ行動をして、アクア団は善人を装って色々調べる。カイオーガ達を調べるなら、自然保護委員が動きやすかったんだろうね。で、協会が唾つけた奴はアオギリの影武者ね。」

星の情報を聞き、我耳を疑うケルア。そして星に対して口を開く

「……その情報からだ、アクア団とマグマ団は繋がっているように聞こえるが？」

「その通りよ。二つの組織は元々は一つの組織で、計画の遂行するためにあえて二つに分けた訳。で、その時からアオギリは影武者を立てて、自分は水面下で確実に計画を進めていた。お分かり？」

「……とんだペテン師だな。今まで気が付かなかった。で、君はなぜそこまで奴らに詳しいのだね？」

「企業秘密だね。」

ケルアの指摘を、鼻であしらい部屋の外に出て行く。

今まで知らなかった真実を知り、ケルアは必死に感情と戦っていた。何を隠そう、ケルアは人にだまされる事を一番嫌いとしている。そのため、今まで自分をだましていたアオギリを今すぐにも殴りに行きたい心境だった。

「セバス。今すぐ各リーダー達に連絡を入れ、何人かを空の柱に向かわせてくれ。」

「親父！ちよつと待ってくれ！」

ケルアの指示を打ち消すようにクロノが声を上げる。

「空の柱には……俺が行く。」

「……何故だ。」

「アカネだけでカイオーガとグラードンは止められない。戦力の分散は危険だ。なら、今自由な俺が行くのが、戦力を分散せずに済む。」

クロノの提案を黙って聞くケルア。

「……理由はそれだけではあるまい。あの時の彼女の頼みだからか？」

クロノの確信を突くケルア。どんなにそれらしい理由を付けてもケルアにはお見通しだった。

「……あいつは俺を信じて、レックウザを任せただ。あいつ

も命を張ってるんだ。俺もそれに答えるべきだ。」

「ふざけるな……。まだ子供のお前が軽々しく命を懸けるとかほざくな！」

クロノの決意を否定するようにケルアが怒鳴る。しかし、それが彼がクロノを大切に思うからの事だった。

「ルネに向かっているお前の彼女もこちらで保護する。こんな危険な事にお前達子供が出てくるな。これは大人の問題だ。」

「ふざけてるのは親父のほうだ！何が子供だからだ！何が大人の問題だ！好きな人の頼みを叶えたいと思って何が悪い！あいつ一人が命をかけて俺一人が親父守られている。あいつには守ってやる奴が必要なんだ！俺にとっての親父のように！」

揺ぎ無い決意を瞳に宿しケルアを見るクロノ。

「……お前の決意は分かった。しかし、だめだ。お前を心配している者の事も考えてくれ。」

「……分かった。なら勝手にさせてもらおう。」

そう言いクロノはケルアの横を通り過ぎ、ドアノブに手を掛けた。

「……待て。お前は仮にもウィルアス家の者だ。あまり見苦しい格好は私が許さん。……彼女を助けに行くならなおのこと。」

「

そう背中越しにケルアの言葉を聴き驚くクロノ。そして、背中に当たる布の感触。

そして振り向くクロノにケルアは新しい衣服を渡す。

今まで黒と赤を基調とした服とは変わり、白と赤を基調とした新しい服。クロノにとってあの服の黒は、意地と決別を意味していた。

旅立つときクロノはそう誓った。しかし、この服の白は、信頼と決意の意味が込められているように思えた。

そして、クロノの肩を掴み、ケルアは言った

「私も必ず助けに行く。だから、お前も必ず戻って来い。」

「分かってる！」

そして、新しい服を身に纏い、セバスから渡された6個のモンスターボールの付いたベルトを腰に巻く。

「クロノ・・・これも持って行って。」

母から渡された、薬。鎮痛剤だった。未だに手足が痛むため無理が効かないが、これがあれば多少の無茶が出来る。

母から薬を受け取り、クロノは部屋を飛び出した。アカネとの約束を果たすために。

「あいつも、大切な者を見つけたみたいだな。・・・追加で依頼を頼めるかな？何でも屋の御仁よ。」

いつの間にか、ベランダで傘を差している星に対しケルアは新たな依頼を頼んだ。

「はいはい、毎度あり。」

いつもと変わらない能天気な声で星は答えた。

天変地異の空をアレスタンと共に空を翔るクロノ。

その胸に決意を新たに。そして、彼らと再び出会ったために。

第22話 「真実、我胸に決意の火が灯る」 (後書き)

いやー、ネタが付きかけています。

息切れがはやいな、おい。

ですが、ホウエン編はクライマックスが近いです！

ハートゴールドとソウルシルバーが出る前にはジョウト編にはいり
たいなあ

第23話 「絶命〜本当の俺はどっちだ?」 (前書き)

今回は、暴力的発言、表現が含まれています。

それらの耐性の無い方の閲覧は控えた方がよろしいと思います

第23話 「絶命〜本当の俺はどっちだ?」

振り付ける雨と照りつける日光。

そんな不安定な空を駆けるアレスタンに跨るクロノ。

そして後ろから付いてくるビブラーバと星。

つい先刻、後から付いてきた星がケルアの新しい依頼を受けた。内容は勿論クロノの護衛だ。

それを聞いたクロノは、潔く了承し2人で空の柱に向かうことになった。

「あれか?おっさん。」

目の前にうつすらと浮かぶ空の柱を見てクロノは星に聞いた。

「そ。あれが空の柱。レックウザが根城にしてる古代遺跡の一つ。」
空の柱。

滅多に人が足を踏み入れることがなく、未だに頂上にたどり着いた人は居ないという。

そして、この塔が何時作られ、なぜ建てられたかは謎のままだった。

塔の入り口に何人もの人影を確認したクロノ達。

服装からマグマ団とアクア団で有ることは容易に確認できた。

これで星の情報が真実であることが証明された。

マグマ団とアクア団が繋がっている。

そして、ここに両組織のボスがいることの証明でもってあった。

敵の存在が明確になり、柱の頂上を目指す二人。

しかし、ポケモンで登れる距離は限られていた。

仕方なく二人は適当な階に入りそこから徒歩で登ることにした。

簡単に抜ける床に苦戦しながら上っている時、二人は床が頑丈な部屋についた。

「ここだけ部屋が頑丈だな……」

他とは違うこの部屋に違和感を感じるクロノ。

しかし、星は天井を見ていた。

「……先客が居るみたいだな。少年。」

星の指摘を聞き天井に視線を贈るクロノ。

すると、天井の一角が崩れ落ちる。破片と混ざり二つの人影もこの部屋に落ちてきた。

「よお小僧。また会ったな。」

マグマ団幹部のカガリとホムラ。

フエン火山以来なりを潜めていたが、また彼らはクロノに対峙した。

「またお前らかよ。そろそろウザいぞ。」

見たくもない顔を見て、うんざりするクロノ。

しかし、カガリはまたあえて嬉しそうだった。

「つれないねえ。私は嬉しいわよ？またアンタの歪んだ顔が見れて」

ため息をつくクロノ。自分と価値観の違う人間との会話は疲れる。

それは誰しも同じ事だった。

「さあ、あの時の続きを始めようか。血沸き肉踊る戦いを！」

よもやクロノしか見えてないホムラ。しかし、クロノは眼中に無か

った。

「やるしかないならやるが、一つ聞きたい。なんで、こんな馬鹿げたことをするんだ？」

クロノの質問を聞くと笑い出す二人。

そして、答えた

「なあに簡単さ。ただ暴れたいからさ。暇つぶしさ。」

実に下らない。そんな為にグラードンは利用されたのかと思うとクロノは自然と拳に力が入る。

「……ふざけやがって。もう容赦しねえ。顔が変形するまで殴り飛ばす！」

怒りを露わにしたクロノ。しかし星がそれを止める。

「まあ待てって少年。ここはおいつちゃんにまかせなつて。クロノの前に立つ星。それをあざ笑う二人。」

「おっさんは引っ込んでな。貴様じゃ燃えねえだろ！」

ホムラの訴えを、耳をかきながら無視する星。そして。

「じゃ、少年。先行つてて。」

刹那、クロノは星のビブラーバと共に、天井の裂け目から次の階に上がっていった。

それを見て追いかける二人だが、階段に見えない壁が立ちふさがる。すると星の横には一匹のバリヤード。

この短時間で星は二匹のポケモンにこれだけの指示を出していた。

「じゃ、ちよつとこのおじさんと遊んでもらおうかな？」

いつものように胡散臭い笑いを浮かべながらその場に座り込む星。二人はそれを見て、少し星の技量を認めた。

「そんなに死にたいなら貴様から先に死なせてやるよ！」

吠えるホムラ。しかし、星顔を見た瞬間、背筋に悪寒が走る。そして星の顔にはさっきの笑顔は無かった。

「……あんまり騒ぐなや、クソガキ。今すぐそのクソうるさい口を黙らせてやる……」

そして、一匹のスピアーと横にいたバリヤードが星の前に出る。カガリ達も星の放つ殺気と戦いながらグラエナとバクーダを出す。

「さ、殺気だけは一人前じゃねえか」

震えた声で星に話すホムラ。

星は冷たい声で言い返す。

「弱い犬ほど良く吠える。先手はくれてやるから早く来い。それとも秒殺されたいか？」

殺される。二人はそう直感しポケモン達に指示を出した。

グラエナはバリヤードを狙い走り出したが、直ぐに何かにつぶつかる。

「み、見えない壁!？」

自分の周りに手を伸ばすと何かに触れた感触がある。まるで壁を触るような。

「無駄話をしてるからだ。俺がバリアードを出した時点で気づかなかったお前らの負けだ。さあ、ダンスの時間だ……精々俺を楽しませてくれ……」

見えない壁に囲まれた2人と二匹の頭上にスピアーが針を構えて近寄る。

両手の針に力をこめ、スピアーはミサイル針を身動きのとれないもの達に容赦なく放つ。

「どうした?反撃ぐらいしてみる。それともそのグラエナは飾りか?」

今の彼らには星の挑発を真に受けるほどの余裕は無かった。身を守る事で精一杯だった。

狭いその空間はミサイル針による土煙で満たされ、避けることは不可能に近くなっていた。

見えないが、彼らのポケモンはすでに戦闘不能になっていた。

その間に彼らは何かを訴えていたが星は聞こうとしなかった。

「……こんなもんか……。飽きたな。スピアー、もう良い。」

星の命令を受けスピアーはやっと攻撃を止めた。

バリアードの作った壁の中の土煙が晴れた。
そして閉じこめられていたもの達がようやく解放された。
無限に続いた攻撃により、全身から血を出していた二人。ポケモンは戻したようだが、モンスターボールは傷だらけになっていた。

「弱いな。それで幹部か？笑わせる。」

息を切らせ、星を睨む二人。

「なら、次はフリーホールでもしてもらうか……」

そう言い立ち上がり、腰の傘を握り近づく星。

二人は星に向かって命乞いをする。

「ま、待ってくれ！分かった！アンタにはもう手を出さない！だから助けてくれ！」

ホムラのそんな言葉が星の眉間をひそめる。

「……そんな覚悟で悪の道を渡ったのか？少しはそれが解っていると思っただが……自分で道を選んだなら、例えば死ぬ瞬間でも命乞いはするな！」

星は二人を一括し、持っていた傘の先を、亀裂にぶつける。
すると二人が居た場所のみ崩れ落ちた。

そして二人は断末魔と共に下の階層に消えていった。

ここの階以外は人が歩くだけで崩れるほど脆い。そんな床が上から落ちてきた人間を支えられる訳がない。

そして、次に二人を見つけた人は、しばらく肉を食べれなくなった。
……

落ちていく二人を見下ろす星。

その目は、人を見る目ではなく、
地面を這う羽虫を見る目だった。
・
・
・

第23話 「絶命〜本当の俺はどっちだ?」 (後書き)

今回は星のお話です。

又、白黒で人の亡くなる描写を始めて書きました。

カイト兄さんは、瀕死の傷を負いましたがまだ息絶えていません。

(屁理屈か?)

そのためグロ(キシ的には大分オブラートには包みました)耐性が無い人は今回の閲覧をお控え下さい

第24話 「現れ〜目覚めた三体目〜」 (前書き)

最近、またポケモンにはまってきて投稿がおろそかになってきてしまいました。

第24話 「現れ〜目覚めた三体目〜」

突然、星のビブラーバに連れられるクロノ。

下も階から次々に天井（この場合、次の階の床に当たる）を破壊しながら最上階を目指していた。

しこの方法なら早くに最上階にたどりつく。しかし、ポケモンは疲労していく。現にビブラーバは大分疲労してきていた。

それは無理のない話だった。ここまで来るのに星をつかみここまで来たのだ。疲れないほうが無理な話だった。

クロノもそれを察し、抵当な部屋でビブラーバから離れた。

「有賀とう。でもここからは俺だけでいいから、お前はおっさんの所に戻ってやりな。」

クロノの指摘を受け、少し悩んだビブラーバ。しかし、すぐに頷き、来た道を戻り始めた。

それを見送ったクロノは、再び自分の足で空の柱を登り始めた。しかし、不意に下の階から騒がしい声とともに無数の足音が近づいてくる。

「いたぞ！侵入者だ！」

マグマとアクア団の連合軍がクロノが降りた階に集合してきた。

「ご苦労様。でも、男の熱烈歓迎はいらないよ。」

そう彼らに言い、クロノはルーウィンに跨り、さらに上の階に上り始めた。

そして、数階上に上り、ルーウインの変わりにジオを出した。

近づいてくる足音、を待ち構えるクロノ。

そして、追っ手がこの部屋に入ってきた瞬間

ジオは、思いつきり床を叩いた。

脆い床はそれだけで崩れ落ち、追って達を下の階に戻した。

そして、崩れた床は追っ手を遮る壁となり追っ手の進行を阻止した。

そして再び空の柱を登り始めるクロノ。

大分酸素が薄くなってきたのか、少し歩くだけで息切れがしてきた。

それだけこの塔が高い事を意味していた。

そして他とは違う形の部屋。星と分かれた部屋に作りは似ているよ

うな部屋にクロノはたどり着いた。

もちろん先客がそこにはいる。

「……やはり部下達では抑えられなかったか……」

そう呟くマグマ団の幹部。彼らのアジトで見た顔の幹部だった。

「その口ぶりだと次が屋上か？」

クロノの疑問に首を立てに振る幹部。

「ならどいてもらおうか？俺は急いでるんでね」

一歩踏み出すクロノ。

しかし、幹部達は、屋上に続く入り口の前に立ちふさがった。

「そう急ぐな。少し俺達と遊んでいってくれ。」

そういい二人は、モンスターボールを構える。

「つたく。急いでるのよ……。お望みならやってやるよ！」

そしてクロノも二つのボールを取り出す。

「ならば、戦う前に自己紹介だ。俺はマグマ団幹部、ホカゲだ。」

「同じくアクア団幹部のトナミと申します。」

そう二人が挨拶しクロノが言い返す。

「悪人の顔と名前を覚えておくほどお人よしじゃないんでね。すぐに忘れてやるよ。」

そしてガレスとガウエインを出すクロノ。

「名前を教えとかないと呼びにくいだろ？しかし、君とはもう会わないだろうけどね」

そして二人が出したポケモンはテッカニンだった。

飛びぬけて早いため昔は、姿がないポケモンとまで言われた。その反面攻撃力は微々たる物だ。

「秒殺する！ガレスはブラストバーン、ガウエインは波導弾！」

二匹が技を繰り出したが、そこにはテッカニン達はいない。

無論クロノはよけられる事など計算通りだった。今の状況を見るまでは。

部屋を飛び回る無数のテッカニン。

「影分身か！」

瞬時に状況を把握するクロノ。
そして帰ってくる返事

「そう。なにも君をここで倒す必要はない。ここでの足止めが私達の任務だからね。」

やさしい言葉で答えるトナミ。

状況は不利だった。無数のテッカニンの中から、本物を探し当て攻撃を当てる。しかし、すばやいテッカニンに攻撃を当てる事そのものが難しい。そして、そんなポケモンが二匹。さらに、相手のポケモンの数がわからない。もしかしたら6匹すべたがテッカニンの可能性すらある。

様々な可能性を頭で考えるクロノ。しかし、決定的な一手は見つからなかった。

幸いなのは、向こうからの攻撃がまったくない。つまり、この布陣は一度破られたらすぐに崩れる。

「だったら、部屋ごと燃やす！ガレス、フルパワーでブラストバーン！」

クロノの指示に従い、ガレスは持てる全ての力を使い部屋を飛び回るテッカニンを焼き払おうとした。

本体のみを狙うのではなく、全てを狙った攻撃でテッカニンは全て業火に包まれたが、全て無傷だった。

「影分身の次は身代わりです。」

不適な笑みを浮かべるトナミ。

いくら攻撃しようとも、影分身でよけられる。仮に当たったとしても身代わりで避けられる。

ガレスのフルパワーのブラストバーンならこの部屋全体を攻撃できるが、そう何度も打てるものではない。ガウエインだけではない。今のクロノの手持ちではガレスと同じ攻撃が可能なポケモンは居ない。

打つ手がない

今のクロノにはこの布陣を打ち崩す手がなかった。しかし、

「少年！壁ギリギリまで寄れ！」

下の階から聞こえる星の声。クロノは咄嗟にその指示に従い、ガレスと共に後ろの壁に飛び寄った。

すると、下の階から突如現れるカイリキー。

そして、宙を舞う無数のテツカニンの中から二匹のみに攻撃を向けた。

そして、掴んだ二匹のテツカニンを地面に叩き付ける。

「今だ少年！」

「ああ！ガレス、ブレイズキック！」

星の指示に導かれ、クロノはガレスに指示を出し、ガレスもそれに答えた。

ガレスの攻撃を無防備のまま、戦闘不能な状態に陥った。そして消えていく分身たち。

ゆっくりこの部屋に上がってくる星。

「どう？おいつちゃん、役に立ったでしょ？」

「ったく。とんだ策士なおっさんだな。でも、本気助かった」

クロノに近づきながら星が言い、クロノは憎まれ口を叩きながらお礼を言う。

「なぜだ・・・なぜあれだけのテッカニンの中から本体を見つけた？」

不思議そうにホムラが言う。しかし、星は何にもしていないかのようになんて返す。上を上げて答える。

「ベーターにー。おっさんは何にもしてないよ。ただ、このカイリキーの特性がノーガードなだけよ。」

カイリキーが持つ特性の一つ「ノーガード」

この特性を持つカイリキーは特別なフェロモンを分泌していて、その匂いを嗅いだポケモンは闘争本能を刺激される。そして、お互いは攻撃を避けようとせず、互いに攻撃を打ち合う。これが、今分かっているノーガードのメカニズムだった。

「くそ・・・。ノーガードの特性をもつカイリキーが居たとは・・・」

悔しそうに地面を叩くホムラ。しかし、不思議とその顔は勝利の余韻に浸っていた。

「しまった！おっさん、こいつらの事頼む！俺は屋上のマツブサたちを止めに行く！」

そう星に告げクロノは屋上に駆けていつて。

そして、星はそんなクロノの後ろ姿を見ながら手を振っている。

「はいはい。．．．．んじゃ、おっさんは個人的なお仕事しますか．．．．」

すると、跪く二人に対して、取り出した銃を向ける。

「やはり貴方は、あの時の．．．．」

トナミのその言葉を聞くと、星の顔つきが変わる

「悪いな．．．。足が付くと色々とカントーとシンオウで動きづらくなるのでな．．．．」

そして、銃弾は二人の眉間に打ち込まれる．．．．

屋上に向かって駆けるクロノ。

上る階段は緩やかなアーチを描いているが、地上よりはるかに高いため呼吸がしにくい。

クロノですら、息切れをし始めていた。

そして見えた、天空へ続く光。

その光を目にすると、クロノはまた頭痛に襲われる。

しかし、以前ほどの痛みは無く、軽い偏頭痛程度のもだった。

その刹那。

廊下を揺るがす叫び。

不安がクロノの胸を過ぎる

そして、屋上にたどり着く。

そこには、朱色の玉を持ったマツブサ、蒼い玉の持ったアオギリ。

そして、三体目超古代ポケモンレックウザの姿があった。

しかし、レックウザは緑色の空間に押し込められ、苦しそうに体を痙攣させている。

そして、レックウザを包む空間を作っているものは、二色の玉であることは明白だった。

「……よお。久しぶりだな。」

クロノに気づき、横目で見るマツブサ。

「お前ら。ちょっとおいたが過ぎないか？大人なんだから、ガキ達の模範になるようなことしろよ。」

皮肉と怒りを込め、二人に告げるクロノ。

それを鼻で笑うアオギリ

「模範ですか……。その模範を演じるのも疲れましたよ。孤児達を心から信じさせるのですから、莫大な時間と労力がかかりましたよ。」

「偽善を演じて子供達を信じさせ、挙句悪事に加担させる。外道つて言葉はお前のためにあるようなもんだな。」

アオギリの言葉にクロノは、更なる敵意と殺意を込め言い返す。

「外道で結構。あの方の為なら、喜んで外道に成り下がりましたよ。そして、孤児達は良い駒でした。特にクリアス。彼は良い駒でしたよ。あの方の許可が降りたことで大変良い働きをしてくれましたよ。」

「

クリアスが敵。クロノが始めて知った事実だったが、クロノは微塵にも驚いていなかった。

「おや？少しは驚いてくれると思ったのですが、意外と平然ですね。」

「あいつが、敵だったとしても、あの時俺を助けてくれた。だから別におどろかぬーよ。それより、そろそろ、レックウザを開放してくれぬーか？」

クロノの指摘に、二人は首を横に振った。

「あつそ。なら、力ずくで行くかな……。パロミデス！」

クロノがその名を呼ぶと、二人の間に一匹のガブリアスが床を突き破り飛びだす。

そして、二人に切りかかるが、寸前でパロミデスの爪が止まる。否、見えない壁に阻まれたのだ

「惜しかったな。この玉は使用者を守ってくれるみたいだぜ。……さて、そろそろ、こいつの洗脳も良い頃だろ。」

そして、レックウザを包む空間が消えていく。そして、レックウザの目には不適な光が宿っていた。

「さあ！レックウザ！このハウエンを蹂躪し、破壊の限りを尽くせ！」

二人の叫びに応じるかのように、レックウザは天空にその姿を消していった。

そして、マツブサ達も何かに呼ばれるかのように、その身が宙に浮き始める。

「どうやら、俺達は特等席に招待されるみたいだな。あばよ、ヒーロー！ 気取りの小僧。精々ハウエンが壊れていく様を見物してな。」

そう捨て台詞を吐き二人も天空へと、姿を消していった。

何も出来ず、ただ見ているしかなかったクロノ。自分の無力をただかみ締めていた。

「間に合わなかったねえ。で、少年はこれからどうする？ まだあいつらとやるの？」

いつからか星がクロノの後ろに居た。

振り向き星に答えるクロノ。

「当たり前だ。事件を目の前にして指をくわえてられるか。」

そして、アレスタンを出すクロノ。

「相手は超古代ポケモンが三体だ。いくら少年が強くても分が悪い。死に行く……。」

「あいつらが居るなら怖くない！」

話途中の星の言葉を打ち消し答えるクロノ。

星もクロノの気迫に押され、それ以上何も言わなかった。

「……たぶん、あいつらはルネシティに向かっていると思う。行くなら急げ。」

そうクロノに告げると、星は踵を返しクロノの前から姿をけしてた。
そして、クロノもこの事件を止めるため、空に舞った。決戦の地、
古代の遺跡の町ルネシティに……

第24話 「現れ〜目覚めた三体目〜」 (後書き)

いやー、ポケモンって楽しいね。

キシはまた、メインポケの固体値狙って頑張っています

第25話 「決戦！私はあなたを待っていた」 (前書き)

ついに三人集合です！今回はアカネ目線でお話が進みます

第25話 「決戦」私はあなたを待っていた」

ただ静かに時が過ぎていた

人の声はおるか、心配すらないルネシティ。

いち早く超古代ポケモン達がここを目指していることを知ったポケモン協会がこの住人を避難させたためだ。

そんな静寂の中、一人ルネジムの前に佇むアカネ。

自分の侵した罪と知りながら何もしなかった自分の罪を償うために今ここで、彼らを止めるためにいる。

「……来た……」

僅かに揺れる大地の異変に気づき、自分のポケモン達をボールより出す。

海底遺跡でクリアスから託されたホエルコもいる。

そして、彼らは現れた

町の外壁を破壊し現れたグラードン

海底より現れたカイオーガ

この二匹を前にアカネの足は震えていた。

怖い。出来るなら逃げ出した……。

しかし、そんな恐怖にアカネは打つ勝った。心から思う彼を思うとどんな恐怖にも耐えられた。

「みんな！一斉攻撃！」

アカネの指示で攻撃を開始するポケモン達。その攻撃はすべて当たり、爆煙が舞う。

「まだまだよ！ビレッジ、ラフレシアはカイオーガ。ホエルコ、ジー

ランスはグライドンに攻撃を続けて！カイリユーは上空から流星群！ピジヨットはカイリユーのサポート！」

更なる追撃を行うため、更なる指示を送るアカネ。

全ての攻撃は確実に当たっていた。しかし、グライドン達には微塵にもダメージを受けていなかった。

「そんな……」

二匹から間合いをとったポケモンたちとアカネに立ちふさがる現実。アカネもポケモンも決して弱くない。グライドン達が常識を揺るがすほどに強大だったただけだ。

顎を開くグライドン。日光がグライドンに集まっていく。

「！みんな避けて！」

グライドンの攻撃を読んでポケモン達に回避を指示するアカネ。アカネもピジヨットに乗りその場を離れる。

そしてグライドンのソーラービームが放たれた。跡形もなくなるルネジム。巻き起こる爆風。

「きゃあああああ！」

爆風に巻き込まれるアカネ。思わず悲鳴を上げてしまう。

そして、ピジヨットから振り落とされてしまう。伸ばす手は虚空を掴む。ピジヨットやカイリユー達が助けに行くが間に合わない。

地面に激突する瞬間、アカネを救うフライゴン。

「無事ですかアカネさん？」

フライゴンの背中に乗る男。見覚えがあった

「クリアス!？」

その男の名を呼ぶアカネ。

「私だけではありません。」

前方を指差す繰クリアス。

その光景は、壮観だった。ハウエンのジムリーダーが全てここに終結していた

「ふん……。ずいぶん大きな暴れん坊だな。」

グラードンを目の前に鼻であしらうテッセン。

「暴れん坊には押しおきが必要だな。」

指を鳴らすトウキ

「では、私の特別授業を受けていただきましょう。」

読んでいた本を閉じカイオーガを見るツツジ。

「あんたらが悪い分けじゃないけど、ちょっと黙っててもらおうよ」

腕を組み二匹に言い聞かせるアスナ。

「いつ振りだろうな? 誰かに対して怒るのは?」

過去を思い浮かべるセンチリ。

「君達も被害者なんだよね」

「ごめんね」

二匹に対して哀れむフウとラン。

「別任務で席を外していたんだ。それを返すくらいに働くよ。」

チルタリスの背中から言うナギ

「全部終わったら、全部話してくれるんだね？クリアスくん」

クリアスに視線を向けるミクリ。

それに頷くクリアス。

「なら、いくぞ！みんな！」

「はい！」

テッセンに指示ど全ジムリーダーが二匹に攻撃を開始する。

「クリアス無事だったんだ」

安全なところにアカネをおろすクリアス。

「ええ。あの後、シズク姉さんと一緒に津波に巻き込まれて意識を失ってしまって。海面を漂っていたところを皆さんに助けていたのだいんです。」

そんなクリアスを見ると、所々傷だらけだった。足には深い傷があるのか、応急処置で止血してあった。

「では、私達も加勢しましょう。いくら彼らが強くても相手は超古代ポケモン。そう長くは持たないはずですよ。」

そう言い加勢しようとするクリアスをアカネはとめた。

「待って。私達のポケモンじゃ、彼らには決定打にはならないわ。」

「では、どうするのですか？白旗でも上げますか？」

クリアスの指摘を聞き笑うアカネ。

「だから、私にホエルコを渡したんでしょ？」

そう言い不思議の飴を出すアカネ

「私の意図を読んでくれましたか。ならば話は早いですね。ホエルコ！」

クリアスの呼び声に応じ、彼のホエルコが海面より飛び出す。

そして、そのホエルコに向かってアカネが不思議の飴を投げる。

飴を食べたホエルコはその姿を変え始め、新たな姿ホエルオーにその姿を変えた。

「準備は整いました！いきますよ、アカネさん！」

「ええ！みんな集まって！」

アカネの呼び声に終結するポケモン。

「古の巨人を封じし大いなる鍵よ」

「鋼、岩、氷に宿りし意思よ」

「連なる布陣によりその力を解放せよ。最初にホエルオー、最後にジーランス！」

二人の呼び声に応じるかのように、彼らのポケモンは大いなる鍵を呼ぶ出す布陣を描いた。

そして、上空より現れた巨人を封じた鍵。

レジスチル

レジアイス

レジロック

「この者たちは!？」

彼ら前に現れた三匹が二人の顔を見て驚く。
そして、その声は二人にも聞こえていた。

「お願い。私達に力を貸して。」

三体に言うアカネ。

そして三体は無言でそれを了承した。

「……よかるう。あいつらが、あのような姿で見えるのは見るに耐えん。」

そして、三体は暴れている同胞を止めに行く。
それに、便乗するようにアカネ達もカイオーガ達の下に向かう。

アカネの胸に希望の光が見えた。しかし、その光は一つの咆哮によ
って再び費えた・・・

天空からの咆哮。

最悪のパターン。

三体目の超古代ポケモン・レックウザ
不意打ちにより吹き飛ばされるレジスチル達。

「!!!!まさか、レックウザまでもが!?!」

吹き飛ばされていく仲間達。

「そんな・・・。もう無理なの・・・?」

絶望に染まるアカネを眼前にグライドンがその腕を振り下ろそうと
した瞬間

「ブレイズキック!!」

グライドンの顔面を蹴り飛ばすバシャーモ。

そして、アカネの前に降り立った。

「え?」

「大丈夫かアカネ?」

アレスタンと共に降りてくるクロノ。

彼女が待ち望んだ人。心から会いたかった人。彼となら希望の光は費えることはなかった。

「うん！……会いたかったクロノ。」

「俺もだよアカネ。」

クロノの伸ばした手を取り、立ち上がるアカネ。

「なら、あの駄々っ子を止めるぞ！」

「うん！」

ここに、運命に導かれた者たちが全て揃った……。過去と未来。現在に翻弄された三人が……

第25話 「決戦！私はあなたを待っていた」 (後書き)

ついに思い人と再会したアカネ。絶望に立たされてもクロノがいるから大丈夫。でも、やっぱり彼には近くにおいてほしい。クロノと一緒にだと、不可能も可能に出来そうなんですネ。乙女パワーと命名しましょう。

第26話 「終焉、終わりを告げる心の光」 (前書き)

いやーここまで遅くなるとは思わなかった・・・
次話は早めに投稿します

第26話 「終焉〜終わりを告げる心の光〜」

白い鎧纏いし円卓の騎士の長。

愛した姫のためその命を賭して、想い重ねし仲間と共に母国を守りその命を散らす……。

〜円卓騎士団・最終章〜より抜粋

目の前に立ちふさがる超古代ポケモンを前にしても、クロノの闘志は微塵にも衰えなかった。

後ろには、クロノの後ろにはジムリーダー達が、クリアスが。手元には信じたポケモン達が。何よりアカネがいた。恐れる必要が何処にある？

今ならどんな相手にも勝てる自信があった。

「クロノ……」

突然の助っ人に驚くクリアス。

絶望に落ちた中、彼の新たに纏った白い服は希望の光に見えた。

「よっ！クリアス。なかなかिकास格好してるな？意外と似合ってるぜ？」

こんな中でも、クロノの口調はいつもと変わらなかった。

クリアスは今着ている服を指摘され口ごもる。

「わ、私は……貴方を……」

「ストップ。俺が知りたいのは只一つ。今のお前は何がしたいかだ

け。」

クリアスがすべて言い終える前にクロノが聞く。それを聞いたクリアスは何の迷いもなく答える。

「私は仲間を守りたい。そして、自分の過ちを償うために彼らを止めたい！」

「OK！最高にテンションの上がる答えだ！」

そして、クリアスに近づくクロノ。片手を挙げ二人はハイタッチをする。

そこには、主と従者ではなく同じ想いを抱く好敵手ともの姿であった。

そんな二人に近づくレジスチル達。

彼らはクロノの顔を見ると絶句した

「……まさかこのような運命が来ようとは。」

「彼らの運命はこつも残酷なものなのか……」

「同じ魂の波導を感じる……」

口々に想いを言う伝説のポケモン達。

しかし、クロノ達には理解出来なかった。

「こいつらは？」

初めて見るポケモンに問うクロノ。

「貴殿達と志を同じとするもの。同胞を悪の呪縛から解き放つため

に力を貸してほしい。」

クロノに跪くレジロック達。

まるで王に仕える騎士のように。

「いや。お願いするのは俺達のほうさ。グラードン達を止めるためにお前達の力を貸してほしい。」

「心得た！」

そして、心無き暴走を起こす被害者達を見る。

立ち上がるグラードン。

その瞳から流れる涙。それは彼が愛した世界に対し、自分自身が今世界の脅威になっていることに対しての涙。

「グラードンが泣いてる……。」

それに気づくアカネ。

「……とりあえず、俺達は何をすれば良い？」

「彼らを操っている物を止められれば早いけど、何処にいるかわからない。ひとまず彼らを動けなくしていただきたい。」

「了解！」

レジアイスとガレスと共に駆けるクロノ。

レジスチルとポケモン達と駆けるアカネ。

レジロックと駆けるクリアス。

「若いやつ等が、気合を入れたんだ。ワシらが踏ん張らんでどうする……！」

瓦礫を押し分け、ライボルトと共にクロノ達を追うテッセン。

「燃えるねえ！熱いのは好きだぜ！」

テッセンに続くトウキ。

そして、次々に立ち上がるジムリーダー達。

どんな状況でも決して諦めないクロノの想いが、再び彼らを振るい立たせた。

自分の意思とは関係なく振りあがるグラードンの腕。

その腕は、駆けるクロノに襲い掛かる。

「氷頭！頼む！」

「その呼び方はやめてくれ……。レジアイスと名前があるのだから！」

腕を押さえるレジアイス。その隙にクロノは距離を詰める。

「ガレス！もう一発蹴り上げろ！」

グラードンの腕部を駆け上がりガレス。そして、顎に強力な蹴りを食らわせグラードンに空を見上げさせる。

「悪いが、追撃させてもらうー！アレスタン！パロミデス！流星群！」

クロノの後ろで待機していた二匹。そして待っていたクロノの指示にあわせ、二匹は無数の流星を落とす。無防備なまま、無数の流星を浴びたグラードン。そして再び地面に顔をつける。

カイオーガに向かって駆けるアカネ。

そんなアカネにカイオーガは、攻撃のためにハイドロポンプをチャージしていた。

「そんな大技今の私には当たらないわよ！ビレッジ、カイリユーお願い！」

アカネの指示に応じ、カイオーガに突き進む二匹。

そして、二匹による上下からの攻撃がカイオーガを襲う。

「今よ！鋼君最後はよろしく！」

「我にはレジスチルという名がある。以後はそう呼んで頂きたい！」
よろけるカイオーガの腕をつかみ、力を入れるレジスチル。そして、見事な一本背負いを決める。

宙を舞うレックウザに対峙するクリアス。

先に攻撃してきたのはレックウザだったが、その攻撃は軽くかわされた。

「どんな時でも優雅に、美しく見せる！それが私のコンテストに対

するポリシーです。そして、隙があれば狙う！これも鉄則です！」

その言葉を聴きレックウザは後ろを見たが、少し遅かった。

キングドラとエンペルトの二体による冷凍ビームが、レックウザを氷が包んでゆくが、すぐに氷の鎧は破られた。

しかし、それこそがクリアスの作戦だった

「飛散した氷と降り注ぐ岩。見た目も威力も申し分ないですよ！最後は任せます、レジロック！」

「任された！」

レックウザの周りを舞う氷と岩。それらがレックウザを襲う。

「今回限りの大技でしたね。」

そして、倒れるレックウザ。

たった三人で超古代ポケモンを止めた。

それを見ていたジムリーダー達。

隙あれば助けに入るつもりだったが、その必要がなかった。

「とりあえずこれでいいか？」

倒れているグラードンを見ながらレジアイスに問うクロノ。

よもや立つことさえできなくなった三体を見る。

「意識があっても体が動かなければ意味がありません。後は彼らを操っているもの達を探せばよいだけです。」

「探さなくてもいいぜ。こっちから出て行ってやるからよ。」

聞き覚えのその声の方をみるクロノたち。
ひとときわ高い瓦礫の山に彼らは立っていた。
マツブサとアオギリ。

「ったく、馬鹿と何とかは高いところが好きなのか？」

二人が高いところにいる事を皮肉ってクロノが言う。
しかし二人は無視して話を進めた。

「まさか超古代ポケモン三体が倒れるとはな。恐れ入ったぜ」

倒れた三体を見てマツブサは感心していた。

「アオギリさん！なぜこのようなことを？あなたを変えたのは何ですか？」

クリアスの問いにアオギリは無表情で答えた

「私はもともと、とある方の命令で動いていました。そして、私に従順な駒を作るには孤児のような心に傷を持った人間が扱いやすかった。現にあなたは今まで私に何の疑問を抱かずここまで着ました。そして！計画は最終段階に入りました！もうマグマ団やアクア団は不要！それはあなたも同じことです、クリアス！」

自分の信じた人から告げられた真実。
しかし、クリアスは絶望しなかった。

「……少しですが気づいていました。あなたが私たちに仮初の愛情を注いでいたのは。でも、今の言葉で吹っ切れました！あなたを私たちの敵です！私の新しい家族を利用した罪は償ってもらいます！」

そっぴい構えるクリアスたち。

「おー怖い。でもな。これがあればこいつらはマリオネットみたいにまた動き出すぜ！」

そして、マツブサたちが持つ二つに玉が不気味な色を放ち、グラードンたちは再び立ちあがった

「もうやめろ！これ以上その力で彼らを操れば命にかかわる！」

レジアイスの声に耳を傾けるはずのないマツブサ達。

「おい！止める方法はないのかよ！？」

「方法ならここにありません。」

クロノの叫びに上空から声が返ってくる。

ラティオスとラティオス。

ラティオスの手には水のような色の玉が握られていた。

「クロノこれを」

「何だこれ？」

クロノの疑問に答えたのはレジロックだった。

「心の雫……」

「心の雫？」

初めて聞く名にアカネが小首をかしげる。

「昔アルトマーレを救った軌跡の宝石。そして、あらゆる心を浄化する心の涙。」

ラティアスがさらに続けて言う

「でも、心を浄化するには、穢れより強い希望を持ったものがこれをもつ必要があるの。この中にあの二人より強い希望を持った人がいなければ意味をなさないわ。」

そんな彼らに三体のポケモン達が攻撃を仕掛けてきた。しかし、その攻撃はジムリーダー達が防いでくれた。

「ならば、クロノが適任じゃ！」

ライボルトと共に駆けるテッセンが語る。

「確かに。絶望の淵にいた我らを一発で復活させました。それを持つのは君がふさわしいです！」

ミロカロスと共にカイオーガの攻撃を打ち消すミクリが叫ぶ

そしてクロノはラティオスから、心の雫を受け取り、それを掲げる。

「心の雫！あいつらを助けてくれ！」

そして、この戦場を淡い蒼色の光が包み込む。
この光に包まれた三体の攻撃の手が止まった。しかし、

「じゃらくせ！」

マツブサ達の邪念が心の雫の光を押し返してきた。

「グラードン達はお前らの道具じゃない！いい加減にしろ！」

クロノの思いに答え心の雫はさらに光ったが、まだ足りなかった。
そして、クロノの手に二人の手だ加わる。

「足りない分は私達が補うから！」

「諦めないでください！」

アカネとクリアスの手が、心の雫の伸びる。

そして、今までにないほどの、美しい光がルネシティを包み込む・

・
・
・

第26話 「終焉〜終わりを告げる心の光〜」（後書き）

クロノ「もう、聞くのも飽きたけど何で遅れたの？」

いやー、映画三昧で……。アマルイにポト。ポッターは個人的に微妙。サマーーズは神作品だね！

一同「市ね。くそ作者。」

何も映画のせいで遅れたわけじゃないやい！職場の納涼祭なんかの準備とか。急に副主任に格上げされたから、仕事が忙しかったんだよ！うちの施設人使い荒いんだよ！

クロノ「いや……。ヒラから副主任になったんだから喜べよ……」

いーやーだー！ヒラで時間が余ってる方が執筆できる！

アカネ「……私こんなだめな社会人ならように頑張ろう……」

では、今回は可能な限り早めに執筆いたします

第27話 「光る目覚めた私の力」 (前書き)

お茶濁しな話です。
はい。すいません。

第27話 「光〜目覚めた私の力〜」

この世のものとは思えない光がルネシティを包み込む。

そして、邪念に操られていた超古代ポケモン達を助け出す。

光の中心には、心の滴を掲げるクロノ、アカネ、クリアスの三人。溢れ出す三人の希望に心の滴は答え、その力を表していた。

「何でだ！たかが三人のガキに俺達が負けるのか！？ふざけるな！」

邪念から解放されてゆくグラードン達を見てマツブサ達が吠える。

そして、手にした朱色の玉と藍色の玉に力を込める。

それに反応した玉は怪しげな光を放ち、心の滴の光を押し返している。

「っ！」

朱色の玉から光が放たれると、心の滴を持っているクロノの腕から鮮血が流れる。

心配そうに見る二人にクロノは

「こんなの傷の内に入らない！」

と言い、滴に意識を集中させる。

二つの玉の力がぶつかり合う。

そして、玉を握る者にその衝撃は直に反映される。

マツブサ、アオギリの両腕は既に傷だらけになり、地面には血の水

溜まりが出来ていた。

しかし、クロノも同じ事だった。白い上着は血を吸い込み、赤く染まり、クロノは片膝を付いていた。

アカネ達も心の滴に触れているが、傷を追ってはいなかった。

心の滴の光は、徐々にその力を弱め、二つの玉の光に押し負けていた。

「ク・・ソ！負けられねえんだよ！」

血塗れの腕を押さえ、残り少ない力を出し、クロノは立ち上がった。しかし、マツブサ達の邪念は強大だった。

アカネ達の力を借りても、後少し。少しだけ力が足りなかった。

「誰でもいい！誰かクロノを助けて……！」

二人に支えられながら立つクロノの前に、アカネは神頼みをするしかなかった。

『貴方なら彼を救えるわ』

アカネ頭の中に響く知らないし女性の声。

女性の声はさらに告げてゆく

「貴方が真に心より願うなら、貴方の力は答えてくれます。前世で彼に出来なかつた事を、貴方に託します。」

女性の声に導かれ、アカネは心の底から願った。

グラードン達を、みんなを。クロノを助けたい

そう願った時、アカネの瞳の色が、蒼く変わっていく。
そして自然と心の滴を握る手に力が入る。

「私は願う！みんなを助けるために！心の滴よ！私の力を纏って、その力を解き放って！」

アカネの願いに呼応し、心の滴は誠の力を解き放った。
その蒼い光はルネシティを越え、ホウエン地方全てを覆っていった。
そして、光に包まれた人々の中から、黒い想いが和らいでいった。
それは、マツブサ達も例外ではなかった。
世界を飲み込む程の邪念を抱えていた二人。しかし、その邪念は和らいでいき、二つの玉の光も小さくなっていく。

そして、朱色と藍色の玉の光が消え、グラードン達は邪念の呪縛から解放された。

「やつ……た……」

正気に戻ったグライードン達を見て、クロノ達の意識が遠のいていく。そして、遠のく意識の中。クロノは確かに聞いた。

『ありがとうよ。人間』

グライードン達の感謝の言葉を……

第27話 「光る目覚めた私の力」 (後書き)

えー毎度毎度、お茶濁しなお話ですいません。

クロノ「本当は、26話で出す話だったんだよね？」

うん。26話を出すときに何故か、消えてたから今回にした。

クロノ「ならもっと早く出せよ。いくらなんでも長くねえか？」

返す言葉もない。でも、近々パソコン買う予定だから、投稿スピードは上がるはずだよ！

クロノ「おっマジで。」

そ。だから、暫く投稿スピードは遅いの。パソコンを吟味してるからね。

では、今回はこれで

第28話 「夢く見せられた真実く」 (前書き)

今回は、夢と自然環境のお話

第28話 「夢く見せられた真実」

夜をも飲み込む漆黒。一遍の光すらなく、自分すら見失うような黒い空間。

クロノが目を覚めたのはそんな世界だった。

地面に立っている感覚は無い。しかし、飛んでいる感覚も無い。

ルネシティで、マツブサ達を止めた後、意識を失ったためその後の経緯は分からないが、ここが自分のいた世界でないことは容易に理解できた。

腕の傷がなくなっているのが何よりの証拠だった。

そして、そんな空間は、ひとつの森へと姿を変えた。

その森は、小鳥が囀り、ポケモンが穏やかに暮らす森ではなかった。業火が踊り、木が倒れ本来の姿から逸脱した姿をしていた。

そんな森の一角にクロノはいた。

そこは木を切り倒し、何かを建てていた場所のようだったが、今は崩れその本来の姿を失い、瓦礫に成り果てていた。

「何だよ……どこ？」

自分が今、どこにいるのか分からないクロノ。

すると、瓦礫の上に獅子のようなポケモンが現れる。

そして、そのポケモンを追うように2人のポケモンレンジャーがこの場に現れる。

その二人を知っていた。

血が繋がっていないが誰より信頼していた兄。カイト。

そして、クロノが憎み続けている男、カズキ。

「……兄さん！」

目の前に起こっているあり得無い事を理解できないクロノ。
しかし、クロノの叫びはこの世界の誰にも届く事はなかった。

「やはり、この炎はあなたのものでしたか……」

瓦礫の上に立つポケモンに問うカイト。

そして、そのポケモンに語る

「お願いします。ここに住むポケモンたちのために、この火を消してください！あなたの炎あなたにしか消せないんです！エンテイ！」

瓦礫に立つポケモン・エンテイに頼むカイト。

しかし、エンテイは聞く耳を持たなかった

「たわごとを！貴様ら人間が我を利用し、我の力を悪用した結果だ！貴様ら人間が自分の力で解決しろ！」

エンテイの叫びにたじろぐカズキ。しかし、カイトは怯まずさらに言い返した

「確かに元凶はわれわれ人間です。しかし、ここに住むポケモンたちには関係のない事です。ここに住むポケモンのためにお願いします。」

「おろかな……。ここに人が踏み込んだ時、この森は本来の姿を消した。貴様の気づいているだろ。ここに住まうポケモン達は、ここを本来の住みかとしていたもの達ではない。貴様ら人間が、自然保護と大義名分を掲げ外よりつれて来たもの達。この森そのものが、貴様らに荒らされた被害者だ。このまま滅する事が、この森のためになると思わないか？そして、ここにいたポケモンたちはす

でに避難した。よもや何ら被害はない。」

エンテイの意見は正論だった。

自然を守るといい、木を植えることは一見自然保護のように見える。しかし、植える木に問題がある。本来その場になかった木を植えることが、隠れた自然破壊になっていく。

それは、いたるところで行われている。自然を守るといふ大義名分に隠れて……。

「先輩。このままでは埒が明きません。ここは強引にでもキャプチャーしましょう。」

キャプチャースタイラーを構えるカズキ。

しかし、カイトはカズキの構えている腕を下ろした。

「ただ、キャプチャーするなら、悪党と変わりない。前から言っているだろ？」

「……」

それを見ていたエンテイ。しかし、不思議と先刻までの刺さるような敵意はなくなっていた。

「エンテイ。確かにここを荒らしているのは人間だ。森も本来の姿ではない。しかし、ここを新しいすみかに行っているものたちがいる。その者のために力を貸してくれ。」

「……良からう。」

カイトの必死の頼みをエンテイは聞き入れた。姿は変わったしまっ

だが、ここには新しい命があることを知らされた。
エンテイが空に吼えると、森を焦がしていた炎は消えた。
しかし、傷跡は残った。

「漕げた木々は、時間が癒す。貴様ら人間が何をしなければ、そう
長くない時でここは本来の姿に戻る。」

そう、エンテイがカイトに告げる。

この一瞬、エンテイは再び人間を信じて見たいと思った。しかし・
・
木々の陰から、飛来するキャプチャー。しかし、エンテイを捕まえ
る前に、悉くをエンテイに破壊される。
再び、人間に対し疑心と怒りがエンテイの心を染めていく。

「人間！これはどういうことだ！やはり、人間は信用するに値しな
い生き物という事か！」

「違う！俺達も知らないことだ！」

草を掻き分け走る足音。

カイトは、その音を聞きカズキに指示を出す。

「カズキ！足音を追え！エンテイは俺が止める！」

「は、ハイ！」

エンテイに背を向け走るカズキ。

しかし、エンテイはカズキを逃すまいと、襲い掛かる。

「!!!カズキ！」

カズキを突き飛ばし、彼を守ったカイト。
その背中は深く抉られ、大量の血があふれ出る。

「せ、先輩！」

カイトに駆け寄るカズキ。

そして、震える手でキャプチャーライターを構えるが、エンティはすでにそこにはいなかった。

そして、森はさっきの漆黒の空間に戻る。

一部始終を見ていたクロノ。

倒れた兄に駆け寄ろうとしたが、足が動かなかった。

今見ていたことが理解できなかった。聞いていた話とすべてが違う。

「何なんだよこれは！」

動くようになった体を震わせ叫ぶ。そしてその声は虚空へ消えていく。

「これが、貴様の兄が無くなった時の真実だ。そして貴様が知りたがっていた真実の一つ。」

クロノの背後から現れた、黒い存在。

襟を思わせる部分には、赤い牙のような突起が。そして、銀色の長髪から覗く目。

クロノの知らないポケモン。

「誰だ貴様。」

「人は私をダークライと呼んでいるが、我々には不要な呼び名だ。」
ダークライと名乗るそのポケモン。
続けてクロノが問う

「今のはなんだ。真実って何だ。」

「ここは貴様の夢。深層心理の中だ。この漆黒の空間は貴様の心そのもの。そして、今見せて事は、過去に起きた出来事そのもの。周りの人間達が貴様に隠していた出来事だ。」

ただ、機械的に話すダークライ。
すると、漆黒が晴れ、一筋の光が照らし始めた。

「時間が……。真実が知りたければルネシティの目覚めの祠の最深部に来い。茜色の髪の姫と、忠義の騎士をつれてな……」

そして、ダークライは徐々にその姿を消していく。
同時にクロノの意識は遠のいていき、再び意識を失っていく。

そして、次に目覚めた時、信じた仲間や両親達が彼を待っていた。

揺れる高速艇の牢屋の中に、今回の事件の中心人物の二人がいた。
マツブサとアオギリ。
事件の後、ポケモン協会やジムリーダー達に捕まり、ミナモシティの警察所に連衡中だった。

そして、波の揺れとは違う振動が船を襲い、船は停止する。

程なくして、牢屋の鍵が開き、一人の男が入ってくる。

「おお、あなたは！助けに来てくれたのですか！？」

予期していなかった人間を見て、喜ぶ二人。しかし、喜びを絶望に変えることはそう難しいことではなかった。

サイレンサーのついた拳銃を構え、喜ぶ二人に銃口を向ける。

「貴様の敬愛するボスからだ。使えなくなった駒は切り捨てる。だ
そうだ。」

その言葉を聴き、絶望に染まる二人。

そして、殺意の籠った銃弾が二人に向かって放たれた……

第28話 「夢く見せられた真実く」（後書き）

皆さん、エコってますか？

キシは特に考えてませんが、節約と節電には気を使っています。

本編でエンテイが言っていたことは、決して人事ではございません。むしろ今、私達の世界で起きていることです。

自然を守ると言って、本来無い木を植える事は、木を切ることより自然破壊になります。（この場合は自然改造ですが。）

砂漠を緑地化することは大いに結構ですが、植えてる木は過去にそこにあつたものですか？砂漠で育ちやすい？水分が多い？ふざけんじゃねえと思います。

保護することは、元に戻す事と考えてるキシにとって、下手な自然保護は破壊以外の何者でもないと考えています。

小さな節約が、大きな助けになることがあります。

この、「ポケットモンスターく白と黒の想いく」ではそういった事を投げかけられるように善処します。

読者の皆様も、少し足を止めて考えてみてください。

地球に生きている一つの命としてちよつとだけいいですから考えてみてください。

少し話が暗くなってしまいました、今回はこれだ失礼いたします。

第29話 「道々それぞれが抱える道の先」(前書き)

とりあえず再びお茶濁しな後日談。

第29話 「道々それぞれが抱える道の先」

晴天が空を彩り、風が肌を撫でる。

再び掴んだ平穩を前に人々は喜びを隠せずにした。彼等を除いては病院の一室からホウエンを見るクロノ。右腕には包帯が巻かれ、その下には生々しい傷跡が残っていた。

マツブサ達が海上で暗殺された事が彼らの耳に届くのに大した時間はかからなかった。

アオギリが口にしていた『あのお方』。

その言葉が意味することは容易に想像できた。二人の後ろには黒幕がいる。

しかし、クロノの気を曇らせていたのは、それだけではなかった。気を失っていた時、見たあの夢。

あの夢が見せた事が真実かどうかは定かではないが、偽りである証拠もない。

そして、夢の中のポケモン・ダークライと呼ばれたポケモンが言った言葉がクロノの動揺を誘う。

『これが貴様を知るべき真実だ』

その言葉が常に彼の頭を回り続ける。

その言葉が真実かを確かめようとした。ケルアに聞こうとしたが、今回の事件の後処理の追われここ数日まともに話をしていない。

ルインやラティアスに聞こうと思っても、事件以来姿を見せない。

「クソ……何なんだよ……」

今の彼には、そう呟くしかなかった。

無機質な部屋のイスに腰をかけたクリアスがいる。

味気ない部屋には、スチール製のイスとテーブルのみがあるだけ。体を動かす度、手に付けられて手錠の鎖が擦れる音が部屋に響く。

事件の後、クリアスは自ら警察に自首し、知りうる全てを話した。アクア団が何を目的にしたのか。彼が過去に何をしたのか。その中にはデボンコーポレーションを襲ったことも含まれていた。その話を聞いたダイゴが平静を保てる訳がない。怒りに囚われたダイゴに、右頬を殴られ彼の頬は赤くはれ上がっていた。

「これで……良かったんです……。これで。」

小さい言葉で彼は、自分に言い聞かせた。過去に起こした自分の罪を償うため……

他愛のない会話を楽しむアカネ。対話の相手は、実の父親だった。

しかし、素直に喜べないのが実情だった。

巨大なガラス越しの対話。二人っきりの会話ではなく、看守がいる中の会話。しかし、それで良かった。初めて彼女は『家族』の絆を味わっていた。

〈事件後〉

マグマ団の二つ目のアジトを鎮圧したポケモン協会。

その中には、非戦闘員や学者。マグマ団にかかわった全ての人間を一時的ではあるが逮捕した。その中の科学班のリーダーがアカネの父親だった。

彼は、とある学会で自分の仮説を全否定された。

『ポケモンによる世界創造論』

それが彼の掲げた理論だった。

しかし、彼の話为谁もまともに聞く者はいなかった。

夢物語、あり得ない、良い茶番だった。そういった批判を彼は受けた。

そして、彼は自分の仮説が正しい事を証明するためにマグマ団を利

用した。

幸か不幸か、学会の学者達は今回の事件を前に彼の理論が正しかった事を知った。

しかし、彼自身このような事態になろうとは思ってもよらなかった。だから、自らの罪を受け入れた。そして、実の娘の思いを知った。

こうして、アカネは新しい自分の居場所を掴んだ。

夢にまで見た家族を今、味わっていた。

この世界とは違う空気が流れていた。

あり得ないほどの広い空間の中心にダークライはいた。

ダークライだけではない。ラティオスとラティアスもそこにいた。

「いいのお兄ちゃん？あいつの処に行かなくて？」

兄の顔を横から覗き込むラティアス。

「今、私がクロノの前に行けば、彼は私に答えを聞きに来る。でも、それではダメなのだ。彼がもっとも嫌う者から真実を聞かなくてはならない……」

強く瞼を閉じるラティオス。しかし、その心境は辛く、拷問にも似ていた。

そして、その空間にさらなる来客が現れる。

今回の被害者達。そして、人に力を貸した巨人の鍵達か……

第29話 「道々それぞれが抱える道の先」(後書き)

つ・い・に・来たー俺の時代!

クロノ「うるさい!このアホ!」

今の俺はアルセウスすら凌駕する存在!

アカネ「だから何なの!?!」

いやーパソコンがついに来てね。うれしくてつい。

クリアス「それはそれは。」

だから、これからは投稿スピードが上がるはず。

クロノ「そう信じるよ。」

第30話 「後日談〜終わりは始まりを告げる〜」 (前書き)

久々に長めの話です。

第30話 「後日談〜終わりは始まりを告げる〜」

平和は掴み取るよりも維持するほうが大変だ。

そんなことは誰もが知っているが、誰もがすぐに忘れる。しかし、今のケルアはその言葉を身にしみて感じていた。

久々の我が家の書斎のイスに身を任せ疲れをとるケルア。時刻は深夜を回り妻は既に床についており、メイド達も一部の者を除いては大半の者が夢の中に入っていた。

ホウエンを襲って大事件から数週間が経過し、人々はいつもの生活に戻るために日夜努力していた。もちろんケルアもその一人だった。ポケモン協会の会長として、ウィールアスコレポレーションの社長として彼が今出来ることを全て行っていた。会社の業務と協会会長の仕事。そして被害にあつた町の復興作業。大量の仕事に追われ着かれないほうおかしい。

そんな彼にセバスは一杯のコーヒーを彼に差し出す。

「ああ、すまな・・・」

「旦那様、少し無理をしすぎなのでは？少しはご自身のお身体のことをお考えください。」

主の身を案じるセバス。ケルアの身を案じているのは執事としてではなく一人の人間としてだった。

背凭れに身を任せ、右手で顔を覆うケルア。そして重たい口を開く

「分かっている。しかし、あいつに。クロノにホウエンを救わせて私がそれに便乗するのはあいつに申し訳がたたない。少なからず、我々はいつが死ぬような思いをし、この地方を救ってくれたんだ。後の事ぐらいは我々大人が努力しなくてはな。」

そして、コーヒーを口に含む。
口に広がる独特の香りが、彼の疲れを癒していく。そして、微量の砂糖がコーヒーの味を引き立てる。ケルアが好きな味。長年一緒にいたセバスだからこそこの味を出せる。

「実に旨い……」

思わず口に出してしまう本音。

そんな時だった。部屋に響くドアを叩く音。

セバスが扉をあけると、部屋の外にはクロノの姿があった。

「これは坊ちやま。こんな夜更けにどうされました？」

セバスの問いには答えず、部屋に入るクロノ。そして、ケルアの前まで歩いていく。

服の裾から見え隠れする包帯で巻かれた右腕。傷の中には縫うほどモノもあり、包帯越しでも痛々しいのが分かる。

「疲れてるのに悪い。でもちょっとだけ、時間をくれ。」

「何かあったのか？」

まじめなクロノの表情にケルアも疲れを隠してそれを聞く。

「……兄貴は、本当はあいつに。カズキさんのせいで死んだ訳じゃないんだろ？」

クロノのその言葉に驚く二人。

「…………誰から聞いた…………。」

ケルアのその言葉が意味するものをクロノはすぐに理解した。真実だった。ダークライの見せたモノは全て本当だった。

「なんで教えてくれなかった？また俺だけ蚊帳の外かよ…………。」

力の入る両手。右腕の傷が開き、包帯を赤く染めていく。

「…………明日、昼過ぎに教会墓地に来なさい。今日は遅い。もう寝なさい。セバス、こいつの腕を見てやってくれ。」

「はい…………では坊ちやまこちらへ…………。」

セバスに連れられ、クロノは静かに部屋の外出ていく。

再び、部屋には静寂が戻る。

湯気の立つコーヒーを見ながらケルアは考えた。そして、電話の受話器を取り、ある人物へ電話をかける。クロノが忌み嫌っていた『彼』に…………。

眠れなかった。否眠れる訳が無かった。知らされたい事が偽りだった。夢だと思っていたことが真実だった。

カズキさんは、無実だった。むしろ兄を守ろうとしてくれていた。

「馬鹿みただな俺…………。」

一人相撲を今までしていた。一人で彼を恨んでいた。一人何も知らされなかった。ずっと一人蚊帳の外だった…………。

自然と涙が流れた。『やはりここには俺の居場所がないのか？』そ

う思えてしかただなかった。

憎らしいほどの晴天。雲ひとつなく、静かに響く波の音が心を静めていく。

正午を告げる協会の鐘の音が水の都に響き渡る。

協会墓地のベンチに腰掛けるクロノ。普段は物静かなこの場所だが、今日は違っていた。

喪服に身を包んだ人が墓地の一角に集まり、今は動かないその思い人と最後の別れを告げていた。

そんな、人々を見るクロノ。過去の自分を思い出し今までの自分の行いを恥じていた。

「今まで何してたんだろうな……。全然強くなってねーや俺……」

三年間。そんな長い期間ジヨウトのとある人に弟子入りし、心身鍛えた。それで一人前になったつもりだった。しかし、何も知らされず、何も聞かされず、無実な人に理不尽な怒りをぶつけていた。そんな、クロノの前に近づいてくる一人の女の子。

「お兄ちゃん一人？」

「ああ。君は？」

突然の質問にも答えるクロノ。

「私は一人じゃないよ。お母さんとお父さんと一緒だよ。」

「……そっか。」

少し切なくなるクロノ。この女の子のように、家族で大切な人を弔ってあげられなかった。そのことがひどく彼の胸を苦しめている。

「……お兄ちゃんも大切な人が無くなっちゃったの？」

無垢な心だからこそ、核心を突いてくる質問。しかし、クロノはその質問を隠すことなく答える。

「……すごく前にな……。俺のお兄ちゃんをね。」

「優しい人だったの？」

「ああ。すごく優しく、俺の目標だった人だった。」

「へえ。私のおじいちゃんもすごく優しい人だったよ？ただ、この前ポケモンが暴れた時に無くなっちゃった……。」「

その言葉を聞き、愕然とするクロノ。誰も犠牲にしてない。そう思っていた。しかし、あれほどの災害で誰も無くなっていないほうがおかしい話であった。

そして、両親のもとに帰っていく女の子。しかし、帰っていく時女の子はクロノに一言話した。

「ありがとう、お兄ちゃん。おじいちゃんはお兄ちゃんに助けられただよ。」

「!」

そして、駆け足で両親の元へ帰っていく。

『ありがとう』今のクロノは重く、辛い言葉だった。肩に大きな手が乗る。ケルアの大きな手。ケルアの手には、生前カイトが好きだった花が。そして、ケルアの後ろには、今まで憎んでいた男力ズキの姿があった。今はポケモンレンジャーの制服ではなく、普段着に袖を通している。

「……待たせたな。」

「いや……。良い話し相手がいたから大丈夫だった……。。」

気分は明るくなれなかった。ベンチから立ち上がり、カズキにその視線を向ける。

「久しぶり……。。」

「……どうも。」

どこかぎこちない挨拶をし、三人はカイトが眠る墓前に足を運ぶ。今無きその人に祈りを捧げる三人。それぞれの抱える思いは違えど、彼を思う気持ちは何も変わらない。

「……お前にカイトの本当の最後を告げなかったのは、カイトが死ぬ前から私たちに言っていた事なんだ。」

祈りを終え、クロノに話し出すケルア。そして、話は続く。

「カイトには、お前と同じように不思議な力をもっていた。あいつの話では、未来を見ることのできる力らしい。そして、その力であいつは自分の死期を悟った。そして、あのミッションに参加する前に私たちにお願をしてみた。『クロノには、俺の死の真相は伏せ

ていてほしい』と。」

「なんでだ？」

その質問に答えたのはカズキだった。

「それはクロノくんの力のためだよ。先輩はエンテイのせい自分が死んだことを当時に君に教えたら君がポケモンを恨むのではないかと心配していたんだよ。」

「だから、俺には嘘を教えてカズキさんが、俺に恨まれるようにしたと？」

「君が、ポケモンを恨み、その力がポケモン全体の脅威にならないように三人で考えた結果だったんだよ。」

真実を隠していた理由は分かった。しかし、クロノは一つ疑問に感じていた

「なあ。兄さんは未来を予知できたんだろ？なのになんで、死ぬ事を回避しなかつたんだ？」

「すまない。そこまではあいつは話してくれなかった。しかし、あいつは自分がああのミッションで死ぬことが最善であると言っていた。」

立ち上がる三人。それに呼応するかのようになり、協会の鐘の音が再び時を知らせる。

そして、協会の墓地から離れていく。何かつつかえが取れたよに気

持ちが楽になっていた。

『そう……。お兄さんそんなこと言ってたんだ。』

「ああ、兄さんはどんな時も俺を心配してくれていたんだ。」

その夜。クロノは久しぶりにアカネと連絡を取っていた。

『ねえ、クロノ。そうになるとやっぱりルネシティに行くの？』

クロノが見たあの夢の話をアカネとクリアスにはしていた。

ダークライが見せたあの夢が真実であった。ならば、目覚めの祠で待っていると言う話も信憑性がある。

「ああ。でも、明日のクリアスの裁判の結果を待つてからだな。」

『うん。そうだね。』

クリアスがつかり、その判決が明日行われる。その判決次第でクリアスはポケモントレーナーでいられなくなってしまう。つまり、彼は自分のポケモンと離れ離れになってしまう。一生……。

しかし、裁判が終わるまで彼らはクリアスとの面会は禁止されている。ただ、不安が二人を襲う。

だが、今の彼らのは、クリアスを心配するしかできなかった。

一際高いテーブルから、罪人を見下げる裁判官達。その中にはポケモン協会の現会長・ケルアの姿もあった。罪人として裁かれているのは、今回の事件の犯罪組織に身を置き、そしてその事態の收拾に

尽力を尽くした人物・クリアスである。

手にはもちろん手錠がしてあり、この部屋の警備は一際厳重になっていた。

クロノたちもこの部屋に入るのに、何回もの検査を受け、拳句ポケモンの入室は出来ず、外の警官に預けているほどだった。

「……以上の事から、クリアス少年は今回の事件を収拾するために力を貸した功労者であり、その行いは評価に値します。」

クリアスの弁護人が彼の罪を軽くするために裁判長を説得する。

クリアスが捕まって数日後。ケルアは彼のために弁護人を一人付けた。彼が全ての罪を認めても、彼が事件を収拾するために力を使った事は事実。弁護人はそんな彼へのケルアからのお礼であった。

しかし、ケルアにも役職上、彼の罪を裁かなくてはならない。ポケモンを使った犯罪ならなおのこと。そこに、ケルア個人の情は入れてはならない。そして、他の裁判官と出した判決が言い渡される。

「被告人クリアス・キャスパニア。今回の超古代ポケモンを悪用とし、町へ与えた被害は甚大なものである。君個人が与えたものではないにしろ、アクア団として暗躍していたことには変わりはない。そして、デボンコーポレーション社長への暴行は重罪にあたる。しかし、その事件への收拾にあたったジムリーダー達と協力して、それをおさめたことは評価に値する。よって、我々が下す判決は」

一息入れる裁判長。そして判決が言い渡される。

「これより5年間。君は公式のポケモンバトル及びコンテスト等の公式機関でのポケモンの使用を禁ずる。そして執行猶予5年を言い渡す。」

その判決を聞きクロノは小さくガツポーズをした。
公式でのポケモンの使用を禁止されてはいるが、実質無罪と同じことだった。

ほどなくしてクリアスは解放された。そんな彼を、クロノとアカネが迎えに来ていた。

クリアスは、旅をしていた時の服に身を包んでいた。

「よ！久しぶり。」

「お帰り」

久々のクリアスの顔を見て二人は彼に言う。

「ご迷惑おかけしました。」

荷物を持ち、二人に頭を下げるクリアス。

「別にいいよ。それよりさっそくで悪いけど、ちょっと付き合ってくれ。」

「ええ。分かっています。……あの話は本当だったわけですね？」

「ああ……。ちょっと御挨拶とまいりますか。」

そして、三人は自分のポケモンにまたがり、夢の中で告げられた場所・ルネシティに向かっていった

第31話 「対話く世界のありよう」 (前書き)

最近前書きのネタが尽きてきました。

あ、前からなかったか……

第31話 「対話く世界のありよう」

歴史を色濃く残していた町・ルネシティ。

今となつては廃墟以外のなにものではない。しかし、ポケモン協会など様々な機関の人間がこの町の復旧に全力を尽くしていた。この街だけじゃない。フエン、キンセツも今回の事件により被害を受けた。その町も少しずつだが、復旧してきている。

しかし、そんな復旧していくルネシティには誰も誰もいなかった。町を直す作業員が誰ひとりいない。残っているのは作業機器だけだった。

そんな、光景を前にした3人。しかし、驚きはしなかった。

目覚めの祠の入口に立つ3人。そしてクロノが、入口向かって言う。

「来たぞ、ダークライ。」

クロノの声を、祠の入口の闇が吸い込む。

そして、入口の前の『空間』に変化が起きる。

その空間は、まるで鏡を割るように割れ、『ここではない空間』が顔を見せる。

空間の奥は、説明のしようがない色をしていた。人の言葉で言うなら、黒系の絵具を雑に混ぜたような色だ。

そして、その中から、銀髪をなびかせながらダークライが現れる。

「来たか……。ならばついてこい。」

そして、ダークライの後をついて、ここではない空間の中に入っていく。3人が空間に入ると、割れた空間は巻き戻したように破片が、元の空間を構成していく。

ダークライについていく3人。そして、異世界の道が終わり彼らは元の世界に戻った。

そこは、確かにルネシティにある目覚めの祠の中だった。しかし、部屋の広さが異常だった。

奥行き、広さ、高さ。全てが想像していたものより広がった。

そして、なにより3人が驚いたのはこの部屋の中にいるポケモン達にだった。

レックウザ、グラードン、カイオーガ。そして、レジスチル、レジアイス、レジロック。ラティオス、ラティアス。

今回の事件に関わった全てのポケモンがここにはいた。

そして、クロノは少しばかりであったが、偏頭痛に襲われる。そんなクロノの頭に聞こえてくる

『・・・が、特・点。』

『・・・我を保・・・会・・・の・・・初・・・か・・・』

頭に響く知らない声。しかし、この声の正体は見当が付いていた。

「すまない。彼は力に目覚めて間もない。念で話すには控えていた
だきたい。」

痛みをこらえるクロノを見て、ラティオスがほかのポケモン達に言う。

すると、クロノの偏頭痛はおさまり、『彼らの声』も響かなくなった。頭を押さえていた手を放し、クロノは再び超古代ポケモンを見る。

「そうか。力に目覚めたばかりだったな。では貴様らの言葉で話すとしよう。」

今度は人の言葉で話すレックウザ。

「やはり、似ているな……。彼らが生きているようだ。」

そう言いレックウザは彼らを見つめる。しかし、レックウザが見ているのは、クロノ達ではない。『彼らによく似ている別人』。そう、もういない彼らの知っている別人達を見ていた。

「無駄話はいい。本題を話すぞ。」

感傷に浸っていたレックウザに言うダークライ。そして、呼び出したクロノ達に向き直り、話し始める。

「では、本題だ。特異点達よ。今我々、この世界を作った者たちはこの世界の行く末について対立している。」

ダークライの話聞くクロノ達。しかし、アカネがダークライの話に割り込む。

「ダークライだっけ。話の前に何個か聞きたいことがあるの。」

「……………良いだろう。何が聞きたい？」

胸に手を当てるアカネ。そして口を開く

「クロノが特別な力を持っているのは知ってる。なら、私たちにもそんな力があるの？そして、なんであなたは私たちを『特異点』と呼ぶの？それと、この世界の行く末と私たちが何の関係があるの？」

アカネの質問を聞き、一息つくダークライ。そして、その質問に答

えていく。

「そうだな。貴様らは知らないことが多すぎる。そこから話している。まずは貴様たちの力ついてだ。」

「その話は私たちのほうが適任じゃない？」

話し始めたダークライにラティアスが横やりをいれ、代わりに話続ける。

「まずは、茜色の髪の子。あなたの力は、この中で一番強力でもっとも危険な力。あなたが持っている力は『心を現実にする力』。」

「心を現実にする力？」

「そう。あなたは心から願った事を現実の事象にあらわすことができるの。でも、この力を使えば使うほどあなたを蝕んでいくわ。全てを蝕まれた時、あなたは笑うことも怒ることも、彼を愛することも出来なくなるわ。」

「……つまり、心をなくすってこと？」

「簡単に言えばそうなるわ。具体的に言えば、植物状態になるわ。」

その話を聞いたクロノ。そして、ラティアスに怒鳴る。

「ちょっと待てよ！望んで手に入れた力でもないのに、そんな力にアカネは振り回されなきゃなんないんだよ！心をなくすってなんだよー！」

愛する者の身を案じて怒鳴るクロノ。しかし、そんなクロノをラテ
イアスは鼻であしらって話を進める。

「話は最後まで聞きなさい。別に力を抑制する方法はあるわよ。次
は、そのイケメン。あなたの力は……。もう知ってるわね？」

「……。ええ。この力とは長い付き合いですから。」

そう言い、頷くクリアス。そして、二人に向かい、自らの口でその
力の全貌を話す。

「今まで黙っていました。私はポケモンの考えている事が手に取
るように分かるんです。」

「つまり、心が読めるってことか？」

「そう解釈してもらって構いません。」

クリアスの力に質問するクロノ。クリアスもその質問に答える。

「で、一番複雑なのがあなた。前にも話したけど、あなたは生き物
の心を操る事が出来るの。今は、『はい』を『いいえ』にする程度
だけど、本当に怖いのはあなたの力が完全に目覚めたときね。」

「これで、まだ強くなるのか？」

「ええ。その力の本当の力は『対象の心を作り変える』が出来る力
よ。」

「つまり、相手を別人に出来るってことか？」

「ええ。可能よ。」

淡々と答えるラティマス。そして、自分の知らなかった力を知り驚きを隠せずに行った。

そして、またダーククライが語りを変える。

「では、次の話だ。残り二つの質問は同時に説明する。まず、なぜ貴様たちを『特異点』と呼ぶかだ。それは、貴様たちが人の身でありながら、我々に近い力を持つているからだ。しかし、我々のように無限に近い命を持たず、有限の命しか持たない。人の身でありながら人にあらず。我々と違う姿をしながら我々を凌駕する力をもつ。ゆえに貴様らを『特異点』と呼ぶ。」

一息つき、ダーククライは再び話し始める。

「そしてここからが本題だ。今この世界を創世した我々は、貴様ら人間の存在について三つの意見に分かれている。一つは、人間との共存を反対する意見。人間を全て消す事を望んでいる者たちだ。二つ目は、人間との共存を望む意見。最後は中立。この世界は人間によって汚され始めている。世界だけじゃない。ポケモンに対してもある種の脅威になりつつある。しかし、こちらから一方的に人間を消すことは、悪に他ならない。ゆえに我々は人間との対話を考えた。そこで、我々に近い力を持った貴様ら『特異点』と対話をする事にした。人の身であり、純粋な眼でこの世界を見ることのできる貴殿たちなら中立な意見を言えると考えての結論だ。」

ダーククライから話されるこの世界の今の実情。自分の見ていた世界だけが全てではなかった。自分たちが今までこの世界にそこまでの関心が無かった事に気がついた。

「なら、ダークライ俺からも質問だ。なんで夢の中であんなもんを見せた？エンテイもこの世界を作った仲間の一人だろ？」

クロノがダークライに質問をする。腕を組みダークライはそれに答える。

「それは、真実を知った後でも貴様がポケモンを信じられるかを試すためだ。何より、遅かれ早かれ貴様が知ることになる真実には変わりない。そして、あの時のエンテイの行いは我々の間でも否定的な意見が多い。もっとも彼を支持する者もいるがな。」

その会話のあとしばらく無音な時間が続いた。そんな無音を破ったのがクロノだった。

「なあ。その話しあいは、今すぐか？出来るなら俺に時間をくれな
いか？」

「いいや？しかし、出来るならこのまま創世主の元に行こうと思っ
ていた。」

「話し合いに行く。でも、俺たちはまだこの世界を知らなすぎる。この世界に生きる人たちともろくに知らない。だから、せめてカン
トー、ジョウト、シンオウを旅させてくれないか？その旅の中で、
これまで以上に人と話、そいつがポケモンをどう思っているか。俺
たちが呆れるくらい人はこの世界に不必要な存在かを確かめさせて
くれ。それと、お前たちの仲間ともあって話をしてみたい。」

クロノの提案を聞き考えるダークライ。そして、

「……いいだろう。しかし、シンオウのテンガン山は最後にしてもらおう。あそこには創世主が住まう場所だ。最初はジョウトあたりから行ってもらいたい。」

「ああ。ありがとう。」

「なら、祠の入口まで送ろう。」

ダークライの先導され、三人は祠を後にした。

「ねえ。クリアスの事は言わなくていいの？」

「彼自身知らない様子だったからな。」

そうラティオスとラティアスが話す。彼の後ろ姿を見ながら話す。そう。彼らは知っていた。クリアスの出征の秘密を……

第31話 「対話、世界のありよう」 (後書き)

ええ、クロノ達が初めて創世者たちと会いましたよね。

グラードン達「…………俺たち完全に空気だったよな？」

ええ。空気でしたね。

レックウザ「俺は少ししゃべったな。」

カイオーガ「私はどうやってあそこにいたんだ？」

浮いてた？

カイオーガ「なんで疑問形何だ!？」

なんとなく？

第32話 「バトン」思いのバトンは受け取った」（前書き）

仲間とのバトンを受け取ったクロノはどうなっていて行くのでしょうか？

第32話 「バトン」思いのバトンは受け取った」

晴れ渡る空。額に汗し、町を直している人々。数週間前の事件が嘘のように人々は明るく未来に向けて歩いていった。それが今のフエンタウンの姿だった。

そんな人の中にクロノもいた。無論、手持ちのポケモン総動員してこの町の復興に強力していた。

数日前にダークライ達にこの世界の現状を、自分たちが特別な存在であることを聞いた。

そして、クロノは再び各地方を旅すること決めた。しかし、壊れた町をこのままにはしておけなかった。だから、町を直してから旅に出ることにしたなだった。

しかし、今この場にはアカネやクリアスの姿はない。ダークライの話の後、アカネはラティアスに自分の力の抑制方法を聞くために再び、目覚めの祠に足を運んでいた。

クリアスは、アクア団の残党を集め本来の姿である『自然保護協会』に戻すために努力していた。その努力が実ってか、自然保護協会は以前ほどの信頼こそないが、再びその活動を開始した。そして、クリアスはその代表として抜擢された。

「おーい！坊主！少し休憩入れ！」

「あ、はい！」

木材を運んでいたクロノに、大工の頭が休憩を進め、クロノは休憩に入ることになった。

そして、ポケモン達と木陰で一休みすることにした。

「お疲れさま。」

アカネの声とともに頬に冷たい感覚が走る。

振り向き、こちらを見ているアカネから缶ジュースを受け取るクロノ。そして、その横にアカネが腰掛ける。

「汗びつしよりだね。終わったらシャワー浴びないとね。」

「それより、そっちは大丈夫か？」

「うん。ラティアスとグラードン達のおかげで。」

そう言い、両手首着いている腕輪を見せるアカネ。

腕輪は、淡い銀色をしており、細かな装飾が施されている。そして一番目を引くのが、中心に着いた朱と蒼色をした宝石だった。

「なあ。その石って・・・」

「うん。グラードン達を操ることのできる石の一部だよ。」

驚くクロノ。無理もない。あの石の一部だけとはいえ、この石を使えば再びグラードン達を操る事が出来る。

この腕輪を悪用されたら、今回のような事件が再び起こりかねない。

「でも大丈夫だよ。グラードン達は私たちを信じて、石の一部を預けてくれたんだよ。」

そう言い、アカネは大事そうにその腕輪を見つめる。

この腕輪には、彼らを信じてグラードン達は石の一部を譲ってくれた。これを守るとはアカネに課せられた義務だった。そして、それはアカネ自信が選んだ道だった。

「それより、アカネは何しに来たんだ？手伝いに来たわけでも、腕輪の報告だけじゃないだろ？」

「うん。この後の事をちょっと話したくて。」

アカネの言う『この後』が意味する事をクロノは理解できなかった。

「ねえ。クロノは町の修復が終わったら、そのまま旅に出るの？」

「ん？そうだな……。少しは家にいると思うけど、精々一週間つてとこかな？なんでだ？」

「なら、ホウエンリーグには出ないの？そのためにジム戦してきたんでしょ？」

そして寝ころぶクロノ。懐から、ジムバッチの納めているケースを取り出し中身を見る。三つ空きがあり、今のクロノにはリーグの出場資格はない。

そんなクロノのバッチケースをアカネが取り上げる。

「あと少しだね。なら私が少し手伝ってあげる。」

そして、アカネは自分のバッチケースから二つのバッチを取り出し、クロノのケースに移す。

「お、おい。それは違反だろ。」

アカネのその行為に戸惑うクロノ。しかし、アカネは何の躊躇もなくバッチを移しクロノに手渡す。

「これは、私からのお礼。クロノだけ、なんのお礼もないのは不公平でしょ？だから私から。あと一つはルネジムのバッチだけだから、ギリギリ間に合うでしょ？」

リーグの締め切りまであと三日に迫った今日。

こんな大事件があった後に開催するのを反対する意見もあったが、こんな時だからこそあえて開催することにした。そして、アカネの手助けがあり、今のクロノなら期限内にリーグの登録は可能だった。

「では、最後の一つは私からのお礼として、受け取ってください。」

「クリアス。いつここに？」

風のように現れたクリアス。その手には、リーグ出場に必要な最後のバッチが握られていた。

そして、そのバッチをクロノのバッチケースに収める。

「おいおい。お前ら。何勝手にいれてんだよ。」

「いいんです。クロノにはリーグに出てほしいんです。私たちの代わりに。」

クロノの横尾に座るクリアス。

「前々からアカネさんと話してたんです。クロノの夢を今回の事件が潰してしまったのではないかと。どんな使命があっても夢は叶えてほしいんです。」

「私たち二人で考えた結果の答えだから、受け取ってクロノ。」

バッチケースの握るクロノの手に二人の手が重なる。

確かな思いが伝わる。二人がどれだけクロノを思っているかが伝わる。

「……OK。お前たちの気持ち受け取ったぜ。」

「あと、これはお願いなんだけど……。この子も連れてって。」

「私の剣もお願いします。」

そう言い、二人が一つずつのボールをクロノに差し出す。

中には二人のパートナーである、ビレッジとエンペルトが入っている。

「私は隣には入れないけど、この子がクロノの力になってくれるはずだから。」

「試合中は主をお守り出来ません。ですから、せめて私の剣をお使いください。」

二人の思いと、力の結晶のポケモン。

「ったく。こうなったら否が応でも勝つしかないな！」

そして、三人は腕を高く上げ、拳を合わせる。

今のクロノには恐れはなかった。誰にも負ける気がしなかった。

否、負ける道理がなかった。信じた友が、自分を信じてパートナー

のポケモンすら貸してくれた。心が満たされた。

誰もいない選手控室。否、一人しかいない。テーブルには6個のモンスターボールが並べられ、ポケモン達も戦う時を静かに待つ。

観客が歓声を上げる。誰もいないそのフィールドに立つべき猛者の登場を今か今かと待ちわびていた。そして、観客の熱気はピークに達していた。

なぜなら、今から行われる大戦は、現ホウエンチャンピオンと、ここまで様々な猛者を倒してきたチャレンジャーとの対戦だからだ。

「ふう……。」

胸に手をあて、自分を落ち着かせるチャレンジャー。

そして、控室にドアをノックする音が響き、スタッフが部屋に入ってきて来る。

「そろそろ、お時間です。準備のほうをお願いします。」

「あ、はい。」

「がんばってくださいね。英雄さん。」

去り際に、チャレンジャーを茶化すスタッフ。

そして、テーブルに並んだ6個のボールのベルトに納め、控室を後にするチャレンジャー。

第32話 「バトン」思いのバトンは受け取った」（後書き）

（注意）

今から話す事は今回のあとがきは本編と何の関係も関わりもありません。あと、想像力と作者と笑いのつぼが同じじゃないと少し意味不明になります。

突然だが君たちは『星間飛行』って曲のサビをしっているかい？

クロノ「????なんだよ急に？」

アカネ「たしか……。『流星にまたがってあなたに急降下』って歌詞だったよね？」

では、想像してくれ。その曲に合わせて、『流星群』が発動した瞬間を！！

クロノ&アカネ「……………あんまり急降下してほしくないかも。」

この前、バトレボ中に流れて、ちょうど流星群が発動中で少し笑った。

第33話 「火花散らして、畏怖と狂喜の狭間で」 (前書き)

バトルスタートで、しかも前後篇!!
どうです? じらされる感じは?

アカネ「悪趣味。」

クリアス「鬼畜作者ですね。」

っさいな。まあちよいとした理由がありまして、あえて前後篇です。
ご了承を。

第33話 「火花散らして〜畏怖と狂喜の狭間で〜」

闘士と信念。そして信頼と忠義。

様々な思いを込め、トレーナーとポケモンはここまでともに歩んできた。夢を抱きここまで来た者。名声を欲しここまで来た者。誰もがここでは己のために戦った。

しかし、彼は違った。ここまで送ってくれた友のため。自分を信じてくれたポケモンのため。今この場に立っていた。

対峙するのは、ハウエン最強のトレーナーダイゴ。

『さああああ！ついにこの時がきたぜ！チャレンジャークロノ！泣いても笑ってもこれが最後の闘いだ！準備とコンディションは万全か！？』

一際テンションの高い実況の質問。一回深呼吸しクロノは、その眼を開き答える。

「ああ！絶好調だ！！」

揺るぎない闘志を込め答える。

そして、トレーナーサークルに入るクロノ。

既にサークル内にいるダイゴと、本当の意味で対峙する。

「……ようやくこの時がきたよ。君を見た時からこうなるんじゃないかって思ってた。そして！今君はこうしてここにいる！さあ！挑戦者クロノ！君の戦略と知略の限りを尽くして挑んできてくれ！！そして僕はそれに全力で答える！！」

纏ってマントを脱ぎ捨てるダイゴ。普段からは想像できない覇気。

クロノが今まで感じたことがない空気。背筋が凍るように冷たくなつていくのが手に取るように分かる。

「いいね……。ジムリーダーなんて比べもんにならないじゃんか。だからこそ！俺も燃え上がるってもんよ！！！」

ダイゴの強さをすぐに察したクロノ。そして、押さえてた感情が表に出てきた。

強敵と戦える事に対して狂喜。

『さて！両者ともにエンジンが入ったことで！！いよいよバトルスタートだ！！準備はいいか！！行くぜ！！』

実況の声とともにまり響くゴングの鐘の音。

両者が投げるモンスターボール。

「僕の一番手はハガネールだ！」

ダイゴのボールから現れるハガネール。その巨体は圧巻の一言がふさわしい。

「アカネ！力を借りるぞ！！こい、ビレッジ！！！」

アカネのパートナーのビレッジがクロノの先方。

体格差ではダイゴに分があるが、それが勝敗に直接関係することは少ない。

「行くぞハガネール！」

ダイゴの指示に呼应し、ハガネールはその巨大な尾を叩きつけてくるが、

「図体がデカくて、鈍い！！そんなんじゃこいつには攻撃は当たらないぜ！ビレッジ！投げてやれ！！」

不防備なハガネールの尾を掴み、数倍もある相手の巨体を投げるビレッジ。

渾身の力を込めるビレッジ。そして、ハガネールの巨体を会場の外壁に投げつける。

外壁の崩れる音と立ち込める土煙。

「まだまだ！追撃しろビレッジ！！」

土煙の中から覗くハガネールの頭に向かって、飛び跳ねるビレッジ。しかし、余裕の表情のダイゴ。

「大爆発」

「貴様！このタイミングで！！」

光りだすハガネールの体。ビレッジもそれは理解していたが、空中では避けようがなかった。

そしてハガネールの体から全てを屠るエネルギーが溢れだす。客席まで飛ばされるビレッジ。

よもやリングまで戻る事は不可能なほどダメージを受けた。

『ダブルノックアウト！これは先が分からない展開になってきたあああああ！！』

選手以上に興奮していく実況と観客。

しかし、戦場に立つ二人にしか理解できない世界があった。

『隙を見せたら負ける』

『相手の上を行け』

同じ境地に立った二人。

数年チャンピオンとして君臨したダイゴと同じ境地にクロノは立っていた。

そんなクロノのバトルセンスにダイゴは畏怖していた。

チャンピオンとして、様々なトレーナーと戦ってきたが彼ほどセンスの高いトレーナーと戦った事はなかった。今までに感じた事が無い感覚がダイゴを襲った。

それは『恐怖』

初めてだった。タイプの相性で隙を見せたダイゴを完全に出し向けたと思っていた。

しかし、予期できなかったタイミングでの『大爆発』

油断できない。

気持ちがさらに高ぶる。血が沸騰していく。まだまだ、この闘いを続けていきたい。

そんな気持ちをクロノが抱く

それは『喜び』

「まさか『大爆発』を使う相手が来るとは。君は油断できないな。でも、まだまだこれからだ！」

「あんたの全力を見せてくれ！！こんなバトル滅多に味わえねえ！

！行くぜ、次はダチ公が預けた剣で行く！！」

クロノがフィールドにボールを投げ、クリアスのエンペルトが舞い降りる。

今度もクロノがタイプ相性で負けることになった。

ダイゴのポケモンはジバコイル。

「さて、僕の攻撃はもう始まつてるよ？」

ダイゴの言葉に反応したように無数の瓦礫がエンペルトに襲いかかる。

「ステルスロックかよ！！」

「ああ。幸い仕掛けるタイミングを君が作ってくれてね。」

ハガネールが土煙に埋もれた瞬間。その一瞬にダイゴは『ステルスロック』を仕掛けていた。

「だけどな！所詮奇襲は奇襲！二度も三度も同じ手は使わせねえ！エンペルト！！お前の美を見せてやれ！！」

クロノの指示に頷き、ハイドロカノンを噴射しながらその場で回転するエンペルト。

そして、その水はフィールドを包み、やがては巨大な水柱を作る。

「へえ。きれいな技だけど、それが攻撃にどうつながっていくのかな？」

「黙って見てもいいが、技が終わったらあんたの負けだぜ？」

「それを聞いて黙って見てはられないね。ジバコイル！10万ボルト！」

そして放たれる10万ボルト。しかし、その攻撃はエンペルトには届かなかった。

攻撃を阻んだのは、ダイゴ自信が仕掛け、水柱によって巻き上げられたステルスロックの岩。

「ステルスロック。利用させてもらったぜ。さて。下ごしらえは済んだし、行かせてもらう！！エンペルト！！！」

水柱が消え、中から現れるエンペルト。

水柱を構成していた水は、未だ中を漂っていたが、刹那。フィールドは銀世界に姿を変える。

エンペルトの吹雪がフィールドに満ちた水を凍らせた。無論水浸しになっていたジバコイルも例外ではなかった。

「これだ、封じたつもりかい？氷も水も電気を通すなら氷漬けでも関係はないよ！ジバコイル！！！」

しかし、ジバコイルの電機は氷を抜ける事はなかった。

「あんだ。水はなんでも電気を通すとも思ってたのか？不純物が限りなく0の水は電気を通さない。無論氷も。終わらせる！！エンペルト！！！」

的と化したジバコイル。そして、エンペルトの鋼の翼が一閃し、氷ごとジバコイルを切り裂く。

『これはまさかまさかのどんでん返し！！まさかダイゴが最初に黒星がつくとは！！』

ジバコイルをボールに戻すダイゴ。

こみあげていく恐怖は次第に大きくなり、反応を鈍らせていく。ステルスロックは今の攻撃でその効力を失った。

「さすがだね。今の攻防でステルスロックを消して、僕に勝つなんて。」

「……俺一人なら負けてた。でも、仲間が。ポケモンが俺を後押ししてくれてる限り俺に負ける道理はない！！」

天を指差すクロノ。

その指は、空に浮かぶ太陽に向いていた。

彼の戦う姿を、彼を知る全ての人が至るところで見ている。

あるものはテレビ。あるものは会場。またあるものはラジオで。そして、それを見ている者の心は一つだった。

彼に勝つてほしかった。彼に夢への一步を踏み出してほしかった。

「それが君の強さか……。では、続けよう！この頂上決戦を！」

「！！」

「望むところだ！！！！」

ダイゴの次のポケモン。空を舞う鋼の翼。エアームド。

海の中の鳥と宙を舞う鳥の対決。

速さの理はダイゴにあったが、弱点を付けるのはクロノだった。

「エアームド！速さでかく乱だ！！」

「速さだけじゃこの剣は折れえよ！！エンペルト！！」

速さでかく乱するエアームド。少しずつだが、エンペルトにはダメージが入って行った。

そして、エンペルトの攻撃を紙一重でかわしていく。しかし、一撃でも食らえば、そこで終わるのも事実。そして、勝負は動いた。

ダイゴはただ避けていたのではなかった。

水に浸食されたフィールド。照る太陽。言うまでもない。フィールドのコンディションはさっきの一戦で最悪になっていた。

そう。エンペルトの攻撃は透けられていたのではない。打点がずれていただけだった。

「今度は僕が君の攻撃を利用させてもらったよ。」

「チツ！」

「では、終わらせよう！！エアームド！！鋼の翼！！」

「迎え討てエンペルト！！」

ぶつかり合う、鋼の翼。しかし、踏ん張りの効かないエンペルトには部の悪い勝負だった。

軸のずれた一閃はいとも簡単にはじかれ、エアームドの翼がエンペルトを襲う。

そして、戦闘不能を告げるコールが響く。

しかし、エアームドも無傷ではなかった。飛ぶ事がやっとの状態であった。

『勝負は互角に状態に！！手持ちの数は同じ。しかし、ダイゴのエアームドはダメージがある！！これが今後の試合にどう影響するか！？目が離せない試合に私たちのハートは臨界点を超えそうだ！！』

エンペルトを戻すクロノ。そして、3体目のポケモンを出す。
ルカリオのガウエイン。

「ふん……。エアームドじゃ分が悪いか……。なら僕も。」

そう言いダイゴは、エアームドを戻し、新たなポケモンを出す。
そのポケモンを見ると、会場も、クロノも驚く。
ダイゴもルカリオだからだ。しかも、世にも珍しい色違いのルカリオだ。

『なななななんと！！同種の対決！！これは見ものです！！はたして、この勝負の行方は！？』

迸る火花。ルカリオ同士の対決の行方は……。

第33話 「火花散らして〜畏怖と狂喜の狭間で〜」（後書き）

ええ。いかがですか？VSダイゴの全編！

キシの知略を尽くして全速全身で書いています。

アカネ「で、なんで前後篇なの？」

ああ。それね。実はしばらく忙しくなりそうので、執筆活動が遅くなりそうで、とりあえずの分割で読者様に提供を。

クリアス「では、休刊ですか？」

いや、そこまではしないけど、この対決を一本にすると、もうしばらく後になりそうだったから、前後篇にすただけ。投稿が遅くなりそうなので、投稿はするよ。

ということ、しばらく、投稿スピードが遅くなるかも知れませんが、また次回

第34話 「終戦〜闘志の炎〜」 (前書き)

ついに決着が着きました!!

第34話 「終戦〜闘志の炎〜」

同種の対決は珍しい事ではない。トレーナー同士の対決なら高い頻度で起こる事がある。

しかし、この闘いが一段と珍しかった。

色違いのポケモンとの対決。

ごく稀に本来の体色が異なるポケモンが生まれる。色違いがどのようにして生まれるかは未だ解明されないポケモンの神秘の一つだった。

黄色い体色のルカリオ。ダイゴが繰り出したポケモン。クロノも同じくルカリオのガウエイン。

距離を詰めて戦っていたら、咄嗟に距離をあけ遠距離戦を繰り広げる。

一歩指示が遅れば相手の攻撃の嵐が吹く。息も着けぬこの勝負に実況すらも言葉を失った。

しかし、組み合った時、二人の指示が重なる。

「ブレイズキック!!!」

そして、2匹のルカリオの足に炎が宿り、2匹は上段蹴りを繰り出し、ぶつかり停止する。

固唾を飲み、二人のトレーナーの顎から汗の滴が垂れる。

「まったく。君と戦うと息が抜けないな……。いつぶりかな？
こんな闘いは。」

「その言葉、そっくりそのままお返しするよ。」

二人の会話が終わると同時に、2匹は距離をあける。そして、蒼い波導が2匹に集まる。集まった波導は、放たれるその時を待っている。

「波導弾！！」

放たれる波導弾は、互いにぶつかり爆煙が再びフィールドを覆う。視界ゼロの戦闘。トレーナー達は自分のポケモンの安否のみを気にしていた。

そして、爆煙の中から再び爆発音が響き、土煙がはれていく。クロスカウンターのように互いに殴りあった状態で立つ2匹。しかし、ガウエインは拳ではなく『波導弾』で攻撃していた。

勝者は一人。それはどんな時も揺るぎない掟。倒れる異色のルカリオ。

この、同種対決を制したのはガウエインだった。

『決まったあああああ！ルカリオ対決を制したのはチャレンジャークロノだあああ！』

しかし、ガウエインも满身創痕な状態だった。勝利を告げる実況聞くと、その場に片膝をつき、肩で息をつく。

「まさか、ルカリオで負けるとはね。予想外だったね。でも、君のルカリオも次は無理そうだね。」

「言われるまでもねえよ。ガウエインもういい休め。」

そう言い、二人は互いのルカリオを戻す。

これで、互いのポケモンの数と状況は同じになった。ダイゴはエアームドが、クロノはルカリオが。それぞれ戦闘不能ではないが、戦

えな状態で戻した。

今、二人が満足に戦う事が出来るポケモンは互いに2匹。どちらに勝ってもおかしくない状況だ。

そして、二人は互いに新たなポケモンをフィールドに出す。

「僕のポケモンはダイノズだよ！」

巨大な顔を思わせる容姿のポケモン。それがダイノズだ。

「ぶった切れ！！ルーカン！！」

ルーカン。クロノの持つ11体目のポケモンのガラガラだ。

フィールドに出たルーカンは、手にした骨を刀のように構え眼前の敵に闘志を燃やす。

「今度はこちらから行かせてもらおうよ！！ダイノズ！！」

ダイゴの指示に応じ、ダイノズは『ラスターカノン』をチャージし始めた。

そんなダイノズを前にルーカンは太い骨を構えたまま動かなかった。

そして、放たれるラスターカノン。

「一閃！！」

クロノの叫びとともに振り下ろされる骨。そして、切り裂かれたラスターカノン。ラスターカノンは何も無いところに向かい爆発する。

「ルーカン！疾風！！」

そして、風のように走るルーカン。距離を詰め、間合いは完全にルーカンの得意な距離だった。

「くっ！ダイノズ、『守る』！」

「遅い！！」

ダイノズの『守る』によるバリアが張られたが、意味がなかった。確かに『守る』は発動した。しかし、『守る』の効果が切れた瞬間、ルーカンが渾身の一撃をダイノズに放ち、この勝負は幕を閉じた。

『う、うおおおおおおお！まさに神速！この時代に生まれたサムライポケモン！！その名はルーカン！！しかし、サムライにチャレンジャー！！次はチャンピオンの最強ポケモンだ！！さあ！行くぜ！！』

実況のアナウンスを聞き、ルーカンもクロノも身を引き締める。次はダイゴの最強ポケモン。メタグロスだからだ。

「すごいねクロノくん！では、僕の最強ポケモンで君をお相手しよう！！行くぞメタグロス！！」

そして、放たれるメタグロス。鋼の体に人を凌駕した頭脳。鋼タイプの代名詞的なポケモンである。

「メタグロス！！コメントパンチ！！」

「ルーカン！！抜刀！！」

メタグロスのコメントパンチとルーカンの一閃がぶつかる。拳と刀。勝負は一瞬だった。倒れたのはルーカンだった。

『決まった！！サムライも鋼は切れなかったか！？これで両者後が無い！！この一千で勝負が着くぞ！！』

実況のアナウンスに呼応し会場はさらに熱気を増す。まさにピークを過ぎ、限界にすら達していた。無論、クロノもだ。

「いいぜ！！あんた最高だよ！！血が噴きあがる！！魂が叫んでるぜ！！あんたとなら登りつめられそうだ！！強者だけが見れる世界の頂きによ！！行くぞガレス！！」

ガレス。クロノが最も信頼し、もっとも長い間過ごしたポケモン。彼の最強のポケモンだ。

「君の言う、頂きにいけるか分からないが、僕も全力で行かせてもらう！！メタグロス！！」

「あいつを燃やすぜガレス！！」

フィールドの中心に走る二体のポケモン。

そして、メタグロスの腕がガレスを襲う。しかし、腕は虚空を切り、ガレスはメタグロスの懐に入り、怒涛の連撃を食らわせる。

「ガレス、フィニッシュ！！」

そして、メタグロスを上空に殴りあげ、無防備なメタグロスを蹴り

飛ばす。

飛ばされたメタグロスは、そのままフィールドの隅まで飛ばされ、土煙に覆われる。

『は、早い！これは決まったか！？』

ざわめく会場をよそに、ダイゴは涼しい顔をしたいた。

「余裕じゃねえか。」

「まあね。実際余裕だしね。」

「ああ？状況を見て言えよ。」

土煙が晴れ、メタグロスが顔を出す。

そのメタグロスを見たクロノは驚愕した。

ダメージが入ってない。

タイプ相性が悪いのは分かっていた

しかし、無傷な訳がない。ガレスが弱い訳ではない。

ダイゴとメタグロスが強すぎるだけだった。

「次は僕たちの番だね。メタグロス！！」

メタグロスの目が光、ガレスが見えない力に縛られる。

サイコキネシス。もっともポピュラーで強力なエスパークタイプの技だ。

そして、今度はガレスがフィールドの隅に叩きつけられる。

しかし、メタグロスとは状況が違った。サイコキネシスと壁にぶつかる二つのダメージがガレスの体力を奪っていく。

三度同じこと繰り返され、ガレスは瓦礫に沈む。

「もう立てないね。潔く負けを認めたらどうだい？なに、恥じることはないよ。ここまでよく戦ったよ。」

既に勝ち誇ったダイゴ。いや。会場の観客全てがダイゴの勝利を確信していた。

「……………。なに判定が下りる前に、勝ち誇ってんだよ。ガレス！！思い出せ！！お前は何のためにここまで来た！！」

クロノの声を聞き、閉じていた瞳を開き立ち上がるガレス。しかし、ダメージはすさまじく次の攻撃が最後であることは明白だった。

「どうあっても戦うのかい？…仕方ないね。メタグロス終わらせるぞ！！」

再びメタグロスの目が光るが、

「ガレス！！『地震』！！」

地震により、会場全てを土煙が巻きあがり、視界を奪うがメタグロスの『サイコキネシス』はガレスを捕まえ、再び地面にたたきつけられる。

「もう動けないよ。これで、今回の大会は終わりだ。」

「……………。ああ。終わりだな。あんたの負けでは！！」

再び揺れる地面。メタグロスの真下が震源地である。そして、メタ

グロスの真下から、現れるガレス。
その、両手足には炎が宿り、再びメタグロスを上空に蹴り上げ、上空でメタグロスの腹部を力の限り殴続ける。
そして、メタグロスの腹部を鷲掴みにし、手首の炎がさらに燃え上がる。

「ブラストバーン!!」

クロノの叫びを合図に、膨れ上がった炎は無防備なメタグロスを包み、上空でその身を焼き払う。

最初地面に着いたのはガレスだった。着地は失敗し、背中から落ちたが、今は片膝をつきながら身を起こしている。

ほどなくし、メタグロスも落ちてきた。そして、背中から落ちてきたが、ガレスのように起き上がることは起きることはなかった。

この瞬間、勝者を告げる鐘がなり実況と観客が叫ぶ。

『おおおおおおお!!! き、決まったあああああああ!!! この瞬間!!! 今、この瞬間!!! チャンピオンをその玉座から引きずり落とした!!!! 我々は今、目撃した!!!! 今ここに新たなチャンピオンが誕生した!!!! その名はクロノ!!!!』

実況のその声を聞き、安心したガレスはその場に倒れたが、それをクロノや他のポケモン達が押さえる。

「サンキューなお前ら。」

静かに、ポケモン達にお礼を言うクロノ。無論、聴力では聞こえていなくともポケモン達には聞こえたいた。クロノのその想いは……。

ポケモン達の回復の後、閉会式とチャンピオンの交換式が行われる予定だ。

閉会式が終わり、続いてチャンピオンの交換式が始まり、クロノとダイゴが同じ舞台上立つ。その場には、先の闘いでともに戦ったポケモン達もいた。

「では、新チャンピオンクロノ。今から君がこのホウエンのチャンピオンだ。それでは、このチャンピオンマントを。」

「あゝ。ちょっといいですか？俺、チャンピオン辞退します。」

そのクロノの言葉に会場がざわめく。

「実はこの、ジュカインとエンペルトは友達から借りたポケモンなんです。だから、今回の勝利は三人でもらわなきゃ意味が無いんです。ゲライント、アレスタン。頼む。」

二匹をボールから出し、会場へ飛ばす。

そして、会場で彼の闘いを見ていた二人を連れ来た。

「この二人が、いたから俺はダイゴさんに勝てたんだ。だから俺は今回は辞退させていただきます。」

そして、並ぶ二人の肩に腕をまわし寄せる。そんな、クロノを見て、笑う二人。

こうして、今年のホウエン大会は幕を閉じ、クロノ達は次の旅のためしばし羽を休める。

これから、起こる果てしない世界の闇に立ち向かうために……

第34話 「終戦〜闘志の炎〜」 (後書き)

ついにチャンピオン戦が終わりました。

クロノ「一応は勝ったぜ。」

アカネ「おめでとう!!!」

そして、少しの休憩の後、また冒険してもらいます。

第35話 「秘密事項」誰にだって秘密の二つや三つありますって」(前書き)

今回は完全にギャグなお話だけど、後々重要なものが何個か出てきています。

第35話 「秘密事項」誰にだって秘密の一つや二つありますって」

神はこの世にはいない。そうクロノは思った。

突然だった。アカネがその言葉を言わなければ、今日という日は安泰だった。

「ねえ。クロノの部屋見せてよ。」

中庭で家族とアカネ、クリアス達とティータイムを満喫していた時に、アカネがその言葉を口にした。

その言葉を聞いたクロノの手は小刻みに震え、背中には冷や汗すら掻いていた。

「ななななな、ナニヲ言ってるんDA?ベベべっべ別にななななな何にもないぞ?」

「なに動揺してるのクロノ?」

明らかに動揺しているクロノにアカネが言う。そんな中、中庭にセバスが大きな段ボールを持ってきた。

「坊ちやま。ご注文されていたものが届きました。」

「おお!!そうか!悪い。ちょっと席外すな!!」

そう言いクロノは、段ボールを持って早々と部屋に消えていって。そんなクロノを見た彼のポケモン達は、『ああ。またか』『かわいい』など様々な表情を浮かべていた。

「あの、クロノの部屋に何があるんですか？」

一緒にお茶を飲んでいたケルアに聞くアカネ。

「ん？いや、実は私も知らないんだ。母さんは知ってるかい？」

「ごめんなさい。私も知らないの。セバスはなに知ってる？」

突然話を振られたセバス。涼しい顔をしているが、背中には冷や汗をかいていた。

「あ、えーっと。私も、存じ上げません。」

『明らかに知っている』そうこの場にいた4人は思った。

今夜はクロノの家に泊まる事になったアカネ、クリアス。

夕食を済ませ、各々好きな事をしている時間。今、クロノはトレーニングのため町をポケモン達と一緒にランニングをしている。つまり今のクロノの部屋にはその主

がいない。

そんな、クロノの部屋の前にアカネ達がいる。

鍵のかかった部屋の力ギ穴をピッキングするアカネ。

「ここまでできてなんですが、やめませんか？これはプライベートの侵害ですよ？」

良心が痛むクリアスをしり目にアカネは楽しそうにピッキングを続ける。

「ええー。だって秘密にしてるほうが悪いじゃん。部屋くらい見た

つてねえ〜。」

「では、あなたが同じことをされても同じことが言えますか？」

「ん〜どうだろね。ん？」

クリアスではない声を聞き、振り向くアカネ。後ろにはにこやかな笑みを浮かべ立つセバスがいた。汗が噴き出す二人。

「「え〜。失礼しました!!!」」

シンクロする二人の声が廊下に響き二人は脱兎の如くその場から消えていく。

しかし、これであきらめていないアカネ。次に二人が行った作戦は、

「何もここまでしなくても・・・。」

「ダメ!!!こうなったら意地でも部屋に入ってやるんだから!!!」

屋根裏からの侵入だった。

しかし、こんな屋根裏でもきれいに掃除されたい。多少の埃はあったが、それ以外は特に汚れたれていなかった。

「うふふふ。セバスさんもここには気づかないはず!!!完ぺきな作戦!!!」

『曲者!!!』

そんなアカネの鼻先をかする槍。血の気が引いていく

『お客人。あまり無謀な事はしないほうが身のためですぞ?』

「はい……。」

そして、戻っていく二人。なんとも間抜けな光景だった。

「むきー!!どうやったたら部屋に入れるのよ!!」

客間で怒りだすアカネ。もうどうでもよくなっているクリアス。

「あの、もうやめませんか?無理に見なくても本人に頼めば早い気がしますが?」

「頼んでの見せてくれなさそうじゃん。」

そして、椅子に座り落ち着くアカネ。そこに現れたサクナ。

「あら?二人とも。どう、クロノの部屋は見れた?」

「まだです。」

その言葉を聞き、口を隠し小さく笑うサクナ。

「よかった。来た甲斐があったわ。ちょっと一緒にきてちょうだい。」

サクナに連れられ、二人はセバスの元に足を運んだ。

「これは奥方様。どうされました？」

「セバス。クロノの部屋に入りたいんだけど、よろしい？」

「それは、いくら奥方様でも無理です。坊ちやまの許可が無い限りは・・・。」

「そう？ならこの写真を見てもダメかしら？」

そう言い、1枚の写真をセバスに見せるサクナ。

それをみたセバスの目は今にも飛び出しそうな勢いで開く。そして声にもならない声をあげる。

しかし、

「~~~~~!!いえ!!このセバス!!そのような写真には屈しませんぞ!!」

何かに勝ったセバス。しかし、次の勝負には負けるのであった。

「そうか。ではこの写真でもダメか？」

いつの間にか現れたケルアがセバスに新たな写真を見せる。再び声にならない声を上げるセバス。そして等々クロノへの忠義が砕かれた

「坊ちやますいません。このリナス。一生の不覚です・・・。」

「なら、部屋をあけてくれるな？」

「はい。仰せの通りに・・・。」

そして、クロノの部屋に足を運ぶ5人。そして、鍵穴に鍵が差し込まれる。
そのころクロノはトレーニングを終え、自室へ続く廊下を歩いていた。

運命のいたずらとでもいふべきか？

ちょうど部屋の前に集まる5人を見て、クロノは走り出す。

「おおおおお前ら！！なにやってるんだ！！！！」

「うむ。しかし、間に合わないなクロノよ。」

般若のような顔を浮かべるクロノを前にケルアは余裕の表情を浮かべていた。

そして、開かれたクロノの部屋。

その部屋はきれいに片付いていた。16歳の男の部屋とは思えないほどに。

そして16歳の部屋とは思えない物が部屋の大半を占拠していた。

「わあ。かわいい。」

「人のことは言えませんが意外ですね。」

「あらあら。」

「うむ。」

大量のデフォルメされたポケモンの人形が部屋には奇麗に並べられていた。

机の上から、棚の上。さらにはベッドの上までも。

ふわふわで触れば気持ち良さそうなものが大量に。

「~~~~~!!!」

言葉にならない声を上げ顔を真っ赤にするクロノ。耳までも赤く染まっている。

ただ、この部屋の人形とはマッチしない、レコードと蓄音機が部屋の隅に置かれている。無論埃避けの布もかわいいお手製の刺しゅうがしてあるのは言うまでもない。

「かわいいねこの部屋。」

「えーい！言うな！見るな貴様ら！！」

別に誰も笑っていないが、クロノは恥ずかしくてしょうがなかった。

「で、クロノはどの人形が一番好き？」

「それはこいつだろ！このアチャモのふわふわ具合と好い、大きさ、抱き心地！全てが完ぺきだ……はっ！」

我に返り、再び顔を赤くするクロノ。

その後、みんなでクロノの部屋で何気ない会話をしする。人形をいじられると、顔を赤くするクロノ。

「ねえ、この蓄音機は？」

「ああ。それか？セバスからもらったんだ。聞くか？」

そして、蓄音機にレコードをセットする。

曲のタイトルは『守るべきもの』

クロノのもっとも好きな曲だ。

蓄音機から流れる曲がアルトマーレの海に溶け込み、この夜はふけていく……。

第35話 「秘密事項」誰にだって秘密の二つや三つありますって」「(後書き

誰にでも隠したいことの一つや二つありますよね？
クロノの場合は人形です。

アカネ「クロノ。この子はどう？」

クロノ「ん〜。触り心地がいまいち。」

何やらあちらの二人は買い物中ですか。

クリアス「独り身はさびしいです。心とお財布が・・・。」

次の話はクリアスがそれなりにメインだから我慢して？

だはまた次回

第36話 「英雄が愛した町」はじまりのうた」

華やかな装飾が部屋を彩り、優雅な音楽が人を踊らせる。

壁には二枚の巨大な絵が飾られている。世界を救った波導の勇者「アーロン」とその従者「ルカリオ」が書かれた絵。

もう一つは、伝説のポケモン「ミュウ」が描かれた絵。

そんなパーティー会場が有る場所。

勇者が愛した町「オールドラン城」

そこに着飾ったクロノ達は居た。

遡ること数日前

自室にて書類と格闘するケルア。そこにセバスがノックをし部屋に入ってくる

「旦那様。オールドラン城のリーン姫からお手紙が。」

純白の便せんにオールドラン城の家紋が押されている。

その手紙を受け取り、封を切るケルア。

「ふむ。リーン姫らしい御考えだ。セバス。クロノを呼んでくれ。」

「はい。しばしお待ちを。」

部屋を出るセバス。ほどなくしてセバスは戻り、後ろにはスポーツウェアに身を包んだクロノが着いてきた。

「トレーニング中すまないな。オルドラン城のリーン姫は知っているな？そのリーン姫からお前とアカネくん、クリアスくんを迎えてパーティーを行いたいと手紙が来ていてな。」

「なんで俺をパーティーに？」

「いまいち自分が招待される理由が分からないクロノ。」

「うむ。招待理由は、今回のホウエンリーグ優勝祝いと今回の事件を止めたお前たちへの感謝を込めてのパーティーだそうだ。」

ようやくパーティーの招待理由を理解したクロノ。パーティー自体はあまり好きではなかったが、自分たちのためにパーティーを開いてくれたのなら、無碍には断れない。

こうしてクロノ達はオルドラン城のパーティーに招待され、現在に至る。

着なれない着飾った服。襟元が煩わしく感じるが我慢するクロノ。クロノ自信、このパーティーを楽しいと思えなかった。

声をかけてくる人間は、クロノの後ろのある『ウィールアス家の財力と権力』を目当てにした者。ポケモンバトルを挑んでくる者もいた。それは『ダイゴに勝ったクロノを倒し名声を得る』事を目当てにしたものばかり。

煩わし。

誰も、『クロノ』ウィールアス』個人として見る者はいなかった。

否いたがごく一部の人間だけだった。

そして、そんなパーティー会場を離れ、ラウンジに退避し一人月を見ている。

そんなクロノを見つけ、近寄るアカネ。
黄色いドレスに身を包み、髪を上でまとめている。

「詰まんないそうだね？無理もないか。」

「……………。ちよつとここに来たことを後悔してる。」

「なら、二人で逃げようか？」

「クリアスはどうすんだよ？」

「今は、二人で居たい気分…………。」

そして、クロノに寄り添うアカネ。二人を月明かりが照らす。
月明かりが照らしたのは二人だけではなかった。

小柄の小さなポケモン。白い肌に長い尾をもつそのポケモンも照らしていた。

全てのポケモンの祖先といわれているそのポケモンを…………。

こんなところで出会うとは思わなかった。出会いたくもなかった。
クリアスの前に立つ、夫婦。クリアスが9歳まで育てた人間だ。

一応は彼らも貴族である。このパーティーに参加している可能性は
十分あった。

「ク、クリアス！探したのよ！」

「……………なにを白々し。演技だけは世界一ですね。」

「今まであなたには酷いことをしたわ。あなたがいなくなって初め

て知ったわ。」

「口先だけで私をだませるとでも？あなたが本当にほしいのは私の後ろにある『ホウエンを救った称号』でしょう？9年間育ててくれたことは感謝します。ですが、もうあなたの家には戻る事はありません。ではさようなら。」

深々と頭を下げ、夫婦達から離れていくクリアス。夫婦は何も言い返せずクリアスの背中を見送るしか出来なかった。

人込みをかき分け、部屋の隅で飲み物を飲むクリアス。珍しくイライラするのが分かる。

飲み物を飲み終え新しいものを取りに行こうとした時、気を利かせたメイドが同じものをもつて来てくれた。

「どうぞ。」

「すみません。」

飲み物を受け取り一口飲む。しかし、メイドは未だクリアスの元を離れなかった。

「……何か御用で？」

「あ、いえ。すみません。」

一礼し離れようとするメイド。しかしクリアスがそれを止める。

「少しお話良いですか？」

「あ、今は仕事中ですから・・・。」

「では、仕事が終わりましたら中庭の噴水前で落ち合いましょう。」

「はい！」

明るい笑顔を見せ、軽い足取りで離れていくメイド。それを見て微笑むクリアス。

「クリアスさんですね？少しお時間よろしいですか？」

まっ白いスーツに身を包んだ少女とも少年ともつかない顔達の青年。青年に手を引かれクリアスは青年についていく。

着いていくこと数分。着いた先は、誰のいないパーティー会場。楽器のみがそこにはあり、照明は月明かりのみ。ここだけ絵本の世界のようであった。

しかし、先客がいた。

クロノとアカネ。

「よ。お前も連れてこられたのか？」

「ええ。」

そして、青年はピアノに座り、クリアスへ言う。

「さて、クリアスさん。あなたは何か楽器は演奏出来ますか？」

「サックスなら少々。」

「ではお願いします。」

そして、サククスを手に取り一度吹いてみるクリアス。ピアノとサククスの音が重なり曲を作りだす。

「では、お二人はこの会場にいる唯一のおお客様です。どうぞ、気の向くまま踊りください。」

青年に言われるまま、クロノに手を差し出すアカネ。その手を取るクロノ。

月明かりが照らす、この会場。奏でる音楽が、二人の男女の踊りを彩る。

まるで、ここだけおとぎの国のように、幻想に満ちていた。

曲が終わり、二人のダンスも終わりを迎えた。

「なかなかのサククスでしたよ？」

「あなたのピアノもね。」

演奏した二人が握手を交わし、踊った二人が彼らに拍手を送る。

「ありがとうよ。これだけでもここに来たかいがあったよ。」

「ありがとうね。」

部屋を中心に集まる4人。

「さて。そろそろ正体を現してくれよ。ミュウ。」

「あれ？ばれたました？」

クロノの正体をバラさえ、本来の姿を現す青年。
この世界を創造したポケモンの一体。ミュウ。

「で、俺たちになんのようにだ？ただ、踊らせるために呼んだわけじゃないだろ？」

「君たちがあまりにもつまらなさそうにしてたから元気づづかせようと思ってるね。気に入ってくれた？」

「とっつても。」

ミュウの頭をなでるアカネ。

「ならよかった。じゃ本題ね。君たちが僕たちに会いたがってるみたいだったから僕のほうから会いに来たんだよ。」

「ご足労感謝するぜ。さて、俺が聞きたいのは、ミュウが人間をどう思ってるかを知りたいんだが。」

「ん？そうでねえ。僕個人としてはあんまり人間は好きじゃないよ？でも君たちを見てたら、人間もまんざらでもないと思えちゃうね。」

小首を傾げ答えるミュウ。

「そうか。」

それだけ答えるクロノ

「でさあ。君は僕たちの意見を聞いてどうしたいの？」

「なんで、お前たちが人間を嫌いかを聞きたいだけだ。」

「……………昔人間は、僕の体の一部を使って二つの命を作ったんだ。一つの命は人間に復讐を誓った。もう一つの命は善良ある人間によって人として生きてている。身勝手な人間のせいで二つの命はまっとうな生を受けられなかった。だから人間は嫌い。」

「……………。その命はどこにいる？」

「……………近々君の前に現れると思うよ。僕が話せるのはここまで。」

「ああ。ありがとう。」

「少しだけ。君たちを見ててもいいかな？君たちが世界をどう変えていくのかを見せてよ。」

「ああ。」

手を差し出すクロノ。クロノの指を掴むミュウ。

そして、彼らは誓った。ミュウに恥じないように。真剣にこの世界の事を考えると……………。

第36話 「英雄が愛した町」はじまりのうた」（後書き）

おくれましたが、36話です。

次回からは、本格的に第二章のジヨウト編スタートです

第37話 「nextstage」胡散臭さの陰にあるもの（前書き）

第二章とか豪語してましたが、ジョウトの話の材料が少ないので今回もお茶濁し。

読者様、すみません

第37話 「next stage」胡散臭さの陰にあるもの」

吹きつける海の風が髪を撫でる。飛び交うペリッパの鳴き声が船の上を彩っていく。

クロノ達がいる場所。カントー地方クチバシテイに向かっていた。カントーとジョウトはモノレールでつながっているため、無理に船で直接ジョウトに行くより少し遠回りになるがカントー経由でジョウトに向かうほうが確実であるための判断だ。

「海風が気持ちいいね。」

「あんまり海風に当たっていると後でべたべたになるぞ？」

「クロノの意地悪……。」

クロノの意見に対し頬を膨らませるアカネ。そんなアカネを見てクロノとクリアスは笑う。

ハウエンで伝説のポケモン達と会い、様々な意見を聞いた。人間をどう思っているのか。世界をどう思っているのか。

ゆえに3人は、自分の肩にかかっている責任の重要性を再度理解した。

「これから、ジョウトに行つてハウオウ達に会いに行くんだよね？」

「ああ。一番会いたいのはエンテイだけだな。」

エンテイ。

クロノの兄、カイトにその爪をかけたポケモン。人間との共存に一

番強く反対しているポケモン。
なぜそこまで人間を憎みむのか？何がそこまでエンティを変えたのか。クロノはそれが知りたかった。

「よ！青少年、少女達！青春を満喫してるかい？」

どこまでも陽気な声。声のする方に3人は振り向く。

「星さん。」

「おっさん。久しぶりだな。槍の柱以来か？」

「……ごきげんよう。」

口々に星に挨拶する3人。相変わらず飄々としている星。

「少年たちはジヨウトに行きたいの？」

「ん？そのつもりだけど。」

「ん〜。実にまずいね。」

無精ひげをさすりながら空を仰ぐ星。

首をかしげる3人。

「なんか悪いのか？」

「ん、いやー。実は今ジヨウトは治安が著しく悪くてね。『ロケツト団』って知ってるかい？」

まったく聞き覚えな組織の名前を聞き、よもやホーホーと同じくらい首が回っている3人。

「ん〜知らんよね。まっ、マグマ団たちみたいな組織と違ってくて遜色ないよ。で、そいつらがいろいろと悪さをしてるって噂が絶えないのよ。だから、知り合いのお前たちをそんなところには送りたくないのよ。お分かり？」

ようやく事情の整理が着いた3人。しかし、

「心配してくれてありがとよおっさん。でも決めたんだ。ジョウトに行くって。」

「うん。3人ならどんな事でもやり遂げらる。」

「そう。私たちならどんな悪にも勝てる気がします。」

揺るぎな意志と絆。それが3人の強さだった。よもや説得は無理と判断した星。肩を落としてうなだれる。

「はあ〜。どうしてこう若人は熱血かねえ。はいはい。分かりました。それならおっちゃんも旅についていきますよ。心配だからね。」

「「「は!?!」「」」

3人の声が重なり船の甲板に広がる。

「だからおいつちゃんも着いて行くって言ってるの。」

「だからなんで?ついてくる理由が分からないんだけど?」

また、顎ひげをさすり空を仰ぐ星。

「ん〜。そうね〜。青年達についていけば珍しいポケモンに会えるからじゃダメ？」

実にやる気のない答え。クロノ、アカネは肩を落とし溜息を、クリアスは少しイラついていた。

「あまりふざけた事を言わないでください。私たちは本気で世界を、ポケモンの事を考えているんです。そんな不純な動機で旅に同行売るとか言わないでください。」

「ごもつとも。」

そして、近くにあったベンチに座り、いつになくまじめな顔で話します星。

「…………。おっさんな、こつ見えて子供がいたのよ。もういないけど。生きてればお前さんたちと同じ年くらいかな？そんなガキ達が世界の行く末をうんぬん言ってるんだ。自分の子供にはなんも出来なかったおっさんだけど、お前さんたちの手助けさせてくれ。たのむよ。」

真剣な星の視線は3人を、クリアスの意志をも動かした。

「クリアス。おっさんは本気だよ。」

クリアスの肩を手を置くクロノ。

「……分かりました。星さん、あなたの知識と技量を貸してください。」

星に差し出されたクリアスの手。それを取る星の手。

「ありがとな。忠義に厚い騎士の青年。」

白銀の鎧纏いし円卓の騎士の長。茜色の髪の姫を守り、愛した街を守りその鎧を血に染めた。

白銀の鎧纏いし円卓の騎士の長。12の騎士を纏める大いなる騎士。騎士たちも長を信じ、国を守り、命も蝋燭を消す……

（名前の無い古書より抜粋）

第37話 「next stage」胡散臭さの陰にあるもの（後書き）

次回から、星さんが正式に仲間になりました。

クロノ「胡散臭さが服を着て歩いてるおっさんだな」

アカネ「いままで影が薄かったからね」

星「好きで薄くなった訳じゃないよ。」

クリアス「もし、旅の最中に裏切ったら。分かりますよね？」

星「おゝ怖。」

では今回はこれで。」

第38話 「炎帝の闇」過去は戻すことはできない。神にさえ不可能なこと」

すごーくお待たせしました！

え？待ってない？そう言わずに見てやってください。

本格的に第二章に入り、TVならOPとEDが変わるころです。

第38話 「炎帝の闇へ過去は戻すことはできない。神にさえ不可能なことへ」

焼け落ちた塔。その本来の姿はとうの昔に失い今の姿になっていた。今となつては肝試しに若者が来る以外には誰も立ち寄らないこの場所。

そこに、彼はいた。

世界を作ったポケモン・エンテイ。

最上階でこのジヨウトを。人間を見つめる眼差し。

「……ミイ。見ているか？お前の好きと言った世界は、腐敗の道を辿っているぞ。」

今はいないその少女に思いを馳せるエンテイ。
腐敗していく世界を見ながら。

数千年前。

今ほど化学は発達していないが、人と人のつながりは今より強かった。そんな時代にエンテイとミイは出会った。

風のように大地を駆けるエンテイ。

「くっ！こうも追手が多いと逃げるのも困難か？」

久々に人里近くまで出てきたエンテイ。しかし、エンテイの力を欲した人間はいつの時代にもいた。そんな人間たちに追われるエンテイ。

先刻追手の攻撃で足を負傷したため、これ以上逃げるのは難しい。

そう思い立ち止り迎え撃つ態勢をとる。
場所は森の中。乱戦になれば身動きが取れないが、逆を言えば攻撃を当てやすい。
そう思い、森に逃げ込んだ。
そんな中、茂みが揺れる。

「そこか！」

咄嗟に茂みに対して攻撃をしようとしたが、茂みから出てきたのは追っ手では無かった。

人間の女の子。

エンテイの出す覇気にあてられているのか、口は動くが言葉が出ていなかった。

しかし、追手の足音は近付いてくる。

「ちっ！」

舌打ちしエンテイは、動けなくなった少女を背中に乗せ再び走り出した。

ようやく言葉を出した少女だがエンテイがそれを止める。

「今はしゃべるな！舌をかむぞ！」

負傷した足を引きずり駆けるエンテイ。

追手を振り切った時には、日は沈み、月が空を照らしていた。
背中に乗せた少女は、寝息を立ててエンテイの背中で寝ていた。

「……………成り行きとは言えほってはいけないな。」

人の寄らない洞窟に身を隠し、近くにある小枝や落ち葉を集め、それに火を灯すエンテイ。

漆黒の洞窟に炎の温かい光が闇を振り払う。

背中から少女を下し、自分の体を枕代わりにし寝せる。

「……………どうしたものか。」

咄嗟に連れて逃げたが、この少女の名前も住んでいる場所も知らなかった。

足の傷は深いものではなく、すぐに出血は止まった。しかし、完治するにはまだ時間がかかる。

「考えても仕方がない。ひとまず休むか……………」

そう言い、エンテイも体を休める事にし、瞳を閉じた。

夜はすぐに明け、エンテイも目を覚ました。しかし、昨日までいた少女の姿はなかった。

「自力で帰ったか？」

立ち上がる際に足に布の感触がある。

怪我をした足に薬草が布でまかれたいる。

そんなときに、少女は両手一杯の木の实を持って帰った来た。

「あ。目が覚めたんだ。」

無垢な声が洞窟に響く。

「足の調子はどうか？他に痛い所はない？」

「いや。足以外は怪我はしていない。それより足の治療ありがとう。」

「そう言い、二人は木の実を食べ、エンティは少女・ミイを村に送り届る。」

道中、ミイから様々な話を聞いた。彼女の村の事。彼女の家族のこと。話の全てが新鮮だった。

そして辿りついた彼女の住まう村。

決して豊かとはいえなかったが、人とポケモンが互いに協力し助け合いながら住んでいる村。

物理的ではない。この村は心が豊かだった。

「あ！長老さま！只今戻りました。」

一人の老人に駆けよるミイ。

「おお！ミイ！どこに行っておったのだ？村のみんなが心配して居ったのだぞ。」

「ごめんなさい。」

「長よ、彼女を責めないでやってくれ。私が連れまわしてしまったのだ。」

長老の前に姿を現すエンティ。

その姿を見た村の者は、はじめた見る神の姿にただ驚くしかなかった。

「こゝろは、世界をお作りになつた魔獣。エンテイ様！」

「いかにも。人は我をそう呼ぶ。」

一礼するエンテイを前に村の全ての住人がエンテイにひざまずき頭を下げた。

それから、エンテイは村総出で祭り上げられた。

豊かではないこの村に神が現れたと言われ。

実りの時期なのに、畑には少量の実りしかなかった。

このままでは、今年の冬は越せない。誰もがそう思っていた。

「村長。この村の作物は毎年この程度の実りしかないのか？」

「ええ。幸い近隣の村から物を交換してここまでつなぎとめていましたが、その村が野党に襲われ、今年は今実っているものだけだ過ぎすしかありません……。」

今にも枯れそうな作物。それを目の当たりにしたエンテイ。

「……足の治療の代価だ。」

そう言い、目を閉じ大地に呼び掛ける。

大地の持つ命の炎に。今にも消えそうなその炎を再び滾らせる。

エンテイの呼び掛けに大地は答え、見て取れるように作物は今までにないほどの実りをもたらした。

「おお！こゝこれは！」

「礼ならこの少女に言ってくれ。私の怪我をした足に薬草を巻いてくれたこの少女に。」

隣で笑うミイをみてほほ笑むエンテイ。まるで娘を見る父親のような笑顔。

「しかし、大地の命は有限。それを伸ばすか縮めるかは貴殿らの努力次第。努々忘れるな。」

「ええ！ありがとうございますエンテイ様！」

そして、すぐに収穫を開始する村民。

食べきれない量の果実。今年の冬を越しても有り余る量。

「エンテイ様。ありがとうございます。」

「こんな事でしか、君にお返しができないからな。」

それから、エンテイは何度もこの村に足を運んだ。

村が心配なのもそうだが、彼女が、ミイが心配だった。

ミイには親がいなかった。そして、ミイもエンテイを慕っていた。ゆえにこの村が余計に心配だった。

村を一望できる丘を夕日が照す。その丘にエンテイとミイはいた。

「ありがとうエンテイ。村が栄えたのはあなたのおかげ。どんなにお礼を言っても感謝しきれない。そして、私のことも・・・。」

「ただ、人の営みを見ているしかない我々だが、共存する人間に手

を貸せる事で我々との仲が末永く続く事を願っている。」

「エンテイはこの世界のことを本当に考えてるんだね。」

「ミイはこの世界は好きか？」

「好き。長老がいて、村のみんながいて。何よりエンテイがいるから。」

そう言い、エンテイに体に顔を埋めるミイ。

「暖かい……。」

このまま、人とポケモンの絆が続くと信じていた。

しかし、人間はそんなに強い生き物ではなかった。目の前に強大な力があれば、それを我が物にしようとする人間は確実に出てくる。無論この街も例外ではなかった。

「長老。エンテイ様は我々を信用しきっています。」

「うむ。神の力があればこのあたりを我々のものにするのもたやすい。」

「エンテイ様はミイに一番心を開いています。これを利用すれば。」

「うむ。では各自、計画に失敗は許されんぞ？良いか？」

「はい。」

そして悲劇は起きた。人が人を使って。まだ幼い少女を使って、身

に合わない力を求めて神に牙をむいた。

「……………長老。これは何のマネだ？」

周りをポケモンと農具で武装した村人に囲まれるエンテイ。

「エンテイ様。無理を承知で言います。どうかこの村にとどまり村のために力をお貸しいただけませんか？」

「無論断る。われの力はこの世界すべてに等しく使うもの。この村だけに使うことは世界に均衡を壊すことに等しい。何より、村長。貴殿からは野心の波長が見える。われの力を使いこのあたりは愚か世界を手中に収めようとする程の心の闇がな。」

「そうですか……………ではこの娘がどうなってもよろしいですか？」

そう言い連れられてきたのは荒縄で縛られたミイの姿。

「貴様！そうまでして力を欲するか！！」

「私にはこの村を栄えさせる義務がある。そのためには神にも牙をむきましよう。」

「この外道が！！」

「さて、再度聞きましょう。お力添え願えますか？」

エンテイには残された道は二つ。

このまま、この村の飼い犬になる道。

ミイを見捨てて逃げる道。

後者は選択外だった。

ミイと過ごした時間。ミイと話した時。全てがエンテイにとって、何にも変えられない時間だった。

ミイを見捨てることはできなかった。

「……分かった。言うとおりにする。だからミイにだけは手を・
」

エンテイの言葉を消すかのように村人が叫ぶ。

縛られたミイが突然、鮮血を吐いた。血と共に小さい肉片も口から飛び出す。

「ミイ!!」

誰よりも早くエンテイはミイに駆け寄った。
急な吐血。その理由は分かっていた。

「ごめん……ね。エン……テイ。私が……いた
から……村のみんな……に、利用……されちゃう……
。ごめん……なさい……おとうさ……ん。」

血の気の引いていくミイの顔。力なく地面に横たわる小さい体。

「舌を噛み切ったのか。哀れな子だ。」

「黙れ……。ミイ。私があの時、この森に来なければ。すぐに
この村から姿を消して入れれば。全て私のせいだ……。」

短い人生を終えたその少女の顔に、エンテイの大粒の涙がこぼれお
ちる。

あの時、この森に来なければ。長い間この村に姿をさらさなければ。この村に対して、自分の力を使わなければ。

ミイは。娘は死ななくて良かった。

人間が。ミイを死に追いやった人間が。そして自分が憎い。憎悪が心を支配していくのが分かる。

「ええい！皆の者！エンテイを捕らえよ！」

「……手加減はできんぞ！人間共が！！」

手加減のないエンテイの炎。大人が赤子の手をひねるようにものだった。

村がその姿を、人が人でなくなるのにさほどの時間はかからなかった。

村が焼け。森が消え。人が灰と化した。ただ一人、動かなくなったその少女とエンテイを除いて、村があった場所にいるだけだった。

虚しさと絶望。人の愚かしさ。自分が犯した愚行をただ嘆いていた。そして、愛した娘が好きと言った丘に、静かに寝るさせた。ただ静かに……。

過去を思い出していたら、空が夕暮れに染まっていた。

世界は変わったも、この夕日は変わらなかった。ミイと見たあの空はいついかなる時もその姿を変えることは無かった。

「ここにいたのかエンテイ。」

「……ライコウか。何の用だ？」

「ダークライが選んだ子供たちがコガネシティについたとラティオスから念が来た。」

「・・・ああ。分かった。」

二つの影は、風になりエンジンシティからその姿を消した。
来るべくクロノ達との対話の目的に向けて大地を駆けた

第38話 「炎帝の闇へ過去は戻すことはできない。神にさえ不可能なことへ」

えーほんとお久しぶりです。

HGとSSにもすごくハマっちゃいましたw

クロノ「wwじゃねーよ。」

アカネ「すごく暇だったんだから！」

クリアス「まあ、私はその間、デートとしゃれこんでいましたが。」

ごめんごめん。でも、おかげで第二章のストーリーは固まったから、これからは挽回する勢いで更新していくよ！

でも、このまま終わらせるのも何なんで、SSで使えるマル秘情報を一つ。

ルギアの高個体値が楽に狙える方法を。でも素早さだけね。

まず、シンクロ持ちで素早さの上がる性格のポケモンをメンバートップにします（ひん死状態で、2体目に素早さが127丁度のポケモンにします。

これで下準備OKです。

これでルギアと戦います。

そうすると、2体目の素早さ127のポケモンが戦闘します。ルギアがそのポケモンより早く動ければ、ルギアの素早さの個体値は最高です。

でも、ルギアの素早さって大して高くないですよね……。

第39話 「夢の意味」コガネの泣き虫リーダー様」(前書き)

シルバーウィーク？

知るか！！

キシには無かったですよ？シルバーウィーク中はずっと遅番ばっかですよ？連休なんて無くなればいいのに・・・

第39話 「夢の意味」コガネの泣き虫リーダー様」

カントーとジヨウト

この二つの地名を聞いてからクリアスは二つの変な夢を見るようになった。

一つは真っ白い部屋の夢。

その部屋に幼いクリアスと白衣を着た人間が何人も。目の前には無数のスプーンが並んでいる。

そしてクリアスが手をかざすと、スプーンは曲がり、折れていく。

二つ目の夢は、水の中の夢。オレンジ色の水の中。

ガラス越しに無数の人が見える。

中でもある二人の人間がこちらを見ている。何かを言っている。

「これ……の……た……だ。」

「……さいな……えるのか？」

- 何を言ってるの？君たちは誰？僕は誰？ -

- 君は君だよ -

- 誰？ -

- 僕？彼らは『……』って呼ぶよ？ -

- ？なんて言ったの？ -

- 聞こえなかった？なら『友達』っ呼んで。 -

- 友達？ -

- そう。同じ境遇の僕たち。だから友達。君はなんて呼べばいい？ -

- 僕は..... -

「.....きろよ。クリアス。」

信頼する主の声によって、謎の夢から帰ってくるクリアス。額や背中には嫌な汗をかいていた。

「ん。。。ああ主。もうジョウトですか？」

「ああ。大分魘されたてな。大丈夫か？」

心配するクロノ。

クリアスはハンカチで額を拭き、軽くうなづく。

「ええ。少し嫌な夢を見まして。」

「気分が悪くなったら言っただけ？」

「はい。」

アカネもクリアスを心配し声をかける。

クロノ達がいる場所。それはカントーとジョウトを繋ぐモノレール

の中だった。

カントー経由でジョウトに向かったクロノ達。

カントーのクチバシティの到着すぐに、ヤマブキシティに向かい、今に至る。

途中の船の中で星と出会い、彼もそのままこの旅に同行することになった。

星本人は、クロノ達の前の席に座り、アイマスクをつけ爆睡していた。

『ご乗車ありがとうございます。このモノレールは間もなくジョウト地方コガネシティステーションに到着いたします。お下りの際は手に持つお忘れないうようお願いいたします』

モノレールのアナウンスが車内に響き、乗客は下車の準備を始める。

ジョウト地方コガネシティ。

ジョウト地方で一番栄え、人が最も行きかう街。クロノ達もこのコガネシティの土を踏んでいた。

「帰ってきたって実感が湧くな。」

「そういえばクロノは旅する前はジョウトで修業してたんだっけ？」

「ああ。」

「誰がお師匠さんだったの？」

「ん？それは……」

クロノが答えようとした瞬間。

横からコガネ弁でクロノにラリアットをする少女が。

「クロノ！めっさ久しぶりやん！！」

赤い髪に白い服。

コガネジムのリーダーアカネだった。

「痛つてえな、アカネ！！」

首をさすり、怒鳴るクロノ。

「いやあ。ごめんごめん！で、後ろの人達は誰なん？」

よほど痛かったのだろう。クロノは未だ首をさすっている。

「ああ。女の子の方は彼女のアカネ。金髪の男がダチのクリアス。残りはストーカーのおっさん。」

「ちょ！青年！おっさんの説明ひどくない！！」

クロノの説明に異議を唱える星。

それを聞いたアカネはお腹を抱えて笑いだす。

「おもしろくなつたな、クロノは！昔と大違いやな！！」

よほど今のクロノとのギャップが面白いのだから。涙を浮かべて笑っている。

「久々にあつたんやし、ジムで話さへん？」

アカネの案内でクロノ達はジムで話すことになった。
そして、今クロノが旅をしている理由を話した。

「ふーん。クロノもずいぶん大変やったな。」

「ああ。で、みんながポケモンをどう思ってるかを聞きたいんだが、
良いか？」

そして、腕を組み考え込むアカネ。

普段の彼女からは想像もできないほど悩んでいた。

「そやなあ。うちはポケモンは家族だと思もとるよ。ポケモンバ
トルもしとるけど、バトルを通じて人とポケモンとの間に絆が生ま
れていくんやと思うよ？」

家族。

そんな当たり前で安心する環境をクロノはクリアス達と出会って初
めて知った。

だからこそ、家族という言葉が重く感じた。

「家族、か……。ありがと。お前の考えが聞けて良かったよ。」

「おおきに。それより、クロノ。久々にバトらん？上がった腕見た
る。」

「へっ。泣きづらにしてやるよ。」

そして、一同はバトルフィールドに移動した。

無論、クリアス達は観客席で見てる。

「結局クロノのお師匠様って誰だったの？」

「ん？青年の師匠？おっさん知ってるよ？」

アカネがもらした言葉に星が反応し答える。

「青年の師匠はこのジヨウトのジムリーダー全員だよ。中でもシジマが一番青年を鍛えたみたいだね。」

「なんで星さんが知ってるの？」

「それは、企業秘密。それより始まるよ。」

フィールドを挟んでアカネとクロノが立つ。

「ルールはシンプルに1対1でどや？」

「OK！行くぞ！」

そして、二人の投げられたボールから、ガレスとミルタンクがフィールドに現れる。

「先制はいただくぞ！ガレス、昔と違うところを見せてやれ！！」

突っ込むガレス。炎が宿る足をミルタンクへ食らわせる。しかし。

「やっぱり詰めが甘いなあクロノ。ミルタンク、転がる！！」

ミルタンクの腹部に足が食い込んだままの状態のガレス。
そんな状態でのミルタンクの転がる。
まさに、クリーンヒットだった。
宙を舞うガレス。

「こりゃ、終わっちゃったかな？」

「・・・ああ。お前の負けでな！！」

宙を舞っているガレスも、クロノに呼応し不敵な笑みを浮かべる。

「ガレス！ブレイブバード！！」

空中で姿勢を直し、衝撃波を纏った鳥になるガレスは、フィールドのミルタンクに襲いかかる。

爆煙がフィールドを覆い、視界ゼロになる。

煙が晴れ、二体のポケモンが見える。

ガレスとミルタンク。

ガレスの拳をミルタンクが両手で押さえて攻撃を防いでいた。

「あ、危なかったあ。でも、ウチのミルタンクを倒しきれなかったな。」

しかし、それもクロノの計算内だった。

衝撃波の鳥の次。次第にガレスの体は炎に包まれる。

「フレアドライブ！！」

構えた左腕と足に有りつ丈の力を込めたガレスのフレアドライブ。
ミルタンクによける術は無く今度はミルタンクに攻撃がクリーンヒ
ットした。

フィールドの中心から、場外まで吹っ飛ぶミルタンク。
誰が見ても分かる。この勝負の行方。

「俺の、いや。俺たちの勝ちだ。」

腰に手をあて、勝ち誇るクロノ。
しかし、アカネは……

「う、うわあああああん!!」

泣きだした。

「……まだ治ってなかったのかよ……。」

ため息をつき、手で顔を覆うクロノ。

コガネジムにアカネの鳴き声が響き、ジヨウトを照らす太陽は沈ん
でいく。

第39話 「夢の意味」コガネの泣き虫リーダー様」（後書き）

はい第二章が本格的にスタートしました。

ジムリーダーのアカネ嬢は、某アニメのちゆるやさんみたいに『めがっさ語』で話してもらいました。

クロノ「なんだよめがっさ語って？オフィシャルじゃないだろ？」

つーかコガネ弁をうまく書ける人、書き方教えて。

ちなみに『めがっさ語』は今キシが勝手に作った言葉で検索してもでないと思います。

アカネ「ねえ。今回書きにくくなかった？同名の人がいると。」

かなり。今回は学習した。おんなじ名前のキャラは作らない方がいい。

では今回はこれで

第40話 「紅葉の街」紅葉は不安と共に」(前書き)

2話連続投稿!!

肩がすごく痛いです。

第40話 「紅葉の街」紅葉は不安と共に」

秋を知らせる紅葉が宙を、街を飾る。

伝説のポケモン・ホウオウと最もゆかりの深い街。それがこの街工
ンジュシティ

コガネシティでアカネと別れ、クロノ達はここまで来た。

丁度、秋を告げる時期に来たため、一番美しいエンジュの姿を見る
ことができ、アカネだけだ無く、皆が心を弾ませていた。

「すごく綺麗……。」

思わず見とれるアカネ。街の様式と相まって、紅葉が一段と美しく
見える。

「青年。ここは言うことがあるんじゃないの」

「ん？なんか言うことなんてあったか？」

クロノに耳打ちする星。何を聞かれないか分からないクロノ。

「まあ。ここは『お前の方が綺麗だよ』とか言っとくとポイント
上がるよ?」

「馬鹿がおっさんは?」

声を殺して笑う星をクロノは一笑するが、まんざらでもなかった。

『まあ……確かに綺麗だな』

紅葉と戯れるアカネを素直に綺麗と思っっているクロノ。

アカネの髪と紅葉の色が混ざり、その美しさは一段と上がっていた。

街の奥に見える二つの塔。一つは焼け落ちその本来の姿はとうに消えていた。

もう一つは、未だにその風格を未だに残し、街に彩りを与えている。

「さて、マツバさんにも顔見せてくるか・・・。」

3人は街の美しさに見とれて、ここに来た本来の目的を忘れていた。しょうがなく、クロノは一人でこの街のジムリーダーに顔を見せに行くことにしたが・・・

「来なくていいよ。こっちから来たから。」

頭に紫のバンダナを巻いた男が、クロノに歩み寄る。

「あ、マツバさん。お久しぶりです。」

「や。ずいぶん変わったね。見た目も、心も。」

にこやかな笑みを浮かべ、クロノの肩に手を置く。

「ところで、お連れみんながいないけど、良いの?」

「あゝ。あいつら・・・。」

「探すなら早い方がいいよ。エンジユは知らない人がホイホイ歩けるところじゃないよ。」

「ちょっと失礼します。」

そしてクロノはマツバから離れ、いなくなった3人を探しに行った。

エンジユは決して、狭い街ではない。

加えて、ここは有数の観光地。人も多い。

「ったく。あいつらどこに行ったんだよ……。」

クロノが最初に足を足を運んだのは、池だった。

水面に浮かぶ紅葉が美しく、観光名所としても有名であった。

そして、見慣れた後姿。陣羽織のような上着、少し猫背な背中。腰につけられた傘が星ということを物語っている。

「おっさん。どっか行くなら一声かけるよ。」

「ん……。わりいな青年。」

いつもと違う星の雰囲気。

「……なんかいつもと雰囲気違うな。ここになんか思い入れでもあんのか？」

「……………」『今』をあいつらが見たらどう思うかな、と
思ってたな。」

「あいつら？」

何かを思う星。見ているものは水面だが、『見ている』ものは遠いものを見ていた。

「船の上で話したよな。子供がいたって。子供がいるってことは嫁のいる。そういうことだ。」

「……もう、いないのか？」

「ずーっと前にな。」

しばらくの無言が二人を包む。

無言を破ったのは星だった。

「……気がすんだらポケセンに戻るから、ほかの2人を探してきな。」

「……この時期は冷えるから早目にな。」

そして、星から離れるクロノ。

背中と背中が向き合った時、星が一言

「……青年。これから何があっても、あの二人を守ってやれよ。それこそ死ぬ気で。」

舞い散る紅葉。そよぐ風が紅葉を運ぶ。水面に波紋を作る。何も言い返さないクロノ。そして、この場から消えていく。紅葉を踏みしめ。

「柄にもなく、何を言ってるんだか俺は。俺があいつを……。絶望にたたき込むのにな。」

悲しそうな星の顔。拳に力宿る。

クリアスは比較的早く見つけた。
何もない高台からエンジュを見ていた。

「ここで、何見てんだ？」

「分かりません。」

理解に苦しむ答え。クロノには到底理解できない質問の答え。

「……。主よ。身に覚えのない記憶ってどう思います？」

「……。身におぼえない記憶？」

再び理解に苦しむ質問。

「カントーとジヨウト。この二つの地名を聞く前は、そんなことはありませんでした。でも、ここ最近変な夢を見るんです。私自信、見たことも行ったこともない場所の夢をここ毎日見るようになってんです。それも、鮮明に。」

「夢……。」

「二つの夢を、交互に。」

何も言い返せない。こればっかしは本人にしかどうしようもない。

「……怖いんです。私の中に私の知らない記憶があるんじゃないか。その記憶が、主をアカネさんを傷つけるんじゃないかって」

夢に、自分に恐怖を感じるクリアス。胸に手を当て、虚空を見つめる。

「………。主よ。もし、私が主たちに危害を加えるようなことがあつたら、ためらいなく排除してください。」

クリアスから、放たれた言葉にクロノは少し、カチンと来た。そして、後ろからクリアスの口を思いつきり引っ張る。

「なあゝに、言ってた。この口か？この口なんだな？」

「あるひ、なにを！！」

うまく言葉にできないクリアス。

「安心しな。もし、お前が俺らに危害を加えたら、俺が一発殴って目覚まさせてやるよ。」

クロノのその言葉でクリアスは少し安心した。クロノのいる所がクリアスの居場所。

「じゃ、そういうことだ。俺はアカネ探しに行くから、お前も適当にポケセンに来いよ。」

「はい。」

そして、クロノは再び街に戻って行った。
安心した。クロノがいるだけで不安は杞憂に変わっていった。

エンジュのシンボルともいえる塔。それがスズの塔だった。
塔の真下にアカネがいた。塔を見上げていた。

「観光に行くなら、そう言うてから行けよ。探すのが大変だろ？」

「……やっぱり来てくれた。」

そう言い、切なそうな瞳をこちらに向けるアカネ。

「どうした？」

「……なんかね、クロノと離れたらもう会えないような気がして。だから、何にも言わないで消えてみたの。そしたら、やっぱりクロノは来てくれた。」

そう言い、笑顔になるがどこか切ない顔のアカネ。

「なに言ってたんだ。お前がどこに行こうとも迎えに行ってるよ。
星の裏側でもな。」

「ありがとう。」

不安そうなアカネを抱き寄せるクロノ。
クロノの心臓の音をアカネは聞き、瞳を閉じる。

「……………安心する。」

「落ち着くまでごうしてようか？」

「……………うん。」

紅葉落ちるエンジュシティ。それぞれが持つ不安。

エンジュの紅葉はそれを流してくれるのか……………。

第40話 「紅葉の街」紅葉は不安と共に」(後書き)

はい。今回はちょっと、シリアスな話にしてみましたた。

クロノ以外の3人の今現在の不安を書いてみました。

そして、これからのストーリーの道しるべを書いてあります。
これからのストーリーをお楽しみに!!

第41話 「心の師と不自然な物の先に」

打ち寄せる波。引いては来てを繰り返し、今という時を刻む。

決して大きくない街。それが、タンバシティ。街の大半が浜辺のためたびたび水害にあうこともあるため、決して住み心地の良い場所ではない。

しかし、このタンバシティに新しくできたレジャー施設。サファリパークのおかげで、以前ほどとは比べ物にならないほどの人が行きかう街になった。

「ここがタンバシティ？パンフレットとは大分雰囲気が違うね？」

パンフレットに書かれたタンバと目の前にあるタンバとの違いに戸惑うアカネ。

静かな海辺の町

それがパンフレットのタンバのキャッチコピーだったが、今は静かどころか騒がしくゴミが散乱する町だった。お世辞に静かな海辺の町とは言い難い。

「……先生がいながらなんで……。」

クロノの一番の師匠シジマ。

格闘家、格闘ポケモンを極めようとするれば必ず出てくる名のトレーナーだ。

そして、その意思は固く、一度口に出した言葉は曲げない男でもあり、クロノが一番初めに師と仰いだ男でもある。

とりあえず、シジマがいるであろう、タンバジムに足を運ぶ4人。

そして、ジムの前には人盛りがきている。

「シジマさん。ここはアンタだけの町じゃないんだ。サファリパークのおかげでこの町は、今までより住みやすい町になるんだ。分かってくれ。」

ジムの前に立つ胴衣も大男。口には立派な髭を生やしその威風堂々たる風格は昔と何も変わらない。

「……そのサファリパークで町が本来の姿を消しているのも事実。汚くなつた海岸がその説明だ。」

「それは、みんなで努力すればその問題も解決できます。ですからシジマさんも協力してください！」

「断る！！あいつらには裏がある！！やつらの裏が分かるまでは何度言われても協力はせん！！」

そして、口論は一度の終焉を迎え、人々は去って行った。

「先生、お久しぶりです。」

「クロノか。久しいな。」

シジマに頭を下げるクロノ。つられて3人も頭を下げ挨拶をする。

「先生、今のは一体？」

「うむ。……立ち話も何だ、家に来い。何も無いが茶なら出せる。」

シジマの家はジムの裏手にあり、すぐに着いた。

道場もある家であるため、この家の様式は全てが和風。当然茶の間も当然畳であった。

クロノは座布団の上で、綺麗な正座を作っているが、なれないアカネやクリアスはかなりきつそうな表情を浮かべている。言うまでもないが、星は初めから正座はしないで、座布団に座っている。

「……クロノ。今のタンバを見てどう思う？」

「人が多く出入りする事は、良いことだと思えます。しかし、来る人間のマナーに問題があります。ただ、今のタンバの問題はそれではないと思います。」

「流石はジョウト全リーダー達の弟子だ。そうだ。今、タンバには新しくサファリパークなるものができた。おかげでそれ目当てで来客が多くなり、町の経済は潤い、自然災害による被害も以前とは比べ物にならないほど良くなった。反面、人が来ることでゴミの不法投棄が増え、ポケモンやこの農業に大きなダメージを与えている。」

町の急な繁栄にはこういった問題はつきものだ。しかし、一部の者にしか分からないダンバを包む不穏な空気。それをシジマが感じていた。

「ですが、シジマさん。そう言った問題はどこの町にもあると思います。何もサファリパークだけの問題とは限らないのでは？」

足を崩したアカネがシジマに言う

「その1点だけの問題だけならばワシもサファリパークの運営を反対はせん。本当の問題はパークの運営者だ。」

「運営者、ですか？」

「そうだ。パークができる前。やつらは突然現れ、山の土地の権利を多額の大金で買い取り、パークを作り始めた。山を強引に買い取ったことを詫びて、多額の資金を町に寄付。そして、パークの利用料の6割を村に寄付。何か裏があるとしたか思えないのだ。」

確かにおかしい。パークを作るために山を買った。しかし、やり方が少し強引。そして、謝罪と共に、大金を渡す。そして、運営費の6割を町に寄付。

こうなるとパークの経営はほとんど赤字。サイドビジネスでよほど儲かってないと、こんなことはできない。何かがおかしい。

「だからワシはパークの早期撤退を言っているのだが、村人がそれを邪魔してな。いかんせん身動きが取れない。」

「つまり、パークの運営者は村人の心を金という、煙で惑わし、裏で何かを企んでいるって寸法か。」

急に口をはさむ星。

的を射た言葉に全員が口を開く。

「後考えられるのは、この町の異常を感じる連中に自分たちの動き

を探られたくない。もしくはこの町から追い出そうとしているってところかな?」

「つまり、ワシか?」

「あと、青年とかね。オタクと青年は昔この町に住んでて、町の間ほとんどが顔を知ってるし、その実力も知ってる。青年なんて、ハウエンのチャンピオンを倒したのなんて全国ネットで放送されてるしね。」

「なんで、そんなことを?」

「さあ?あくまでおっさんの憶測だしね。」

再び考える5人。

「……ねえ。なんでサファリパークなんだろうね。別に金銭で人の目をくらませるなら、ほかのレジャー施設でも良かったんじゃないの?」

「そうだな。つまりサファリパークである利点か。」

サファリパーク。

敷地内を専用のボールで、制限時間内にポケモンを捕まえることのできる施設。

無論ポケモンを連れて入ることは可能だが、バトルは禁止されている。

ポケモンや人がいなくなればすぐに問題になるが今はそう言った事件は無い。

「……ポケモンはいなくなってる。サファリの中から!!」
声をあげたのはクロノだった。

「サファリパークである利点は、パーク内で捕まえたポケモンをトレーナーが外に連れ出せること。」

「でも、それに何の利点が？」

「昔、オーレ地方つてとこで、凶暴化したポケモンを使った事件があったんだ。つまり、その凶暴化したポケモンを一般に紛れ込ませることが目的。そして、実力のあるトレーナーにはそのポケモン違いが分かる。だから、先生にはサファリパークには近づいてほしくなかった。」

オーレ地方。

ここから海を渡った国外の地方。

そして昔、『ダークポケモン』と呼ばれる凶暴化したポケモンを使った犯罪があつたところでもある。

「つまり、パークの経営者はそのダークポケモンを一般に出して、町を混乱させるのが目的？」

「これも俺の憶測だから、なんともいえない。もしかしたら本当に成金の人の道楽かもしれないし、今言っただみたいに本当に悪人が一枚かんでるかもしれない。」

アカネの問いに答えるクロノ。

クロノの推理も所詮は憶測の粋をでないもの。

「だったら今から、行ってみない？サファリパークに。」

星が言った一言。

まさに今の状況を動かす一言だった。

「ただ、青年とお師匠さんは、待機。行くのは、嬢ちゃんとイケメンとおっさんだけね。」

「そうだな。ワシらは顔が割れている。うかつに動くのは危険だ。」

星の意見に同意するシジマ。

「そうだ。先にワシのもう一人の弟子が行っている。短い黒髪の女だ。年はクロノと同じ年だ。それらしい人間を見つけたら、ワシがクロノの名前を出してみる。」

立ち上がるアカネたちに言うシジマ。

しかし、その話を聞いたクロノは少し浮かぬ顔をしていた。

不自然なサファリパークに向かう三人。

ここから彼らの未来は大きく動いていくことに今は誰も気づいていなかった

第42話 「悪意と闇／見え隠れする闇」 (前書き)

また新キャラです。

今回はアカネにはない属性のキャラです。

第42話 「悪意と闇々見え隠れする闇々」

広大な敷地の中を歩く3人。
アカネ、クリアス、星。

遡ること1時間。

タンバシテイの山道を越え、ついた先。サファリパーク。
その受付までたどり着いた3人。

「いらつしゃいませ。お客様は3名でよろしいですか？」

入口に入ると受付の女性がアカネ達に声をかける。

「あ。はい。」

受付に近づく3人。

そして、利用料を払い、サファリボールを30個受け取り、パーク内に入り、今に至る。

「で、入ったは良いけど、これからどうする？一目でダークポケモンなんて分かりっこないでしょ？」

頭をかきむしる星が2人に言う。

「とりあえず、パーク内を歩きましょう。幸いここのルールに歩数制限はないみたいだし。」

そう。一部のサファリパークには何歩以上歩くとその時点で終了してしまう場所もある。

アカネが言った通り、このサファリパークにはその上限がないため、終了はボールを全て使い切るか、任意での終了しかない。だからこそ、広い敷地を歩きまわれるのだ。

そうして、探索と休憩を繰り返しながら3人は、敷地の奥までたどり着いた。

「いませんね。普通とは違うポケモンなんて。」

アカネがそうぼやき、クリアスも続けてぼやく。

「やはり杞憂だったんでしょうか？」

ここまで一個もボールを使っていない三人。

しかし、ここまで来るのには少なからず多くの時間を使っていた。このまま戻るのも時間がかかる。せめて、白か黒か証明できるものがほしいところだった。

しかし、その時は速くに訪れた。

草むらから現れた一匹のサンド。

見た目こそ変わりが無い。

しかし、そのサンドを見た3人は気づいていた。このサンドが、普通とは違う何かを放っていた。黒い何かを。

外界との関わりを拒絶したような雰囲気も放っていた。

「あの、サンドなんかおかしい！」

「ええ。分かっています。捕まえましょう！」

そして、ボールを投げる2人。
しかし、ボールは無残に壊された。その異様なサンドによって。

「へえ。やるね、あのサンド……。」

感心する星を無視して、捕獲を続ける2人。
しかし、サンドはその姿をくらませてしまった。

「あ！逃げた！」

「追いましょー!!！」

逃げるサンドを追おうとする2人。

しかし、その2人を止める、聞きなれない声。
声の主は、彼らの真後ろにいた。

いつからかそこにいたのかは分からないが、少なからず2人がサンドを捕獲しているところは見えていたのだろう。

「まるで駄目ですね。あなたたちの捕獲は。」

腕を組み、地近づく女性。

醸し出す雰囲気は、優雅で気品すらある。

髪は黒のショートヘア。

動きやすさを重視した、タンクトップにジーンズ。そして、膝まであるブーツ。

「なにを思って今のサンドを捕まえようとしたのかは知りませんが、お止めになった方がよろしくてよ？怪我をしないうちに身を引いた方が良くてよ？」

心当たりがある、その女性。
そして、星が。

「なあ、お嬢さん？『シジマ』と『クロノ』って知ってる？知ってるなら・・・」

「！！！！あなたたちクロノ様のお知り合いなの！！！！知り合いなのね！！！！そうなのね！！！！」

星が全てを言い終わる前に女性は、話に割り込み星の胸倉をつかみ前後左右に揺らし、問いただす。

「おおおおおおじょうさああああああああん・・・。ゆううううらああああされたらあああああ話せないよおおおおおお。」

揺れる星の声を理解し、女性はその手を止める。

「あら、ごめんなさい。少々興奮してしまいました。ごめんあそばせ。」

手を離しようやく落ち着く女性。

そして、星達はシジマの話と自分たちが何をしに来たのかを話した。

「そう。先生がそう言ったんですか。分かりました、あなたたちにご協力いたします。」

「ああ。で、そろそろ名前教えてくれない？」

「それは、失礼しました。私の名前は、ミヨ・イザナミ。クロノ様

と同じくシジマ先生に弟子入りしたものです。以後よろしく願います。」

礼儀正しく挨拶をするミヨ。

そして、再び先刻のサンドを探し始めた。

「で、お前ら。例のガキの画像データはボスに送ったのか？」

「はい。ホールの監視カメラとパーク内のカメラで撮ったものを確かにお送りしました。」

「そうか。後は指示を待つだけか。」

どこかも分からない一室。

白い服を着た者と黒い服を着た人間が何人もいる。

しかし、共通してその服の胸には『R』の文字があった。

「さて、画像も取れたから、サンドを回収しろ。今、あいつらに捕まったらまずいからな。」

「了解。」

そして、パソコンを操作してる人間がキーボードを素早くたたき始める。

巨大なビルの最上階。

そこに一人の男がいた。

黒いスーツに胸には『R』の文字。

そして、パソコンに何枚かの写真が送られてきた。

そのデータを見て、口元が笑う。

「・・・オルドラン城で報告がなかったら、危うく見失いところだったが、ついに見つけたぞ。P-H781。」

その男の見ている写真には、3人の人間が映っていた。

茜色の髪の女。

猫背な男。

そして、目的の金髪の男。

そんな時、電話が鳴り響く。

「なんだ。」

『ご報告します。ターゲットがハナダ付近で目撃されたとの情報がありました。』

その報告を受け、男の口元がさらに笑う。

「そうか。例のボールができるまでには見つける。何が何でもだ。」

『了解』

そして、電話を切る男。

「ついに見つかったぞ。我々の計画の最後のピースが！」

笑いをこらえられない男。

そんな男に、先刻よりいた客が話しかける。

胸に『G』のマークを付けた男が。

「探し物が見つかったのか？」

「ああ。我々の計画をより確実なものにするための駒だ。」

出されていた、飲み物を一口飲み、男は答えた。

「……しかし、素直に従うとは思えないが？」

「そこは、貴様らの科学者の出番だ。確かプルートとかいったか？

貴様らの手足の雑兵もそいつの研究で、感情のない駒になったんだ。

「

「過信はするな。所詮は人の技術だ。それと、その可能ならばその

写真の茜色の髪の女も捕らえてほしい。」

眉をひそめる、その男。

「なぜだ？」

「仲間からの報告で、その女も、貴様の人形に負けず劣らずの特別な力を持っているそうだ。」

「分かった。可能なら捕らえよう。」

こうして、世界の夜は深けていった。
悪意と野心。陰謀を抱えた人間を残したまま……

第42話 「悪意と闇へ見え隠れする闇」（後書き）

はい。こんばんわ

アカネ「こんばんわ。」

ミヨ「こんばんわみなさん。」

えへ今回から、登場した新キャラのミヨさんです。

ミヨ「はじめまして、みなさま。」

でも、ミヨさんはあんまり出番はないよ

ミヨ「あら、それは残念です。」

でも、すごく重要な場面や感動的なシーンで目立つようにしてあるよ。

ミヨ「あら、うれしい。」

では今回はこれで

第43話 「次の事件〜ドキ女同士の戦い〜」 (前書き)

今回はクロノには修羅場の中心に立つてもらいました

第43話 「次の事件〜ドキ女同士の戦い〜」

すでに何時間が経過したのかも分からない。

異様なオーラを出していたサンドを探していたアカネ、クリアス、星、ミヨ。

しかし、その後そのサンドが彼らの目の前に現れることはなく、彼らは一度サファリパークを出ることとなった。

「あれから、出ませんでしたね。」

帰り道、アカネがそう、3人に言った。

「ですが、異様なポケモンがいた事には変わりありません。それだけでも収穫でしたわ。」

それに対しミヨがアカネに付け足す。

確かにあのサンドは捕まえられなかったが、異常なポケモンがいることが分かった。それだけでも収穫だった。

そして、シジマの家についた。

「クロノさまあああああああ！！」

道場の戸をあけ、中にいるクロノに飛びつくミヨ。

それをよけるクロノ。

そして、ミヨは豪快に顔から床に倒れこむ

「久しいなミヨ。」

「はい！お久しゅうございます！！」

鼻血を出しながらクロノにすり寄るミヨ。
しかし、明らかにぶつけただけで出る量ではない。クロノに会えたことで血圧でもあがっているのだろう。

「うむ。クロノ。腕は衰えてはいないようだな。これからも精進するがよい。」

「はい。ありがとうございます。」

シジマに一礼し、クロノは帰ってきた3人に顔を向ける。

「お帰り。で、首尾はどうだった？」

「それは落ち着いてから話すわ。それよりおいっちゃん腹減ったわ。」

シジマの邸宅で夕食を食べるクロノ達。
相変わらず、ミヨはクロノにベツタリとくっつき、食事どころではなかった。

「では、そちらの首尾を聞こうか。」
食事を終え、お茶をすすっている時、シジマは星に聞いた。

「ん？確かに異常なポケモンはいたよ。でも捕獲はできなかったよ。そんなポケモンがサファリ内にいるんだ。まともなサファリパークではないだろうね。」

「そうか。やはりな。」

腕を組み、考えるシジマ。

「で、どうする？また、明日行ってみるか？」

「そう、何度も行けば怪しまれる。異常なポケモンがいただけでも収穫だ。」

確かに何度も行けば、怪しまれるもは明白。向こうも警戒し、異常なポケモンをパーク内に出さなくなるかもしれない。

「先生。実は、ここに来る前、変な噂をきいたんですが。」

「ん？どんな噂だ？」

ミヨの話に耳を傾けるシジマ。

「実は、チヨウジタウンの怒りの湖に普通のギャラドスより凶暴なギャラドスがいるって噂なんです。」

「凶暴なギャラドス？」

「はい。それも色違いの赤いギャラドスが。」

元来ギャラドスは凶暴なポケモンだが、それに輪おかけて凶暴ばとすると人の手ではどうしようもない。

実際、チヨウジタウン付近でギャラドスによる被害報告はこの、タウンバシテイにまで届いてはいた。

「それが、今回の事件に関係があるか？」

「勘ですが、何らかのつながりがあるものと、考えてはいます。」

シジマの質問に答える、ミヨ。

立て続けに起きている、異変。これらが何の関係がないとは思えなかった。

「ならば、二手に分かれるか？幸い頭数はあるんだしさ？」

突然の星の提案。

こちらの問題も危険だが、凶暴なギャラドスも調べる必要があった。

「そうだな。ならば、クロノ。お前はギャラドスの調査だ。残りのメンツは戦力バランスを考えて……」

「はい！私はクロノ様と一緒にいきたいです！！」

そう名乗りを上げたのは、無論ミヨだった。

しかし、流星にアカネも。

「あなた、いい加減にしなさい！！さっきからクロノ、クロノって！！あなたクロノのなんなのよ！！」

「あら、その言葉そのままお返ししますわ。」

「私はクロノの彼女よ！！」

ミヨに稲妻が走る。そして涙目でクロノを見る。

「クロノ様！本当ですか！？こんなチンチクリンとお付き合いしてるなんて！！私というものがいながら、こんなまな板娘なんかと！」

キャラ崩壊していくミヨ。

「お前、言うに事書いて、ひどいこと言ってるな。そうだ。アカネは俺の彼女だ。なんか問題あるか？」

あっさりと、交際を認めるクロノ。

それを聞いたミヨは両膝着き、愕然とした。
しかし、

「良いでしょう！！アカネさん！！クロノ様をかけて私と勝負しなさい！！勝った方がクロノ様と一緒にギャラドスを調査しに行ける
どうですか？」

「いいわよ！！その無駄にでかい胸をへこませてやる！！」

「あら？まな板にできるかしら？」

それを見る男集。

星はわれ関せずといわんばかりにシジマの家でくつろいでいた。

「主よ。これは修羅場というものですか？」

「俺に聞くな……。」

「クロノよ。こういった問題は早目に片付けといた良いぞ。」

口々にクロノに言うクリアスとシジマ。
今、女同士による、戦いの火ぶたが切って落とされた……。

第43話 「次の事件〜ドキ女同士の戦い〜」(後書き)

はいはい。次回は修羅場による、女同士のキャットファイト!!
どうなるクロノ?!

クロノ「俺、なんか悪いことしたか?」

クリアス「しかし、はたから見ていると、これ以上面白いものは無いですよ?」

クロノ「なかなかいい趣味してんじゃねえかクリアス。」

H A H A H A。では修羅場の場に立ち会えクロノ!!

第44話 「思いをぶつけて弱いたら強くなればいい」 (前書き)

あんまり修羅場になりませんでした。
ちよっと残念です。

第44話 「思いをぶつけて弱いたら強くなればいい」

火花を散らしにらみ合う二人の女性。

その間に立ち、審判を務める男。言うまでもないクロノ本人だ。

(なんでこうなるんだか?)

いまいち自分の置かれている状況が分かっていないクロノ。

そんなクロノをお構いなしにアカネとミヨは闘志をむき出しにしている。

「んじゃ、ルールな。使用ポケモンは1対のみ。夜だしな。良いな？」

「よろしくだよ。」

「問題ないわよ。」

ルールを説明するクロノに二人は答え、ボールを構える。そして

「行くわよビレッジ!」

アカネのボールから出てくるビレッジ。

眼前の相手に闘志と敵意を向け、構える

「あら? ジュカイン? これは相性で勝っちゃましたね。」

ミヨの投げたボールからは。

燃えるような赤い髪。その姿はまるで西遊記の孫悟空に酷似したポケモン。

「これが私のパートナーのゴウカザルですわ。」

フィールドでならみ合う2匹。

しかし、ゴウカザルの構えは独特だった。

クロノのガレスとも違う。まるで柳のように緩やかに動き絶え間なくその構えは変わっていく。

「クネクネと、少しは落ち着きなさいよ！」

先に仕掛けたアカネのビレッジ。

腕から生えている刃のように鋭い葉。それから繰り出される『リーフブレード』。

並みの相手ならば当たっていた。しかし、ミヨはその『並み』の相手ではなかった

ビレッジの攻撃を紙一重でかわすゴウカザル。そして、返して一撃をもらう。

距離を置くビレッジ。

相手の攻撃は今までの誰よりも軽かった。

しかし、このゴウカザルは今まで出会ったポケモンの中で一番しなやかに動いていた。

「……………厄介ねその動き。」

アカネは今の一撃で理解した。ミヨは強いことを。

それだけで頭に上っていた血が下がった。

「お褒めにあずかり光栄ですね。でしたら、このまま負けてくださいらない?」

「それはヤダ。」

ミヨは笑いながらアカネに言ったが、アカネはそれを断った。

距離を置くビレッジ。

距離を置けばこちらでも向こうも攻撃はできないと考えた。

「あら?近づいては来ないのですか?でしたら、ゴウカザル、火炎放射。」

「な!?!」

思いもよらない攻撃。

ゴウカザルから放たれる火炎放射。

それを避けるビレッジ。

しかし、

炎に隠れて近づいてきたゴウカザル。攻撃を避けることのみ集中していたビレッジをゴウカザルの拳は的確に捉えていた。

攻撃を食らい、フィールドの端まで飛ばされるビレッジ。思わず片膝をついてしまう。

「残念ね。あなたの実力ってこの程度?」

少し残念そうにアカネを見るミヨ。

「……何が言いたいんですか？」

「貴方今まで、クロノ様をお守りしたことがあって？今回の事件、確実に裏に何かいますわ。貴方もクロノ様を好いているなら、守れるだけの力がないと、今回の事件の黒幕に太刀打ちできず、クロノ様の足を引つ張る結果になりえるかもしれませんわよ？」

ミヨの言っていることは正論だった。

今までクロノに助けられてきた。クロノを助けた事は無かった。いや、メンタル的支えになっただけかもしれないが、物理的に助けた事はなかった。

今回に事件に黒幕がいたと仮定して、もしその黒幕が強大な力を持つていたらクロノを助けられるのか？いや、クロノの足を引つ張るかも知れない。

「だから、実力が高い順に危険な場所に行くべきだと考えます。ギヤラドスは凶暴なポケモンよ。生半かな実力では足手まといよ。」

的確な指摘をするミヨ。

確かにアカネも実力は低くは無い。しかし、飛びぬけて高いわけでもない。

危険な場所に連れていくのには少し心もとないのが事実だった。

「……確かに私はこの中のメンバーじゃ一番弱いかもしれない。クロノにいつも守ってもらっている。でも、クロノの助けになりたいと思う気持ちは誰にも負けてないつもりです！！」

アカネの気持ちに呼応しビレッジが答える。

ゴウカザルに突っ込み、『リーフブレード』を放つ。

しかし、また紙一重でかわし、一撃を食らわせるが……

「クロノ様を思っている気持は私も負けていないつもりよ。だから、クロノ様にふさわしい女になるために、隣にいて無様ではないように鍛えたわ。たとえ貴方がどんなに頑張っても、私には勝てないわ
! !」

ゴウカザルの拳はビレッジに食い込み、勝負はついていたように見えた。

「・・・そうよね。守ってもらっただけじゃダメよね。だから、私たちは強くなるの! !」

ビレッジの腕がゴウカザルの顔面を鷲掴みにし、地面に向かって押し倒す。

「『地震』! !」

ゴウカザルを地面にたたきつける勢いから、地震を放つビレッジ。勝敗は決した。

「弱いなら強くなる。私もクロノの隣に似合うように努力していく。」

ミヨに言うアカネ。

「生きているかぎり、人は強くなれる。たとえ今は弱くても、強くなるうとする」
『意思があれば。』

次の日。

怒りの湖に行くのは、クロノ、クリアス、アカネの3人になり、残

ってサファリパークを調査するのは、ミヨと星に決まった。

「では、先生。行ってきます。」

「うむ。何か分ければこちらにも連絡する。気をつけていけ。」

クロノを心配し、送り出すシジマ。

「では、アカネさん。クロノ様の隣お任せしましたよ。」

「はい。ミヨさんも気をつけて。」

握手をする二人。

そして、アカネに耳打ちする。

「クロノ様って、意外と鈍感だから、行く時は行かないとだめですよ?」

「分かってますよ。」

そして笑う2人。

こうして、3人は次の事件に向かって足を運んで行った。

そこが、運命の分かれ道になろうとも知らずに……………

第44話 「思いをぶつけて弱いたら強くなればいい」(後書き)

あい、女同士のキャットファイトは終了です。

星「なあ。作者さんよ。おっさんまたしばらく出番なし?」

ん?まあ3〜4話くらいかな出番無くなるのは?

三ヨ「私は?」

とりあえず、カントーに行ってからまた出番ありかな?でもそんなに長いこと退場させることはしないから安心して。

ケルア、セバス「……………」

ジラーチ、レジシリーズ、カイ、グラ、レックウザ「……………」
「……………」

あああああ、視線が痛い……………」

第45話 「チャンピオンの真実〜裏切られた信頼〜」(前書き)

ここから物語は急展開していきます。

第45話 「チャンピオンの真実〜裏切られた信頼〜」

天と地を揺るがす叫び。

怒りの湖に、その姿を現した赤いギャラドス。

その叫びは対峙する者を振りあがらせる叫び。

「チツ！！少しはおとなしくしろよな！！」

ガレスと共に駆け、ギャラドスの猛攻を避けるクロノ。

上空には、アレスタンとアカネを乗せたカイリユー。

水面にはクリアスとエンペルト。

「クロノ！！同時に行くよ！！」

「タイミングは任せる！！」

アカネの合図に呼応するクロノとクリアス。

遡ること数時間前。

チヨウジタウンに着いた3人を待っていたのは、粗ぶるギャラドスと対峙するジムリーダーのヤナギだった。

满身創痕のヤナギ。手持ちのポケモンはとうに戦闘不能な状態だった。

そんなヤナギにとどめを刺そうとするギャラドス。

そんな場面にクロノ達がついたのだった。

ヤナギを助け、避難させた後に代わりにクロノ達がギャラドスの相手を引き受けた。

そして今に至る。

いや。すでにクロノ達も後はなかった。

彼らの手持ちは今出ているメンバー以外はすべてやられていた。それだけこの、赤いギャラドスが強く、凶暴なのだ。

「カイリユー！ 『流星群』 ！！」

「ガレス！！ 『雷パンチ』、アレスタンも 『流星群』！」

「エンペルト、『ハイドロカノン』 ！！」

3人の攻撃がギャラドスを捕らえ、クリーンヒットした。弱り倒れ込むギャラドス。

「アカネ、今だ！！」

「うん！！」

そして、アカネがモンスターボールを投げ、ギャラドスが吸い込まれていく。

地面に落ち、しばらく震えるボール。

やがて止まり、捕獲が完了した。

ボールを持ち上げるアカネ

「とりあえず、捕獲はできたけどどうする？このギャラドス？」

「とりあえず、親父と所に送ろう。あの凶暴性は異常だからな。」

これで怒りの湖の事件は表面化の事件は解決した。
そして、ヤナギの待つポケモンセンターに3人は向かった。

『で、このギャラドスを調べればいいんだな?』

「ああ。頼むよ親父。流石にポケモンセンターで調べてもらうのも危ないしさ。」

『ふうー……。まあ良いだろ。何か分かったら連絡する。』

「サンキューな親父。」

TV電話でケルアと話し赤いギャラドスを送ったクロノ。

こちらのポケモンセンターで調べてもらうのも良いが、いかんせん凶暴なギャラドスのため、専門的機関がある自分の所で調べてもらった方が良く考えた。

「とりあえず、これでギャラドスによる被害は無くなったと。」

「ですが、問題はこれからですよ。なんで赤いギャラドスが怒りの湖に現れたのかを調べて、サファリパークのサンドとの関連性を調べる。やることは山積みですよ。」

一息入れたクロノにクリアスが今日の前にある問題を口に出して言う。

それを聞き、肩を落とすクロノとアカネ。
やるべき問題は山積みだった。

「なら、ヤナギさんに聞いてみようよ。なんか知ってるかもよ?」

「だな。」

病室にいるヤナギは意外と元気だった。そして、そんなヤナギに先客がいた。

現カントー、ジョウトリーグのチャンピオン・ワタルだった。しかし、彼の素性はフスベ出身であること、ドラゴンタイプ使用であること以外は何も分かっていない人物。しかし、ポケモンの保安を守るチームの一員であった。

「ん？君たちか。赤いギャラドスを捕まえたっていう子たちは。」
病室に入ってきたクロノ達に気づいたワタルが声をかける。

「君がクロノ君か。ダイゴからは聞いてるよ。すごく強いみたいだね。」

「あ、それほどでもないですよ。」
褒められクロノは謙虚な態度をとるが、ワタルはそれを否定した。そして、話は本題に移った。

「そうか。実はワシらも今、同じ話をしていたところなんじゃ。」
顎もさすり話すヤナギ。

「実は私に心当たりがあるんだ。君たちの力を貸してくれないか？」
無論クロノ達はワタルに力を貸すことに何の躊躇はなかった。

「寧ろ俺たちが力を貸してほしいくらいですよ。」

「そうか。なら今すぐ行こう。」

そして、クロノ達はワタルについてポケモンセンターの外にある、一軒のお土産屋に来た。

店の外には一本の大きな木が植わっている。

「……ここってお土産屋さんですよね？」

前に行くワタルにアカネが言う

「そう。表向きはね。」

そう言い、店内に入っていくワタル。クロノ達もそれに続いて店内に入っていく。

店の中には、1人の老人と店員が数人。

店の中は何の変哲もないお土産屋であり、何もおかしなものは無かった。

「いらっしやいませ。」

レジ前にいる店長の老人がクロノ達に対し頭を下げ挨拶をする。

しかし、ワタルは……

「演技はいい。さっさと秘密の入口を教えろ。」

殺気を込めた声で店の中の全員を脅すワタル。

無論クロノ達も例外ではなかった。

ワタルのその声に、思わず身を固めてしまった。

「お客様。一体何を言っているのですか？秘密の入口とは？」

「シラを切るか。ならばこちらにも考えがある。カイリユーー！！」

腰に付けたボールから、もっとも信頼するカイリユーーを出すワタル。そして、カイリユーーに攻撃の命令を出すワタル。

カイリユーーはそれに答え、店内で暴れ始める。

「ちよっ！！ワタルさん！！なにやってんですか！！」

理解できななワタルの行動に思わずクロノが口を出す。

「今に分かるよ。」

そう言うワタル。

そしてその真意はすぐに分かった。

ひと際大きな筆筒を倒すカイリユーー。

その下からは地下へ続く階段が隠されていた。

「さて、店長。これは何ですか？ご説明を。」

先刻とは違い、穏やかな口調で話すワタル。

店員と店長は苦虫を噛んだような顔をし、その本当の姿を出す。

「ちっ！ばれてたなら仕方ない！！お前ら！！こいつらを片づけるぞ！！」

クロノ達に戦意を向ける店員達。

構えたボールからポケモンを出し、クロノ達を排除しようとする。

「なんだか知らないけど、来るなら来い！」

無論クロノ達もそれに応戦し、ポケモンを出し対応した。

しかし、店内は狭い。

さらにワタルの出したカイリユーが店内をさらに狭くしているため、ガレス達はうまく身動きが取れない。

「君たち！頭を下げて！！」

急にクロノの頭を押さえしやがむワタル。つられてアカネ、クリアスもしやがむ。

4人の頭をかすめるカイリユーの尻尾。そして、その尻尾は戦意をむき出しにした店員達とポケモン達を一瞬で気絶させた。

「お見事。」

「狭いなら狭いなりの戦い方があることも覚えておくといいよ。」

膝に着いた砂埃をはたきながら、見事なワタルの戦術を褒めるクロノ。

そしてワタルは余裕の表情を浮かべながら、立ち上がる。

隠された階段を下がると、上とは違うつくりの廊下に出た。

鉄で作られた壁に、暗闇を消す電気の光。

ここが倉庫でないことは容易に想像できた。

「ワタルさん。ここ、何ですか？」

先に行くワタルにアカネが言う。

長い廊下警戒しながら歩くワタルは思いもよらないことを口にした。

「……君たちはロケット団を知ってるかい？ここはそいつらのアジトの一つと言われている場所さ。」

ジヨウトに来る前。星が言っていた悪の組織。その名がロケット団だった。

クロノ達もまさか自分たちがそいつらに関わるとは思ってもいなかった。

そして、ワタルが足をとめた。

そこは、巨大な空間。

三本の巨大な筒状の機械が低い音を立てながら動いている。

「何だこれ？」

そんな機械を見てクロノが口を開いて見入ってしまった。

「……ロケット団は、ポケモンを強化し、戦争などに流用し金儲けをしている組織でもある。そして、その中には人工的にポケモンを進化させる非人道的なこともある。さらには、ポケモンを操る電波を発し操るなどの方法も行っている。これは、その怪電波を発する装置さ。」

ワタルがその機械の詳細を説明した。

しかし、クリアスには一つ腑に落ちない点があった。

「……ワタルさん。なんでそんなことを知ってるんですか？いくらロケット団を調べていたとは言え、そこまで詳細なことはそう

簡単には分かることは思えません。」

「ごもつとも。」

クリアスの指摘は的確だった。

そのことはクリアスだけでなく、クロノ、アカネも思っていた。そして、その答えを教えてくれる人物が現れた。

「その質問。私が教えて差し上げましょう。」

クロノ達の後ろから、響き声。

黒い制服を着た団員の中心にいる、白い制服に身を包んだ女性。

「……アテナ!!」

「覚えていてくれて光栄ですね。元ロケット団戦闘隊長ワタル。」

アテナと呼ばれる女性の発言に驚くクロノ達。

「ああ。そう言って動揺を誘って戦法ですか？悪人らしいことだね、ワタルさん。」

「……」

クロノの言葉を聞いても顔色一つ変えないワタル。

その表情からアテナの言葉が嘘でないことを物語っていた。

「……嘘じゃないんですね。」

「……ああ。本当のことだ。五年前まで俺はロケット団の戦

闘隊長としてここに身を置いていた。」

拳に力を入れるワタル。

アテナは不敵な笑みを浮かべ4人を見る。

「さて、ここまで来たのです。ロケット団流のもてなしを受けてもらいましょう。お前たち！！金髪の男だけ捕らえなさい！！生きていけばいいです。抵抗できなくなるまで弱らせなさい！！」

「は！」

ボールから大量のポケモンを出す、ロケット団団員。
4人もそれぞれのポケモンを出し、それに応戦する。

激しい持久戦。

一体一体は大した強さは無かった。
しかし数が多すぎた。クロノモアカネにしか気を使えない状況であり、いつの間にか、ワタルとクリアスとはぐれて戦っていた。

「アカネ、まだ無事か！」

「うん！でもクリアスとワタルさんが・・・」

「2人なら大丈夫だろ。それより今はこのザコを片づけるぞ！！」

「『ドリル嘴』！！」

エンペルトが目の中のゴルバットを倒すクリアス。
これedyouやくクリアスを追ってきた敵は全て倒した。
額の背を拭い、エンペルトをボールにしまう。

「さて、主達と合流しなくては。」

廊下を走り、先ほどの機械がある部屋まで戻った。
そこでクリアスは、思いがけない人物と出会った。

「貴方は。いつここに？」

「……………」

機械の音がうるさく、良く聞き取れなかったが、意味は理解できた。

「……………」

「ええ。主達がまだ戦っているかもしれませんが。早く行かなくては。」

「

「……………」

「それは助かります。では急ぎましょう。」

そして、その人物に背を向けた瞬間、彼の意識は遠のいていった。

「な……………んで……………」

薄れ行く意識の中、その人物の顔を見る。
まるで機械的なその顔を最後に彼の記憶は消えていく。

「良くやってくれた。例を言うわ。」

「同盟を組んでいたからな。後は女の方だ。」

「そいつも任せた良いんだな？」

「任せる。」

そして、男はその場から消えていった。
消えた意識の中、クリアスはその男を少しでも信じた事を悔やんでいた。

第45話 「チャンピオンの真実」裏切られた信頼」（後書き）

「ポケモン白黒楽屋裏」

スタッフ「はい。今日の収録はOKです。お疲れでした。」

クロノ「お疲れでした」

アカネ「おっつ」

クリアス「ども」

ワタル「ああ、疲れた。」

クロノ「ワタルさん、どうです？この後一杯？」

ワタル「良いねえ。給料日前だけ行っちゃおう？」

クロノ「クリアスさんはどうです？」

クリアス「ああ……。俺パス。財布がさびしいからな。」

クロノ「アカネさんは？」

アカネ「ごめん。彼氏呼んでるからパス。」

ワタル「しょうがないな。2人で行くか？」

クロノ「ですね。」

クリアス、アカネ「……………なんだこれ？」

クロノ「さあ？」

ワタル「作者が発案した新しい後書きらしいぞ？」

いや、ネタがなくて。

第46話 「折れてゆく剣、強者が抱える苦悩」 (前書き)

うん。ネタがない。

なんか面白いことが思い浮かばない・・・

第46話 「折れてゆく剣、強者が抱える苦悩」

「ふざけてんのかアンタは!!!」

ワタルの胸倉を掴み、壁に押し付けるクロノ。

そんなクロノの腕を掴み引き離そうとするアカネ。

「貴様はそんな、理由でそのカイリユーを!!!道具みたいにしたって言うのか!!!」

「.....」

「答える!!!」

何も言わないワタル。

そして、星がクロノの肩を掴み2人を引き離す。

「落ち着け青年。今は、クリアスとエンテイの問題が先だろ?違つか?」

「クソ!.....俺はあんたを認めない!!!」

近くにあったゴミ箱をけり飛ばしその場を離れるクロノ。

「悪いねチャンピオン。まだ若くて感情がコントロールできないのよ。」

「.....構わないさ。彼の怒りはポケモンを。カイリユーを心配しての怒りだ。恨まれ、嫌われて当然のことをしたんだよ俺は。」

襟を直し、離れていくクロノの後姿を見る。
怒りに震えているが、今自分がすべき事を理解しているクロノの背中を。

今クロノ達がいる場所はチョウジタウンのポケモンセンター。
遡ること数十時間前・・・

ロケット団のアジトで、大量の団員達と戦っていたクロノとアカネ。

「クソ！次から次と！農家の出荷する果実なんかより多いんじゃないか！？」

「まだ冗談が言えるなら問題ないね！？それよりもう、クリアス達
が心配だよ。」

背中を合わせ、構える2人。

ガレスとビレッジも度重なる連戦で肩で息をし始めていた。
そんな時だった。

「バンギラス！！『ギガインパクト』！！！」

聞きなれた声と共に、バンギラスが団員達に向かって突撃しながら
向かってくる。

遠巻きに見てもそれが分かった。

吹き飛ばされていくロケット団団員。

バンギラスが作った道を、一人の男が歩いてくる。

「よ！青年。助けに来たよ。」

右腕を振りながら近づいてくる星。
思わぬ助っ人に2人は驚きを隠せなかった。

「おっさん！！なんで!?!」

「ん〜？おっさんだけじゃないよ？青年のストーカーまで着いてきてるよ？」

そう言い、来た道を指差す星。

後ろからは、団員達とポケモン達の悲鳴と共に足音が近づいてくる。

ゴウカザルを引き連れ、気を失った団員を引きずるミヨが。

「クロノ様あ〜！お怪我はありませんでしたか!?!」

クロノを見るなり、目を輝せるミヨ。

団員を放り投げ、近寄りクロノの手を握る。ミヨの手には団員達を殴った時に着いたであろう血が着いているのは言っまでもない。

「あ、ああ。なんとかな。でお前たちはなんでここに？」

ミヨがクロノの質問に答えようとした時だった。

「……クソ！このまま生きて帰れると思うなよ！マルマイン！！
『大爆発』！！」

倒れていた数名の団員が残されたボールから数匹のマルマインを出し、『大爆発』を命じた。

油断した。

一瞬、彼らが油断したためにこの爆発は避けられない。そう誰も思っていた。しかし、

「カイリユー！『バリヤー』！！」

ワタルと共に現れたカイリユー。

そして、カイリユーから放出される力場に守られ、クロノ達はマルマインの大爆発から難を逃れた。

しかし、爆発の後に残っていたのは、今までロケット団として、人としてここで戦っていた者たちのなれの果ての姿だった。

そんな惨劇を見たアカネ。思わず膝を着き、口を押さえる。指の間から僅かに逆流してきたものがあふれ出してきた。

そんなアカネにマントを被せ視界を遮るワタル。

クロノも立っではいるものの、胃が逆流しそうな状態であった。無論ミヨモ。

「……ひとまずここを離れよう。」

そう言い、5人はひとまずこのアジトを離れることにした。

帰り道、警戒こそしていたがなんの襲撃すらなかった。

それどころか、幹部と思われるアテナと呼ばれた女すらあれ以来姿を見せていなかった。

そしてクリアスも……

地上のお土産屋。

ワタルのカイリユーが暴れ、今となっては見る影もない。

「アカネ、大丈夫か？」

「……うん。」

両手で自分の腕をさすり答えるアカネ。しかし、今だに肩を震わせていた。

そんなアカネをミヨが落ち着かせ、男たちはこれからの事を話すことになった。

「おっさん。クリアス見なかったか？途中ではぐれてな。」

「ん？いや。見てないが？まだアジトの中か？」

いつものおどけた雰囲気ではない星。

そこにワタルが

「……すまない、クロノくん。彼は、アテナに連れていかれた……。」

ワタルのその言葉を聞き、驚くクロノ。

「な、何だって！！」

「彼がアテナと団員達に連れて行かれるのを見て、助けようとしたんだか……。すまない力及ばず、連れていかれてしまった。」

頭を下げるワタルに食ってかかるクロノ。

「なら、今すぐ追わないと！！！」

すると星は懐中時計を見て、クロノの肩に手を乗せる。

「もう、無理だ。時間を逆算したが、どう見積もっても1時間以上は過ぎてる。行き先が分かっているならまだしも、分からないなら追跡は無理だ。」

「クソ！！なんでクリアスなんだ！！」

手近なテーブルを力いっぱい殴りつけるクロノ。
悔しさと己の無力感に押しつぶさせそうになりながら。

「・・・このアジトのこともある。ひとまずポケモンセンターに行こう。」

星が全員をポケモンセンターに誘導し、そこで再び話し合いを始めた。

しかし、ワタルはアジトの事を警察機関に報告するため、一時的に席を離れていた。

「・・・で、おっさんたちはなんでここに？」

ようやく落ち着いたクロノとアカネ。

そして、星とミヨがなぜここにいるのかを改めて聞いた。

「例のサファリパーク。裏を調べる事が出来てな。調べたら、経営者がロケット団に捕まってな。で、ロケット団が作った例のデータポケモンの性能を調査するための施設になってたんだよ。そこで、おっさんと嬢ちゃんとシジマさんでロケット団を追っ払うことはできたんだが、こっちでなんかエグイ計画を立ててるって話を聞いてな。で、慌てて飛んで来ったわけ。」

壁に背中を預けて話す星。

ミヨはそれに便乗して着いてた。

「そうか……。でも、何だそのエグイ計画って？それとクリアスってなんか関係があるのか？」

そんな時だった。

クロノの頭に響く声。

『聞こえるか、特異点？』

『なんだ？この声？』

『ほう……。念での会話が可能になったのか。大分力が体になじんだようだな。』

『なんでデメエーは？』

『エンテイと言えば分かるか？』

「『エンテイだと！！』」

思わず心の声を口に出したクロノ。

そして、センターの外に走りだし、辺りを見渡す。

「どこだエンテイ！！」

叫ぶクロノ。

そしてエンテイはその姿を見せた。

少し高くなつた高台からクロノを見降ろし。

そんなエンテイをにらみつけるクロノ。

3人もその場に現れ、クロノの後ろからその光景を見る。

「貴様がエンテイか……！兄さんを殺したポケモン……！」

「ふ……。激しい憎悪の色。よほど我が憎いらしいな。」

「降りてこい！面と向かって話せ……！」

「……スズの塔、最上階に來い。そこで我らの因縁に終止符を告げよう。」

「へっ！怖気づいたのかよ……！」

「スズの塔に來れば、貴様の探し人の居場所くらいは教えてやるぞ？」

「何だと……！」

「待っているぞ！転生した騎士よ……！」

そして姿を消すエンテイ。

強く拳を握り、エンテイがいた高台をただならむクロノ。そんなチヨウジタウンには、夕闇が近づいてきていた。

エンテイに会ってから、数分後にワタルは姿を見せた。

「遅くなってすまない。そっちの情報交換は終わったかい？」

「……ええ。」

別れた時と雰囲気の違うクロノに違和感を感じるワタル。
そしてアカネが先刻の出来事を話した。

「・・・そうか、それで。だが、これでクリアス君の居場所が分かるんだ。大きな進展じゃないか。」

「ええ・・・。」

「まだ何かあるのかい？」

大きな進展があったが、クロノの疑問は残ってた。
そう、ワタルの素性についての疑問が・・・

「何個か質問良いですか？」

そうワタルに言うクロノ。

そして、一つの機械を取り出した。
ポケナビ。

衛星とリンクし、リアルタイムで自分の居場所が分かる電子マップだが、これの最たる機能はそれではない。

独自のシステムでポケモンの強さを数値化しするシステム。

これを目安にし、ポケモンを育てるトレーナーもいるくらい便利な機能である。

そして、この機械で測定すると、カイリユースは平均55以上ないと進化しない。

しかし、ワタルのカイリユースは

「分かりますか？なんでワタルさんのカイリユースは40LVなんですか？なんで、あのカイリユースは本来覚えられない『バリアー』を

覚えてるんですか？ワタルさんは、ロケット団で何をしていたんですか？」

何も言わないワタル。

しばらくの無言が続いたが、意を決し、ワタルが口を開いた。

「そう。知っている通り俺はロケット団にいた。しかし、表向きはカントー、ジョウトの最強の四天王として君臨していた。だが、四天王を続けていくうちに『勝つ』事に執着するようになってしまった。挑んでくるチャレンジャーは年を重ねる度に強くなり、俺も勝つことがせい一杯になってきた。そんな時だった。ロケット団に入ったのは。そして、当時まだミニリュウだった、こいつを強くするために非人道的な方法で強くした。そして、俺の強さは増し、四天王の地位も不動の物になった。代わりに、俺はロケット団として、闇に生きた。強さに酔っていた俺は、ポケモンとの信頼を忘れていた。まるで道具のようにポケモンを扱い、傷つけ、負けることを恐れた。そして彼が現れた。1チャレンジャーだった彼が。」

「彼？」

うなづくワタル。そして話を続ける。

「彼の名はセキ。誰よりもポケモンを信頼し、愛していたトレーナーだった。彼に負けた俺は彼に言われたよ。『負けることが怖いかな？』って。俺は怖いと答えた。そしてら彼は、『ポケモンを信頼していれば負けることは怖くない。本当に怖いのはポケモンを信頼できなくなつた時だ』ってね。・・・彼に言われるまで忘れていたよ。勝つことだけに拘つた結果、ポケモンを傷つけ、道具のように扱い、もう戻れないところまで来てしまっていた。ロケット団から足を洗い、1からポケモンを育てなおし、やっと取り戻した信頼だ。」

もう俺みたいな存在は作っちゃいけない。そう思って俺はロケット団を止めようとしている。」

思いの内を話したワタル。

しかし、クロノはそんなワタルに同情はしていなかった。寧ろ怒りを覚えていた。

これが数時間前の事実だ。

夜が町を包み、辺りのは夜になっていた。

夜風が身にしみ、煮えたぎった頭を冷やしていく。

「……まだ許せない？」

後ろからアカネが寄ってくる

「……どんな理由であろうとポケモンを悪用する奴は許せねえよ……。」

クロノにとってのポケモン。

それは家族異常の存在だった。だからこそ許せなかった。

だからこのあのカイリユーがかわいそうに見えた。

しかし、

「でも、あのカイリユー。ワタルさんとして幸せそうだったよ？」

そう。だから、分からなくなっていた。外から見ではかわいそうな

カイリユーだが、本人は、違った。

だから、こそ悩んだ。

移動する飛行機の中。

そこにアテナ率いるロケット団はいた。

「サカキ様、脱走していたプロトタイプは捕獲に成功しました。記憶の書き換えは現在進行中で行っています。」

『そうか。では、ヤマブキまで悟られずに運べ。こちらはアポロが作戦を実行中だ。』

「了解。」

通信を終え、後ろに座っているクリアスに目を向ける。

彼の横には、何人もの化学班が彼の頭に取り付けたコードの先の機器のキーボードを叩く。

「さて……。お人形さん。これからは貴方の本当の居場所で働いてもらおうよ。」

今だ意識が戻らないクリアス。

「ク……口……ノ……」

誰にも聞こえない彼の声。

消えていく彼の記憶。そんな中で呼んだ親友の名。

本当の彼。それは、絶望と闇の中にあつた……

第46話 「折れてゆく剣、強者が抱える苦悩」 (後書き)

今回はいかがでしたか？チャンピオンワタルの黒い面を出してみました。

ワタルの黒い面は『強者である事』でした。

四天王が弱かったらチャレンジャーはどう思います？

だからこそ、ワタルは強くあろうとしました。しかし、そうあろうとした時、無くしたものは、隣にいるポケモンの信頼でした。

手に入れた力はワタルを強者にしました。ですが、負けた時、初めて気づいたのでした。ワタルは『負ける事』を怖がっていたのではなく、『ポケモンが負ける姿を見ること』を恐れていたのです。

誰も友達がフルボッコされる姿なんて見たくいらないですもんね。

第47話 「炎と闇の狂気に落ちた剣」 (前書き)

エンテイは結構好きなポケモンなんで、話の中で待遇してました。

第47話 「炎と闇の狂気に落ちた剣」

一歩ずつ階段を上がる。

上がるたびに木製の階段が軋む。

古の古塔・スズの塔。

クロノが向かう先は塔の頂上。待つ者は彼の敵であるポケモン。名をエンテイと言う。

「ここは俺一人で行かせてくれないか？」

エンジュシテイ、スズの塔の前でクロノが、アカネ、ワタル、星、ミヨに言う。

「……………気をつけてね。」

誰もクロノの意見に反対はしなかった。
そんなクロノをアカネはただ黙って見送った。

「……………待ちわびたぞ。転生の騎士。」

「クロノだ、犬っころ。」

スズの塔の最上階で出会った彼ら。

「先刻とは違う色の心。少しは世界を見て貴様はどう思った？」

「…………見れば見るほど、汚れが目立つ。ぶっちゃけ、見たくなかったと思つて事もあつたさ。」

顔色を変えず答えるクロノ。さらに続けて話す。

「悪党はわんさかいるし、ポケモンを悪用しようとする奴らもいる。人の兄貴を殺したポケモンもいる。正直、人がいなくなつてもいいつて思つた。」

そんなクロノの話を聞き、エンテイが鼻で笑う。

「豪語してた割には、簡単に世界を、人の未来を捨てたな。貴様の決意はそんなものか？」

エンテイがそう言うのと今度はクロノが鼻で笑う

「その言葉、そっくりそのまま返すよ。じゃ、なんでお前は、人と関わる？人が嫌いなんだろ？憎いんだろ？世界が大切なんだろ？なのになんで、行動に移さない？人が憎いなら、俺みたいに行動に移して自分の意思を貫けよ！今の話し合いもそうだ。なんでエンジユシティに俺らを呼んだ？ただ話すだけなら怒りの湖でも良かったろ？…………エンテイ。お前、本当は…………」

「それ以上言うな！！」

吠えるエンテイ。その叫びはクロノの言葉を消した。

「知つた風な口を聞くな！何の使命も持たず、限られた時間しか持たない貴様に我々の苦悩が分かるのか！？」

「知るか、そんなもん！でもな！お前たちがどんなに偉くても、悩んでも『命』を奪う事は許されてねえんだよ！何がお前を苦しめるかは知らなえ。……今までお前の仲間たちと話したよでも、どいつもあんまり『人間』の事を考えて無かった。でも、お前は違う。なんでそんなに人間を気にかける？それを教えてくれ。」

二人の間の空気が変わった。

「……クロノ。なぜ神は人を作ったのだ？なぜ人間の命は短いのだ？なぜ、我らの命は無限なのだ？なぜ我は人と共に歩めぬ？共に歩み、笑い、泣き、最期を迎えられぬ？……この長い時の牢獄の中に我々は閉じ込められた。牢獄の中から、人の死を見た。手助られなかった。ミイを……。そして、貴殿の兄を手にかけた。貴殿が兄をどんなに思っていたのかを知りながら。」

一陣の風が吹き、クロノの髪を揺らす。

「人に手を貸したら、人は我に力に酔い、力を欲した。そして、我の愛した人は、無くなっていく。……ならば我が、人の最たる恐怖になれば人は我に近づかなくなり、我も近づかなくなれば、どちらも傷つかなくてすむ。もう、愛した人間が無くなるのは見たくない……。」

瞳を閉じるエンティ。

その瞳には僅かながらの涙。

人を愛した。しかし、彼が近づけば人に不幸が舞い降りる。そして、彼が友好的ならば人が彼を狙う。

ならば、人が寄り付かなくなよようにすればよい。

畏怖の象徴になれば言い。

そして、自分が近づかなくなれば、誰も不幸にならなくて済む。

「……だが、貴様が兄貴を殺したのは事実だ。俺の、怒りはどうすればいい？」

「貴殿の兄を殺めたのは我の、怒り故。クロノの怒りが、我を殺すことで鎮まるならば、我もそれを受け入れよう。」

すると、クロノの目の前の空間が割れ、一振りの剣が現れる。刀身は刃こぼれしているが、しっかりとした造りの剣。

「貴様とゆかりの深い剣だ。我を殺すことで貴様の怒りが静まるならば、その剣で我の首を落とせ。」

何も言わずに剣を取るクロノ。

そして、エンティの目の前に立ち、剣を振り上げる。瞳を閉じるエンティ。

「……これが、俺の答えだ!!」

そう叫ぶクロノ。そして、腕を振り下ろす。

ゴスン!!

鈍い音がスズの塔に響く。

頭を押さえ、転げ回るエンティ。

拳を押さえ、声にならない悲鳴を上げるクロノ。

床に刺さる剣。

「~~~~~!!こっんの石頭!!マジいてえ!!」

「その言葉!!そのまま返すわ!!」

しばらく、もがき苦しむ2人。

「おゝ痛え。……でも、これでケジメは着けた。はい、おしまい。」

「……殺したいほど憎んでいたのではないのか？」

今だ涙を浮かべている2人。

「恨んでたさ。お前が何にも考えないで人を憎んでただけのポケモンなら。でも、お前は違った。人を好きで、いろんな事を考えてた。だから、これでチャラだ。……兄貴もそれを望んでると思う。」

赤くなつた拳を冷やししながら、笑いクロノは言った。

「……貴様の知り合いはカントーだ。早く行け。友は、貴様の助けを待っているはずだ。」

「サンキューな。」

そんな時だった。

空より舞い降りた、ラティアス。

その顔は焦りの色に染まっていた。

「探したわよ！！早くカントーに行くわよ！！」

「お、おい！どうしたんだ！？」

「私たちの仲間が、人間達に捕まえられてるのよ！！」

その言葉を聞きエンテイも驚く。

「どづいうことだ！？」

「知らないわよ！！もう、アーシア島のフリーザー達が捕まっちゃてるのよ！！ルギアはまだだけど……。」

そして、クロノは島を駆け降りた。

人々が逃げ惑うアーシア島。

燃え広がる炎の中に、彼がいた。

金髪の髪をなびかせ、狂気に満ちた目を向けながら。

「障害排除を完了。対象の捕獲・ルギア以外捕獲完了。追跡・困難対象のロストを確認。これより帰還する。」

特殊なヘルメットを身につけ、彼はまるで機械のように話、自分が来た道を帰り始めた。

「ただで帰れると思うなよ！！ネイティオ『サイコキネシス』！！」

村人の一人が挑み、ポケモンに指示をだす。

見えない力が彼を襲うが、その力はまるでなかったかのように消える

「エスパータイプの技を確認。個人タイプを『悪』へ変更。『サイコキネシス』の無力化を確認。・・・攻撃対象を障害と判断。排除を開始する。」

振り向き、村人に向かい、手をかざす。

「対象ポケモン・『飛行』および『エスパー』。技を選択。・・・消える。」

彼の掌より『10万ボルト』が放たれる。

この攻撃は無慈悲に、ポケモンを人を襲い、反撃の体力を消した。

「対象の無力化を確認。再度帰還行動に移る。」

何の感情も見せない彼。

過去の彼の名を『クリアス』という。

しかし、今は命令を聞き、作戦を忠実にこなす機械になっていた。しかし、これが彼の本当の姿でもあった・・・

第47話 「炎と闇の狂気に落ちた剣」 (後書き)

はい。どうも。

エンテイとクロノも話、わだかまりが無くなりました。

そして、クリアスの本当の姿。

捕まる伝説のポケモン達。

クロノ達に、どうするのか!?

第48話 「突撃ジムリーダー連合」届かぬ友の声」(前書き)

出会った2人。

しかし、友の叫びは届かず。

第48話 「突撃ジムリーダー連合」届かぬ友の声」

スズの塔を駆け降りるクロノ。

複雑な構造の造りのこの塔は、観光、建築技術としては目を見張るものがあるが、こつ急いでるときには煩わしい以外の何物でもなかった。

「クソ！なんでこつ入り組んでるんだよ！！」

駆け下りながら怒鳴るクロノ。

急がないといけないこんな時。この世界を守ってきたポケモンが危ないのに。

そう、思いながら足を動かす。

そんな時、一陣の風が吹く。いや、正確には風ではない。

「乗れ！」

階段の踊り場に現れた風の正体。エンテイだった。

最上階から、追ってきたのだった。

「・・・エンテイ。なんで・・・」

「クロノ。貴殿なら信じられると思ったからだ。貴殿の目指す世界のために我の力を使え。」

「サンキュー。」

そしてエンテイにまたがるクロノ。

走るエンテイ。クロノが走るよりはるかに早く下に降りていく。

ほどなくし、入口まで下りた2人。
そして、入口で待っていたアカネ達も慌てていた。
中でもワタルはポケギアで誰かと電話をしていた。

「・・・今は、被害を最小化する事を優先するんだ。反撃は機械を見ればいつでもできる。」

そう言い、ポケギアを切りしまふ。
しかし、この場に星の姿がなかった。

「ワタルさん。もしかしてカントーの事ですか？」

エンテイと共にスズの塔から出て、ワタルに話すクロノ。

「ああ。カントーの各地がロケット団によって制圧されてるんだ。
クチバシテイにヤマブキシテイ。そして、トキワシテイがロケット団によって制圧されてしまった。その知らせを聞いて星さんが一人で行ってしまつてね。今、俺はカントーのジムリーダー達に指示を出したところだったんだ。」

「そうですか。」

ワタルからそう聞き、さらに不安が深まるクロノ。

「クロノ、エンテイがいるってことは。」

「ああ。力を貸してくれるってよ。」

クロノの横にいるエンテイを見て、アカネがクロノに聞く。

そしてクロノも横にいるエンテイをみて親指を立てる。

「ですが、どうします？ ヤマブキシティを押さえられたということは、リニアを使ってカントーへの進撃は無理。クチバを占拠したということは、海路も無理。トキワを押さえたということは陸路も危険。八方ふさがりですわよ？」

ミヨの言うことはもっともだった。

リニアで直通しているヤマブキシティを押さえたということは、必然的にリニアでは行けない。

クチバを押さえたとすれば、海路で向かう事を消すため。

トキワはチャンピオンロードにつながっているため、押さえられたとなれば、そこから向かえばすぐに察知される。

つまり、彼らが今使える作戦は……

「……総力を挙げての強行突破。もしくは、空中からの奇襲ですか？」

「そうだ。そして、カントー、ジョウトのジムリーダー達は私の指示で、今終結しつつある。ほどなくして強行突破の準備は整う。」

クロノの言葉に答えるワタル。

そして、強行突破する場所は……

「強行突破する場所は、奴らの根城にしているヤマブキシティに直通しているリニアから直接突破する！」

拳に力を入れ、話すワタル。

それに反論する者は誰もいなかった。

「無論君たちも行くだろ？友のために？」

「はい」

クロノとアカネの言葉が重なり、彼らはコガネシティに向かった。

カイリユーやボーマンダなどのポケモンで空を飛べば、エンジン、コガネシティはアツという間で着いてしまう。

それだけ、ポケモンの身体能力が高いことを意味していた。

そして、混乱したコガネシティのリニアの前に、ジムリーダーのアカネが待っていた。

「あ！ワタルさん、こっちやー！」

空を飛ぶワタル達に気が付き、手を振り声を上げるアカネ。

「待たせた。何かロケット団に代わりは無いか？」

「そや！これをきてやー！」

そういい、アカネは自分のポケギアのラジオを聴かせた。

『……………繰り返す。カントーは我々ロケット団が占拠した。抵抗は無意味。逆らう者には容赦しない。繰り返す……………』

「大きく出たものだな。」

ラジオを聴きそういうワタル。

無論クロノもその放送は聞いていた。

「で、リニアでヤマブキまで強行突破ですね？」

「ああ、それなんやけど、無理やねん。」

クロノにそう答えるアカネ

「なんでだ？」

「実は、さつきからリニアが全く動かんねん。整備士はんいわく、電力が完全に途切れてしまったらしいねん。」

「なんだと!!！」

突然告げられた現状に驚くクロノとワタル。

「ぬかった……。まさか無人発電所を押さえられるとは。マチスカカスミを向かわせておけばよかった……。」

爪を噛み、考え直すワタル。

そんな時だった。

『クロノ。電気が必要なのか？』

『エンテイか？今どこだ。』

『コガネの郊外だ。電気が必要なら我に任せろ。』

『どっするっ。』

』とりあえず、リニアの動力部で落ち合おう。』

そして、エンテイの念が切れる。

「ワタルさん。エンテイがなんとかできるそうです。リニアの動力部で落ち合う事になりました。」

そうワタルに告げるクロノ

「いつエンテイと話したんだい？しかし、そんな詮索している余裕はなさそうだ。では行こう。」

そしてリニアの中。電力を受ける動力部に集まったクロノ達。そこにはエンテイ以外のポケモン・ライコウもいた。

「我の同胞のライコウだ。こいつの電撃ならば、このリニアも動くだろう。」

「…………エンテイの心を動かした人間たちの危機だ。我も手を貸そう。」

そう言いライコウは電気を帯び始めた。

「頼むライコウ。俺のダチがいるんだ。」

「…………彼にいた良い目をしている。よかろう。我々の知るクロノの頼みだ。全力で行くぞ人間達。何かに捕待っている!!」

ライコウより放たれる電撃。

その電撃を浴び、リニアは動き始める。

その速さは次第に速くなり、その速さは本来の速さ以上に達した。ひとまず、客席で作戦を練り始める。

「・・・私の合図で、ジムリーダー達は動くように指示は出してある。中でも、キョウさんとアングの2人はすでにヤマブキシティに潜入し情報の収集をしている。後はこのリニアがつけばいいだけだ。」

「で、俺たちは？」

クロノがワタルに問う。

「ああ。俺たちは、ヤマブキ到着前にポケモンでこのリニアから下りて、上空からヤマブキシティのシルフカンパニーに潜入する。」

「分かりました。」

うなずく、4人。

そして、時計を見るワタル。

「さて、そろそろだ。行くぞみんな。」

「「「はい！」「」「」」

気合いを入れ、返事をするメンバー。

そして、ジムリーダー連合とロケット団の対決は始まった。

駅に爆煙と爆音が鳴り響く。

「なんだ！リニアが激突しただと！？何を考えているんだ！？」

警備に当たっていたロケット団員。

「……………困かな？だろっつな。そっだろっつな。」

顎に手を当て、考える一人の団員。
青い髪が帽子から覗く男・ランス。

「うるたえるな。おそらくこれに乗じて奴らは来る。気を引き締め
て警備しなさい！」

ランスの一括で団員達は落ち着き現状の収集に着手した。

「……………おしいの。その技量と洞察力があれば良いトレーナー
になれたろっつに。」

「……………おほめにあずかり光栄だな。」

ランスの後ろからする声の主に答える。

足元に落ちた石を声の方に投げるランス。

石は、何かにはじかれ方向を変え、地面に落ちていく。

「さて、姿を出してもらえますか？四天王キョウ！」

電柱の陰から現れたキョウ。そしてその娘のアンズ。

「おや？親子ですか？」

「貴殿の相手が我々の役目！」

「その首、もらい受ける！！」

ボールを構える3人。

「隊長！！」

「問題ない。それより消火活動に戻りなさい。」

騒ぐ団員を下がらせるランス。そして構えるボール。異様なオーラを出す漆黒のボール。

「異様なオーラ。貴殿、何者！？」

そのオーラを察知したキョウウ。

「アンス気をつける。こ奴。強いぞ……。」

「はい、父上……。」

固唾を飲む2人。

「このポケモンが出た時。それは貴方達が負ける瞬間です。」

不敵な笑みを浮かべるランス。

空を舞うクロノ、アカネ、ワタル。
アカネ、ミヨはワタルの指示で別のジムリーダー達と行動を共にした。

空から見れば分かった。

ヤマブキのいたるところで戦いが起きていた。

「行くぞ。私たちは屋上から、シルフカンパニーを制圧する。準備はいいか2人とも？」

「愚問！」

「大丈夫です。」

そして3人は屋上に降り立った。

陽動が訊いているのか、シルフカンパニーの警備はほぼ皆無だった。

「……おかしいな。警備が全くない。」

思わずワタルが口にした。

嫌な予感が3人を襲った。

3人がたどり着いた先は、パーティ会場だった。

その部屋の奥に腰かける男。

その男をみたワタル

「久しいなワタル。」

「サカキ!!」

憎しみを一杯に叫ぶワタル。

「そして、我々の計画をより完璧にする2人のガキ。上出来じゃないか。」

椅子から立ち上がり、クロノとアカネを見るサカキ。

「おっさん。俺のダチはどこだ！返答次第ではボコるぞ?」

そして笑うサカキ。

「……良いだろう、合わせてやる。」

指を鳴らすサカキ。

そしてクロノ達の後方から歩み寄る彼。

振り向き、変わり果てた友の姿を見る2人。

「ク、クリアス!!」

「……捕獲対象を確認。捕獲行動を開始。」

まるで機械のように話すクリアス。

そんな、クリアスを見てサカキを睨むワタル。

「サカキ、貴様彼を!!」

不敵な笑みを浮かべ笑うサカキ。

「そう。こいつこそ、我々の造ったHP計画の僅かな成功例の一体！！そして、こいつの本当の姿だ！！人の姿でありながら、ポケモンの技が使える生物兵器だ！！」

掌を向けるクリアス。

「……………金縛り」

「！！」

とっさにかわす3人。

彼らのいた場所の床がへこむ。

「クリアス！！思い出せ！！お前は兵器なんじゃない！！」

呼び掛けるクロノ。しかし、クリアスには届かなかった。

「『神速』」

人ではありえない速さでクロノとの間を詰めるクリアス。

「『雷パンチ』」

電撃を帯びたクリアスの拳がクロノの腹部にめり込む。

しかし、咄嗟に後ろに下がったため、直撃は避けた。

腹部を抑えるクロノ

「行けカイリユー！！……………クロノ君。もう彼を倒すしかない……」

「。。辛いかもしれないが。」

「ふざけんな！！クリアスは俺のダチだ！！」

そんな時だった。ワタルの耳に付けていたイヤホンに通信が入った。

『作戦は。。。失敗。。。一時退散を！』

「何！」

耳を疑いたくなる連絡。

苦虫を噛んだような顔をするワタル。

「。。。。。。一時退却だ。」

「クリアスがいるんだ！！引けるかよ！！」

「引くんだ！！」

そんなクロノの腕を引き、ワタルとアカネは窓まで走った。

そして窓を突き破り、外に飛び出し、カイリューに乗りヤマブキを去る。

「クリアス！！待ってる！！必ず迎えに行くからな！！」

そんなクロノの叫びは虚空に消え、友の耳には。心には届かなかった。。。。。。

ヤマブキシティの空に響くのはロケット団達の勝利の叫びだけだった。

第48話 「突撃ジムリーダー連合へ届かぬ友の声」 (後書き)

クロノの叫びはクリアスには届かない。

その想いは、クリアスを救うことができるのか!?

蠢く世界の闇に飲まれたいくクロノ。闇を払い、世界を。

ポケモンと人の未来をつなぐ事が出来るのか?

第49話 「揺るがぬ想い〜友への想いが動かすもの〜」 (前書き)

友を思う気持ちが揺れ、クロノに覚悟と決断を迫ります

第49話 「揺るがぬ想い〜友への想いが動かすもの〜」

チャンピオンロードにあるカントー、ジヨウトのポケモン協会。
その大会議室に23人もものトレーナーがいた。

「クツソオオオオオオ!!」

壁を殴りつけるクロノ。

全力の彼の拳を受け、壁は悲鳴を上げ、へこみ亀裂が入る。

「なんでクリアスなんだ!! あいつが何をしたって言うんだ!! 何なんだ『HP計画』って!!」

もう一度、壁を殴るクロノ。

「落ち着きたまえクロノ君。」

なだめるハヤト。

しかし、そんなハヤトの手を振り払うクロノ。

「うるさい!!」

パン!!

会議室に響く頬をはたく音。

アカネがクロノの頬を叩いた。

「いい加減にして!! クロノだけじゃないんだよ!!? 悔しいのは!!」

「……………」

ようやく落ち着いたクロノ。

「……………ごめん。」

うつむき、小さな声で言うクロノ。

「いや。友達なんだろう？無理もない。」

「落ち着けて方が無理なもんだ。」

何人ものジムリーダー達がフォローしてくれた。

「……………みんなに聞いてもらいたいことがあるんだ。」

そんな、ジムリーダー達に言うワタル。

「さっきクロノ君が行った『HP計画』についてだ。」

「それは私が説明した方が良いかの？」

ワタルの横にいた人物。カツラが言う。

「……………一部の者は知っていると思うが、ワタルと私は元ロケット団に所属していた。ワタルは、戦闘隊長として。私は科学者として。そして、私が携わっていた計画。それが、『ヒューマノドポケモン計画』。通称『HP計画』。……………人の姿をしたポケモンを生み出す計画。そんな生物兵器と言うべきものを作り、ポケモン

なしで強大な力を生みだす計画。」

誰もが息をのんだ。
さらに続けた。

「計画は難攻した。しかし、ある時。伝説のポケモンの体の一部を入手できた。それにより計画は完成した。その時に生み出された存在の一つが彼。君たちが『クリアス』と呼ぶ存在。」

「ちょ、ちよつと待ってくれ！ならクリアスの記憶はどうなんだよ！あいつからそんな話は聞いたこと無いぞ！」

カツラに食ってかかるクロノ。
顔色を変えずにカツラは話す。

「……当たり前だ。クリアスと名を与えたのは私なんだからな。『どんな色でもない全てを見透かす色・クリアー』から付けたその名。……私がロケット団から逃げた時、クリアスの記憶を書き換え、私の知り合いの家に預けた。しかし、その家から飛び出したクリアスは、幸か不幸かアクア団に身を置いた。それがロケット団の傘下の組織とも知らずに。」

無言が続いた。

「……しかし、HP計画はこれだけではない。別コンセプトとしてももう一体の命を生みだした。『最強の力を秘めたポケモン』。そのポケモンの名は『ミュウツー』。手に入れたポケモン、ミュウの名から付けた名だ。おそらくロケット団はミュウツーも狙っている。」

「……………そのミュウツーってポケモンは？」

アカネが聞く。

「ロケット団が狙っていたのを知ってこの地下室にいる。」

再びの無言の空間。

震える拳のクロノ。

許せなかった。

自分たちの都合だけでクリアスやそのミュウツーと呼ばれるポケモンを作ったロケット団が。
カツラが。

「……………どいつもこいつも……………！命を何だと思ってんだ！！ポケモンは道具じゃないんだぞ！！」

「……………君の怒りはもつともだ。だから私はクリアスとミュウツーをロケット団から連れ出した。」

ただそう答えるカツラ。

しかし、クロノの怒りは今だ燃えていた。

そして、会議室を出て行った。

怒りだけが今のクロノを動かしていた。
闇雲に教会を歩いていた。

- 怒っているな人間 -

クロノの頭に響き声。

エンテイ達とは違う頭に直接語りかけてくる。

・我の友のために怒ってくれらることはうれしく思えるぞ・

「…………誰だよ。貴様。」

・知っているのだろ？我の名を・

「…………ミュウツィー。」

・そつだ。我の主はその名をつけてくれた・

「……………」

・直接話した。地下室まで来てくれ・

ミュウツィーに言われるがまま、クロノは知らぬ道を歩み、地下室まで向かった。

想い扉をあけると、そこに彼がいた。

白い体に長い尾。細長い手足があるが、その巨体は僅かばかり地上から浮いていた。

「…………お前がミュウツィー……………」

「いかにも。」

さまざまな機器が並ぶこの部屋。

そんな中にミュウツーがいた

「なんの用だ？」

「……………貴様は、世界を見て人とポケモンの未来をつなぐらしいな。そこで問う。我は何だ？」

眉間を寄せるクロノ。

「貴様は先、クリアスや我を生みだした人間に怒りを覚えたな。ならば、この世界では我は何だ？」

「……………テメエもクリアスも変わんねえよ。この世界にある命の一つだ。お前らは何にも悪くねえ。悪いのはお前らを悪用しようとした奴らだ。」

「……………変わらない命か。では、貴様の友が貴様の命を奪おうとしたなら、どうする？」

腕を組み、クロノに言い聞かせるミュウツー

「決まってるんだろ。死んでもダチは信じる！あいつが戻ってくるまで俺はあきらめねえ。」

まっすぐなクロノの答え。

どんな状況でも、信じた友を思う彼の心と信念。

彼にできた、心の居場所。

ポケモン以外に、彼が初めて『友達』と呼べた存在だったからこそ、クロノはクリアスを信じていた。

「……フ。良い友を持ったみたいだな。ならば、私の力も使え。」

近づいて来るミュウツー。

手にしたモンスターボールをクロノに手渡す。

漆黒の市販されたいないボール。ボールには『R』の文字が刻んであった。

大会議室では、再度の決戦の作戦会議が開かれていた。

スクリーンに映し出された、上空から見たヤマブキシティ。

侵入が可能な部分には赤い目印が移しだされ、横には潜入するメンバーの名前が書かれていた。

「……以上このメンバーで再度突入を試みる。また、キヨウさん、アンズからの報告から察するに、幹部候補達は『ダークポケモン』なるポケモンを所有しているものと考えられる。十分気をつけて対処してもらいたい。」

「あの、ちょっと良いですか？」

ワタルの話に割り込みアカネ。

突入メンバーにクロノとアカネの名前が無かった。

「私とクロノはどうすれば。」

「…………サカキが君たち2人を『計画をより確実にする2人』
と言っていた。つまり君たちも、ロケット団に狙われている。よっ
て、今回の突入作戦からは外れてもらった。」

そうワタルに言われ、その事には納得したアカネ。しかし、もうひ
とつ気がかりなことがあった。

「…………クリアスは、どうするんですか？」

「……………」

誰も何も言わなかった。

それは、クリアスを保護するという選択肢は無いことを意味してい
た。

そう、クリアスを『消す』という選択肢を意味していた。

「…………もう、彼は君たちの知っているクリアス君じゃな無
いんだ。彼を、救う唯一の方法なんだ。分かってくれ。」

「…………そんな…………。」

助けられない。

そんな、絶望感がアカネを襲った。

「違う！！クリアスは今もクリアスだ！！」

会議室の扉を勢いよくあけるクロノ。

「まだあきらめんな！！まだチャンスはある！可能性があるなら、
それに賭ける！！」

会議室に入りながら、希望を説くクロノ。
友を救おうとする想いが、彼を動かさし、希望を湧かす。

「しかし、彼は君の言葉には耳も傾け無かった。もう彼を救う手は・
・・」

「まだ、クリアスは生きてんだ!!俺がなんとかする!!」

「……それでもだめなら。」

ワタルの言葉を聞き、少し考えるクロノ。
最善を考える。その上で最悪も考える。
覚悟を決める時だった。

「……俺が、クリアスを開放する。」

それはつまり、クロノがクリアスを消す事を意味していた。
他人の手を借りるくらいなら、友であるクロノが彼を開放する。
そう考えた。

「分かった。では、クロノ君とアカネ君は私とカツラさんと一緒に
再びシルフカンパニーに突入する。いいね?」

「はい!」

力強く返事をするクロノ。
次は無い。

これがクリアスを救える最後のチャンスだった。
時は着実に近づいて来ていた。

カウンターとジョウトを巻き込んだ、この事件が終わる時が・・・

第49話 「揺るがぬ想い〜友への想いが動かすもの〜」(後書き)

次回はカントー、ジヨウト編の最終回!

クロノは友を救い、ロケット団を倒すことができるのか!?

そして、捕まってフリーザ達は?

謎を残したまま、物語は次の舞台に移動しつつあります。

第50話 「戻りし剣〱裏切りと別れ〱」 (前書き)

さてさて、次回からはシンオウ編に突入いたします。

第50話 「戻りし剣と裏切りと別れ」

誰もいないヤマブキシティ。

いや、正確には人はいる。

悪の牙・ロケット団。

この町を占拠し、世界に対して宣戦布告をした。

世間はこの事態を軽く見ていた。

『ジムリーダー達が何とかしてくれる』

『どうせ直ぐに片が付く』

そう考えていた。

しかし、世間が知らない事実もあった。

『伝説のポケモン』

口伝や書物でしか記されていないポケモン達。

その内の三体が彼らに捕獲されていた。

フリーザー、サンダー、ファイヤー。

彼らが捕獲されたのは事実だが、安否までは不明だった。

そして、彼らがどのような目的で彼らを捕まえたのかも不明だった。

しかし、今の彼らにはそんな事を気にかけている余裕はなかった。

ジムリーダー達は作戦通りの場所で待機し、作戦の開始まで息を潜めていた。

無論、クロノもそうだった。

腰には、今までにない黒いボールを付け、友を救うために時を待っていた。

「心配かい？」

そんなクロノを見て、ワタルは声をかけた。

いつものクロノならば、強気な答えを言うが、今日は違った。不安だった。心配だった。

もし

クリアスが正気に戻らなければ。

友を、この手で倒さなくてはならない。

それが辛かった。考えたくない未来をずっと考えていた。そんな時。

クロノの手を握るアカネの手。

「大丈夫。クロノの想いをクリアスにぶつければ。」

そんな言葉でクロノの不安は和らいだ。

そう、一人では無理なことも、ポケモンとなら。アカネとなら不可能じゃないと思えた。

気を引き締め、前を見た。

友が捕らえられているそのビルの影を見つめた。

激しい爆音とともに轟く地鳴り。

ヤマブキシティに再度、ジムリーダー達が攻め込んできた。しかし、ロケット団は先刻のような焦りは無かった。

「さて。みなさん。また蹴散らせて差し上げましょう。」

手を叩き、周りの団員達に覇気を送るランス。
前の戦いで、四天王のキヨウとその娘アンズを相手に、互角の勝負をしたランス。

そんな彼が、そういえば団員達の覇気は必然的に上がる。

「次は逃がしませんよ……。」

舌を出し、不敵な笑みを浮かべるランス。前の戦いで逃した獲物をしとめようとする狩人のような目をしていた。

「行くぞ!!!!」

ワタルの合図と共に空へ舞う3人。

そして、今度は屋上ではなく、サカキがいるであろう部屋に突入しようとしたが、

「!!!!」

窓からワタル達を見るサカキ。

その横には、クロノの友の姿。クリアスがいた。

そして、両手を向ける。

するとクロノのアレスタンとアカネのカイリユーに異変が起きる。

体の自由が利かなくなっていた。

見えざる力に抗おうとする2匹。

しかし、それも虚しく、クロノとアカネはサカキのもとに引き寄せられていった。

「しまった!!!!」

クロノのその言葉にアカネも賛同する。
それを聞いたサカキは、一笑しクリアスに命じた。

「……手足の一本は構わん。動けなくしろ。」

「了解。」

そして、駆けるクリアス。

「アレスタン！！」

駆けるクリアスの進路を遮断するようにアレスタンが道を遮る。
しかし、それを見越していたクリアスは、飛び電撃を帯びた拳を構えていた。

「『雷パンチ』」

「『恩返し』！！」

クリアスとクロノの声が重なり、互いの技がぶつかる。
しかし、威力はクリアスに分があった。

恩返しを弾き飛ばし、なお且つアレスタンにダメージを与えたクリアスの雷パンチ。

アレスタンは一発で、動けなくなってしまった。

「我を出せ」

「お前に任せたぞ。ミュウツー！」

クロノが投げる漆黒のボール。

そして現れるポケモン。名をミュウツー。

「……久しいなサカキ。」

憎しみを宿した瞳でサカキを睨む。

「散々探したが、よもや貴様は不要。世界には貴様以上に強力なポケモン達がいるからな」

「伝説のポケモン達を捕まえたのはそのためか……。」

「そう！ギンガの奴らは知っていて何も言わなかったようだが、こちらも奴らを騙していたんだ。よもやあいつらの手を借りる必要は無くなった！！」

ついに本性を現したサカキ。

「まあいい。貴様みたいなやつでも、いないよりはマシだ。ミュウツーも捕らえる！」

「了解。」

サカキの命令を行けクリアスが構える。

「『悪の波導』」

振られた腕から、黒い波導が3人を襲うが、

「あまい！！『波導弾』！！」

ミュウツァーから放たれた波導の弾が、黒い波導を打ち消した。
そして、距離を詰めるミュウツァー

「『波導弾』!!」

両手にためた波導の弾を、クリアスの腹部に押し付ける。

そしてその、波動は爆発した。しかし、クリアスは無傷だった。

いや、ダメージは確かに入っていたが、ミュウツァーのダメージがあまりにも大きすぎたのだった。

「『ミラーコート』」

倒れるミュウツァー

「くっ……。ぬかった。」

「ミュウツァー!!」

倒れたミュウツァーに声をかけるクロノ。

駆け寄ろうとするが、足が動かなかった。

いや、正確に言うのであれば、クロノの右足の脛が有らぬ方向に曲がっていた。

急に走ってくる激痛

立位が保てなくなり倒れるクロノ

「っ!!!!」

「クロノ!!」

そんなクロノに駆け寄るアカネ。

一歩ずつ近づいてくるクリアス。

「おいクリアス。お前の騎士道はそんな簡単に消えちまうもんなのか？」

痛みをこらえクリアスに問うクロノ
そしてアカネも

「クリアスは、その心を。考えを、好きだったおじいちゃんにもらったんでしょ？その気持ちは、どこに行っちゃったの？」

ゆっくり近づくクリアス

「お前の騎士道は！！お前の掲げる剣はここで振うためのものなのか！？お前は、『騎士』としてではなく、『道具』として死にたいのか！？」

初めてクリアスの歩みが止まった。
しかし、再び歩きだし、クロノの胸倉を掴み持ち上げる。

「……エンジユで言ったよな。お前がもし、俺らに牙向けたら俺がぶん殴っても正気にさせてやるって。……だから。戻ってこいクリアス！！！」

力いっぱい振り下ろすクロノの拳。
拳はクリアスの頬を殴りつけた。

「……それで、正気になったか？とんだ茶番だったな。おい、早くそいつらを捕らえろ。」

しかし、復唱しないクリアス。

「……………了解。」

ようやく復唱した。

そして、クロノに向かって、掌を向ける。

「『サイコカッター』!!」

振り向き、念で造った刃をサカキに向け放つクリアス。
しかし、サカキの横をかすめただけだった。

「……………なんのマネだ。」

クロノを下し、サカキに話す。

「……………私は、道具じゃない。確かに生い立ちは、悲惨なものだったかもしれない。だが、私は私だ。貴方達の道具なんかじゃない!!」

立ち上がり、指を指す

「私の名は、クリアス・キャスパニエ。君主クロノに仕える、騎士なり!!」

そして、腰に着いているボールから、彼の剣を出す。
エンペルトという名の剣を。

「へっ。おせーんだよ。馬鹿。」

「申し訳ありません。そのような怪我まで。」

そして、彼の兄弟とも言うべき存在に肩を貸すクリアス。

「久しいな友達よ。」

「ええ。何年ぶりでしょうね。」

そんな彼らを見たサカキ。

そんな時だった。

ビル内の放送で伝えられた訃報。

『こちらB班。ジムリーダー達の猛攻激しく、対処不能！シルフカンパニーは間もなく制圧されます！！』

「ちっ！無能共が……。」

そんな放送を聞き毒づくサカキ。

しかし、クロノ達の顔には勝利の笑みが浮かんだ。

「……良いだろう。今回は勝ちを譲ろう。しかし、手ぶらでは引かんよ。手みあげはもらっていいこう。……マーキュリー！！」

サカキの声と共に現れる男。

そして、アカネを捕らえる。

「アカネ！！」

立とうとするが立てない。

そして、その男の顔を見た時、クロノとアカネの顔に驚きの色が浮かんだ。

「おっさん……」

マーキュリーと呼ばれた男。

そう、クロノ達のまえでは『星』と名乗っていた男。

今では、銀色の服を着て、胸には『G』の文字が入っていた。

「おっさん！何してんだよ！！」

何も答えず、サカキの元まで歩く星。

捕まったアカネも、逃げようとするが、それはできなかった。

「俺は、『ギンガ団』が幹部、マーキュリー。この娘は、我々の計画のために、利用させてもらう。……クリアス。少しでもおかしな行動をとってみる？この娘が、どうなっても知らんぞ？」

掌を向けようとしたが、先読みされるクリアス。

そして、窓のシャッターが開く。

外では戦っているワタルとカツラが、遠巻きに見える。

「さて、では俺たちはこれで退散する。……縁があればまたな。小僧。」

そして、窓の外に飛び降りる2人。

「クロノ！！！」

「アカネ!!!」

2人の伸ばした手は届かず、掴んだのは愛したものの手ではなく霞と虚空。

アカネを連れ去った2人はポケモンで空に消えていった……。

こうして、カントーでの Rocket 団による事件は幕を閉じた。

しかし、それは世界の異変の始まりでしかなかった……。

第50話 「戻りし剣、裏切りと別れ」 (後書き)

とりあえずカントー、ジョウト編はおしまいです。

連れ去られたアカネはどうなる事やら。

しかし、元に戻ったクリアス。

そして、星の正体。

世界は、クロノをどこまで試すのか!?

なんか、最近次回予告風になりつつあるな。いかんいかん。

第51話 「抗えぬものゝ闇に食われていく姫」 (前書き)

ひっそりと。でも確実に闇は、その勢力を広げていっています。そして、世界を侵食し始めています。

第51話 「抗えぬものゝ闇に食われていく姫」

何人もの味方がその膝をついた。
何人もの敵が投降してきた。

満身創痍なキョウとアンズ。
彼らのポケモンも立っているのがやっとの状態だった。
しかし、それはランスも同じことだった。

「はぁー……はぁー……はぁー……。良いですね……。ここまで、
私を苦戦させたのは貴方達が初めてですよ……。」

強引に呼吸を整え、笑いながら話すランス。
対するキョウ達は片膝をついている状態だった。

「まだ、貴方達と戦っていたいのですが、こちらも事情がありまし
てね。これで失礼させていただきます。」

そして、手を上にあげるランス。その手を掴み飛んでいくピジョッ
ト。

「では、ご縁がありましたらまた。」

「待て!!」

そんなランスを追おうとするアンズ。
それを止めるキョウ。

早くしなくては。

クロノちゃんとアカネくんが心配だ。

そう、思っけていても動けないワタルとカツラ。

「カイリユー!!!『流星群』!!!」

そして、無数の流星がワタル達に対峙する敵をなぎ倒していく。

「くそ!!!きりがない!!!」

今のワタルの攻撃でも減らせたのは良くて半分。

今までの攻防でカイリユーも大分疲労している。

もう今ほどの『流星群』は打てない。

そんな、時だった。

クロノ達がいる部屋の窓が開き、そこからサカキと一人の男。そしてアカネの姿を見た。

追おうとするが、敵が多すぎてサカキ達の後を追えない。

こうして、ジムリーダー達はサカキとその幹部達を捕らえることができなかった。

しかし、ひとまずのカントーの治安は守られた。

そのことにカントーの住民は喜んでいた。

しかし、一部の者たちはそんな気持にはなれなかった。

痛む右足を引きずりながら、何の特徴も無いに、薬品臭い廊下を歩くクロノ。

松葉杖を使い、一歩ずつ病院の出口に向かい。

「くそ……。俺がおっさんを信じなければ。もつとアカネに気を配ってれば。……。待ってるアカネ、今行くからな……。」
そんなクロノを呼びとめる看護師。

「クロノ君。君はまだ安静にしてなきゃだめです！そんな足でどこに行く気ですか！？」

そう。クロノが病院を抜け出そうとしたのは、1〜2回の事ではなかった。

アカネが連れ去られて、早3週間。

完全に折れたクロノの足がそんな短期間で治るわけがない。

しかし、アカネの事を思うと、自分の足の怪我など微微たるものでもしかなかった。

「足なんてギブス付けときゃ治る！それより、アカネが心配なんだよ！！」

看護師に怒鳴るクロノ。

そこえ、来たのは彼の父親・ケルアだった。

「クロノ。彼女が心配なのは分かる。我々も全力で探している。今、お前がすることはその足を直すことだ。」

一週間前。

ロケット団による襲撃が終わり、後処理に追われていたころ、ケルアはこのカントーに来た。

そこで、クロノと再会した。

そして、クロノとワタル。クリアスから今回の事件の全貌を聞き、ロケット団の対策を立て、サカキを捕まえようと努力している。

「そんな悠長な事が言っただらばか！アカネがクリアスみたいにご利用されるかもしれない時に、おとなしく寝てられるかよ！！」

病院のホールで、人目を気にしないで怒鳴るクロノ。
そして、響くクロノを殴る音。

「いい加減、頭を冷やせ！！今貴様が本当にすべきことは、体に無理をさせ、ロケット団を探し、アカネ君を探すことか！今、貴様がすべきことは仲間を、アカネ君を信じて、体を直すことだ！！・・・
・・・どんな時でも諦めるな。アカネ君は無事だと信じて待て。そして、体が完治した時。その怒りを奴らにぶつけてやればいい。」

倒れたクロノを見て、諭すケルア。

クロノもその言葉に納得はした。

しかし、居ても立ってもいられない気持には変わりは無かった。

「クソ・・・・・・・・・・。こんな時に、また無能なのかよ。俺は・・・
・・・！」

床を叩き、今の自分の体たらくぶりを嘆くクロノ。

悔しかった。辛かった。そして、悲しかった。

アカネを居まずぐ助けに行けない自分が、憎かった。

病院の屋上。

程よい風がクリアスの金髪を撫でる。

横には、彼の兄弟と呼べる存在、ミュウツィが居る。

「全部思い出しました。自分がどこで、どうやって生まれたかを。」

「……それだ、これから貴様はどうする？ククロノについて行くのか？」

そんなミュウツィの言葉にうなづくクリアス。

「私が、捕まらなければ、アカネさんは捕まらなくて済みました。それに、今回の事件の黒幕は、私にも関係があります。だから、私は彼らを倒します。自分の自由と、主のために。それが私が受け継いだ騎士道です。」

心にある、騎士道を掲げ、クリアスはミュウツィに言った。
揺るぎない意思と、主への忠誠心を胸にして。

「……自分の自由のためにか……。ならば我也戦う理由がある。クリアス、我也連れて行ってくれ。我也貴様と同じように、『己の自由』のために戦う。」

そして、一陣の風が舞う。

クリアスの答えは決まっていた。

それは口に出さずとも、2人には分かっていた。

ここがどこか分からない。

分かっていること。それはここが、普通の場所ではないこと。それ

だけだった。

「ふおっふおっふおっ。なかなか面白い娘じゃ。これは、研究のし甲斐があるもんじゃ。」

様々のコードと繋がっている椅子に座らされているアカネ。頭にもそのコードが付けられている。

そのコードが何を調べているかは、意識のないアカネには理解できないものだった。

「さて、頭の中をいじりまわして、ワシらの計画の糧になってもえらおつかの。」

そんなアカネを鏡越しにみる、一人の研究者。

その顔は常人の顔をしてはいなかった。

そして、キーボードを叩く。

その時、アカネの体がのけぞり、悲鳴を上げる。

「やめてええええええ！！みんなとの思い出を！消さないで！！」

そんなアカネの悲鳴も、彼らには届く事は無かった。

「さて、あと何回繰り返し返せば、悲鳴を聞けなくなるかのう？」

アカネの悲鳴をBGMに、その科学者はキーボードを叩き続ける。

そんな、一部始終をモニター越しにみるサカキ達。

「で、今度こそ対等な立場。とみて良いんだな？」

対面の席に座る、男に言うサカキ。

「ああ。まさか伝説のポケモンを手札に持たれたは、こちらが不利だ。それにそちらの戦力はこちらの上に行く。ここは対等な関係でいる方がどちら也得策だ。……これからどちらにも隠しごとはなしだ。」

背もたれに身を任せ、話す男。

「良いだろ。そちらの技術力が無ければ、あの娘の自我は消せない。そちらは、戦力を。こちらは技術力を求めている。どちらが裏切ったら、計画は成り立たない。両方とも互いを必要としている。……次は裏切るなよ、アカギ？」

眉をひそめ言い聞かせるサカキ。

対面に座る男・アカギに言う。

アカギもそれにつなずき、答える。

ひそかに忍び寄る闇。

それは、音もなく近づき、全てを食らおうとしていた。

それは、人の心すらも……

第51話 「抗えぬものゝ闇に食われていく姫」 (後書き)

人の叫ぶシーンと違って、描写が難しいと思うのはキシだけでしょ
うか？ポケモンとかの声とか、人の悲痛の叫びって、文字で表現し
ようがない音だよね。

まあ、ポケモンの鳴き声は名前を、鳴き声っぽくすれば簡単か？

第52話 「歩む道く心の箱庭く」

巨大な建造物の上に彼は居た。

世界一の弦楽器『時空の塔』の頂上にダーククライはいた。

時と空の狭間の町・アラモスタウン。

100年前に建築家・ゴードイの手によって設計し、立てられたその塔は世界遺産にも登録されるほど貴重なものとしても有名である。

夜の静けさと、闇がアラモスタウンを包んだ、その塔の頂上から、町を見下ろすダーククライ。

「…………闇が騎士を。姫を。騎士団を食らおうとしている。どうする？円卓の騎士の長。」

カントーにいる『騎士の長』に、届かない言葉を言うダーククライ。そんな時だった。

月光と見間違っほどの、温かい光を纏ったポケモンが彼に近づいてきた。

「ごきげんよう、ダーククライ。」

三日月のような体に、美しいベールのような羽を纏ったポケモン。名をクレセリア。

ダーククライの対になる『光』を持つ者。

「…………何の用だ、クレセリア。貴様が人間の世界に来るのは、100年前以来か？」

後ろにいるクレセリアに言うダーククライ。
クレセリアもそれにこたえる。

「ええ。あの時から、私が人里に来るのは今日が初めてです。．．．
．．．あの人が亡くなってから初めての人間界です．．．．。」

「．．．．お互い。あの時から、変わったな。彼女がこんな私に
存在理由をくれた。恐怖を与えるだけの存在の私に。」

過去の想い人に思いをはせるダーククライ。

「．．．．ダーククライ。もう、彼女は居ません。ですたか、もう
人間と関わるのはお止めになりませんか？．．．．もう、彼らを試
すのはやめませんか？」

クレセリアがそう言うが、ダーククライは無言だった。

「．．．．何時まで彼女との約束を全うするつもりですか。彼女
との約束を守る事が、貴方を、貴方で無くす事であるのは、分かっ
ているはずです。」

「だからどうした。．．．．私は貴様のように、自分の選んだ道
を後悔もしなければ、選ぶことをやめたりしない。ましてや、歩ん
でいる道が、愛した者と選んだ道ならばなおのことだ。」

ダーククライの言葉に、何も答えないクレセリア。

「たとえ、選んで道の先に同胞たちが敵として立ちふさがろうとも、
私は選んだ道に戻ることも後悔もしない。それが、『決意』という
ものではないのか？．．．．過去に円卓に騎士の長から、その事

を、我々は教えられたはずだ。」

うつむくクレセリア。

自ら選んだ道を否定し、歩むことをやめたクレセリアには今のダークライを止める資格は無かった。

「……皆が貴方みたいに強い訳では有りません。それはご理解ください。……人間達が、私達を狙っています。貴方もお気をつけよ。」

ダークライに一礼し、クレセリアはその姿を消した。

昔々、あるところに悪夢を見せるポケモンと、月の光を纏ったポケモンが居ました。

2匹は、互いに人間を好きになりました。

人間達も2匹を愛しました。

しかし、それを良しとしない人間によつて、彼らは引き離されてしまいました。

悲しんだ月の光を纏ったポケモンは、2度とこんなことが起きないように、人の前に現れる事をやめました。

しかし、悪夢を見せるポケモンは、人の目を盗んで何度も愛した人間に会いに行きました。

それでも、彼らは幸せでした。

しかし、そんな時間は人間の『死』という形で幕を閉じました。

人間は最後に、ポケモンと一つの約束を交わしました。

ポケモンはその約束を固く誓いました。たとえ、どんなことが起きようと、彼は約束を破ることは有りませんでした。

『ポケモン絵本の友』より発行・『やくそく』より抜粋 作

者・クロノ・S・ウィールアス

彼女の心の中は、花畑だった。

しかし、その花畑には彼女と彼女のポケモンしかいなかった。

色取り取りの花が咲く花畑。しかし、花畑の主の顔は、どこかさみしげだった。

誰も、ここにはいなかった。

心から彼女を必要としている人が居なかった。

誰も彼女を見ていなかった。

実の父親ですら。

しかし、彼と出会ってから、彼女は心からの笑顔で笑うことを覚えた。

辛いこともあった。悲しいこともあった。でも、彼らと一緒にならば、耐えられた。

でも、今はいない。

いや、居た。しかし、主が居たことを覚えていない。忘れてしまった。忘れさせられた。

それに比例し、心の花畑は、徐々に枯れていった。

主の顔も、笑顔を忘れた。いや、悲しみも。喜びも。感情と呼べるものが無くなってきていた。

「ようやくか……。意外と粘ったの。」

何の反応も見せなくなったアカネを見ながら、一人の科学者が言う。

様々なコードが彼女につながれ、彼女の頭の中を。記憶と感情を消されていった。

「……うまくいきそうか、プルート。」

プルートと呼ばれた科学者に声をかける星。今はマーキュリーと名乗っている。

「なんじゃい、お前さんか。……ようやく頭の中を空っぽにしたとこだ。今から、こいつの力と、システムを連動させる作業に入るとこじゃ。ここからは、少し早く作業が進む。もう少し待てとアカギに伝えておけ。」

「ああ。」

そう言い、マーキュリーは変わり果てたアカネを見る。

自分の目的のために彼女を利用した。

複雑な気分だった。自分を信じてくれた人間を裏切った。それも、まだ20歳も行っていない少女を。

ようやくギブスが外れたクロノ。

何度か足を動かし、足の具合を見る。

完治するまで、一か月。長かった。

しかし、その間にアカネがどこに連れて行かれたの目星がついた。神話が色濃く残る地方・シンオウ地方。

そこにアカネが居ると思われる。

「待ってる。アカネ。今行くからな。」

リュックを背負い、ポケモンを連れ、クロノは向かった。

全ての始まりの地、シンオウ地方に。

しかし、この地で彼を待っていた運命は、残酷なものでしかなかった……。

第53話 「曇った眼と世界の壁」 (前書き)

今回は、繋がらない話が中途半端で終わっちゃうので、短くしました。

コラボ企画のつなぎなお話でも有ります。

第53話 「曇った眼く世界の壁く」

空を舞う飛行機。

窓の外には、上空が見るシンオウ地方が見える。

向かう先は、シンオウ地方のヨスガシティの空港。

飛行機の中には、クロノ達が乗っている。

そして、この飛行機も一般のものではなく、ポケモン協会専用の物である。

空港に着き、クロノ、ケルア達を待っていたのは、この町のジムリーダーのメリッサであった。

「会長、お待ちしていました。ご報告通り彼らの情報は調べておきます。タ。」

どこか訛りが残るしゃべり方をするメリッサ。それはしょうがないことであった。

同じ海外から来たプリムとは違い、メリッサがここにきてまだ日が浅い。母国語の訛りが残っているのはいた仕方ないことだった。

「うむ、御苦労。さっそく、目を通したい。」

「では、こちらへ。」

メリッサに連れられ、クロノ達はジムまで足を伸ばした。

ジム内部の一室のパソコンに目を通すケルア。
内容は言うまでもなく、ロケット団とギンガ団についてのことだった。

「……………メリッサ君。ハクタイのナタネ君とトバリのスモモ君は、このことは知っているのかね？」

後ろで画面を見るメリッサに言うケルア。

「ええ、シンオウのジムリーダー達全員で、彼らを追っています。もちろん、2人も知っています。」

答えるメリッサ。

そんなやり取りを見ているクロノ。腕を組み、少しイラついている。そんなクロノの横にはクリアスとミヨ。

声を掛けようにもかけずらい雰囲気、2人が居づらいのは言うまでもなかった。

「……………一月前、ハクタイに大型の貨物が運ばれた形跡あり。場所は、『(株)コスモエネルギー』か……………。少し探りを入れるか……………。クロノ。ハクタイに行ってみてくれ。」

「理由は。」

ケルアに理由を問うクロノ。今は余計なこととはしたくない。今は空振りはしたくないのが、クロノの本心だからだった。

「一月前に、『コスモエネルギー』という会社に大型の貨物の搬入があった。その、前日の夜中に、その会社に人を連れたポケモンが下りたと、目撃情報が有った。その証言だと、人数は3人だそうだ。．．．言いたいことは分かるな？」

「．．．．．すぐに向かう。ほかに何か分かったら、連絡をくれ。」

人を連れたポケモン。一月前。

不確定であるが、アカネを連れた星とサカキ達と特徴が似ていた。探りを入れるには、十分だった。

部屋を出て、出口に向かい歩くクロノ。

後について歩く、クリアスとミヨ。

今のクロノにはアカネしか、見えていない。それが、2人には少しさびしく思えた。

先に行くクロノには聞こえない声で話すミヨ

「．．．．．クリアスさん。軽蔑していただいて結構ですから聞いてください。」

「．．．．．はい。」

「アカネさんが居なくなつて、私少しうれいす。．．．．．今のクロノ様の横には誰も居ない。今なら私がアカネさんの椅子に座れる。そう考えてしまふんです。．．．．．最低ですな私。好きな人が、すごく苦しんでるのにこんなことしか思えないなんて。．．．．．」

「．．．．．それだけ、貴方が主を好きだということだと思いま

す。」

この、答えが今のクリアスに答えられる最大の答えだった。

「………実に面白いのお……。」

パソコンの画面に映し出されたものを、見て感心するプルート。

「おじいさん、何が面白いの？私には何にもわかんない？」

プルートの後ろから、「画面を見る赤毛の女・マーズが言う。
それに対し、プルートが答える。

「お前さん。『もしもの世界』が有ると思うか？」

「何それ？」

プルートの質問に疑問を持つマーズ。

「つまり、この世界は何本にも枝分かれした木の枝の一本というわけじゃ……。分からだろっから、さらに説明するぞい……。要するにだ、この世界ではない無数の世界が存在するかもしれないということじゃ。」

「で、それとこの女の子の何が関係有るのよ？」

パソコンから、人形のように動かなくなったアカネに目を移すマーズ。

「この娘の超能力は、世界のルールに干渉することができる。つまり、『別の世界』と『この世界』を結ぶことも可能という話じゃ。」

ブルートの話を、半分しか聞いていないマーズ。

「まあ、そんなことより、おじいちゃん。この娘さあ、私好みにしていい？」

「なんじゃ、そんなことが。服装ぐらいなら構わんぞ。」

そう、答えるブルート。

そして、マーズも舌を出し笑う

「私、こういう女の子イジルの好きなのよねえ……………お人形みたいにしてあげるわよ……………」

まるで、新しい玩具を得た子供のように笑うマーズ。

ブルートは、興味なさそうにマーズの話を無視していた。

こことは違う別の世界。

枝分かれした別の世界。

それこそ、星の数、トレーナーの数だけ存在する。

そして、世界と世界が重なる時、異世界の住人が舞い降りる。そう遠くない時に……………。

しかし、その時、彼が出会った少年は、黒く、悲しみの闇に墮ちていた。世界を、人を憎みきった心で彼は出会ってしまった……。

第53話 「曇った眼／＼世界の壁／＼」 (後書き)

はてはて、話すことがないですね。

困りました・・・。

まあ、無理に話すこともないか(待て)

では、今回はこれで失礼します。

第54話 「遅い再会〜ごめん〜」

「トリスタン、少し急いでくれ。」

トリスタンに掴まり、そう指示を出すクロノ。

しかし、今のスピードがトリスタンの限界スピードだった。

普段のクロノならば気が付いている事であったが、今の彼にはその事に気を向ける余裕がなかった。

そして、そんなトリスタンの後ろを飛ぶクリアスとミヨ。彼らがクロノから離されていくことにすらクロノは気づいていなかった。

彼らが向かっている先。コスモエネルギーハクタイ支社。

そこにサカキ達と思われる人間の目撃情報が有ったからだ。

今のクロノには、アカネ以外の人間、ポケモンに対して意識を向けている余裕がなかった。

クリアスが操られたように、アカネにも同様、いやそれ以上の事が起こっていると思うと、クロノは不安で居られなかった。

「見えた。ハクタイシティだ。」

先に行くクロノが見た景色。近くには、ハクタイの森が有る町。それがハクタイシティだ。

そして、クロノのポケギアに電話を告げるコールが鳴り、クロノがそれを取る。

「はい。」

『君がクロノ君？私はハクタイシティのジムリーダーナタネ。会長

から連絡は受けてるわ。ひとまず、ハクタイジムまで来て頂戴。』

「・・・はい。」

あまり、寄り道したくないが、何かの情報を得るためにクロノは仕方なくナタネの言うとおり、ハクタイジムに立ち寄ることにした。無論、その事は後ろを飛ぶ、2人にも告げた。

ジムの前にはこの町のジムリーダーのナタネが待っていた。

「君がクロノ君？」

ナタネの前に降り立った、クロノにナタネが言う。

そして、クロノもそれにこたえる。

「はい。そんなことより、コスモエネルギー社について聞きたいんですが・・・。」

「そうね。君の大切な人が捕まっているみたいだし、手短に行くわ。・・・ズバリ、コスモエネルギーは、7割がた黒よ。残り三割は証拠不十分よ。まだ、彼らが君の探している女の子をちゃんと見たって人が誰もいないの。ただ、ここ最近、いろいろな機器を搬入しているのが確認できているは。こここのコスモエネルギー社はあくまで支社。そんなに何度も機器を搬入しなくてはいけないような会社ではないわ。」

そう、ナタネがクロノに告げる。

しかし、クロノに取ってそれだけで十分だった。

7割がたが怪しいならば、今のクロノにとって強行突破するのに十

分な理由だった。

「それだけで十分です。今から、この支社に行ってみます。」

「目の前から行ってどうにかなる事ではないと思うわよ?」

腕を組みナタネがクロノに言う。

「もちろん、正面から行って簡単に口を開くとは思ってませんが、あまり時間をかけては居られません。いざとなれば力技で行きます。」

表情を変えずに、クロノが告げる。

しかし、ここでようやくクリアスが口を開く。

「お待ちください主よ。アカネさんが心配なのは分かりますが、最近の主の行動は過激すぎます。ここまで来るのにだって、限界のトリスタンを無理やり速度を上げて……。」

「あいつは今までずっと一人ぼっちだったんだ!!ようやく、父親に正面から見てもらって!やっと自分の居場所を見つけて!やっと人並みの幸せを、生活を!手とポケモンを汚さないで過ごせる生活を掴んだ!!……クリアス。お前なら分かるだろ?ずっと日蔭の道を歩いて、日向の道を恋い焦がれながら生きてきたお前ならアカネの気持ちがあいぶん分かるだろ?ようやく掴んだあいつの平穩を、悪党に潰させたくないんだ……。頼む、今だけ、俺の我儘わがままを……。せめてアカネを助けるまで、黙って聞いてくれ……。頼む。」

今の想いをここにしている全員に言うクロノ。

クロノに会ってから、アカネを取り巻く世界は変わった。同時にクロノを取り巻く世界も。クリアスを取り巻く世界も変わった。

クロノは、アカネとクリアスに出会って、今まで自分が望んでいた居場所を手に入れた。

それは、クリアスも。アカネも同じだった。

だから、クロノは2人を命を賭けて助けたいと。自分に居場所をくれた2人に恩返しをしたかった。

だから、彼女を救いたい。たとえ世間から悪人と呼ばれても良い。それでアカネとクリアスの居場所が守れるなら、本望だった。

「……分かりました。ですが、無理をするなら、私も一緒です。主一人では行かせません。」

そんなクロノに、告げるクリアス。

うれしかった。普段は、自分たちに笑いかけてくれる友がそこまで自分を思っていてくれた事が。

ならば、自分も友のために命を賭けるのがクリアスが受け継いだ『騎士道』だからだ。

無論、それは彼らのポケモン達も理解していた。

ボールの中から、今話を聞いていたポケモン達も、自分のトレーナーのために命を賭ける覚悟を決めた。

「私も忘れては困ります。もちろん、私もお付き合いいたします！」
胸を張り、ミヨも言う。

それを見ていたナタネも頭をかきながら、笑みを浮かべる。

「……君が好きになった子は幸せだね。こんな、大切に思われてるなんて。……下準備は任せて。私の合図で会社に入社して。」

後は君が想うように行きなさい。」

「はい！」

ナタネがクロノに告げる。そして力強く答えるクロノ。

想いは、強く。そして、大切な人が無事であることを信じていた。しかし、それは所詮願望でしかなかった。

それを彼が知るのは、そう遠くない未来であった……。

ナタネと別れ、ひとまず、コスモエネルギー社の裏手で待機する人。

何時でも行けるように、クロノの手にはポケギア強く握られていた。

「……主よ。作戦前に一つ良いですか？……いかなる事が起きようとも、主はアカネさんを助ける事を優先してください。それが、たとえ永遠の別れになるかも知れない時でも。」

「縁起でもねえこと行ってる暇があるなら、ポケモンの状態チェックでもしとけ。……みんな無事に助かって、また旅すんだよ。知らない地方に行つて、知らない人に、ポケモンに出会つて。笑つて、喧嘩して。数えられないほどの思い出作るんだ。俺たちがいつまでも『友達』でいられるようにな。」

そうクロノが言つと、ミヨもそれに加わる

「……その旅に、私も加わつてよろしいですか？」

クロノの答えは決まっていた。

「もちろん。お前も含んでの旅だ。」

アカネがいなくなつて初めて見せたクロノの笑顔。

その笑顔で、2人の緊張は無くなり、また皆が再び出会える事を信じられるように思えた。

そんな時だった。ポケギアにナタネからのコールが入る。

コール共に、コスモエネルギーの社内から慌ただしい人の声と、走り回る足音が聞こえてくる。

中では、物が壊れる音も混じっている。

「行くぞ！」

そして、3人は裏口から社内に入り、アカネを探しだした。

外へ聞こえてくる声とは裏腹に、中は何も起きてはいなかった。

いや、確かに表面的には騒いでいた。しかし、奥の方で働く人間は、無表情のまま、事態の收拾を行っていた。

「……なんだ、こいつら。まるで機会みたいだな。」

無表情なその社員達を見て、思わず口に出してしまうクロノ。

しかし、そんな時。

「おい、貴様ら！部外者だな！ここは部外者が入って良い場所ではない。どこから入ったか知らないが、早く出ていけ！」

見ていた社員とは違い、怒りをあらわにした表情をした社員。

しかし、そう言われて『はいそうですか』といって帰るクロノ達ではなかった。

「嫌だつて言ったら、おっさんはどうする？」

挑発的な態度で、社員に話すクロノ。

「ならば、ここで見たことを外へ漏れないよう、お前たちを捕まえるだけだ!!」

そして、鳴り響く社内のサイレン。

それに反応し、無表情な社員達が一斉にポケモンを出し3人を囲んだ。

「お二人とも!ここは私が止めます!!ですから、早く上の階へ!!・・・この人たちの反応から見ても、ここにアカネさんがいる可能性は高いです!!お早く!!」

そして、ゴウカザルを出し応戦するミノ。

戦いながら、2人のために道をあけている。その芸当ができるのは彼女がかなりの腕を持っているからできる芸当である。

「恩に着る!お前も気をつける!!」

「ありがとうございます!!」

そして、2人が上の階へ駆けていく。

2階にたどり着いた2人。このビルは、4階建ての建物。しかし、1フロアが意外と広い。

そして、この階にも待ち伏せていた社員がいた。

「クソ!テメエらはほかにすることは無いのかよ!!」

ボールを構えるクロノ。
しかし、クリアスがそれを止める。

「ここは、私の兄弟が食い止めてくれます。我々は先に。……頼みましたよ、ミュウツィー。」

そして、黒いボールから現れるミュウツィー。
軽くうなずき、敵に対峙する。

「……クロノ。貴様は、いかなる時もお前でいてくれ。我の兄弟のためにも。」

「ああ。……ここは任せた！」

そして、走っていくクロノ達。
しかし、ミュウツィーには、一つの不安の色が有った。

今では無い。近い未来、クロノに何かが起こるのではないのだろうか。
という不安が。

そして、時折体が何かに引っ張られるような感覚に襲われる。
物理的ではない。魂が何かを引っ張っているような感覚だ。

『杞憂で有ってほしい』

そう考えている。

階段を駆ける2人。

そして、たどり着いた3階には、1人の男だけが待ち構えていた。

その、男を見る2人。
そして、顔色が怒りの色に染まっていく。

「貴様!!どの面下げここにいる!!」

対峙する男。かつてその想いを信じたために、今と言う現状を作った張本人。

クロノ達を監視するために近づいてきた男。
星。いや、今はマーキュリーと呼ばれている。

「……ここから先は通すわけにはいかない。」

クロノの問いには答えず、バンギラスを出し、臨戦態勢に入るマーキュリー。

「貴方の相手は私です!!」

そして、エンペルトと共にマーキュリーに対峙するクリアス。
そして、後ろにいるクロノに向かって叫ぶ

「主よ!こいつがここにいるということとは、アカネさんがここに
いる可能性はかなり高いです!こいつは私が倒します!ですからアカ
ネさんを!!」

「ああ!!すまない!!」

そして、階段に向かって走るクロノ。
マーキュリーもそれを止めようと走るが、クリアスとエンペルトが
それを阻む。

「あの時のお礼がまだでした。今ここでお礼参りいたしますよ！」

「……それもよからう。来い！クリアス！！」

睨むクリアスに対し、マーキュリーは何かを覚悟したような顔でクリアスとの戦いに臨んだ。

まるで、これが彼の最後の戦いかのように……。

階段を駆けるクロノ。

今までで一番長い階段を素早く登っていく。

着いた部屋には、頑丈な扉が立ちふさがったが、ガレス達の攻撃でいとも簡単に崩れ去った。

そして、部屋に飛び込むクロノ。

部屋の中には、いくつもの機器に向かって、素早く手を動かしている科学者だけで、ほかに誰も今いなかった。

「ん？なんじゃい。こんなガキ一人捕まえる事すらできんかったのか。全く使えない部下どもだ。」

クロノの存在に気づき、そうつぶやく科学者。

その科学者にクロノが吠える

「テメエ！アカネをどこにやった！！さっさとアカネを返せ！！」

クロノの叫びを聞き、少しうるさそうな顔をする科学者。

「うるさいガキじゃ。そう騒がんでも、会いたいならすぐに会わせてやる。ほれ。」

そう言い、科学者は一つのボタンを押すと、部屋の壁の一角が上に上がり、ガラス張りの部屋が現れる。
中には、機器のついた椅子に座っていたアカネの姿が有った。
来ている衣装は違えど、その椅子に座らされている女の子がアカネで有ることは間違いではなかった。

「アカネ!!!」

アカネのいる部屋に駆け寄るクロノ。
しかし、ガラスがそれを拒み、二人を遮る。

「アカネ!!!おい、返事をしろ!!!」

ガラスを何度も叩き、アカネに呼び掛けるクロノ。
そこでクロノは気がつく。グラードン達から受け取った、プレスレットが無くなっている事を。
あのプレスレットはアカネの力を抑制する力を持っている。つまりあれがなければ、アカネは、力を制御できず、力を使い続けてしまう。

「お探しの物はこれかな？」

そう言い、科学者は白衣のポケットからアカネが付けていたプレスレットを取り出す。
離れているが、それがアカネの物であることはクロノにはすぐに理解できた。

「おっさん!!!アカネに何をした!!!」

向き直り、再び科学者に吠えるクロノ。

「いちいちうるさいガキじゃな。その娘にはもう用は無い。連れて変えるなり好きにしろ。ワシはもうここにはようは無い。」

そして、ここを去ろうとする科学者。

しかし、後ろからガレスが襲いかかる。

それをかわす科学者。

「なんじゃい。貴様は後ろから攻撃するのが普通なのか？」

そういう科学者に対し、クロノは怒りをあらわにしていた。

「貴様はだけはゆるさねえ！！アカネを道具みだにした貴様だけは！！ガレス！！」

そしてクロノの命を受け、再びガレスが科学者に向かって攻撃を仕掛ける。

「やれやれ、しょうがないのお。ロトム。」

そして、科学者も一匹のロトムを出した。

炎を纏ったガレスを前にしたロトム。しかし、刹那。

ロトムの姿が変わる。その姿はまるで、洗濯機を思わせる姿だった。

「ほれ、ハイドロポンプ。」

そして、本来なら使うことが出来ない技をロトムが使う。

それを、直接食らう。

「なんだ！そいつは！！」

見たことのないそのロトムを前に、クロノが動揺する。

「さて。少し痛い目に有った方がよいかの？」

歩みを止め、科学者がクロノとガレスに近づいてくる。
その時。

「観念するのは貴様だ。プルート。」

プルートの後ろに刃物を当てる男。

一度クロノ達を裏切った男・星がいた。

「……何のマネじゃ？マーキュリー。裏切るのか？」

「……もう、貴様たちのやり方にはうんざりだ。いい加減、
お縄につけ。」

星のその忠告を聞くプルート。

しかし、突然白衣から、煙が噴き出す。

慌てて距離を置く星とガレスとクロノ。

『まあ、貴様が裏切るのは大方予想は出来ていた。もう貴様も用済
みだ。どこにでも好きなところに行くがよい。』

プルートの声が響く部屋。

煙幕が消えたころには、プルートの姿は無かった。

アカネがいる部屋に入り、アカネを椅子から解放するクロノ。
どんなに呼び掛けても返事は返ってこない。

頬には、涙の後。どれだけ泣いたのだろう。それだけ、彼女の頬に
ついた涙の跡は濃く残っていた。

瞳には光は宿っていないかった。どこを見ているか分からない視線。
そんな変わり果てたアカネを抱き寄せるクロノ。

「ごめん……ごめん……ごめん……ごめん……ごめん……
遅く……な……な……な……ごめん。」

何度も謝るクロノ。

助けられなかった。自分の好きな人を。

涙が止まらなかった。だが、どんなに謝ろうと、アカネから返事が
返ってくる事は無かった。

今のクロノに出来る事は、ただアカネに謝り、泣くことしかできな
かった……

そんな、クロノを見る仲間達。

なんと声をかければいいか。言葉が見つからない。

この時、寒い地方のシンオウにようやく初雪が降り始めた。

12月23日。明日は幸せを祈るクリスマスイヴ。

そして、アカネの誕生日でもあった。

第54話 「遅い再会ごめん」 (後書き)

手遅れだった。何もかも。

守ろうと決めた人を守れず、絶望に染まるクロノの前に現れたのは、世界の壁を越えた者。

次回からコラボ企画で進行いたします。

第55話 「サヨナラ〜異界の者たち」 (前書き)

これから、プラネットさんとのコラボレーションした内容になります。

第55話 「サヨナラ、異界の者ごとく」

神の住まう山。

その名をテンガン山。雪国であるこの地方にそびえ立つその山は、常に雪化粧をしていた。

無論、付近の町なども雪に覆われる事もある。

そんなテンガン山の麓に『彼』はいた。

ボロボロのロープで全身を隠し、世界の壁を越えて、この枝分かれした世界の内の一つの世界に……。

「……転移はできた。体に支障は無し、か。上々だ。」

手を動かし、体に支障がないかを確認する。

そして、辺りを見渡し、誰かいないかを確認する。

探すのは『人間』。

そんな時だった。

遙か彼方から、重たい。それでいて悲しみに満ちた念を感じ取った。

「何だこの念は……。重たい。それでいて暗く悲しみに包まれたもの。一片の光すら見えない……。そう遠くではないな……。」

そして、『彼』は念のする方に向かう。
興味が湧いた。

その、念は世界すら食らおうとしかねない闇にもなりえる。

そんな心を持っている存在を見てみたくなった。

単なる好奇心でもあった。

アカネを助けて一夜が明けた。

心の無くなつた人間を救える医者などこの世にはいない。

どうにか出来ないかを、クロノは必死に探した。

クロノの力で何とかならないかをラティオスに聞いた。

しかし、それはできなかつた。

所詮クロノの力は『心を作りかえる力』。決して『心を元に戻す力』では、無かつた。

物理的なものならば直せる。

しかし、目に見えない物を直すことは不可能だつた。

クロノにも、周りの人間達にもアカネに笑顔を与える事は出来なかつた……。

アカネに病室で、一人椅子に座り手を握っているクロノ。

守りたくても守れなかつた。

全てが手遅れだつた。

医者に診てもらつたが、医学的側面から見た結果。アカネが目覚める事は無い。

そう、告げられた。

それを想い出すだけで、クロノの手に力が入る。

「なんで……お前なんだ。お前が何したんだよ……。」

そう、口にするクロノ。

あれからいくら泣いただろう。アカネはどれだけ辛い思いをして、どれだけ泣いたんだろう。

それに比べれば、今、クロノが流した涙など比ではなかつた。

12月24日のハクタイシティ。

コスモエネルギーが襲撃された事件は、またたく間に世間に広まった。

しかし、人々の一年に一度の行事を止めるほどにインパクトは無かった。

そして、何の関係もない人は想想いの人とクリスマスを過ごしていた。

今年の遅い初雪がシンオウ全土を包んでいる。

片時もアカネのそばから離れないクロノ。

ここにきてから、一回も食事も、睡眠もとっていない。

寝ずの看護をクロノが行っていた。

そこに、現れるケルア。

涙の後の残るクロノの顔を見て話す。

「・・・少しは休め。そんな顔をしていたらアカネ君が目を覚ました時、驚くぞ？」

「・・・俺は、こいつを守れなかった。助けると言いながら助けられなかった。俺は・・・無力だ。」

そして、クロノの肩に手を乗せるケルア。

「お前は、彼女を必死に助けた。お前が飛び出すのを止めたのは、我々だ。お前がそれを振り切っていれば、アカネ君は助かったかもしれない。お前ばかりが堕ち込むな。だから、今は休め。」

そして、ようやくクロノが病室を出た。

クロノの変わりりは、看護師の人たちが見てくれる事になった。廊下で、クリアス達とすれ違った。

「主よ、大丈夫ですか？」

クリアスがそう、声をかける

「……俺よりアカネを助けてやってくれ。」

それだけ言い、クロノはあてもなく歩きだした。

どれだけ歩いたのか。気がつくともクロノは町を歩いていた。

そして、時刻はすでに夕刻。

クリスマスを祝うには十分な時刻だった。

そんな時に、クロノの目にとまった、一組の指輪。

ただのシルバーアクセサリーであった。

そして、今日はアカネの誕生日だった。

何も考えないでクロノはその指輪を買っていた。

購入時、店員に冗談を言われ、茶化されたが、今のクロノにそれをまともに受け答える、気力もゆとりもなかった。

病院に戻った時、すでに面会時間は終わっていたが、クロノ達は特別に許されていた。

クリアス達は、廊下のソファで毛布にくるまって休んでいた。

ケルア達は、ギンガ団達の行方を様々な方法で探していた。

そして、今のアカネの病室を照らしていたのは、常夜灯だけ。

少し、うす暗く感じるが、歩くには十分の明るさだった。

布団の中に有るアカネの手を取り、先刻買った何の変哲もない指輪をつける。

そして、もう片方を自分の指にはめる

「誕生日おめでとう……。メリークリスマス。」

それだけ言い、クロノは病室を出た。

向かった先は、屋上。特に理由は無かった。

だが、今アカネにそばに居ても、自分では何もできない。ならば、今はゆっくり寝させてあげよう。

そう、考えたのだった。

冬の風が吹く屋上。

少しであるが、ところどころ雪が積もっている。

屋上を貼り巡るネット越しに、外を見る。

ところどころ明るく、人々は『今』という幸せを味わっていた。そんな人間が憎かった……。

「人間が憎いか？」

後ろから、聞こえる声。

振り向くと、給水塔の上にボロボロのローブを纏った者がいた。

「……憎い。アカネが。不本意な力を持っただけなのに、悪党に利用され。人並みの幸せすら味わえないのに！なんで何にも知らない奴らだけがそれを味わっているのか！そう考えると、憎くしょうがない……。」

そう、ローブの主に答えるクロノ。

そして、ローブの主も答える。

「ならば、人間を全て消すか？」

「……………違う。ほんとに消さなきゃいけないのは。『悪』だ！この世界を利用するだけの存在！そんな奴らがいるから奴らがいるから皆が安心して過ごせない！なら、俺はあいつらを！ギンガ団もロケット団も全員倒す！！」

ギンガ団。

そのキーワードを聞くとロープの主は眉をひそめる。

そして、口を開く。

「そう思っているのならば、なぜ動かない？動かなかったから、貴様は大切なものを失ったのだろう。」

そう、諭されるクロノ。

そう、常に後手に回っていたから、みんなが危険にさらされた。ならば、今度はこちらから仕掛ける。

「……………そうだな。いつも後手に回って俺は後悔してきた。」

そして、一步踏み出したクロノ。

屋上を下り、病院を背にした。

病院の外には、先刻のロープを纏った存在が待っていた。

「……………まだなんか用か？」

足を止め、対峙し話す。

「貴様に付き合えば、ギンガ団と会える。貴様の復讐に付き合っ
やる。」

「……好きにしる。」

そう言い、ローブの者と共に歩きだす。

それから、クロノが仲間の前に、公の舞台に姿を出すことは無かった……。

それに比例し、テレビのニュースでは、一日に何件もの犯罪者が捕まるニュースが流されるようになった。

第55話 「サヨナラ〜異界の者たち」（後書き）

しばらくの間、プラネットさんとの『空の探検記』とコラボした内容になります。

プラネットさんの更新した空の探検記の冒頭に登場した『あの人』がこの世界に現れ、クロノと何を見るのか？

こんな感じになっちゃいましたが、どうでしょう？プラネットさん？

第56話 「模索する者、神を超えた力」 (前書き)

コラボ第2話です。

第56話 「模索する者、神を超えた力」

ただ、私はそこにいた。

笑うことも、泣くこともなく、ここに座っていた。

枯れた花の中心に私は居た。

誰も居ない。居たかもしれない。でも覚えてない。

こんな私の横に、彼が居た。

茶色い髪をして、白と赤を基調とした上着を着た『彼』。

- 誰なの？ -

そう私は言おうとした。でも、言葉すら覚えていない。

私の想いを口にすることすらできない。

そして、『彼』は私に1個の指輪をはめてくれた。

『彼』も同じ指輪をした。

そして、『彼』は立ち上がり歩きだした。

遠くに誰か居る。

ボロボロのローブを着た誰かが。

そして、『彼』はその人と一緒に遠くに歩きだした。

遠巻きに見える、茨の森。

そこに、『彼』は向かって歩き出した。

- そつちは危ないよ？ -

そう言おうとした。でも、言葉が出ない。

だから、私も立ちあがり『彼』の腕を掴もうとする。

でも、掴めなかった。

私の手をすり抜け、『彼』は茨の森に入っていく。

『彼』の体を傷つけていく茨。
でも、『彼』は何も言わず先に進んでいく。

- なんて、そんなところに行くの？ここに居れば、痛くないよ？ -

そんな私の想いを、分かったのか『彼』はこつちを振り向く。
そして、一言

「サヨナラ……。キミハワラッテイテ……。」

それだけ言つて、『彼』の姿が見えなくなった。
追いかけてたい。でも、なぜか足が動かない。
この茨が怖い……。

『12月28日、お昼のニュースです。本日もまた、交番前にポケモンを悪用していた犯罪者が負傷した姿で放置されていました。クリスマスから、連続して3日。今日までにすでに10人以上の犯罪者が傷だらけの状態で見つかっています。本日はこの事件を徹底取材していきたいと思えます。』

そして、何人もの評論家や、心理学者、法律研究家がスタジオに現れ口論を始める。

『……つまり、この事件は自分をヒーローと思っただけでいる人間が犯人と思います。』

『ちよつと良いかね？キミはさつきから、犯罪者を捕まえている人間を犯人と呼んでいるが、彼は犯罪をしているのかね？確かに、暴行罪に該当するかもしれないが、犯罪者を捕まえている。これは称賛に値するとは思わないかね？』

『しかし、犯罪者を捕まえているならば、堂々と連行すればいいのに、なぜ彼は夜に交番前に放置するという行動をする？それに、こんなに暴行を加えなくても済むのに、必要以上の暴行。これは犯人と言わざる負えないでしょう。』

『しかし、先生。この犯罪者を捕まえている人物を賛同する声も有ります。彼の行いで喜んでいる人間がいるのも事実です。』

『では、何のために法律が有るのですか？こんなポケモンを犯罪に使っている連中を裁くために有るのでしょうか？』

『ですが、その法律で裁けていないから、犯罪者がいるのでしょうか？そして、この犯罪者を捕まえている者は法律では、どうにもできない犯罪者を裁いてくれているんですよ。』

そして、テレビのスイッチを消すクリアス。

「また、このニュースですか……。」

アカネの病室でそうつぶやく。

クロノが何も言わずに出て行って早三日。

その日から何件もの同じ内容の事件が流された。被害に有っているのは、法の目を潜り抜けた犯罪者。法では裁けない者達。

そして、被害者はポケモン共々重症。傷はやけどから、打撲と様々。一環して犯人の姿は分からず。

しかし、ケルアが非公式にしている情報で、犯人像は特定出来ていた。

犯人は様々なポケモンを使ってくる。

バシャーモ、ガブリアス、ガラガラ、サンダー、マニョーラ、ムクホーク、ニドキング、ウインディ、ルカリオ、ボーマンダ。

それだけで、『彼』を知っている者は愕然とした。

姿を消した知り合いが。何も言わずに。彼が何をしようとしているかが、分からない。

「……主よ。貴方は何をしようとしているんですか？」

目を覚まさないアカネを見てそうつぶやく。

暗い森の中、一台のバイクが何者から逃げていた。

顔には余裕の表情は無かった。

バイクの荷台の籠には、違法な方法で捕まえたポケモンが入ったボール。

そして、手持ちのポケモンは全てやられた。

「クソ！何なんだあの小僧は！！」

刹那、左右から現れるムクホークとルカリオ。バイクの乗り手は、バランスを崩し倒れ込む。

そして、近づいてくるクロノ

無表情で後ろには彼のポケモン達が並ぶ。

「ひ……ゆ、許してくれ！俺は頼まれたんだ！俺は仕方がなくやってたんだ！」

そして、クロノの腕が、男の喉を掴み、持ち上げる。

自分より身長がある男を強引に自分と同じ目線に合わせる。

「誰に頼まれた……。」

「し、知らなえ！ただ、胸に『G』のマークが有る連中に『質の良いポケモンを集めてほしい』て言われたんだ！本当だ！信じてくれ！」

「どこで頼まれた？」

「ヨ、ヨスガシティの『heaven・bar』て酒場でだ！本当だ！！！」

そして、手を離す。
倒れ込み、激しくむせ込む。

「……しかし、貴様が今までやった事のケジメは着けてもらおう。」

男の顔が青ざめる。

そして、視界に飛び込むクロノのつま先。

それからは、クロノによる制裁が行われた……。

それを、ただ見るしかできない彼のポケモン達。

目をそむけている者すらいる。

そして、木に身を任せそれを見ているローブの者。

男は、彼に助けを求めた。

「お、お前！助けてくれ！！このままじゃ死んじゃまう！！！」

「俺が貴様を助ける理由がない。俺は貴様が知っているであろう、『ギンガ団』の情報にしか興味は無い。何より、貴様が『人間』である時点で助けるに値しない。」

「そ、そんな！！！」

そして、男の頭部を掴み、クロノは一言。

「貴様が今までしてきた事の償いだ。黙って償え……。」

力の限り男の顔を木に叩きつける。

そして男の意識は無くなる。

血まみれの男の顔。

よもや、人を殴る事に、人を傷つける事に何の躊躇も無かった。

「……さて、次に行くぞ。」

男の捕まえてポケモン達を逃がし、クロノはポケモン達とローブの者に言う。

しかし、ローブの者がクロノに言う。

「……待て。何か近づいてくるぞ。」

耳を澄ませば、確かに何か近づいてくる音が聞こえてくる。

空、陸の両方から。

そして、クロノの腰の最後の一つから、強引に出てくるルイン。

空から来た者は、デオキシス。クロノが会おうとしていた伝説のポケモンの一体。

そして、地上を疾走してきたのはエンテイ。

「……何の用だ、貴様ら。」

今、倒した男の襟を掴みながらクロノが対峙した伝説のポケモン達に言う。

「クロノ！そのローブの者から離れる！そいつはこの世界の住人ではない！！」

そうエンテイに言われ、クロノはローブの者に視線を向ける。しかし、

「だから何だ？こいつが誰で有ろうと関係ない。こいつが、俺の復

「警に力を貸してくれるというならばそれで良い。」

そう言い返すクロノ。

「クロノ！復讐に何の意味も有りません！貴方は自分のポケモン達の手も血で染めても良いんですか！？」

ルインがクロノに言い聞かせる。

クロノはポケモン達に視線を向ける。

少しおびえたような表情のポケモン達。

「……今の俺に着いて来れない奴は消える。来る奴だけ前に出る。」

過去のクロノではありえない言葉。

ポケモン達は悩んだ。

これは自分の知っているクロノではない。

この三日間、今までにない指令をしてきた。

人を傷つけるだけのための命令。

だが、それでもクロノを裏切りたくなかった。

そして、ポケモン達は全員一歩ずつ前に出た。

誰も、クロノから離れる者はいなかった。

それを見たローブの者は少し驚いた。

どれだけ、酷い扱いを受けたにも関わらず、クロノのポケモンが誰も彼と離れる事を拒んだ事に。

「半分は消えると思ったが……。こいつは、他の人間と何が違う？」

頭の中で考える。彼の中に有る『人間』と今のクロノは何も変わらなかった。

ポケモンを道具として扱っている事。何かが違う。何が？
信頼？人間とポケモンの間に？有りえない。

『人間』はポケモンを道具として扱っている生き物。
その間に信頼関係など成り立つはずがない。

だが、目の前で否定した信頼関係が有った。なぜ？

「これが答えだルイン。貴様はどうなんだ？」

そうルインに達と言うクロノ。
ルインはクロノを見て言った。

「たとえ貴方のポケモン達が貴方を慕っても、私は今の貴方にはついては行けない！だから、私は貴方を止める！！」

構えるルイン。

そして、エンテイも構える。

「人間。キサマには、失望シた。エンテイ達の八なしでは、この世界ヲマカせるニたる存在ダと思ツたが、今ノキサマでは世界ヲ壊ス存在。止めさせモラウ。」

そして、デオキシスはその姿を変え、攻撃に特化した姿に変える。

「止められるものなら、やってみろ。」

クロノの前に出るポケモン達。

どんな時でも彼のポケモン達はクロノを守る道を選んだ。

「……余興だ。少し相手をしてやろう。」

クロノのポケモン達の前に出るローブの者。

「貴様ばかり暴れるな。たまには俺にも暴れさせる。それに、この世界の『神』達の実力も知りたい。」

クロノに視線を送るローブの者。

しかし、その真の意図は別に有った。

クロノと。この人間と居れば何かが分かる気がした。

『人間とポケモンがいる意味』が……。

「異世界の住人！貴様がなぜこの世界に来たかは知らぬ！だが、貴様の存在はこの世界を狂わす！おとなしく元の世界に帰れ！」

エンテイが吠える。

しかし

「まだ、『答え』を見つけていないのでな。まだ帰る訳にはいかないな。どうしても返したいなら、力づくでやってみろ！！」

そして、4体が距離を詰める。

デオキシスの腕が、ローブをかすめる。

エンテイが吐く炎が襲いかかる。

ルインの『ラスターパージ』がローブをなびかせる。

しかし、その全ての技が、ローブをかすめただけで終わった。

「……もう少しやるかと思ったが。興ざめた……。消えろ、弱い神共が。」

ローブから手を出し黒いオーラをためる。

「ダークブラスター」

「！！！！！！」

避けられないと確信したデオキシスが、2体を守りディフェンスフォームで技に耐えようとする。

しかし、所詮そんなもの、その場しのぎの時間稼ぎ。その防御はローブの男の『ダークブラスター』の前では紙切れにも劣った……。

広範囲に『ダークブラスター』の爪後が残った。

3体の姿は無かった。

逃げたか、消し飛んだか。どの道、彼らがクロノを止める、という目的は果たせずにいた。

「……弱い。弱すぎる。この程度で、神とは。」

そう毒づくローブの男。

「……お前は何だ？」

一部始終を見ていたクロノがそんな問いを口にした。

この世界で神と言われたポケモン達を、赤子の手をひねるかのようにあしらったローブの者。

「……それが分かればこんな事はしていない。」

それだけクロノに言う。

クロノもせれ以上聞かなかった。

そして、彼らはヨスガシティまで歩きだした。

ギンガ団を倒す。ただそれだけのために。

第56話 「模索する者、神を超えた力」 (後書き)

法律では守れない物が有ります。

辞書では学べない物が有ります。

ネットでは調べられない物が有ります。

それらはどうすれば、守れ、学べ、調べればいいですか？

ククロノとローブの者は今、それを探し、学び、守るうとしています。

第57話 「解けていく思い〜彼を慕う者達〜」 (前書き)

ちよつとほのぼのとした描写を加えてみました。

第57話 「解けていく思い〜彼を慕う者達〜」

『彼』が居なくなつた。

名前も知らない。顔も思い出せない。そんな知らない人が、茨の森に入つて行つた。

知らない人が何をしようと私には関係無かつた。

そう、思つてる。

でも、何でだろ？

とても心配。ここに居て欲しかつた。ずっと手を握っていてほしかつた。

.....

追いかけてよう。

そう思い、足を進めようとした時。

私の腕を掴む、男の人。

長い金髪の男性。

その人が私の腕を掴み、私が歩くのを止める。

誰だろう？知らない。でも知つてる。

さっきの人と同じ。

知らないけど知つてる。

私は茨の森に目を向け、見えなくなつた『彼』を思つた。

雪が降りしきるハクタイシティ。

アカネが眠る病室に、クロノの代わりにクリアスが居る。

そして、流れるニュースを見ていた。

『では、現場と中継を繋ぎます。』

場面がスタジオから事件現場に移り変わり、有りえない風景が映し出された。

まるで、巨大な光学兵器でも撃ったかのような現場。

なぎ払われた木々。むき出しになった地肌。

名前も無い森は、一瞬にしてその風景を消したのだった。

『こちら、現場です。今朝発見されたこの現場。一体どのようにしてこのような状況が起きたのか、様々な専門家の方々が調べていますが、一向に原因は不明のままです。』

クロノが居なくなつて、様々な事が起きた。

法で裁けない犯罪者が次々に捕まり。

そして、この事件。

クロノが無関係とは思えなかった。

「……これも、クロノ様が関与してるんでしょうか？」

ミヨがクリアスに言う。

分からなかった。しかし、少なからず関わっているものと考える方が無難だった。

「おそらく。ですが、普通のポケモンがこんな威力の技を使えるとは到底思えません。」

そう、少なからず『この世界』のポケモンでは到底不可能な威力だ。そんな時。

部屋の隅の空間にヒビが入る。

まるで、鏡が割れるように。

そして空間が割れ、中からラティアスが血相を変えて出てきた。

その後に続いて、エンテイ、ラティオス、デオキシスがなだれ込む。

「お願い！！みんなを助けて！！」

「何が有ったんですか！？」

椅子から立ち上がり、彼らに近づくとクリアスとミヨ。

ラティアス以外のポケモンは皆、怪我をしていた。

いや、もはや怪我と呼べるレベルではなかった。

「酷い……。ミヨさん！今すぐケルアさんとジョーイさんをお呼びしてください！！」

「はい！！」

その後、彼らの助けにより3匹は助かった。

流星は伝説のポケモンと言ったところだ。

普通のポケモンなら命を落としていたほどの怪我だった。

「……とりあえず一命は取り留めました。あとは本人達による生命力の問題ですね。」

そうジョーイさんがラティアスに言う。

ガラス越しに見る仲間達。

よほど気を張っていたのだろう。胸をなでおろし、少し何だを浮かべていた。

「ジョーイさん。この事は内密にお願いしたい。」

「はい。彼らを狙う人もいます。この事は口にはしません。」

ケルアがジョーイにそう言うと、快く了承してくれた。

そして、この場をクリアス達に任せて、その場を離れた。

「さて、ラティアス。何が有った？」

ケルアがラティアスに聞く。

ラティアスもそれに対し答える。

「……昨日、お兄さん達は、クロノを説得しに行ったの。でも、だめだった。異世界から来た存在が間に入って、お兄さん達は返り討ちにあつたの。」

「異世界？」

「そう。今この世界に、『ここではない世界』の住人が居るの。それがクロノと一緒に居る。多分、この世界で対等に戦えるのは、『この世界』を作った神様だけ。」

異世界。

実感が湧かないが、今朝のニュースを見ると、納得せざる負えない。

「……つまりクロノも関わっている訳か？」

「うん。クロノは今、ギンガ団とロケット団。ううん。この世界の『悪』を消そうとしてる。どんな手を使っても。それが、自分が世間からうとまれる存在になろうとも。」

ラティアスから知らせれる事実。

クロノがやっている事。

この世から『悪』を消すこと。

それが、自分をも『悪』にしてしまつと知っていても。

「なんで・・・そんな事を。」

「なんでつて、あんた。それは、あんた達のためでしょ？」

クリアスの疑問を、ラティアスが答える。

そして続ける。

「クロノにとつて、あんたたちと出会つて世界が変わつた。だから、あんた達を悪用した連中が許せないんでしょ？だから、あんた達が安心して暮らしていけるような世の中を作るためにやってるんですよ。」

自分より友達。

たとえどんなに危険な目に会おうと、クロノは友のために身を呈していた。

クリアスを助ける時もそうだ。

アカネを助ける時も。

そして、ポケモン達が悪用されている時も。

アカネやクリアスと出会つて、クロノは『守りたいもの』ができた。たとえどんなに身を危険にさらそうとも、守り抜きたいもの。

それが、『大切な人が笑つて居られる事』

「・・・主は、今どこに向かっていますか？」

ラティアスに聞くクリアス。

「ヨスガに向かっているみただけど……。」

「ケルアさん。クロノと所縁が深い人を出来るだけ多く集めてください。」

クリアスがケルアに言う。

「なぜだ。」

「私が……主を止めます。今の主のやり方では、誰も笑って過ごせません。だから、私が止めます。アカネさんより、説得力は無いかもしれませんが。ですから、みんなの力を貸してください。」

「……分かった。私を知る限りで所縁が深い人物を集める。……クリアス君。他人にこんなことを頼むのは間違いかもしれないが、クロノを頼む。」

クリアスに自分の息子を。止める事を息子の共に託した。しかし、それは間違った選択だったかもしれない……。

踊る炎を見つめるクロノ。

小さな洞穴で、夜を明かす。

一人で旅をしていた時は、なんとも思わなかったが、今となると虚しかった……。

「……先日、デオキシスが言っていた『貴様に世界は任せられない』と。貴様は何者だ？」

洞穴の奥でクロノに問いかけるローブの者。
横目でクロノは彼を見て、答える。

「……この世界を作った神様は、この星に居る人間の存在理由に疑問を抱いたらしい。そこで、人間の代表として、俺達と話してこの世界の行く末を決めるらしい。たぶん、デオキシスが言っていたのはその事だと思う。」

「ずいぶんと、人任せな神様だな。」

ローブの者がそう言う。

何かを言おうとするが、洞穴に響く小さな寝息。
クロノが出していた。

すると、クロノの腰のボールから彼のポケモン達が様子を見に出てきた。

流石に、全員出ると少々狭く感じるが、広さはそこそこの有るため大丈夫だった。

クロノの膝の上にガラハットが乗り、クロノの暖となる。
トリスタンやパロミデスは入口をふさぎ、風避けになる。
他の皆もクロノに寄り添い、彼を寒さから守る。

それを見ていたローブの者。
やはり信じられなかった。

今まで見てきた、クロノの様子から見ても、この人間のどこに、ここまで信頼する要因が有るのが。

そして、ガレス達に聞いた。
彼らの言葉で。

『……貴様達。どうしてそこまでその人間を慕う？そいつは
貴様達を道具のように扱っているのだぞ？』

ガレスはメンバーの代表としてそれに答えた。

『たしかに、今のマスターを見ただけでは分かりません。ですが、
昔のマスターを知っているからこそ、今を耐えられる。それだけで
す。』

そう答え、クロノを見る。

そう、彼が慕っているのは今のクロノでは無かった。

彼らが知る、いつものクロノ。

今は辛いかもしれない。だが、クロノが自分たちにしてくれた事を
思えば、こんな事恩返しの内にも入らなかった。

『ちよつと。ガラハット。いい加減膝の上変わりなさいよ。』

『いやだー。ここは僕のとくとうちえきー。』

ガラハットとトリスタンがクロノの膝の上で小さく喧嘩を始める。

それを見て、ポケモン達は笑いだす。

幸せそうな風景。

それを見るローブの者。

クロノが、この人間が特別じゃない事が少し分かった気がした。

漏れる炎の光。

クロノと異界の者がいる洞穴。
それを見るダークライ。

「……………クロノ。ここからが貴様に与えた試練だ。どのような結末になるか見定めさせてもらう。」

そして、闇に溶ける体。

静かにふる雪。

シンオウの新年は静かに開けた。

第58話 「語る思い〜出会いが引き金となる時〜」

雪が積もる森を、ただ歩いている。

目的地はヨスガシティ。

目が覚めたら、自分の周りにポケモン達が居た。

おかげで、寝ている時寒くなかった。

(・・・ここ最近、みんなを撫でてやってなかったな。)

クリアス達と別れてから、自分がろくにポケモン達を触ってやっていなかった事に気がついた。

そして、自分の手を見た時、目を疑った。

自分の手が血まみれに見えた。

慌てて視線をずらし、頭を振り手を見なおす。

今度は、普通の自分の手だった。

しかし、ほのかに鉄くさい匂いがした。

言うまでもない。人の血の匂い。

「・・・・・・・・もう、戻れないな。」

自分が今、歩いている道が、もう後戻りできない事に今気づいた。

もう、自分がポケモンを撫でてやる時、彼らも血の匂いが着いてしまいかもしれない。

そう、思うと彼らを撫でてやる事を躊躇してしまう。

「何をブツブツ言っている？ヨスガにはもう着くのか？」

後ろを歩くローブの者が言う。

クロノは顔も見ず、ポケナビのマップを見て道を確認する。

「通常の道を使えば、後1日程度だが、森を歩くと早くて2〜3日はかかる。」

気が遠くなる話だが、仕方がない話だった。

クロノは、今までの事件のニュースで、自分が関与している事は感ず居ているはず。

ロープの者も、この身なりだ。大手を振って通常の道を歩く事などできない。

ゆえに、2人はこうして、人目のつかない森を歩くしかない。

森で小休憩をしている時。

何時もなら、無言な2人だが、今日は違った。

普段は無言なロープの者から、声をかけてきた。

昨日と良い今日と良い、少しずつ彼が変わっている事がクロノにも分かってきた。

「……貴様のポケモンは随分と貴様を信頼しているみたいだな。貴様はポケモン達に何をしたんだ？」

なんじゃない、質問。

何を聞かれるのか、と深く考えていたクロノの様々なシチュエーションには無かった質問だった。

そして、クロノは腰のボールを一つ取る。

中にはアレスタンが入っていた。

「こいつは、タツベイの時、群れの中で一番弱かったんだ。……どんな、トレーナーもこいつには見向きもしなかった。群れからも、

人からも見られなかったんだ。そんな時、俺がこいつらの群れに出会った。喧嘩も弱くて、いつも泣かされていた。でも、こいつは群れで一番、飛ぶ事を夢見てた。だから、俺はこいつが自由に飛べるように手を貸してやった。それからさ。こいつと俺が旅を始めたのは。」

「……その時、貴様はそのボーマンダに恩返しを期待して手を貸した訳ではないのか？」

その言葉を聞いて、クロノは少し笑った。

「お前が人にどんな、認識を持つてるか知らないが、少なからず、当初の俺はそんなことは望んで無かったな。ただ、こいつが自由に空を飛んでいる姿が見たかっただけさ。今じゃ、こんなにでかくなつちまつて。」

そんなクロノの言葉が信じられなかったローブの者。

何の見返りもなく人間がポケモンを手助けする事が信じられなかった。

しかし、クロノが続けてポケモン達の話をしていく内に、それが本当だと思えてきた。

「……で、こいつがまた臆病でな。当初はバトルもまともにできないほどだったんだぜ？信じられるか？今じゃ、バトルで先陣切ってるこいつが。」

いつの間にか、クロノは笑顔でポケモン達の昔話をしていた。

そして、ローブの者がクロノの話を止めた。

そして、クロノに一つの問いを投げかけた。

「貴様に問いたい。人とポケモンは共存できると思うか？」

笑顔が消え、無言なクロノ。

「……………俺もその答えを探してる。人間は酷く愚かな生き物だと思う。でも、全ての人間が愚かじゃな。でも、人間の大半は、ポケモンを悪用している。ギンガ団やロケット団もそうだ。そんな奴らが居る限り、人とポケモンに共存は有りえないと、俺は考える。」

クロノの答えを、黙して聞くローブの者。
その時だった。

「その考えは少し、違うと思いますよ主よ。」

木の陰から、金髪をなびかせてクリアスが出てくる。

「……………新年明けまして。が、挨拶か？」

「こんな形での出会いではなければ……………」

そして、クリアスの後ろから、彼に所縁の深い人物が来る。

クロノが師と崇める人間達。

ジヨウトのジムリーダー達だ。

「新年早々、御苦労さま。」

皮肉交じりのクロノの言葉。

そして、ここから彼の全てが壊れ始める事を知っているのは、未来を見た者だけであった……………。

第59話 「遣える思い、舞う星は流星のごとく」 (前書き)

後書きでも書きますが、執筆中にすごい御幣が有りました。

第59話 「違える思い〜舞う星は流星のごとく〜」

ローブの者と、クリアスが出したミュウツァーがこの場から、姿を消しこの場に残った10人。

クロノにとつては、もっと所縁が深く、もっとも信頼している者たち。

「クロノン！もう止めよ？こんな事したって誰も嬉しくないで？何より、クロノンが一番辛いやろ？」

クロノン。

クロノがアカネのところまで修業していた時の呼び名であり、クロノとアカネが信頼している証でもあった。

「アンタが、どういう経緯でこんな事しているかは、ワタル義兄にいさまさんんから聞いたよ。でも、あんたのやっている事に『正義』は無いよ。」

少し冷たい言い方をするイブキ。

しかし、それでも一度でも未熟な自分を師と崇め、教えを扱いたくクロノ。

だからこそ、口下手な彼女がここまで来て、クロノを説得するメンバーに居る。

何も言わず、クロノは黙ってそれを聞き続けた。

「……無言か。それもよからう。しかし、クロノ。貴様がこのまま貴様が、犯罪者を今のやり方のまま捕まえ続けたら、我々は貴様を捕まえなくてはいけない。」

シジマがクロノに告げる。
そして、ヤナギが続けて語る。

「今は非公式だがな、クロノ。君には『連続ポケモン密輸者暴行事件』の犯人として、逮捕状が出る予定じゃ。今はまだ、大丈夫だがこのまま、このような事をつつけなければいずれば、キミの言う『悪』になってしまふ。……ワシらに『弟子』を捕まえるような事をさせないでくれ。頼む、戻ってきてくれ。」

ヤナギの思い。

『弟子』であるクロノを捕まえたくない思い。

「キミが、彼女やクリアス君を大切に思っているのはよくわかった。だが、『悪』を裁くために法律が有る。だから、キミが自分の翼を血で汚す事は無い。キミだけが辛い思いをしなくても良いんだ。」

「クロノくん。貴方がすごく悩んで、悲しんでいるのは分かる。でも、貴方が今の道を進む事で貴方を知る人が、すごく悲しい思いをすることも分かってください。」

ハヤト、ミカンが思いを叫ぶ。

「僕達ではキミの闇を消すことはできない。でも、闇と一緒に歩く事は出来る。辛い時、その辛さを分かち合う事が出来る。だから、こっちに帰ってきて無いか。」

最後にマツバが思いの内を語る。

しかし、クロノは、人を小馬鹿にしたような、笑みを浮かべて聞いていた。

「……どいつもこいつも、知った風口を。戻ってこいだ、止めるだ、みんな悲しむだ。拳句、法律が『悪』を裁く。……ふざけんな!!」

みんなの思いを吹き飛ばすクロノの叫び。

「法律が悪を裁くなら、何でアカネやクリアスが捕まった時に、あいつらが居る!!悪を裁くなら、今すぐギンガ団達を裁いて見せる!!今すぐアカネを笑顔に見せる!!……法律はいつも、『権力』の味方だ!!弱い奴や、ポケモン達はいつも切り捨てられる!!」

クロノの言っている事は正論だった。

しかし、クリアスもそれに食らいつく。

「確かにそうかもしれませんが、ですが、法律が間違っているなら法律を正す努力をすれば……」

「なら、今苦しんでる奴らに『いつか法を正すから、今は黙って死ぬ』っていいのかお前は!!」

「違います!そのために、警察や秩序を守る人たちが居るんです!」

「そいつらが、『法律』という鎖に縛られて身動きが取れなくて、何人もの弱い奴が泣いてるんだろ!!……そんな使えない奴らじゃ、誰も、何も守れないんだよ。だから、誰かが法律を破ってでも、『悪』を消す必要が有るんだよ。分かってくれ……」

みんなを諭すクロノ。

自分が間違った道を歩いている事など、理解出来ていた。

だが、人を守る人間は『法律』という鎖で自由に動けない。

誰かが、『悪』と同じ土俵で『悪』を裁くしか、全ての『弱い者』を守れない。

その、『誰か』がクロノだけの話だった。

「……………主が、そこまでの覚悟で居たとは、思いませんでした。……………でしたら、私も自分の信じる『信念』で動きます。……………主、いえ！クロノ！私は貴方を、力づくで連れて行きます！！」

クリアスが、初めてクロノの意思に反した。

クロノ守る剣になると、言うてから初めての事だった。そして、クリアスが初めてクロノを名前で呼んだ。

「……………結局、こうなるのか。」

そして、全員がポケモンを出し、クロノを連れ戻そうとする。無論クロノがそれに応じる訳は無かった。

クロノも自分の『円卓の騎士』を出し、応戦する。

しかし、9対1の変則戦。

相手は並みのトレーナーではない。

全員が、ジムリーダー。

クリアスの並みのトレーナーではない。

「ガレス！ハガネールを止める！！」

「相手は一体ではないぞ！！マンムー、『吹雪』！！」

ミカンのハガネールにガレスが攻撃を加えようとするが、それをヤナギが止める。
連携が取れている。

アレスタンやゲライント、マーリンのムウマージは、ハヤトのピジヨット、ツクシのストライクによって下の援護に回れない。
ジオやパロミデス、ガラハットはイブキとアカネが押さえている。
ガレスとユーウィン、ルーカンをミカンとヤナギが。
そして、ガウエインとガラハットをクリアスが、それぞれ相手をしている。

指示が的確なポケモンと、指示がおぼつかないポケモン。
どちらが有利かなど一目瞭然だった。

どう、指示を出しても、誰かがそれをサポートする。
全員が一旦距離をおく。

クロノのポケモン達は、息も絶え絶えの状態であり、彼に勝利をもたらすには絶望的状况だった。

「くそ……！！サシの勝負なら何とかあったのに……！！
」

そう毒づいても現状が変わることは無かった。

「クロノ。いかに貴方が強くても、このメンバーを一人で相手をするのは不可能です。ポケモン達のために、諦めてください。」

クリアスの最後の説得。

しかし、クロノを守ろうと、ポケモン達は彼を隠すように集まる。

「…………お前ら、もう良い…………。」

クロノがそうポケモン達に言った瞬間。

シンオウ地方を襲う、地震とは違い地鳴り。

「少年！掴まれ！！」

上空からクロノを呼ぶ声。聞きなれたその、声の主の方を向くと、

「おっさん…………！！」

一度は敵として、クロノ達を裏切った男・星の姿が有った。

ビブラーバは進化しており、フライゴンにその姿を変えていた。

そして、クロノはその手に捕まり、ポケモン達をボールに戻した。

しかし、アレスタんとゲライントは自力で空を舞い、ついてくる。

「させるか！！ピジヨット、追え！！」

ハヤトがそう命令した時、星が一つの弾を投げる。

投げられた弾は、地面に着くと同時に、爆発し大量の煙を撒き散らす。

「煙幕……………追撃は無理ね。」

せき込み、イブキがそう言つと、すでにクロノ達は居なくなっていた。

上空を飛ぶクロノ達。

刹那、アレスタンの背中にロープの者が飛び乗る。

「すごい跳躍力だね、お宅。」

フライゴンの背中に乗る星が感心して彼に言う。

「貴様は？」

「ん？おっさんは星。しがない情報屋。……ひとまず、この場を離れるけど異存は？」

しかし、彼は何も答えなかった。

そして、星の後ろにいるクロノに目を向ける。

うつむいて良く顔が見えないが、彼が泣いているのが見えた。

星もその事には、気づいて、クロノに声をかけないでいた。

「……………落ち着ける場所に連れていけ。」

「はいはい。」

やる気がなさそうに星は答え、空を舞っていく……………。

出会いが彼を苦しめ、食い違う意見が互いを否定する。

それぞれが抱える答えが見える時、それがこの旅が終わる時だも有った……………。

第59話 「違える思い、舞う星は流星のごとく」 (後書き)

ガラガラのルーカンが『12匹目』という描写以前がありました、それは御幣です。

プラネットさんから、そう言った質問が有って再確認したところ、最後の一匹が居ました。この場で、謝罪をいたしたいと思います。

今まで本編に出れなかった本当の12体目・マーリンのムウマージについては、番外編で詳しく書きたいと思います。

第60話 「世界を揺るがす波紋く波紋広がり」

誰も来ない洞窟。

外に広がるのは一面銀世界。

しかし、クロノの顔には笑顔どころか、怒りの感情すらない。

否定された。しかし、それも覚悟の上だった。

だが、いざ否定されると、心が乱れる。

守りたい者に、全てを否定された。そして、自分も否定した。

自分は何のためにこんなことをしているんだろう？

ポケモン達を傷つけてまで、友の敵に回して俺は何がしたいんだろう？

『悪』を滅した先に、求める答えが有るのか？

そんな、思いがクロノの頭を駆けまわっている。

しかし、今更後戻りはできない。

自分は戻れない道を歩んでしまった。

もう、嘆かない。

次に戦う事になれば……『悪』として、排除する！！

覚悟を決めた、クロノは顔を上げる。

「……心の整理はついた青年？」

星がクロノに問うと、クロノは無言で星を殴りつける。

殴る音が洞窟に響き渡る。

口を切ったのであろう、星は血の混じった唾を吐き捨て座り直す。

「本当はこれだけじゃ済まないが、今回は助けられた。それに、あ

んたにはいろいろ聞きたい事がある。」

「分かってるよ。……おお〜痛え〜」

殴られた頬を撫で、撫でながら話す。

「つと。おっさんの話の前に、この人。ええ〜つとなんて呼べば良い?。」

対面の座るローブの者に星が聞く。

クロノと旅をして、2人が名前を名乗ったことは無かった。常に『お前』か『貴様』などで過こしていた。

「………シャインだ。」

ローブの者が初めて自分の名を名乗った。

「んじゃ、シャインさんよ。クロノに聞きたい事が有るんだろ?ムロシテイの事件の事?。」

「ムロシテイの事件?。」

クロノが眉をひそめる。

なぜいまさら、ムロの事件を知りたいのか?

「これは私の憶測だが、その事件が起きた原因の一端に心当たりがある。」

「心当たり……?。」

クロノが聞き返し、シャインは続けて話す。

「以前、私が居た世界で私は、世界を破壊しようとし、活動してきた。おそらく、その影響でこの世界にも間接的に影響が起きた。と、私は考えている。」

「ちょっと待て。いくらなんでも、話が飛びすぎじゃないか？なんでお前が居た世界で起きた事の余波がここに来るんだよ！」

クロノが混乱しシャインに怒鳴る。
星がそれを止め、洞窟の外に目を向ける。

「まゝ待ちなつて青年。今詳しく事情を知っている人が来てくれたみたいだからさ……。」

そして、洞窟の入り口の空間に亀裂が走る。
割れた空間から現れたポケモン・ダークライ。

「察しが良いな。流石は神の力の断片を持つ者。と言ったところか？」

「ダークライ、どう言うことだ？」

クロノがダークライに聞く。

ダークライは一瞬、シャインを見て、話をする。

「こいつの憶測は正論だ。こいつが世界そのものを消そうとした事による、こいつの世界がいろいろな世界に様々な影響を与えてしまった結果になってしまった。……その影響が強く出た時代が、この時代だ。無論、この世界の様々な時間にも影響は出ている。この

星がその被害者の一人だ。」

星を見て、ダークライは言う。

星は苦笑いを浮かべていた。

「どう言う事だ？」

「そう言うことか……。」

クロノは疑問を。シャインは自分が感じていたものに答えを見つけた

「しょうがない。おっさんの正体から明かしますか。……ホレ見えるか？」

自分の上着をまくり、胸を見せる。

彼の心臓の有る場所には、七色に輝く宝石のようなものが埋め込まれている。

宝石と体が完全に同化している。

「自前の心臓は、ウン千年前に無くしたよ。……俺は、この時代の人間じゃない。ウン千年前、ミチーナって町に隕石が落ちた。そこに、創生神・アルセウスが現れた。隕石に傷跡は酷く、神の力無くては元の環境に戻れないほどに傷ついていた。アルセウスは、人間を憐れんでミチーナを元に戻すために、『命の宝玉』を貸し与えた。一年後、命の宝玉を返す日、人間は宝玉を返す事を拒んだ。怒ったアルセウスは、ミチーナを滅ぼそうとした。しかし、パルキア、ディアルガ、ギラティナがそれを止めようとした。その時、ミチーナに居た住人は神々の戦いに巻き込まれ亡くなった者すらいる。俺もその時死んでいればよかった。しかし、俺はディアルガが時間を歪め、俺はその吸い込まれた。その時、俺は『命の宝玉』

の欠片を手にしていた。その時、俺の命は限界を迎えていた。そんな、俺を助けたのが現代のギンガ団だったわけだ。……もう十年も前の話だ。」

長い、星の過去。

過去から来た人間。

「しかし、これだけではない。物理的ではなく、心にも影響を及ぼしている。現に人間ごときにグラードン達が操られた居るのもその影響だ。」

ダークライが現状を明かす。

「しかし、その影響も大分小さくなってきている。それほど問題視する必要はない。」

「そ。今うち等が今するべき事。青年がこれからどうするかだね。……シャインはクロノについて行くんだろ？」

星が、シャインを見て言う。
無論シャインはうなずく。

「……このまま、『悪』を消していく。無論、最終目的はギンガ団、ロケット団だ。今、もっとも世界で凶悪な存在だ。こいつらがいる限り、みんなが落ち着いて過ごせない。」

そうクロノが言う。

このクロノの意見に誰も反論は無かった。

「なら、向かうはトバリだな。トバリのコスモエネルギー社がギン

「ガ団の本拠地だ。」

立ち上がる星が2人に言い聞かせる。

それに、連動に2人も立ちあがり、新たな目的地に足を進めた。その場に残ったダークライ。

腕を組み、彼らの背中を見送った。

そんなダークライの元に現れるスイクン。

「ダークライ。皆が貴方を読んでいます。御同行を。」

「致し方がないか……。」

そして、スイクンと共にダークライはその場から消える

第61話 「本拠地襲撃〜阻む壁〜」

何で貴方達は戦うの？

友達同士なのに……。

一緒に居たのに。

お互いにお互いを思っているのに……。

悲しい事なのに……。

私の目の前で、彼らは戦っていた。

茶色の髪の男の人と金髪の男の人。

泣いていた……。

でも、お互い自分の道を変える事をしなかった。

どっちも間違っていないと私は思う。

でも、何かが違う。

何が？どこが？分からない……。

私は彼らの戦う姿を見たくない……。

どうすれば止められるの？

眼前にはこの世界の創造主・アルセウス。

周りを囲むのは、神に仕える者達。

しかし、何人かのものが居ない。

そして、中心にはダーククライが腕を組み構える。

「……………弁解が有れば聞こう。悪夢を司る者よ。」

「……………」

アルセウスの問いに何も答えないダークライ。

「弁解もなしか。よかろう。……………異世界から来た者について、貴殿はいち早く気づいていた。いや、異世界の者だけではない。フリーザー達の事もそうだ。なぜ我らに何も話さず黙認した？」

「……………言ったところでこの場に居る全ての者が理解できるとは思わん。ゆえに我は何も言わぬ。」

「ほう……………」

この世界の創造主に反論する者は少ない。ましてや挑発する者など皆無。

今のダークライの言葉は、ここに居る全ての者を敵に回した事に等しい。

「何より、神といえど我々個々の活動には干渉してこなかった。何故今になって干渉する。」

逆にアルセウスに問うダークライ。

この世界が生まれ、数光年。彼らは今まで、各々の役割を独自の判断でこなしてきた。

神は今まで彼らの判断に対し、口を出した事は無かった。

しかし、ここ最近になり、神は彼らの活動に干渉するようになってきた。

「貴様！！神に対し無礼の数々！！どう言つ了見か！！」

ホウオウがダークライに食ってかかる。

「今は、この世界の命運を分かつ時。ダークライとてそれは承知のはず。しかし、ここ数年のキミの活動は少し目に余る。何が目的か、我々にだけでも話してくれないか？」

ルギアがダークライの聞く。

しかし、ダークライは何も答えなかった。

代わりに・・・

「時間の無駄だ。我は今まで通り、己の信じた道を行く。」

そして、仲間に向かって『ダークホール』を打ち放つ。

その際にダークライはこの空間からその姿を消す。

「……………貴殿が見る先に、この世界の未来が有るのか？」

混乱する、この空間を見ながらアルセウスはそうつぶやいた。

シンオウポケモン協会の会長室にケルアはいた。

これまで様々の報告書を受け取りそれに目を通していた。一部の者から、犯人の人物像を公開しようとの提案まで出ている現状。

しかし、ケルアはそれをよしてしていなかった。

犯人はクロノでという事など百も承知。だからこそ、説得で事を収めたかった。

しかし、クリアスからの報告で、それは簡単に潰えた。

「クロノ……。その先にお前が目指すのが有るのか？みんなが笑って居られる世界が？……だが、お前を知る人は笑えないぞ。」

椅子に凭れかかり、目じりを押さえケルアはそう口にした。

「この状況。あとはあの御仁に任せるしかないな……。」

窓の外を見て、『あの男』にケルアは思いを託した。

「で。どうするよ青年。」

トバリを一望できる場所で、どうするかを考える3人。

いくらコスモエネルギー社がギンガ団と分かっている、世間ではその事実が振れられている。

そんな中、正面突破と行えば世間をも敵に回すはめになる。
流石に一般人を全員相手にするのは得策ではない。

「前みたいに裏から侵入したいけど、どうにかならないかおっさん？」

「出来なくはないけど、奴さんが目立つから夜になってからの話だね。」

そう星は良い、シャインに目を向ける。

流石にローブ姿のまま町を歩けば目立つ。

そして、クロノを知る人間が町に居ればクロノも日中町を歩くのはやはり得策ではない。

こうして、彼らは夜を待つことになった。

「で、おっさんは何で釈放されたんだ。」

夜を待つ間、クロノは星にそんな事を聞いた。

「ん？ポケモン協会に連中に『協力する代わりに釈放しろ』って言うたらすんなり、ね。」

笑いながらクロノに言う星。

「……嘘だな。いや、釈放してもらう理由はそつだとしても、あんたが思っている真意は違うな。何が目的だ？」

クロノが星の嘘を指摘する。

「ん〜。そうね。さしずめ、『自分探しの旅』ってところかな？」
顎をさすりクロノに言う。

それを聞いていたシャインも、クロノと同じくあきれたようにため息をつく。

「……………そろそろ良い頃あいか。」

シャインが空を見ると、夜が更け込んでいた。
夜襲には良いころ合いだった。

「ほんじゃ、悪党退治と行きますか。」

立ち上がる3人。

そして、向かうは町の郊外の倉庫街。

そこに有る、コスモエネルギー社の倉庫に入る3人。
中には確かに様々な荷物が有った。

「お〜これこれ。……………っこいしょ。」

一つの荷物を動かす星。

そこには倉庫には有りえない、電子ロック式の扉が隠されるように壁に有った。

「万が一の、非常用緊急脱出口よ。ここからなら、アカギのいる最上階付近まで近づける。」

そして、電子ロックを解除する星。

しかし、エラーを告げる電子音。

「おろ？ ロックが書き換えられてるね。おっさんがここから来る事を見越してかな？」

「………退いている。」

シャインが星にそう告げ、扉に手を当てる。
そして、爆音が町全体に響く。

「急ぐぞ！」

「ゲホゲホ！ そうするなら、初めかつらそう言えよお宅！！」

シャインの後に続き星とクロノが駆ける。
よもや隠密活動は不可能な状況。

「どの道気づかれるなら、今気づられても変わらないか。」

そして、無表情の社員達がボールを片手にこちらに向かってくる。

「ホイホイ。お出でなすつた！ ……ここはおっさんが止めつから、お宅らは先行きな。アカギは最上階の社長室だ！ お急ぎなされ！」

そして、星もバンギラスを出し、社員達に抵抗していく。

そして、ビルを駆けていくクロノとシャイン。

途中に幾度となく社員達が攻めてきたが、彼らの敵では無かった。

「……おかしい。なんで幹部クラスの奴らが誰も出てこない。」

ふと疑問に思ったクロノ。

こちらが攻めてくるのが分かっているながら何の策も講じない彼らが不気味思えた。

「お前はどっ思う？」

後ろを走るシャインにクロノが問う。

「戦略的にみれば、後で大きな罫を仕掛けている。もしくは、すでにここを破棄した、と考えるのが妥当だ。しかし、後者は有えないな。……貴様も感じているのだろう？このビル内部から感じる力を。」

「ああ。おそらくおっさんも感じてるはずだ。……おそらく伝説ポケモンたちだろう。5……いや6体分か？」

このビル内から感じる、力。

伝説のポケモン達が持っている力だった。

(気のせいか……。なんだ、この不安定な力。あいつに、この世界の我に。いや、それより遥かに不安定だ)

クロノとは別に何か力を感じていたシャイン。

それはとても自分によく似ているが、とても不安定な力だった。

そして、最上階の社長室前にクロノ達は着いた。
ひとりで開く扉。
中には椅子に座るアカギが一人。

「下が騒がしいと思ったがやはりお前たちか。」

「ロケット団はどうした。」

クロノの質問にアカギは無表情で答える。

「さあな。知りたければ、私を捕らえて尋問でもしてみたらどうだ？」

「御所望ならそうしてやるよ！！ガレス！！」

クロノの指示で駆けるガレス。

燃える右足でアカギにけりかかるが、見えない壁がそれを阻む。

「何!？」

「どうした？私を捕まえるのでは無かったのか？」

立ち上がり、手でこちらを挑発する。

「ならばこれを耐えてみる。」

刹那、クロノはガレスを引かせる。

そして、放たれるシャインの『ダークバースト』
ピルの最上階は吹き飛び、爆煙が立ち込める。

「おい！あいつごと吹き飛ばしたんじゃ……………」

「御心配なく。怪我ひとつ無い。」

目を疑った。

爆煙が晴れた時、そこには無傷のアカギが立っていた。
外壁は壊れ、外が丸見えの社長室。

「……………ほう。」

シャインも少し驚きはしたが、それを表には出さなかった。
そして、アカギのポケナビが鳴り、アカギはそれに出る。

「……………そうか。では、次のフェイズに移る……………さて、
私もあまり暇ではない。これだ失礼させてもらおう。」

そして、アカギは残された、机と共に下へ姿を消していく。

「待ちやがれ！！」

走るクロノだが、間に合わずアカギを逃す結果になった。

しかし、シャインはアカギが居た場所にしゃがみ床を見ていた。

（一部無傷の場所が有る……………。つまり、奴の周りには何かしらの力場が発生していた、ということか。それもダークバーストを防ぐほど強固なものが……………しかし、そんなものがこの世界に有るのか？）

そう考えているシャイン。

そんな時、星が下から駆けあがりクロノ達と合流する。

「よう。無事だね諸君。アカギはどうした？つて、聞くだけ野暮か。」

アカギが居ないのをみて、星が一人で解釈し納得する。

「おっさん。なんか心当たりは有るか？」

「下に消えたなら、おそらく地下研究所だ。その非常用エレベーターで行けると思うぞ。」

クロノ達の後方に有る、エレベーターを指差し3人は地下に向かった。

着いた地下研究所はうす暗く、良く前が見えないほどだった。

「さつきより力が強く感じるな……。」

地下に着いてから、クロノ達はここで感じていた力をより強く感じ始めていた。

ゆっくり先に進んだ先にたどり着いた場所。

そこには、捕まったフリーザー達と、見たこともないポケモン。ユクシー達が、緑色の液体の中に入っている場所だった。

しかし、そのポットはまだ無数に有り、中には『ミュウツー』にしたポケモン達が漂っていた。

そして、なんな場所の奥に、クロノが追っていた人間が居た。

白衣に身を包んだ男・プルート。

「ん？上が騒がしいと思えば、貴様らか。懲りもせずまた来おつてからに。」

彼の手には、赤い結晶体が握られており、クロノ達を一笑しクロノを見る。

「さて、おっさん。いい加減俺に殴られる。んでもって、死ね。」

指を鳴らすクロノ。

よほどプルートが憎いのが2人のも伝わってきた。

「殴りたいならワシを殴ればいいじゃろ？ほれ？」

手を広げ、無抵抗を示すプルート。

しかし、シャインがクロノを止める。

「……やつと理解できたぞ。貴様の周りにもその『力場』があるな？それは何だ？」

シャインの指摘にプルートは笑いだす。

「良く気がついたの？そう、貴様の彼女は実に良い仕事をしてくれた。あの小娘の力はこの世界の『ルール』に干渉することができる。そして、ワシは完成させた。いかなる攻撃にも耐えうる防御壁をな。理論上不可能な高度を持つ壁。この壁の前ではいかなる攻撃も塵にも劣る。」

プルートが不気味な笑みを浮かべながら、クロノ達を笑う。

「つまり、貴様はアカネの力を使って、『絶対破られない壁』を作らせたのか！」

「ちと違うが、おおよそそんなもんじゃ。いかに異世界で猛威をふるったお前さんでも『この世界のルール』の前では御自慢の力技も無意味じゃ。」

怒り狂うクロノの質問に答え、プルートはシャインを指さし笑う。

「さて、ここまで来たんじゃ。それなりのもてなしをしようかの。」
「そういい、プルートがキーボードを操作すると、ポットが有る部屋から水がこぼれる音が無数にする。」

「ミュウツーは大変強力ポケモンじゃが、心という不完全なものが有るゆえに反逆した。だから、ワシは心の無いミュウツーを作った。それがこいつらじゃ。さしずめ『nomind』とでも呼ぶかの？」
「ミュウツーを簡易的にしたようなデザインの彼ら。ただ命令を聞くだけの兵隊。」

「では、ワシも行くかの。」

そして、奥の出口の向かって歩くプルート。

「クソ！待て！」

そんなクロノの行く手を遮るnomind達。

「クロノ、ここは任せる。貴様はあいつを追え。」

「すまねえ。」

シャインに礼を良い。

クロノと星はプルートを追った。

残されたシャイン。目の前のnomind達を前にして、少しイラつきを覚えていた。

「…………消える人形風情が！」

プルートを追う、クロノ達。

そして行きついた先に、待っていた外の世界。

外には様々な人が来ており、外には出られない。

ここまでは一本道だった。

どうやって逃げたか知らないが、見失ってしまった。

「クソ！！逃がした！！」

「安心な青年。行き先は分かっているから。」

イラつくクロノに星は朗報を告げた。

「他の幹部たちは知らないけど、プルートはファイトエリアに向かうみたいだよ。」

「ファイトエリア。．．．．バトルフロンティアが有る島か。」

目的を逃したが、新たな手掛かりを掴んだクロノ。
そして、トバリの夜が明け始めた．．．．。

第62話 「目指す場所」交差する場所へ」（前書き）

大変お待たせしました。
繋ぎなお話ですが

第62話 「目指す場所／交差する場所へ」

戦う意味。

ただ、選んで道が違う。

そう、それだけの事だった。難しくない。

国の偉い人みたいに、大義名分を翳して戦うわけでも、世界の英雄になりたいわけでもない。

彼は。彼らは、ただ、自分が守りたい人、助けたい人のために、茨の森を歩いているだけ。

でも、それが彼らを戦わせる切っ掛けになってしまった。

友達同士なのに。守りたい人同士なのに。

何かが違う。こんなの間違っている。

思いだせない。貴方達は私の何なの？

- 知りたい？ -

誰？

- 私は『私』。それ以上でもそれ以下でもない。 -

どうしてここに居るの？

- 貴方が無くしたものを一緒に探すため -

私は何を無くしたの？そもそも私は誰？

- それを含めて一緒に探すの -

でも、どうやって？

- 彼に連れて行ってもうの -

彼？

静まり返った病室。

そこには、アカネとクリアスしかいない。

椅子に腰かけ、口元を手で押さえ、主と崇めて、人と戦った事を思い出していた。

「ふう………。私は一体何をしているんでしょうね。主を救いたいと思い立ち上がった結果。主と戦い、守りたかった人を傷つけてしまった。……でも、これしか主を止める道がないのですね。」

小さな独り言を口にするクリアス。

クロノの見せた覚悟。

それはクリアスには良く理解できた。

しかし、そんなクロノを誰も望んでいない。だからこそ止める。たとえ、血を見る結果になろうとも。それがクリアスが選んだ道だった。

数日前。

トバリシティのコスモエネルギー社が何者かの襲撃を受け崩壊した。しかし、社長のアカギ氏は愚か重役の記者会見すら今まで無い。世界の影の悪を知っている者たちが見れば、全てが繋がった。ギンガ団達の隠れ蓑だった事が。そして、もう隠れ蓑が不要になった事が。

「……結局、我々はいつも後手に回るしかないんですね……」

やるせない気持ちを抑えクリアスは、ギンガ団達の動きを捕らえるまでここで待っていた。

こうしている間にも、クロノは、一歩でも多く、目的に近づいていると思うと、組織の不便さを感じずには居られなかった。

そんな時、病室のドアを叩く音が響き、ドアが開く。

「クリアスさん。クロノ様の向かった場所が分かりました。急いで支度を。」

入ってきたミヨの言葉を聞き、クリアスは立ち上がり、病室を出ようとした。

しかし、服を掴むアカネの手。有りえない。

今の彼女は歩く事は愚か、指を動かす事すらできない。

そんな彼女が、クリアスの服の裾を掴むなど出来るはずが無かった。しかし、今その有りあない事が目の前でおきていた。

だからこそ、クリアスは有る決断をした。
のちに、この決断が全ての終わりを告げる事になるとは、今この世界のどの人間も知るよしもなかった。

肌を切る風が、冬を告げる空。

彼ら。クロノ、星、シャインの3人が向かうは、ファイトエリア。
そこに、彼らが狙う目的の人物がいる。

「……………このペースで行けば、どれほどで着く。」

星の後ろに居るシャインが星に問う。

「焦りなさんな。急いで事は仕損じるって言うでしょ？後、3時間もすれば着くよ。でも、山に直接乗りこめないから、山の仲間では歩きだよ。」

「そうか。」

そう言い、シャインは再び口を閉じる。

星の少し後ろを、飛ぶクロノ。

クリアスと戦って以来、彼の目つきが変わった。

鋭く。何か獲物を狙った鷹のような目。

今の彼からは、『思いやり』やそれに準ずる感情を殺していた。

自分の覚悟が足りなかった。

腹をくくった。自分が甘かった。

優しさだけでは、守れない。

力の無い正義は無力。信念無き力は悪。

人を守れない力なら、俺は……。悪になり力を選ぶ！！
それが、今のクロノが新しく選んだ道だった。

「……………後3時間。次に出会ったら……………。待ってるギ
ンガ団。俺が、貴様らをぶっ潰す…………！」

クロノは前を見た。しかし、見ていた先は、少し違った。
蛇の道を突き進んだ先の自分。

そんなクロノを星とシャインはただ、静かに見ていた。

全ての終着点。

そこに過去の騎士達がそろった時。彼らの答えが見つかり、そして、
最後の決断を決める扉も開く。

それは、異界の者の旅が終わる時でも有った……………。

第63話 「交わる山々向かうべき場所」 (前書き)

お久しぶりです。これから、また投稿スタートします

第63話 「交わる山々向かうべき場所」

轟音響くヘリコプターの中。

数名は自前のポケモンでヘリの後ろをついてくる。

ヘリの中には、クリアス、ミヨ、ケルア。そして、今だ眠り続けるアカネがいる。

目指す先は、ファイトエリアにある活火山・ハードマウンテン。

ギンガ団の隠れ蓑だったコスモエネルギー社の生きていたパソコンのデータを調べて所、ここに向かったと思しき記録が残っていた。

クロノ達がこの情報を知っていれば、向かった可能性は十分に有るゆえに彼らはそこに向かった。

「……本当に彼女がクロノ様を救えるの？ 私にはいまだに信じられないのですが。」

クリアスの提案でアカネを連れていく事になった。

クロノを救う手助けになると信じて。

しかし、ミヨにはそれが信じられなかった。

喋れもしない。歩けもしない。涙も流せない。こんな人間がクロノを救える可能性など万に一つ。いや、億に一つ有りえない。限りなくゼロに近いそんな可能性をミヨは信じられなかった。

「私も確信が有るわけでは有りません。ですが、彼女にも今回の事件を見てもらう必要があると思います。もう、クロノを助けるとか、救うとかの問題ではなく、世界規模のこれまでの事件を收拾するために、我々は動くべきだと思います。」

膝の上で組んだ拳に力を入れるクリアス。

頭からクロノの言葉が離れなかった。

世界の理は確かに間違っている。

弱い者は強い者に虐げられる世界。クロノは、アカネやクリアス達が傷ついてそれを知った。だから、信念無き力・『悪』を消しさる事を誓い道を選んだ。

しかし、クリアスは今まで、クロノに依存してきた。クロノの歩く道をただついてきた。それではいけないかった。

共に歩み事と、付いて歩く事は別だった。クリアスもクロノと離れてようやく理解した。

自分で道を選ぶ事がいかに大事で、辛い事を。

ヘリコプターの中でパソコンに向かっていているプルート。

「で、アカギ。ワシがなんで、ハードマウンテンに向かわなきゃならんのだ？」

『網が完成しても、肝心の獲物を呼べなければ、網は意味をなさない。獲物をこの世界に引きずり出すには、獲物の同党の能力を持つ同族を使わなければならない。幹部たち全員ターゲットの捕獲に駆られている。ヒードランの持つ力は獲物を呼ぶために必要なエネルギーを持っている。頼むぞ。』

そして、パソコンの電源が切れる。

ため息をつき首を鳴らす。

「頭脳労働者のワシにフィールドワークは、不向きだというのに。まったく、人使いの荒い人間だ。」

そして、後ろに視線を送る。

後ろには無数のポット。中には心の無い兵隊が浮かんでいる。

「この、nomind達がいれば問題は無いはずじゃがな。」

プルトの乗るへりは轟音と鳴らしながら、目的地へ向けてただ、飛んで行った。

彼らが歩いていたのは、岩肌の見えた地面。

先頭を歩くのは星。その後ろをクロノ、シャインが歩く。

「おい、おっさん。まだ着かねえーのか。」

これまでの旅路でクロノは大きく変わった。良い意味でも悪い意味でも。

今まで纏っていた、『優しさ』は解れ、今纏っているのは『強さ』のみ。

ゆえに、彼は目的のためにはいかなる手段を選ばなかった。

友を、仲間を。アカネ達が安心して過ごせる世界になるなら。クロノは阿修羅にすらなれた。

「そう、急がないの。ほれ、見えた。あれがハードマウンテンだ。」

うつすらと見えるハードマウンテンが見えた。

そんな時だった。

彼らの頭上を飛ぶヘリコプター。

そのへりを見た瞬間。クロノは、今までにないほどの笑顔を見せた。

不適で、狂気に満ちて、心の底からの笑顔
へりに書かれたGのマーク。

「見つけたぞオオオオオオオオ！！キサマアアアアアアアアアア！！」
間違っていないかった。ここまでの道のりは間違っていないかった。

そして、アレスタンを出し、飛ぶクロノ。

「死ねええええええええ！！アレスタン！ヤレ！！」

そんな時、へりの後方ハッチが開き、中から一体の見た事のないポケモンが降下してくる。

「邪魔するなあああああああああ！！」

そして、アレスタンがnomindに襲いかかる。

しかし、アレスタンの鋭い爪はnomindに届くことなく、謎の力によって防がれる。

それがサイコネシスの応用だということはすぐに察しがついた。
そして、それよりも早くクロノは、ガレスを出していた。

nomindより高い位置から、踵を振り上げ、nomindの頭蓋にガレスの踵は吸い込まれていく。力を無くした兵隊は、重力に引き寄せられるまま、地面に吸い込まれていく。
巻き起こる土煙。

クロノも空から下りてきて、動かなくなったnomindを見る。

「なんだこいつ？」

「奴らが作りだしたポケモン的一种だ。頭を消し飛ばせば動かなくなるが、それ以外を潰してもすぐに再生する。」

クロノの問いにシャインが答える。

トバリのコスモエネルギー社の地下で苦戦した者をシャインが説明する。

「さて、ではあいつらを追いましょうか。」

星が声をかけ、ハードマウンテンに消えていったへりを追い、彼らは再び歩き出した

第64話 「思い出の歌／異界の者の旅の終わり」 (前書き)

まことに失礼ながら、トイレに起きた時、思いだして投稿しました。

第64話 「思い出の歌／異界の者の旅の終わり」

荒れた岩道を駆ける3人。

先刻、ギンガ団のへりを見つけ、そしてそいつらを追っていた。

「見つけた。・・・でも、誰も居ないみたいだな。」

その場にあったギンガ団のへり。しかしその中には誰も居ない状態だった。

「・・・後部に有るこの部分。貨物を運べるくらいの広さ。ここにさっきの奴らがいたのか。」

まるで、軍用ヘリのような空間の有るへり。しかし、そこに有るのは無数のからのポット。中には緑色の培養液が滴り、そこに残っていた。

「奴らは、もう火山内だ。我らも急ぐぞ。」

「言われるまでもない。・・・楽に死ぬると思うなよ・・・」

シャインに促され、クロノ達はハードマウンテン無いに足を進めた。岩肌の道のり。

しかし、人を阻むように立ちふさがる岩達は、人の手によってその役目を失っていた。

そして、無数の足跡。一つは人の。残りは同じ形。そう、先刻のn o m i n d 達の足跡。

「クロノもこの中に居るはずですよ。私たちも急ぎましょう。」

ハードマウンテンの入口。クロノ達と少し遅れてクリアス達もこの場にたどり着いていた。

「シジマさん、すみません。アカネさんを負ぶさってもらって。」

「構わん。これくらいの重さ位ならば軽いものだ。それより気になるのは表のギンガ団のヘリの方だ。奴らが来ている事も想定していたが、こうもうまく鉢合わせになるとはな。」

背中にアカネを背負い、シジマが話す。

それに対し、イブキが返す。

「想定範囲内だ。それより、今私たちがしなくちゃいけない事は、私たちの元弟子を止める事だ。」

そして、うなづくジムリーダー達。

そして、彼らもまた、クロノ達が進んだ道を辿った。

ハードマウンテン最深部。

溶岩の熱がこの部屋に充満し、ここに居る人を拒絶する。

そして、その部屋に居るのは、プルートと数体のnomind達。

「しかし、熱いのお……。こんな場所には2度と来たくないのお。……さて、神に眠らされたものはどこに居るかの？」

そして、部屋の中心の巨大な置き石に目を向ける。

「おお、これじゃ、これじゃ。」

巨大な置き石に手を当て、それを調べるプルートの。

一つの突起に手が当たり、目を向ける。そしてこぼれる笑み。その、突起を奥に押し込み数歩後ろに下がる。

巨大な置き石は、何かに反応したかのように地面に飲み込まれ、代わりに水晶が現れ、中には一体のポケモンが封じられていた。

「ふおつふおつふおつ。見つけたぞ。ヒードラン。やはり古文書の通り、持つ力が強すぎたために、その身を神に封じられたいたか。……さて、お前達。こいつを運び出せ。」

「それは、無理な話だ。貴様は今すぐ、ここで死ぬからな。」

部屋の入口から聞こえる声。振り向くプルートの。

そこにはクロノ、星、そして、トバリの地下で見たロープの者がいた。

「こんなとこまで、追ってくるとはご苦労な事だ。わしより先に大本を消せば早い話だろうに。」

挑発的な態度で話すプルートの。

クロノはそれに怒りの眼を向けて話す。

「貴様を追ったのは半分以上が私怨だ。貴様だけは何が有っても、俺の手で消す。」

顎をさすり、プルートは白衣の中から一枚のCDを取り出す。

「交渉しようではないか。……このCDの中には、あの少女を助ける方法が入っている。もし、ワシを見逃してくればこれを、貴様に譲ろう。ついでに、アカギの居場所も教えても構わんぞ？」

そんなプルートを見て、星が答える。

「あらま。随分と薄い信仰心なこと。それに、その中身が本当にアカネを救う方法とは限らないよね。」

「信じる信じないはそちらの自由じゃ、マーキュリーよ。それにワシはワシの研究ができればそれで良い。アカギはそれをさせてくれたから、協力したまでじゃ。で、どうする少年？」

クロノを見て言うプルート。

終始無言なクロノが口を開いた。しかし、放った言葉はプルートへの返答ではなかった。

「ゲライント！今だ！！」

部屋の上部。そこには、空とこの部屋を阻む物は無く、頭上には雲の浮かぶ空が見えていた。

そして、クロノの声と同時に、急降下するゲライント。

ブシュ！

部屋に響く肉が裂ける音。何が起きたか分からないプルートのクロノ元で羽ばたき、その場に漂うグライントの嘴にはプルートが持っていたCD。しかし、そのCDケースにはかつてのプルートの指と呼ばれていた部位が付いていた。

「ぎゃあああああ！！」

ようやく痛覚が痛みを理解し、プルートの表情が激痛で歪む。

「これで、貴様を生かしておく理由は無くなった。さあ、俺に殺される。」

一歩近づくクロノ。

「こ、この小僧！！貴様もワシの実験材料にしてやる！！nomind達！行け！！！」

手を押さえるプルートの命を受け、ようやく動き出したnomind達。

そして、ボールを構えるクロノ。

しかし、シャインがそれを止め、前に出る。

「こいつらは俺が相手をする。……こいつらを見ると、イラストく。」

そして、襲いかかるnomind達。

しかし、

「ポケモンにも劣る劣悪種風情が！！！」

シャインの両手から放たれる黒いエネルギー。
トバリの地下より少ない数のnomind達がシャインを止められ
るはずは無かった。

塵と消えるnomind。そして、シャインの放った攻撃は、ハ
ドマウンテンの火口の経常を変える。

唯一の戦力を失ったプルートに焦りが出てきた。

「ヒュー。やるね御宅。」

口笛を吹き、シャインの力に関心する星。

「……これで貴様の駒は無くなった。」

ゆっくり近づくクロノ。クロノが近づく度プルートも後ろに下がる。
そして、プルートの後ろは溶岩がたまる火口。十分な高さが有るた
め、溶岩の熱で人が焼ける事は無かったが、落ちればそんなことは
関係無かった。

「ま、待つて！ワシはアカギに頼まれてやったにすぎない！ワシは
悪くない！！ワシも本当はいやだったんだ！！あんな女の子を実験
するなんて！！だから……」

プルートが話終わる前にクロノ拳がプルートに顔面に入る。火口に
落ちないように襟を掴み、引き戻し星達の方に向け投げ捨てる。

「……他に命乞いは無いのか？」

冷たい。氷など比ではない。こんな熱いところに居るのにも関わら
ず、プルートの背中には冷や汗が溢れ出ていた。

「ワ、ワシを殺したらあの女の子は助か……」

襟を持ち上げ一発。

向け落ちる歯。殴ったクロノの拳にも数本刺さっている。腕を振り、刺さった歯を振り落とすクロノ。

「た、たしゆけて……」

呂律の回らなくなった言葉でクロノに助けを求めるプルート。

「アカネは何度貴様にその言葉を言った？貴様らに利用されたポケモン達は何度その言葉を思った！貴様は生きてちゃいけない存在なんだよ！！今すぐ死ね！！ここで死ね！！貴様が私利私欲で犠牲にした命全てに詫びろ！！！」

「人とは醜いな。」

クロノの叫びを聞き、シャインはそう口にしていた。星はそれを聞き逃さず、シャインに答える。

「そうねえ。少なからず、人は弱い生き物だね。一人だと何にも出れないし、かといって群れを作ればそれを嫌う。ほんと面倒な生き物だよ。」

まるで人ごとのように話す星。

「……貴様はなぜ、クロノについてきた？裏切った罪滅ぼしか？」

「それも有る。でも、本当は何でだろうね？青年についていけば何が分かる、そう思って付いてきた。おっさんが探してる答えが。」
星の付いてきた理由。実にあやふやなものだった。しかし、なぜか共感できるものを感じていた。

クロノに白衣の襟を掴まれ、溶岩の上に浮かぶプルート。すでに意識は無く、顔面は自信の血で満たされていた。

「これで、終わりだ。……あの世で詫びてる。」

手の力を緩め、プルートは溶岩に向かって降下していく。
しかし、そんなプルートを助ける影。

影は、プルートを抱え、入口付近に舞い降りる。

影の正体は一体のピジョット。

そして、入口にはクリアス達がいた。

「あらあら、もう来ちゃったの？」

相変わらずの口調で話す星。

そしてシャインと星はクロノの方に近づき、クリアス達と距離をとる。

「クリアス。そいつを渡せ。」

「出来かねます。この方は法で裁かせてもらいます。そして、貴方も。」

「渡せ。クリアスと言えど容赦はしないぞ？」

「渡せません。」

「最後だ、渡せ。」

「できません。」

目を閉じるクロノ。そして、腰の全てのボールを取り出し、ポケモン達を出す。

「クロノ。もう止める。アカネくんも泣いているぞ。」

ヤナギがそう話、シジマがアカネを下し、抱きかかえクロノに見せる。

「……………お前たちは何がしたいんだ？アカネをこんなところに連れてきて。俺を止めるための道具みたいに扱って。まるで脅迫だな。」

首をかしげ、クリアスに言うクロノ。

「違います！彼女にも今の貴方を見てもらうためにここにきていたただいだけですよ！」

「で？アカネが俺を見て、何が変わった？言ってみる。ギンガ団が壊滅したか？アカネが目を覚ましたか？」

確かに何も変わらなかった。クロノの現状をアカネに感じてても、

世界は何も変わらなかった。
寧ろクロノをさらに壊す結果になっていた。

「もう良い。お前らも消える……。ギンガ団もろとも。俺が、消してやるよ……。」

クロノが壊れた瞬間だった。クロノが『クロノ』を保てなくなった。彼に仇なすもの全てが悪。彼に敵対する者。抵抗する者。抗うもの。止めるもの。大切なもの。

全てが彼の敵。世界が、友が。彼が信じていたもの。

「クロノン……。」

「馬鹿ものが……。」

「クロノ君……。」

「これがあなたの目指したものの集大成かい？」

皆が目を背けたかった。クロノを止めたかった。しかし、クロノはすでにここにはいなかった。

彼らの知るクロノは居なかった。

それは、彼のポケモン達もそうだった。

彼はもう彼だはなかった。壊れてしまった。

しかし、彼らはクロノに着き従った。たとえクロノが壊れ、自分たちが離れてしまえば、それこそクロノは本当に一人になってしまう。自分たちが味わった孤独を、闇を。クロノに与えたくなかった。だから、ガレス達はここまでクロノに着いてきた。それは、これからも同じ事だった。自分たちがクロノを離れる事が有るとすれば、それは天命を全うした時。

「来いよ、クリアス……。殺りあおうぜ？」

「…………貴方はもう私たちの知るクロノではないのですね。……参ります！！」

「来いよ…………！！」

クロノとガレスが前に、クリアスはエンペルトとミュウツィを。

そしてミュウツィはシャインの方を向き、シャインも一歩前に出る。

「そろそろ、そのローブをとったらどうだ？居世界の我よ。」

この場にいた全ての人が耳を疑った。

そして、ローブを脱ぐシャイン。

現れた姿は、クリアスのミュウツィと瓜二つ。違うと言えば目つきや体色であろう。しかし、体色での見分けはよほど洞察力が無ければ不可能なレベルであった。

「あの時の借りを返してやる。来い！！」

「ふっ。無駄な事を…………！！」

そして、二体のミュウツィ、クロノのガレス、クリアスのエンペルトがぶつかり合う。

「さあ〜て。おっさんは、ジムリーダー達のお相手をしましょうかね。青年の今後を左右する大勝負。お宅らに邪魔はさせないよ。」

星がシジマ達に近づき、クロノのポケモン達もそれに連動し彼らの相手をする体性をとった。

「後からの出てきた部外者が邪魔をするな！」

シジマの一括で怯む様子を見せない星。

寧ろ目つきが変わった。

「分かつるのか？ 青年を追いこんだのは御宅らだつてことを。御宅らは青年を分かつているようで何も分かつちやいない。少し青年の気持を考える。それができないようなら、おっさんが。いや、俺が御宅らを青年のところに行かせない。」

「たとえば、そうだとしてもワシらはクロノの師としての責任が有る。だからクロノを止める！」

そして、ぶつかり合うジムリーダー達と、星、クロノのポケモン達譲れぬ思いが有るゆえに、生き物は戦う。時にそれが、友で有ろうとも。誇りに友も親友もない。

譲れる思いならば、生き物は戦わない。

エンペルトの鋼の翼とガレスの拳がぶつかる。

羽には罅が、拳には血が。

「ガレス殿！ 何故に今のクロノ殿に着き従う！？ もうそこには貴殿の君主は居ない！」

ガレスに問うエンペルト。

しかし、ガレスの答えには一変の迷いは無かった。

「たとえマスターがマスターで無くなったとしても、我々がマスターを見捨てる理由にはならない！！我々がマスターと別れる時！それは死の時のみだ！！」

水を蒸発させるガレスの炎。

互いに腕を掴み組み合い、止まる。

「我々は生きる希望すら無くしかけていた時、マスターは見捨てることなく我々を助けてくれた！どんな時でも我々を守ってくれた！だから我々は誓ったのだ！マスターの剣になる事を！！貴様には分かるまい！！我々がマスターを思う気持ちを！！」

そしてエンペルトをけり上げるガレス。

強かった。いや、普段も強い。しかし、今は何か違う強さを持っていた。

決意が違った。クロノを守る強さの度合いがけた外れに違った。

もう止めて。なんでみんなが戦わなくちゃいけないの？

みんな友達なんですよ？

私はただ、目を閉じ、耳を塞ぎ、この場所で起きている現実から逃げていた。

- どうしたの？なんで目を閉じるの？ -

私はこんなものを見たいわけじゃない！！こんなものを見たいわけじゃない！！

・そうやって何時も逃げてた。彼と出会ってからも。自分で何とかするとか言って、心のどこかで彼の助けを待ってた。彼は絶対来てくれるって・

違う違う違う違う!!!

・で、また逃げるの？自分のために彼らは友達同士で戦って、貴方が好きな人は、もう『彼』ではなくなりかけているのに。ずるい人・
私に何ができるのよ!!!私は何もできない!!!無力なの!!!誰も守れない!!!誰も助けられない!!!

・確かに貴方は非力よ。でも無力ではない。無力と非力は違うわ・
非力なんて、無力と一緒によ!!!

・違うわ。現に貴方は彼を助けてる。力は心から生まれる。貴方なら。貴方にしか、彼らを止める事は出来ないわ・

でも、どうやって……。

・答えは、貴方が見つけなさい。私ができる事はここまで。さあ、立ち上がって。・

私は、差し出された手を恐る恐る掴み、立ちあがった。

そして、目を開いて、『彼』を見た。

悲しそうな目。まるで泣いているような目。

友達に、崇めた人達に、誰も信じられなくなってしまっている。

そんな時、私は彼の放った一言を思いだした。

『この曲は俺が一番好きな曲なんだ』

分かった。私が彼を。彼らを止める方法。胸に手を当て、深く息を吸い私は歌った。私を中心に、私の周りの花が咲いていった。そして、思いだした。私の全てを！！

「どうしたあ？クリアス？もうおしまいか？」

倒れるエンペルト。そして、切り傷だらけの手足のガレス。

「くっ！・・・もう貴方はクロノでは無くなってしまったのですね・・・」

エンペルトに寄り添い、クロノを見るクリアス。

「お前がそうしたんだ。さあ、おしまいだ。」

そんな時だった。

聞きなれた女性の声が響く。

入口からするその声の主。

震える足、岩壁に捕まり必死に立ち上がる女性。

彼女が発する歌声。

洞窟へ響き渡るアカネの歌声。

その歌声は、皆の耳に響き、彼の心に深く響いた・・・

歌い終わり、彼女ーアカネはその場に倒れそうになるが、それをクロノが支える。

「アカネ・・・大丈夫か？」

「やっと、いつものクロノに戻った・・・。」

クロノの顔を見てアカネは涙を浮かべて、精一杯の笑顔を見せた。そして、アカネを支えるクロノは、誰もが知っているクロノに戻っていた。

「みんな・・・もう止めて。なんで、大切な人同士でこんな事しくちゃいけないの？なんで、誰もクロノと同じ物を見てあげないの？これじゃ、クロノは一人ぼっちだよ・・・。」

泣きそうな震える声でアカネはこの場に居る全ての人に訴えた。そして、クロノにも。

「クロノもだよ。なんで全部一人で、抱え込むの？辛いなら、悲しいなら、きついなら、みんなを頼ってよ。何も言ってくれなくちゃ、誰も分かんないよ・・・。なんで、クロノの言う、『みんな』にクロノ自身は居ないの？クロノも含んで『みんな』でしょ？」

眠りながら、アカネは誰よりもみんなを見ていた。

クリアス達は、クロノを戻す事ばかり考えクロノと歩こうとしなかった、クロノは自分以外の誰も巻き込まないようにし一人で、何も言わずに一人歩いた。

しかし、それは間違っていた。

他人を変えるには、自分が変わることから始めなくてはならない。どんなにつらくとも何も言わない事は強さではない。それは強情で

しかなかった。辛い時、辛さをわかつ為に友は居る。

「全く……。お譲ちゃんは女神か、聖女だね。」

頭を掻き耨り、星はいつもの口調で茶化す。

「……。あの女。何か特別な力でも有るのか。」

ミュウツーと戦っていたシャインも、アカネの歌声を聞き戦いの手を止めていた。

そして、『自分』を無くしかけていたクロノを、たった一つの歌声でそれを元に戻した。それが理解できなかった。

「いいや。彼女は何もしていない。これが人が持つ力の断片だ。たしかに、人は愚かしい生き物だ。しかし、良きパートナーに出会えた時、我々ポケモンは。いや、人とポケモンは新しい道を歩けると私は信じている。」

ポロポロの体を引きずりミュウツーはシャインに近づき話す。

「……。今のクロノならば、貴殿の得たい答えを教えてくださいと思つぞ。」

そして、シャインは何も言わずにクロノの元に歩いて行った。

「お前は、シャインのほうか？」

シャインの目を向け、クロノが問う。

シャインは小さくうなずき、クロノに解いた。

「クロノ、今一度聞きたい。人とポケモンは、なぜ生きている。我々は共に生きていけるのか。」

「……人間は愚かな生き物だ。俺がそうだったように、すごく不安定で、他の命を簡単に犠牲にする。でも、人が間違った道に進んだ時、ポケモン達がそれを正してくれる。人も同じだ。ポケモン達が間違ったら、人がそれを直す。……こうやって人とポケモンは今まで歩いてきたと思う。今だったら言える。人もポケモンも、手をつなげば一緒に歩いて行ける！」

あの時のクロノとは違う言葉。

ただ、『悪』を消す事だけを考えたクロノではない。そして、シャインはもう一つクロノに聞いた。

「では、もうひとつ聞こう。クロノ、貴様は闇の落ちかけた。だからこそ聞きたい。闇とはなんだ。」

「……闇は誰でも持っているものだ。闇に落ちた時、全部ふっきた気がした。すごく楽になれた。でも、闇の先には何も無い。辛さも、痛みも何もないかった。でも、それだけだった。……そして、分かったんだ。闇はもう一つの自分だっただけ。まるで太陽と月のようにどっちかが無くてもいけない。どっちかだけが居てもいけない。そして、両方の自分と向き合えた時、ようやく見えるものも有るってことが。」

闇も自分。

それがクロノの答えだった。

「そうか。……お前と旅ができた事、この世界に来た事も何かしらの運命だと思うぞ。」

「何言っただよ。」

シャインの言葉に疑問を抱くクロノ。
そして、その答えはすぐに出てきた。

シャインの近くの空間に突如として現れるゲート。
ダークライ達が出てきたものとは違うものである事は一目瞭然だった。

「どうやら、私の旅はここまでのようだ。……クロノ、貴様の事は生涯忘れる事はないだろ。」

「俺もだ……。またな、シャイン。」

最後にシャインの手を掴もうとするクロノ。しかし、あと少し。届かずクロノの手は虚空を掴んだ。

ゲートの中には入り、シャインは『この世界』から姿を消した。

ゲート内を移動するシャイン。

愚かと思っていた人間が、この旅を通して見解を返す事になった。
そんな時だった。

ゲート内に干渉する力。

「ん？このルート。私の世界とは違う……。。」

自分の世界とは違う世界の感じ。クロノが居た世界とどこことなく似ている物を感じていた。

そして、その奥における巨大な力の存在にも。

興味本位だった。そしてシャインはその世界に入って行った。

その世界には何もなかった。

星のきらめき、風の音、生き物の伊吹すら。

そう、何も無い空間。

まさしく無。

そして、シャインは力の主と対峙した。

「異界の者が何故ここに来た。」

「私の帰り道にこの世界が干渉してきてな。単なる興味本位だ。」

目の前にして、ようやくシャインは力の主の力量を知った。

自分と互角。そして、自分と対峙した物が味わうプレッシャーを自身を感じていた。

無論それは目の前の者も同じだった。

「まあいい。貴様らに言うておきたい事が有る。」

「・・・何だ？」

「クロノ達を今一度信じていてほしい。あいつはすごく不安定で、他人を第一に考える人間だ。私が知っている人間とは何かが違う。

ゆえに、まだ見限らないでほしい。」

「ほう・・・。人を嫌悪していた物の言葉とは思えないな・・・

・・・あの人間と出会って貴殿も何か変わったようだな・・・

良からう。我をはじめとした、この世界の神々を説得しておこう。」

「一応感謝しておこう。」

「さて、ここにあまり長居されると、他の者がうるさい。貴殿の帰り道をより確実にするため我も手を貸そう。」

そして、再び開くゲート。

シャインは再びゲートを潜ろうとした。

「……最後に聞きたい。貴様の名は。」

「アルセウスだ。太陽の名をもつ者よ。……貴公の旅儀に幸多からん事を。」

そして、シャインは真の意味でこの世界から姿を消した。

異世界が繋がった物語。

しかし、彼らの冒険の終焉はもうすぐそこまで迫っていた……。

第64話 「思い出の歌、異界の者の旅の終わり」 (後書き)

プラネットさんとのコラボ企画も今回で最後です。

ロープの者このシャインも自分の答えを見つけて、自分の世界に戻って行きました。

そして、クロノ達の旅もクライマックスに近づき、私もラストスパートをかけたいと思います。

第65話 「しばしの安息〜未来へ絶望〜」

まるで何かを告げるかのように彼は・シャインと名乗るミュウツィはこの世界から去って行った。

彼と旅をした時間。見た物。その全てに何か意味が有ったと、今のクロノには思えた。

ようやく、壊れた彼らに時計に歯車が動き出し、皆が皆の知る姿になった。

しかし、思いが通じ有っても、過去は消えない。

「……で、俺はどうすれば良い？俺は裁かれて当然の事をしてきたんだ。みんなも、俺を捕まえるために来たんだろ？」

アカネに手を貸し、クロノが皆に言う。

無論クリアス達はクロノを捕まえるためにここに来た。しかし、捕まえるより彼を止める事を優先していた。ゆえに、いざその時になつてしまつとどうしていいか分からなくなつてしまつていた。

「……ひとまず、協会までは、連行つて形をとれば良いと思う。クロノ君のやった事は全部か全部裁かれる対象では無いはずです。」

マツバがそうクロノに告げる。

「でも、クロノはみんなのために……」

「でも、俺はやってはいけない事をしたのも事実だ。元よりそのつもりで始めた事だ。」

アカネが助け舟を出そうとしたが、クロノがそれを拒んだ。

そんな時だった。

「いや、素晴らしい覚悟。我々の部下にも見習わせたいものです。」

小さな拍手と共に聞こえてくる声。

全員が声の主の方へ向く。

主は、火口の真上。クロノ達を見下す位置に居た。

そして、服装はブルートと同じギンガ団のものだった。

「サターン……!!」

星がその男の名を言う。

「おや？裏切り者のマーキュリーさんではございませんか。敵に投降したと思えば、今度はポケモン協会側に付きましたか。全く節操がないお方だ。」

手を肩ほどまで上げて首を振るサターン。

「さしずめブルートでも取り戻しに来たってところか？」

「いいえ。よもやブルートさんはギンガ、ロケット両方にとって必要な人物です。ほしければ差し上げますよ。……私がここに来た理由。それはヒードランです！」

そして、水晶の中で眠るヒードランに何本ものワイヤーが突き刺さり、持ち上がっていく。

「させん！ピジョット……！」

ハヤトがピジョットに妨害の命を下したが、それに比例し上空から下りてくる彼らの兵隊。
nomind達。その数はプルートが持ってきた数などの比ではなかった。

「くっ！みんな頼む！！」

クロノが自分のポケモン達に指示を出す。それに呼応し、ジムリーダー達も各人のポケモン達で応戦し始める。

しかし、並み異常に強いnomind達。彼らを払いのけ、サターンまでたどり着き、ヒードランを助ける力は今の彼らには無かった。それもそのはずだ。つい先刻まで、彼らは、味方同士で戦っていた。そんな満身創痍の彼らにはnomind達を退けるだけの力しか残されていなかった。

「では、皆さま。ご縁が有りましたらまたお会いしましょう。」

へりから降ろされたロープにつかまり、この場から去っていくサターンと吊るされるヒードラン。

「クソ！待ちやがれ！！」

そう叫ぶクロノ。しかし、その叫びはへりの轟音と、この場で戦う者たちの音でかき消されるだけだった。

どれほどこの場で戦ったのか。ようやく最後のnomindがその役目を終え、クロノ達はその場に腰を下ろした。

「……今はゆっくりさせてあげましょう。」

そして、そんなクロノをみんなは黙って眠らせた。

しかし、彼にはさほどの時間は無かった。

この旅の終わり。そして、新たな道を歩く時。彼は今以上の苦痛と決断を与えられる時が来る。

それは神が授けた試練か。それとも、彼自身の運命なのか。

第66話 「決戦前夜〜いざ行かん決戦の山へ〜」 (前書き)

残り何話か分かりませんが、本当に最終回は近いです。

第66話 「決戦前夜〜いざ行かん決戦の山へ〜」

スパアアン！！

シンオウポケモン協会の大会議室に広がる音。

クロノがケルアと出会って、最初にした事は、父と子の感動の再会ではなく、ケルアによるクロノへの鉄拳制裁だった。

「貴様……！貴様のこれまでの行いが、どれだけ愚かしい行動だったか分かっているのか！？」

ケルアの拳を食らい、倒れるクロノ。

口を切ったのか、唇の端から鮮血が流れ落ちる。

そして、立ち上がりケルアに向き合う。

「親父、何か勘違いしてないか？……俺は自分がやった事が裁かれるほどの事だつては認めたが、その行いが、全部間違いだった事、愚かしい事だつて想った事は無い。確かに俺はみんなを悲しませた。でも、弱い奴が何時も泣きを見ている世の中なのは間違いな
いと思っっている。」

そんな、クロノとケルアを見る一同。

「だけど、俺は俺を思ってくれている人の思いを考えないで、一人走った。みんなを笑顔にするって言って、逆にみんなを悲しませた事は代わりない。だけど、分かったんだ。俺はもう、一人で走ったりしない。一人で悩まない。俺も含んで『みんな』が笑えるように考える。その上で、法律をも変えて見せる！」

彼との旅をした事で、クロノは大きく変わった。いや、彼^{シャイン}だけでは
ない。この旅で出会った全てがクロノを変えた。
ケルアも父親として、それは喜ばしい事だったが、クロノが行った
事は裁かれなくてはいけない事だった。

「……強くなったなクロノ。……ギンガ団、ロケッ
ト団が捕まるまでお前の裁判は、延期だ。いいな？」

これがケルアの精一杯の親心だった。

そして、その言葉を聞いて、皆が笑顔になった。
クロノに近づく皆。

「みんな、ごめん。俺、もう一人でどこにも行かない。……ま
た、俺を……」

何かを言おうとするクロノの手を握るアカネとクリアス。

「分かってるよ。……何にも言わなくてもみんなの気持ちは変わ
らないよ？」

笑顔で話すアカネ。

泣きそうになるクロノ。しかし、今は涙をこらえた。

嬉しかった。こんな俺をみんなは、咎めることなく、また寄り添っ
てくれた。

手を、握ってくれた。それがとてもうれしかった。

「が、しかし。またこんな事が起こらんとも限らんし、またお前は
ワシらが鍛えてやる。」

顎をさすり、笑いながら話すシジマ。

「げ、マジツすか？」

嫌そうな顔をするクロノを見て、皆が声をあげて笑いだす。そんな、空間を壊すように慌てて会議室に入ってくる社員。

「失礼します！会長！奴らが、各地の町や遺跡などを襲撃を始めました！！」

「何！！」

一同の顔から笑みが消えた。

そして、会議室を出る一同。向かう先は、モニタールーム。そこで見た映像は驚愕としか言いようがなかった。

「なんだこれは……。」

モニターに映し出された映像。

そこに町は無くなり、廃墟と化していた。しかし、その共通点はハッキリしていた。全て、伝説のポケモンに関係にしていた。

セレビイが祭られている、アテノ村の森

ミュウが目撃された、オールドラン城と世界の始まりの木

グラードンが眠るフェン火山

レジスチル達のほこら

ホウホウを祭るエンジュシティ

ジラーチが眠る豊かな森、ファウンス

数えれば限りが無い。

「とうとう、表舞台に出てきたか！！狙いは伝説のポケモンか！」

歯を食いしばり、考えるクロノ。

「会長！我々も事態の收拾に向かいます！！」

ハヤトがケルアに話した時、モニタールームに響く声

「それは得策ではない。向かうならば、テンガン山に迎え。」

そして、部屋の隅から実体化するダーククライ。

「どう言つことだダーククライ？」

クロノの問いに淡々と答えるダーククライ。

「結論から言えば、同胞は我と、ラティアス、ラティオス、デオキ
シス、エンテイ。そして、世界を支える3本の柱以外全て奴らの手
に堕ちた。」

「なっ！！だつたらなおの事、急がなくちゃいけないだろ！！」

「だから待て。奴らの目的などおおよそ考えがつく。……奴ら
はテンガン山でこの世界の創生神を手中に収める事だ。同法は創生

神をこの世界に引きづり出すための、鍵にすぎない。逆を言えば、創生神さえ、奴らの手に落ちなければ問題は無い。」

「つまり、奴らが集まるテンガン山で叩くってわけか？」

「そうだ。完全な総力戦。最終決戦だ。ゆえに貴様らも各地の仲間を集める。早急にな。」

ダークライの提案にケルアはうなずき、各地方のジムリーダー、四天王、そしてチャンピオンを招集した。

「……集合場所は、テンガン山が一望できる町、ミチーナだ。我々も向かうぞ。」

地方に連絡を終えた、ケルアがこの場全ての物に言い、彼らもミチーナに向かった。

ミチーナ。

シンオウを代表する観光地として名高い町である。

そして、過去。アルセウスが荒れたこの地を豊かにし人々を助けたと、口伝が残っている。

そんなミチーナの一番きれいな湖。

クロノ達がここに到着し、数時間。ケルア達は最終決戦を前に入念な作戦会議をしていた。

そして、残りの者は各々好きな事をしていた。

そして、クロノはこの湖の足を運んだ。そこに、居たのは星だった。

「おっさん、何やってんだ？」

「……少年。おっさんが過去の時代から来たって話覚えてる？」

「ん？ああ。」

「……ここがおっさんの故郷なのよ。もつとも数千年も前の話な訳だけど……。」

無言のクロノ。そして、星は続けて話す。

「創生神・アルセウスがこの土地に隕石が落ちて、人が住めない土地になった時。自分の力の結晶・命の宝玉を貸し与えた。一年間。それが命の宝玉を貸してくれる期間だった。だけど、人は一年が過ぎて、宝玉を返す事を拒んだ。アルセウスはそれに怒り狂い、ミチーナはこんなにポロポロになっちまった。おっさんはその時にこの時代に飛ばされた。気が付いたら、知らない時代。知っている人は居なく、愛した人も、家族も居ない孤独の時代だったよ……。」

湖の横にそびえたつ、廃墟同然の神殿に目を向ける二人。

「……おっさんは何でギンガ団の仲間になったんだ？」

「……元の時代に帰るため。でも、青年。おっさんが青年の力になりたと、想わせるくらい、すごい人間だったからおっさんは、今、青年の隣に立ってるのよ？……元の時代に帰りたくないと言えばウソになる。でも、悪党になってまであいつらの前に戻っても、おっさんは胸張って笑えない。そう、思ってたね。この時代に来たのも、何か縁と思って頑張るさ……明日は頼むぜ

「クロノ。」

そう言い、星はクロノに背を向け神殿に向けて歩き出した。そして、星が初めてクロノを名前で呼んだ時だった。

夜が深ける頃。

各地方のジムリーダー達が次々にミチーナに終結してきた。この、事件を收拾するために。

「あの、すいません。」

どこに居ていいかわからないクロノに声をかける一人の女性。

「何か？」

「どこかでお会いした事有りませんでしたか？」

「ん？・・・いや、自分はここに来るのは初めてですから、他人の空似だと思いますが？」

そう言ったものの、クロノもこの女性とどこかで出会ったような気がしていた。

どこかで、確かに出会っていた。しかし、そのどこかが分からなかった。

「そう、ですか。すいません。変な事を言ってしまった。」

「シーナ！こっちに来て！！」

シーナと呼ばれる彼女が遠くに居る男性に呼ばれ、一礼しクロノの前からその姿を消してた。

「クロノ。ちよつと良い？」

シーナの後ろ姿を見ていた、クロノにアカネが声をかけてる。

「どうした？」

「ここじゃなんだから、外で……。」

そして2人は夜空の見える屋外に出た。

「……クロノは、ギンガ団達を捕まえたらどうするの？」

「そうだなあ……。とりあえず、裁きを受けてからだな。死刑は無いだろうけど、何かしらの裁きは有るだろうしなあ。」

緊張感の無いクロノの声。それがいつものクロノらしいと言えばクロノらしい。

「……私が寝てる間に、クロノくれたんでしょ？この指輪。」

左の中指にはめられたシルバーアクセサリーの指輪を見せるアカネ。クロノも同じ物を左手にはめていた。

「……寝ている間に、クロノが茨に森に入っていく夢を見たの。先は見えなくて、歩く旅に茨はクロノを傷つけていくの。」

無言で聞くクロノ。

「……………もう、あんの森の中に行かないで。一人で悩まないで。クロノの隣にはみんなが居るんだから。」

「約束する。俺はもう、一人でどこにも行かないから。」

固い約束を交わす2人。

それは永劫の約束だった。

月明かりがミチーナを照らす。

そんな月を見上げるダークライ。

そして彼に近づくラティオス。

「……………貴様の主の元に行かなくて良いのか？」

「そんな野暮なマネはしませんよ。……………それより、クロノが、彼の子孫に出会いました。」

「予想の範疇だ。それに、出会ったところで、何も変わりはない。所詮今の彼らは他人なのだから。」

「……………ルギアの力で平和な時代に彼を転生させたのに、この時代も彼を傷つける。この星はどれだけ残酷なのでしょう。」

「もしくはそれが彼の使命なのかもしれないな。」

「残酷ですね。」

過去の英雄を思つ彼ら。そして、彼らも明日に備え、決意を固めていった。

翌朝。

全ての地方のジムリーダー達が終結していた。

そして、その中にはシンオウのチャンピオンで有り、世界のポケモントレーナーの頂点に立つ女性・シロナの姿すらあった。

「この戦いは、よもやただのテロ事件ではない。世界すら脅かす大事件だ。諸君らの力を合わせこの事件に幕を閉じてもらいたい！」

ケルアの挨拶に、この場に居る全ての者が、気を引き締めた。

そして、この戦いが最後である事を理解していた。

・ 彼らは決戦の地・神の住まう山テンガン山に向けて舞った……

第67話 「近づく決戦」それぞれの思い」 (前書き)

なんか、今回のタイトルが『決戦前夜』が有ってた気がします。
しかし、後悔はしても、反省はしません(ダメじゃん)

第67話 「近づく決戦」それぞれの思い」

「クロノ。少し良いか？」

決戦の前の最後の準備をしているクロノをケルアが呼び出す。

その隣には、ダイゴ、ワタル、そして、シロナ。

各地方のチャンピオン達がこの場に居た。

「何だよ、オヤジ？」

そんな、メンツを見て軽く会釈するクロノ。

そんなクロノを見てケルアは話を続けた。

「クロノ。今回の作戦はただ、ギンガ団達を倒すだけでは無い。お前がテンガン山の頂上にたどり着く事も重要な事なのだ。」

「アルセウスの事か？それなら、ギンガ団の野郎を捕まえた後にでも……。」

「いや、何もお前がアルセウスと対話させる為だけではない。戦力バランスを考えでもこれが最善なのだ。」

ケルアの言葉の意味が理解できないクロノ。確かにクロノはダイゴを倒す程の実力者。しかし、だからと言ってクロノを頂上に上げる事との関係はなかった。頂上にはギンガ団、ロケット団を束ねる者もいる。実力者も相当の者として考えたい。ならば、頂上には世界最高のトレーナーシロナが行くべきが、最善だった。そんなクロノに答えをくれたのは、シロナだった。

「それは、アナタがこの中で一番可能性に満ちているからよ。」

「可能性？」

「私達は、確かに強いわ。でも、逆に私達以上に強い者が現れた時、私達の可能性が揺らぐ時なの。」

シロナに続き話すダイゴ。

「僕達は己の限界に近いのを本能的に察している。だから、先が見えない。無限の可能性が有る君が一番この中で強いんだよ。」

最後にワタルが話す。

「先が見えない事を恐怖と感じる者もいる。しかし、君はポケモン達とそれを乗り越えてここまで来た。君なら出来る。今までみたいになれば良いんだ。」

「そんな、今の君だからこそこれを手にする資格だあるのよ。」

そして、シロナからクロノに手渡される一つのバッチ。

マスターオブマスター

全てのトレーナーが目指す最終目標。数多の強敵と戦い、ポケモンと深い絆を結んだ者に与えられる名誉あるバッチ。そして、その称号は世界最高のトレーナーを倒したもののしか与えられない。

そのバッチをクロノに渡すシロナ。

しかし、クロノはそれを断った。

「作戦は分かりました。ですが、今はまだそのバッチを受け取るこ

とは出来ません。」

そして続けて話すクロノ。

「俺は確かに色々な可能性を持っているかもしれませんが、それ故に未熟でもありません。……俺がそれを受け取るその時まで、預かっていてくれませんか？」

シロナの手を少し押し返し、クロノはそう言った。

最強の称号は、本当の意味で自分が強くなってから『奪いに行く』と言う、クロノの意思だった。

「そう。……なら、貴方が私の前に来るまで、私が預かっておくわね。」

「はい。……では、自分はまだ、準備が有りますんで。」

最後に一礼し、クロノは再び決戦の準備を進める。

「とても芯がしっかりしている御子息ですね、会長。」

シロナが、去りゆくクロノの後ろ姿を見て、ケルアに言う。

「この分だと、お孫さんもクロノ君に似て、しっかりした子になりそうですね？」

「ま、孫!？」

思いもよらない言葉にむせ込むケルア。

そんな、ケルアを見て、3人も笑いだす。

「会長をおちよくるな。」

少し不機嫌そうな表情で言い返すケルア。

しかし、その心中には、クロノとアカネ。2人が幸せで有ってほしいと願う気持ちがあった。

「では、未来の娘さまと御子息のために、この戦いは負けられませんね。」

「うむ・・・！」

ワタルの皮肉を流し、ケルアは強くうなずいた。

決戦はすでに秒読みの段階だった……。この一戦が人と、ポケモンの未来を決める大きな分かれ道になっていた事は、この戦いに参加する全ての人が知っていた。

テンガン山山頂。そこは、この世界全てが見えるように錯覚するよ
うな風景だった。

まさしく、絶景。その言葉が世界一ふさわしかった。

しかし、この風景を壊す無数のポット。

中には、緑色の培養液と、奴らの手に堕ちた伝説のポケモン達が漂っていた。

そして、そのポットは、さらに巨大な機械を囲むように並んでいた。しかし、数個のポットは培養液のみで、要のポケモン達がいなかつ

た。

「これは、これで絶景だな、アカギ。」

「後一步で、世界をすべる力が手に入る。組織の馬鹿どもは、慎重すぎる。」

不吉な笑みを浮かべる、2人。
よもや、全ては彼らの計画通りと言わんばかりのように。

「ポケモン協会の連中が、ここに向かってきているようだ。一応は警備を敷いておいた。それに伴い、貴様の部下達もいじられてもらった。」

「構わん。貴様と私は平等な関係と言う、計約で行動を共にしている。それに、奴らを消耗させるのも、得策だ。」

そして、ポットの中央の機械から、強大なアンテナが展開し、天に伸びる。

神は何もしない。ただ、世界の成り行く様を黙して待つ。

そして、自分と話せるに足る存在が現れるのを今はただ待つだけだった。

神の体より出される、17枚のプレートが現れる。しかし、その中の、『炎』『水』『草』『雷』『竜』を司るプレートは先端が少し欠けていた。

それは、遠い過去に失われ、この世界に飛ばされた男と共に有った。

欠けたプレートの方は微弱だが、その力を弱め、同時に神の力をも弱めていた。

「全てが決まる時。我は何を思っているか……。人よ。その答えを見せてくれ。」

何も無い空間で神は一人今の思いを口にした。

第67話 「近づく決戦」それぞれの思い」(後書き)

さて、数稼ぎも済んだし、次からキシモクロノ達に負けられないように、頑張りここまで読んでくださった、読者様に後悔させない物にするために、全速前進！！強靱無敵最強(某社長風)！！なほどに頑張らせていただきます！！

第68話 「強大な敵へ倒れていく仲間達」 (前書き)

ついに始まった全面对決!!そして、立ちふさがる強敵達!!

第68話 「強大な敵へ倒れていく仲間達」

彼らは時を待っていた。

耳に当てたイヤホンに意識を集中させ、自分の役割が来るのを待っていた。

テンガン山の内部に突入するメンバーは、3か所から、突入する計画であった。

クロノ、アカネ、クリアス、星、ミヨの5人がその3チームの内の一つだった。

残り二つのチームには、シロナ、キョウ、ダイゴ、シバ、ミカン。最後にワタル、イブキ、タケシ、ミクリ、シジマ。

計15人で、テンガン山内部に侵入し、頂上を目指す。

しかし、本命はクロノがいるチームであり、その他チームは、あくまで囮でしかなかった。

無論、テンガン山に入らない、他のメンバー達はテンガン山内に居る敵を外におびき出し、内部に入るチームのサポートする重要な役割が有る。

「ふう……………」

深く息を吸い、そして吐く。そんな事をしないとクロノは落ち着かなかった。

「あの、クロノ様。作戦の前に、少し良いですか？」

そんなクロノにミヨが声をかける。

クロノもその質問に答える。

「ハクタイで、クロノ様は言ってくれましたよね。……落ち着いたら、私も含んで、みんなで旅をするって。それは今も変わりませんか？」

「何言ってるんだか。……当たり前だろ？ ついでにおっさんもどうだ？」

ミヨの質問に答え、そして星に話をふるクロノ。

「おつ。良いねえ。未来に向けて歩く若人と一緒に旅をするなんて。……まあ、マジな話するなら、それも悪くないかな。」

頭を掻きながら星。

「元の時代に帰りたいとは思わないのですか？」

そんな態度の星にクリアスが質問をする。

「ん〜。それも考えたんだけどね。今更、戻ってもね。おっさんはこの時代でいろいろやりすぎたからね。そのの清算はしなくちゃ。……それにおっさんが、この時代に来たのもなんかの縁と、思えるようになってきてね。いっそのこと、この時代に骨でも埋めようかなあ。」

そして、いつもの星らしい笑顔を浮かべ、みんなを見る。

それにつられ、皆笑顔になる。今度の旅も、にぎやかになりそうだ。その時。彼らのイヤホンにコールが鳴り、5人の笑顔が無くなる。それと同時に、彼らは茂みから立ち上がり、テンガン山の頂上に駆けっていく。

別の場所では、すでに別のチームの人たちが陽動作戦を執行し、思

いのほか、テンガン山内部の警備は手薄だった。

「ポケモン協会が襲撃してきたぞ！これより先には行かせるな！！」
ロケット団の団員がクロノ達に気づき、ポケモン達を出してくる。
団員の数は多い。加えて、nomind達も居る。

「チツ！行くぞ、ガレ・・・」

クロノがガレスを出そうとするがミヨがそれを止める。

「クロノ様は少しでも体力を温存しておいてください。・・・それに、この数をいちいち相手にしては、何時になっても頂上に行けません。だから、！」

「任せな！」

そして、星とミヨは、ゴウカザルとバンギラスを出し、それぞれに命を出す。

「バンギラス！ギガインパクト！！」

「ゴウカザルは、フレアドライブ！！」

2匹にポケモンが一直線に突進に一筋の道を紡ぎだす。そして、その道を駆ける、5人。
しかし、最後尾を走るミヨは、少し道幅が狭くなったとこれで、新たなポケモンを出し、新たな命を出した。

「ハッサム！！壁を壊して！！」

そして、ハッサムのバレットパンチで外壁が崩れ、ミヨとクロノ達を隔てる。

「ミヨ！何考えてんだ！」

振り向き、新たに出来た壁に向かって吠えるクロノ。

『壁を使って、逃げてもいつかは追いつかれます。ですから、私はここに残って、彼らを食い止めます。大丈夫です！必ず後を追います！』

「・・・行こう。青年。ここはあのお譲ちゃんの言っている事が正しい。今は屋上で奴らを止める事が先だ。」

「くっ！・・・先に行ってるから必ず、追って来い！！」

そして、先に進むクロノ達。

「・・・無茶な事したかな、私？」

眼前には無数の敵。

手持ちのポケモンは6体。

「貴様も逃げてれば、少しは生き残れてた物を。馬鹿な奴だ。」

獲物を追い詰めた顔をする団員達。

しかし、ミヨの顔は諦めていなかった。

「確かに無謀でしたね。ですが、タダで負けるほど私はお人よしでは有りませんよ！！行きますよ、ゴウカザル、ハッサム！！」

駆けるハッサムとゴウカザル。

それに呼応しnomind達と団員達のポケモン達も距離を詰める。。。

無謀な戦いだが、彼女にも守りたい物が有った。ゆえに、今この場に立っている。引けないがゆえに、彼を守る。

テングガン山内部に響く、轟音。それは、走っているクロノ達のもハツキリと聞こえていた。

ここまで来るのに、何体ものnomind達と戦ってきた。先陣を切っているのは、星のバンギラスとクリアスのエンペルト。最期をクロノが走る。そして、仲間のおかげで、ここまで、クロノのポケモン達は無傷でここまで来れた。

「.....妙だな。敵の数が急に少なくなってきた。」

バンギラスがnomind達を蹴散らしている時、ふと星はそんな事を口にした。

確かに上に行けば行くほど、手薄になってきている。nomindの数も圧倒的に少なくなってきた。それが帰って妙だった。

そして、ついに団員もnomindも居なくなった。

代わりに、2人の団員が立っていた。

「おや、まさかこのルートをマーキュリーさんが来るなんて。これも運命ですかね？」

「サターンに、マーズ……!!」

青い髪のギンガ団の男。ヒードランを連れていく時にその姿を見せた男。

もう一人は、赤い髪の女。

「あら、お人形のお譲ちゃんじゃない。」

アカネを見て、嬉しそうな顔をするマーズ。しかし、アカネの記憶にはマーズの存在は無かった。それもそのはずだった。アカネが眠っていた時に彼女にもてあそばれただけの関係だからだ。

「さて、ならこいつらのお相手は、おっさんがしようかね。」

「大丈夫なのか、おっさん。」

「……合図だから、走れ……。」

それだけ良い、星の目つきが変わる。

刹那

「バンギラス!!ヤれ!!」

星の合図と共に、地面を叩くバンギラス。そして、巻き起こる噴煙。視界ゼロの状態でもクロノ達は迷うことなく走った。己の役割を果たすために。

しかし、サターン達はそんなクロノ達を追おうとしなかった。

「……何で追わない?」

「追ったところで、結果は変わりませんから。まずは裏切り者を始末してから、ゆっくりと後を追いますよ。」

「へっ。言ってくれるねえ。……バンギラス!!」

そして、サターンに突進知るバンギラス。

しかし、サターンの前でバンギラスの動きが止まる。いや、止められたのだった。

「これが、nomind2。名をlegendmind!!」

バンギラスを止めているポケモン。姿形は、レジスチルだった。

しかし、何かが違っていた。

そして、バンギラスをいとも簡単に、吹き飛ばす。

星の真横まで飛ばされる、バンギラス。

「クソ! そういうことか……!」

何かを察した星。

「そう。nomind達はあくまで器。この計画の最終形態た伝説のポケモンの完全量産化! 何も、伝説ポケモン達をアルセウスをこの時空に引きづり出すための触媒にするためだけに集めていたわけだは有りません。伝説のポケモン達のデータをもとに、nomindの技術の応用で伝説のポケモン以上の性能を持ったポケモンを作り出し、それを戦力にする! これが、『カーディナル計画』の最終到達点!!」

何時になく興奮するサターン。

余裕の表情が無くなる星。

「流石にやばいかな……………」

頬をつたう冷や汗。それは星のバンギラスも同じだった。

「あら、私も忘れないで欲しいわ。」

そして、マーズもモンスターボールから、ポケモンを出す。無論 Legendmind シリーズのポケモン。

「おいおい……………。レジスチルの次はサンダーかよ……………」

雷を纏う羽のポケモン・サンダーの Legendmind。

「さて、我々2人を相手にどこまで持つでしょうね？」

不敵な笑みを浮かべるサターンとマーズ。
引きつった笑顔で、星は自分の全てのポケモンを出し、応戦をする
が、それも時間の問題だった。

冷気と水分で満たされた空間。テンガン山の中で彼らは戦っていた。
しかし、戦況は明らかだった。

「くっ……………！これほどの力を……………！」

倒れるキョウのポケモン達。いや、正確には氷漬けになっている。キョウの両足を氷漬けにされて、身動きが取れなくなっていた。キョウの前に立ちほだかるのは、ランス。そして、彼の扱うegg
end mindは、フリーザー、スイクン。

「どうです？伝説のポケモンすら凌駕する、彼らを。貴方がいかなる幻術を駆使しようとも、水と氷の幻術の前では無力。・・・さて、貴方ともう少し遊んでいたいのですが、先に行かれた者達を始末しなくてはいけないので、これにて幕引きとしましょう。」

そして、フリーザーとスイクンにすさまじいほどの冷気が集まってい
いく。

そして、その冷気をキョウに放つ！

「では、さようなら。」

ようやく、見えた光。

そこはまぎれもなく、テンガン山の頂上だった。

そして、クロノ達が目にしたのは、絶望だった。

「っ！！」

先に来た別のチームの人達が、たった二人の男に倒されていた。そして、その彼らの周りのは、ライコウ、ファイヤー、ルギア、ホウオウ、レックウザ居た。

「みなさん！！！」

思わず声を上げ、シロナやダイゴ達を呼ぶ。
彼らのポケモンも、よもやひん死以上の状態だった。

「……これが世界最強のトレーナーの力か。やはり、正義は力に着き従うものだな。そうとは思わないか？ クロノ・ウィールアス君」

入口でたたずむクロノに、アカギが声をかける。

「キミとて、世界の矛盾に怒り、闇にその身をゆだねた者だ。分かるだろ？ 彼らを見れば、分かるだろ。力なき正義は無力。そして、勝ったものが正義だ。つまり、今この場での正義は我々だ。」

「違う！！ お前達には正義に必要な信念が無い！ 信念が無い正義なんか誰も付き従わない！！」

アカギの理論にクロノは敵対した。
確かに、シロナさん達は彼らに負けた。負けた者が悪になるのは、人の歴史が物語っている。
しかし、

「確かにお前達が歴史上の正義かもしれない。だけど、俺たちはお前たちの正義を認めない！！」

「……話し合いで、解決できるならこうはならないか。良いだろ。キミの信念と我々の信念どちらが強いが、試してみよう。」

「いくぞ！ アカネ、ガレス！！」

「うん！」

そしてクロノはガレスを、アカネはビレッジを出し、自分がここに居る意味を、自分が信じた道を、確かめるため、この事件の首謀者と対峙した。

第68話 「強大な敵へ倒れていく仲間達」 (後書き)

敵は、伝説ポケモンのクローン!!世界最強のトレーナーですら、
かなわなかった敵に、クロノ達はどさするのか!?

待て次回!!

第69話 「神降臨〜狂った意思が〜」 (前書き)

ついにアルセウスが降臨!!そして、星とキョウは!?

第69話 「神降臨〜狂った意思が〜」

力の差は歴然だった。

もう、彼には立つ力も、ポケモン達に指示を出す気力すらなかった。

「意外と持ちましたね。ですが、もうこれまでです。」

星のバンギラスを踏みつけ、サターンが倒れる星に言い聞かせる。
この場に倒れる5体の星のポケモン達。彼の全力をもってしても、
legend mindを一体も倒す事は出来なかった。

「では、先刻の少年達を追いかけますよ、マーズ。」

「はい。本当はもう少し遊びたかったけど、良いわ。」

星に背を向け、クロノ達が向かった、方に歩いていく2人。

「……………させるかよ……………!」

最後の力を出し、星とバンギラスが立ち上がる。

「ほお。まだ立ち上がりますか。ですが、もう貴方に戦う力なんて残ってないでしょうに。」

たしかにそうだった。

今の星は立っているのがやっと。ポケモンに指示を出すなんて出来る状態では無い事など誰が見ても分かっていた。

「確かに……………もう、俺は戦えない。でもなあ……………お前らを道ず

れにするぐらいならできるぜ?」

そして、最後の力で、バンギラスは『地震』を起こし、この空間の出入り口を閉じ、さらに砂埃を部屋一面に巻き上げる。

「目くらまし?でも、こんなもの、私のサンダーでひと吹きよ!」

「!!!いけません!マーズ!!!今すぐサンダーをしまってください!!!」

「え?」

しかし、時はすでに遅かった。

「一緒に地獄にドライブと行こうぜえ!!!」

刹那、巻きあがった粉塵とサンダーの静電気が反応しこの空間は、爆煙に包まれた。

粉塵爆発。

星が最後にとつた起死回生の一手。自分の安否すら顧みない方法だった。

凍て着く冷気が、身動きのキョウに襲いかかる。
そして、

「そこで、永遠に寝ているがいい。・・・ん?」

蒸気が晴れた時、そこにキョウとポケモン達は居なかった。

有るのは、砕かれた氷の破片。

「往生際が悪いですね。ならばもう一度、氷漬けにして差し上げます。」

『見つけたぞ。貴様らが最強と謳う、そのポケモンモドキの弱点を！！』

何処より聞こえるキョウウの声。

「ふつ。負け惜しみを。・・・ならば見せてもらいましょうか、その弱点とやらを！！」

刹那。

フリーザーの周りを舞う、クロバット。

流石の素早さに加え、『影分身』も混ぜているため、その実体を捕らえる事は困難を極めた。

「ほお、流石に早いですが、速さだけでは私は負けませんよ。」

『百も承知。しかし、もうフリーザーもスイクンも終わりだ！！』

フリーザーに気を取られていたランスが、スイクンに目を向けた。スイクンは、ヘドロに代わった地面に足を取られ動けなくなっていた。

『弱点の一つ！こ奴らは、主の指示がなければ全くの無害！ゆえに自ら回避を行わない！！』

ヘドロから顔を出す、ベトベトン。ヘドロの正体は擬態したベトベ

トン。

『とどめだベトベトン！！電磁波！！』

そして放たれる、電磁波。

それを食らった、スイクンの姿が信じられない現象が起きた。灰とも炭ともつかない物質に代わり、その姿を無くした。

『弱点の二！強力な力ゆえに、元来の弱点に対しての抵抗がオリジナルより貧弱！！』

「まさか、こんなに早く気づかれるとは。」

そして、姿を現すキョウ。

しかし、その足は氷から抜け出すために火薬を使ったためか、凍傷と火傷のあとが残っていた。

「流石に、こちらが不利になってきましたね。ですが、私もロケット団幹部としての、プライドが有ります！！フリーザー！！」

ランスの指示に呼応し、フリーザーは自壊しながらも、この空間全てを凍らせていく。そのスピードは、早く。逃げる事は困難だった。

「さあ！！私と覚めない眠りに入りましょう！！四天王キョウ！！」

そして、この空間は溶けない氷の間に代わった

宙を舞うレックウザ。
その口にはガレスが、食べられまいとし必死に上顎と下顎を押さえ
ている。

「パロミデス！アレスタン！ガレスを援護しろ！！」

レックウザの元に舞う、アレスタン。パロミデスは大地を駆け、そ
して天に伸びる柱を上り宙を舞い、そして、アレスタンを踏み台に
し、レックウザの頭に乗る。

振り上げた腕を、レックウザの頭に力強く振り下ろす。

「『ドラゴンクロー』！！」

本来のポケモンでは有りえない現象がこのレックウザに起こる。
力の無くなったレックウザの顎。その顎から脱出するガレスをアレ
スタンが宙で拾う。

「一つめ！！」

ライコウの鋭利な爪を必死に太い骨で防ぐルーカン。
タイプ相性で電撃は効かないが、力比べはライコウに比が有った。

「ジオ！頼む！！」

ライコウを横からなぎ倒すジオ。そして、そのライコウを鷲掴みに
そのまま地面に投げつける。

「やっちまえ！『地震』！！」

そしてこのライコウもまた、レックウザのように自壊していった。

「二つ目!!!」

そんなクロノに襲いかかるファイヤー。

しかし、それをガレスが許すはずがなかった。

アレスタンの加速と、ガレスの脚力の合体。

そこから、繰り出されるブレイズキックが、ファイヤーの背中にクリンヒットし地面に向かって急降下していく。その下にはジオが上を見上げ、腕を構えていた。

「お前達！軸をずらすなよ!!!」

真上から落ちてくるファイヤー。真下からはジオの拳。上からはガレスの蹴りが、襲いかかる。

まさに、豪と柔の合体。

そして、ファイヤーその姿を消していく。

「ラスト!!!」

彼らは強くなっていた。自分の黒い想いを知ったクロノ。そんなクロノをも信じ抜いた彼ら^{ポケモン}もまた、強くなっていた。

クロノが3体を引きつけていたころ。

アカネとクリアスは、ルギアとホウオウを相手にしていた。

ルギアの猛攻をアカネのビレッジはかわし、その距離を縮めていった。

「ビレッジ！『辻斬り』！！」

下方からルギアの頭部に目掛け、ビレッジが飛ぶ。

そして、葉の刃がルギアを後方に吹き飛ばす。しかし、宙に飛んだビレッジは無防備だった。

そこに炎を吹き出すハウオウ。

しかし、その炎を消す巨大な水柱。

中からは、クリアスのエンペルトが。

「アカネさん！今です！」

「うん！ビレッジ！！」

互いに宙を舞うエンペルトの頭を踏み台にし、ビレッジはハウオウとの距離を詰め、その頬に強力な一撃を繰り出す。これによってルギアとハウオウが同じ場所に倒れる。

「ビレッジ！！」

「エンペルト！！」

地面に足をつける2匹のポケモン。そこから放たれる強力な一撃。

「ハードプラント！！」

「ハイドロカノン！！」

巨大な植物のツルと、滝をも押し返すほどの激流が、2匹の伝説を模した者を襲う。

そして、彼らもまた、自壊していった。

乾いた拍手を奏でるアカギとサカキ。

「お見事。君たちこそ世界最強のトレーナーだ。しかし、惜しいな。それほどの力が有れば世界すらも自分の物に出来ようというのに。心が幼いがゆえに、大局見れない訳か。」

敵意を向け、クロノは答える。

「俺たちは、別に世界をどうにかしたいわけじゃない。人とポケモンが一緒に過ごせる世界を。みんなが笑える世界にしたいだけだ！」

「……キミはそのポケモンが怖くないのか？この世界が出来た理由を知らながらポケモンに恐れを抱かないのか？」

アカギの質問に耳を傾けるクロノ。

そしてアカギはそれを淡々と話していく。

「この、世界はポケモンの神・アルセウスによって作られ、その同胞達の手によって制御されてきた。人間を監視するために。我々人間は、ポケモン達に監視され生きているにすぎない。現にキミは、この伝説のポケモンに目をつけられ、ここまで来た。こいつらに目をつけられなければ、キミは平穩の中で暮らしていた。」

何も答えないクロノ

「そう。我々はポケモンに飼われている家畜にすぎない。世界を共に作るならば、なぜアルセウスは我々の前に姿を現さない？それは、アルセウスの気まぐれで人間の生き死にが決まっているからだ。アルセウスに反逆したものは死を。我々は、人間の真の独立のためにアルセウスを倒す。」

両手を広げて話すアカギ。

そんな、アカギにアカネが答えた。

「なんで、手を取り合って歩こうとしないの。なんでアルセウスが人の代わりに世界を守っていと考えられないの。」

「それは詭弁だ。アルセウスとて生き物。いつかは人を殺すかもしれない。そうなっては遅いのだよ。」

言葉を無くす3人。

その時サカキが。

「大義名分を掲げても、所詮は貴様は弱者だ。……真の勝者は俺一人だ。」

アカギが、その状況を理解する前に、引き金が引かれた。乾いた音がテンガン山の頂上に響く。

「ふっはっはっはっは……！！御苦労だったなアカギ！貴様の計画は頂いた！」

その惨劇を目のあたりに3人。

「貴様！そいつは仲間じゃなかつのか！？」

「仲間？ふつ。こいつは我々ロケット団が利用していたにすぎない。アルセウスを殺すだと？世界を作るほどの力を持ったポケモンを見す見す殺すなど、バカバカしい。強力な力は使ってこそ意味が有るのだよ！！」

動こうとしたクロノの足元に向けて打たれる弾丸。

「私は子供と言えど、殺す事に何の躊躇もない。生きていたいなら、動かない事だ。」

そして、ポットの並ぶ機器の前のコンソールに手を置き、操作を始める。

「少々、パワー不足だが可能だろ。いざとなれば、legend達を代わりにすればいい。」

そして、天に伸びる巨大なアンテナが、暗雲を呼び寄せ、神の住まう空間への扉を開き始める。
しかし、

「やらせはしません！！」

空から舞い降りる。残りの伝説ポケモン達。

そして、サカキの操る機器を破壊しようとするが、

「来たか。しかし！！」

サカキは懐から赤い結晶を彼らに向ける。

赤い結晶は、不気味な光を放つ。

「それは！『赤い鎖』！？」

「そうだ！貴様ら伝説のポケモンを封じる唯一無二の！古代の人類が作りだした抑止力だ！！」

力を失い、彼らは地面に倒れ込む。

「ラティオス！ダークライ！」

「くっ……。迂闊だった。……ユクシー達が捕まった時点で気づいていれば……！」

立とうとするが力が入らないダークライ。

「よし！全ての伝説ポケモンがそろった！これで、神を呼べる！！」

天に開いた巨大な空間。

そこから現れるポケモン。

神々しい輪を背負い、全てを見透かすような目。

「こ、これがアルセウス……」

巨大な神の姿を見上げるクロノ。

この世に呼ばれた神。

神の出す答えが、この世界をどう変えるのか。全てはこの瞬間に・・・。

第69話 「神降臨〜狂った意思が〜」（後書き）

今回は次回予告風に

彼らの旅は終わった。いや、終わりは次の始まり。

彼らの胸に、宿る新たな想い。人とポケモンが新たに歩んだ世界へ
彼らは歩き出した。

次回・ポケットモンスター〜白と黒の想い〜最終回

「白と黒の想い〜笑い合う世界へ〜」

最終話 「白と黒の想い〜笑い合う世界へ」 (前書き)

これまでの御愛読ありがとうございました。

最終話 「白と黒の想い〜笑い合う世界へ〜」

神々しい輪を背負い、全てを浄化せんばかりの白き体色、世界を見透かす眼。

「こ、これがアルセウス……………」

「綺麗……………」

その神々しい姿に言葉を無くすクロノ達。
しかし、サカキは違った。

「ふっふっふっ……………はっはっはっはっはっはっ！ついに引きずり出したぞ！創世神・アルセウス！さあ、我が僕しんせになれ！」

そして、翳す赤い宝石『赤い鎖』。
しかし

「愚かな人の子よ……………。そのような不完全な『赤い鎖』では、我を捉える事など不可能だ。」

赤い鎖から放たれる不気味な光をもとめないアルセウス。
だが、サカキの表情は余裕だった。

「流石に、小さな原石では神を捉える事は出来ないか。だが、人知は神を超える！アルセウス！貴様を捉えるのは、貴様の同胞だ！」

「!?!?」

コンソールを操作するサカキ。
すると、伝説のポケモン達の入っているポットから更にアンテナが
迫り出し、アルセウスに向けられる。

「さあ！ 跪け！ 我が軍門に下れ！」

更に、『赤い鎖』を機械の中に入れる。

すると、中心アンテナからは、『赤い鎖』のような光が。

ポケモン達の入ったポットからは、そのポケモンを象徴すり色が放
たれる。

「ぐっ！ これは……！！」

膝を折るアルセウス。

しかし、影響を受けているのはアルセウスだけではなかった。

その影響は、この場にいるクロノ達もだった。

「く、そつた……れ！」

「力が……入らない」

「な、んだ……これは」

地面に這い蹲るクロノ達。無論彼らのポケモン達も例外ではなかつ
た。

しかし、サカキだけは平気だった。

「ほう。まさか人体にも影響があるとは。これは思わぬ結果が見れ
た。」

クロノ達を見て語るサカキ。

そして、アルセウスに目を向け、一つのボールを取り出す。

「止め……ろ！」

力の入らない体で這いずりクロノはサカキを止めようとする。

「見上げた根性だが、それだけでは、私は止められないぞ？」

そして、ボールを構えるサカキ。

今のクロノ達はそれを見ているしかなかった。

「止めるおおお！」

精一杯の声で叫ぶクロノ。

無力だった。何も出来なかった。

だが……。

「諦めんな！クロノ！！」

彼の仲間がここに来た。過去から来た男。

少し胡散臭く、無精髭を生やし、礼節とは無縁な彼が

彼の名は

「星……さん」

クロノが初めて星を敬語で呼んだ。

ボロボロな服で、左腕が無くなり荒い応急処置で止血していた。

彼の胸は、アルセウスの放つ光が輝きが。今の星は赤い鎖の力を受

けずに居た。

それは、彼の胸に神の力の断片があるから出来る技。
そして、手にした拳銃でサカキの手にあるボールを射抜く。

「ざまあ……見る……」

膝を付く星。

神の力を使うと言うことは、体力を爆発的に使うこと。
今の星の体力ではこれが精一杯の行動だった。

「くっ！死に損ないが、最後の足掻きを！」

右手を押さえ、星に殺意の眼差しを向けるサカキ。

アルセウスは掴まらなかったが、今のクロノ達には何も出来ない事には変わりは無かった。

「まあ、良い。ここで手に入らなければ、アジトに連れて帰えれば良い。所詮貴様らの頑張りも、無駄なあがきにすぎない。」

倒れるクロノ達を見下すサカキ。

「ここ……まで来て。俺には……何にも出来ないのかよ……」

唇を強くかみしめるクロノ。

今の彼に出来る事は、ただアルセウスがサカキに捕まるのを見てい
るしかできない。
そんな時だった。

- 諦めるな。貴公は円卓の騎士の長なのだぞ！ -

頭に響き声。その声を知っていた。だが、どこで聞いたかは知らなかった。いや、この時代のクロノは知らないはずの声だった。

- 周りを見る！貴様に出会い変わった者たちの必死に抗おうとする姿を！ -

そして、周りに目を向けるクロノ。

そこには、こんな状況でも諦めることなく、今の状況を打開しようと、必死に抗おうとする仲間の姿が有った。

「みんな……な。」

- さあ！我らの剣を取れ！そして切り裂け！貴公が信じる道を塞ぐうとする者を！ -

「ああ！……エンテイ！あの剣を！あの時、俺に見せた剣をくれ！」

「ああ！！……受け取れ円卓の長よ！！」

クロノの叫びに呼応し、エンテイはスズの塔で見せたあの剣をクロノの手元に出した。

その剣をクロノは手にし、立ち上がる。

不思議だった。赤い鎖の力で、全身の力が抜けていたのに。この剣を手にしたとたん、力がみなぎってきた。

そしてサカキに向け、駆けるクロノ。

振り上げたその剣を、目の前の悪に対し振り下ろす。

しかし、そんなクロノにサカキは拳銃を向け引き金に指を駆ける。が、引き金は引けなかった。否、クロノが引かせなかったのだ。

クロノのみに与えられた力。それは、『相手の心を変える力』。
そう、サカキの『引き金を引く』と言う想いを『引き金を引かない』
という正反対の想いに変えた。

「でやあああああああ！！」

振り下ろされた剣。

それが、切った物は

黒い煙を上げ、あちこちで火花を散らす機械。

そして、二つに分断された『赤い鎖』

制御盤を失った装置は、その力を失い、アルセウスはその力を取り
戻した。

それは、囚われていたポケモン達も例外ではなかった。

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

剣を制御盤から引き抜き、呼吸を整えるクロノ。

クロノの横で倒れるサカキ。

なぜ、このガキが自分を切る瞬間、その剣の軌道をズラしたのが分からなかった。

サカキの疑問を知ってか知らずかクロノは、口を開いた。

「……たとえば、相手が悪でも俺はもう、この手で無意味に人を傷つけない。いや、傷つけない。この手は、誰かを殴り、倒すための手じゃない。誰かを守り、友と手をつなぐための手なんだ。」

手にした剣を落とすクロノ。剣は金属音を放ち、石畳の地面に落ちる。

「あまいな小僧。そんな甘い考えでは、いつか世界の理不尽に食い殺されるぞ。」

立ち上がるサカキ。

「彼は、そんな理不尽すら消し飛ばして見せるわ。」

右腕を押さえシロナがサカキに告げる。

周りにはボロボロだが、ジムリーダー達がいた。

何かを察したサカキは、両手を上げた。

こうして、ジムリーダー連合とギンガ、ロケット団連合の戦いはジムリーダー側の勝利で幕を閉じた。
しかし、ジムリーダー側も無傷では無かった。死傷者も居た。キョウもその中の一人だった。

氷に閉ざされた世界。決して溶ける事のない世界に彼は閉じ込められた。

そんな、惨劇を目の前にし、娘のアンズは泣き崩れた。

「父……上……！私は……父上を……誇りに思います！！」

悲しみにくれないながらも、アンズはキョウの雄姿をその目に刻んだ。

残党の討伐も終え、ようやくテンガン山は本来の静けさを取り戻した。

そして、その頂上には、3人のチャンピオンとクロノ達5人。

そして、世界を纏める33のポケモン達がいた。

「こうして、前にすると、やはり似ているな。転生の騎士の長よ。いや、クロノと呼んだ方がよいか。」

アルセウスがクロノを前にし、言葉を発する。

「アルセウス。初めに聞きたい。貴方は俺達人間をどう感じている？神だのそんな肩書なしで、この世界に生きる『アルセウス』とし

て答えてくれ。」

クロノの問いを聞き、アルセウスは夕闇の空を見る。

「……この世界に『完全』は存在しない。私も『完全』では無い。時に揺らぎ、時に疑心に、時に迷い、そして怒りに支配される事もある。……人も同じだ。揺らぎ、迷う時もある。まるで空のように、常に移り変わる存在。しかし、だからこそ美しく思える時もある。私が人を思う感情は、『空』を見る時と同じだ。」

そして、空に輝く一番星。それにつられ、星達はその姿を現す。やがて、満月が顔を出す。

「空、か。なら、ポケモンと人の間に壁なんて無いな。なんてったって同じ『空』なんだしな。」

手を広げクロノはアルセウスに言った。

「ポケモンにも、人にも、同じ心が有る。そう。心はすごく不安定で、まるで空みたい毎日変わっていく。時にうざいくらいの土砂降りになる時だって有る。でもその後には絶対に虹がかかる！必ず青空が見える！」

クロノを見るアルセウス。そして、クロノは続けた。

「俺も、アカネ達が傷ついて知ったよ。人は簡単に『黒く』なっちゃまう。でも、それも自分の一部なんだ。白い自分と黒い自分。白と黒の想い。その両方が合わさって、俺達なんだ！！……。時に間違った道を歩むかもしれない。ポケモン達を傷つけるかもしれない。……考えたんだ。一あいつ（異界の住人）に出会ってから

ずっと。そいつに聞かれたよ。『人とポケモンは共存できるか』って。……アルセウス。俺考えたんだ。アイツに言った言葉だけ。人が間違った道を歩いた時はポケモンが。ポケモンが間違えた道を歩いた時は人がそれを正す。一緒に手を握り、これからも一緒に歩いてくれ!」

手を差し出すクロノ。

互いに歩く道。それがここに居る人間達に答えだった。

「………同胞達よ。これからは、己が信じた道を歩きなさい。各々が信じた道。彼らが己の道を選んだように、皆も己の道を選びなさい。この世界に生きる一つの『命』として。」

全員に言い聞かせるアルセウス。

「クロノよ。今一度、我らも人と生きてみよう。もう、この世界を調整するポケモンとしてではなく、貴殿らと同じこの世界に生きる『命』として、人と歩いてみよう。」

「それじゃ!」

「人もまた、我々と同じように、この世界を調整する役割を持っていたようだ。そう、『未来を司る者』という役割を。」

アルセウスの言葉を聞き、伝説のポケモン達は次々に己の道を模索するために、その姿を消していった。しかし、星は。

「ちよい待ち。……アルセウス。御宅に返す物が有るんだが。」

そして、胸をはだける星。その胸に埋め込まれている『命の宝玉』

「おっさん……。それを取ったらやっぱり。」

星を見てクロノが言う。そう、今の星はこの宝玉で生きている。心臓が無くなった人間は……。

「いいんだよ。おっさんは昔に死んでたんだから。……。それに、この宝玉はもともと、神様のモンだしね。……。青年達にあえて良かったよ。」

後ろ向きにクロノにピースサインを送る星。

「……。貴公を死に追いやった原因は私に有る。だから、これは私からの謝罪だ。」

星から離れる命の宝玉の欠片。そして、星の胸にあいた穴は塞がる。片膝をつき、激しくむせ込む星。

「ゲツホ……。ん!?……。動いてる。俺の心臓が!？」

確かに動いている彼の止まっていた心臓。

星は自分の胸に手を当て、それを確かめる。

「貴殿は私の宝玉を使い生きてきた。だが、それを返してくれた。だから、私も貴公の命を返した。」

無から有を作り出すことができるアルセウスだからこそできる技。

「アルセウス!!」

歓喜の声を上げるクロノ。

そしてついに、アルセウスも宙に浮かび始める。

「私も、新しい道を見つけよう。クロノ。覚えていてくれ。人の隣には、我々がいる事を。……人と我らが歩む道に幸多からん事を私は願おう。」

「俺もだ!……またなアルセウス!!」

満月に照らせら、神は世界に消えた。

「クロノ。行こう。みんなで歩く道に!」

クロノの手を握るアカネ。

「ああ!みんなが笑い会える世界へ、な!!」

そして、彼らは歩き出した。

白と黒の想い。

それは全ての生き物の心。

白と黒の想い。

それはこの世界の有り方。

雨の後には虹がかかる。その虹はとても綺麗で、見るものの心を奪う。

しかし、生き物は『空』

ゆえに、生き物全ては自分だけの『虹』を持つ。
白と黒の想い。その想いは『虹』に受け継がれる。

最終話 「白と黒の想い〜笑い合う世界へ〜」 (後書き)

本当の後書きは、ポケモン灰色で。

エピソード〜それぞれの視点から〜（前書き）

本編の数年後の人々の視点です。

そして、これが「ポケットモンスター〜白と黒の想い〜」の本当の
終わりです。

エピソード／それぞれの視点から

さて、今日の日記は書く事が多いな。

そうだな……。私がああ少年を知ったのは彼のお兄さんが無くなった時だった。

彼のお兄さんの墓前で少年は泣き崩れていた。それが私と少年との出会いだった。

それから、少年はこの島を出ていくまで、何度もここに足を運んで、兄の墓前に座り込んで泣いていた。

彼が島を離れ、次に見た姿は、よもや青年だった。しかし、ここで青年は自分の父親と対面した。よほど憎いのだろう。握りこぶしからは青年の鮮血が。

次に出会ったとき。これまでの青年とは違う姿だった。そう、父親と和解し、彼にも居場所が出来た。

思わず私も、ほっと胸をなでおろしたよ。

そして、今日。青年は、自分の彼女をここに連れてきたよ。夕日のような髪をなびかせる青年に付きそう女性。

兄の墓前で手を合わせた後、青年たちは、私の前に来たよ。

「ここで、結婚式を挙げたい」

青年たちはそう言った。嬉しかったよ。まるで、自分の子供が巣立つような気持だった。

私はそれを快く受けたよ。

さて、日記はここまでにして、明日の準備をしよう。彼らの門出を祝う準備をしなくてはいけないのでね。

～アルトマール教会の神父の日記より～

私は自分の彼氏に誘われ、彼の友達の結婚式に参加していた。

茶髪の新郎に茜色の髪の新婦。

やっぱり、結婚式は良いよね。見てるこっちも幸せになるしね。

私の隣で、金髪の彼は温かい笑みを浮かべ、彼らの新しい門出を祝っていた。

「綺麗だよね。」

私は彼にそう、声をかけた。

彼も、うなづいてくれた。

結婚式も終わり、私達は帰り道を歩いていた。そんな時、彼が突然足を止めた。

「……結婚式の後に言うのもなんですが、受け取ってください。」

彼は私に一つの小箱を差し出す。私はそれを開ける。

中には、指輪が。

「幸せにできるかどうかは分かりませんが、ですが、私は貴方を何時も笑顔にして見せます。」

彼に精一杯のプロポーズ。私の答え？そんなの決まってるよ！

くオールドラン城のメイドよりく

私はテレビにくぎ付けだった。

私の隣には、ジユカインとプラスルがいる。

今付いているテレビは、世界最強のトレーナーを決める『マスターズカップ』の生中継。
世界最強と謳われるシロナさんと、私にブラスルを捕まえさせてくれたお兄さんの戦い。

「私達もいつか、お兄さんと戦いたいね、ジュカイン？」

「ジュラ！」

私の横に居るジュカインは強くうなずいた。そして始まる試合。
でも、私は知っていた。お兄さんが勝つ事を。
何でって？なんとなく。そう思うだけ。

〜ニューキンセツに住む女の子より〜

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9028g/>

ポケットモンスター～白と黒の想い～

2011年9月1日22時01分発行